にして深川敎所の會長たり父翁歿後君其後を繼承し會長となり專ら布敎に從事す方今小講義たり（東京市深川區東森下町六一）

三浦義住

君は尾州の國文學家なり舊藩士故三浦市太郎の長男、嘉永元年四月八日生

る、夙に藩校明倫堂に皇漢學を修め句讀授となり後漢籍を庵原儀一に學び又石橋蘿窓翁に從て歌學を研究す家號を槇の舍と稱す又寂靜に參禪せり傍ら皇典を植松茂岳翁に學ぶ殊に萬葉集に精通す十九歳の頃京都に在りて有栖川宮護衛に奉仕し廢藩後愛知郡田代村に歸田し二十二年以來村長に就任すること二回三十年辭職す以來近鄕より君が門に敎を受くる者多し其間田代小學校を新築し其賞として木盃一個下賜せられ又尾濃震災の際五ヶ村共用の大溜池堤塘破壞するや克く其事に鞅掌し廿七八年戰役に際し恤兵救民に心を勞し後其功に依り木盃褒狀を下賜せらる其他赤十字社の擴張、農工業の奬勵に盡力せしこと多し先是二十九年一月新年御歌會に獻詠して其選に入るの光榮を擔へり御題寄山祝「うこきなき我大君の高みくらよそへまつらん山なかりけり」（愛知縣愛知郡東山村字田代）

箕浦勝人

君は大分縣郡部選出の代議士なり實相寺愚山の二男、安政元年二月十五日豐後臼杵に生る、元と僧侶たり幼少各地に遊學し曾て儒者秋月、栖原、草場等の諸師に就きて漢籍を學ぶ明治四年上京して慶應義塾に入り英學を修め後報知新聞記者となり九年其言論新聞紙條例に觸れ縲紲の身となる、出獄後仙臺神戸岡山等の師範學校、中學校及商業講習所等に長として文敎に盡す所あり更に身を政海に投じ改進主義を執りて世務に奔走す二十三年大分縣第二區より選ばれて衆議院議員となり爾來總選擧毎に當選す第七議會召集の際精勵を以て銀杯を賜はる二十九年松隈內閣成るに方り擢でられて農商務省商務局長となり正五位に叙せられ後懲戒に依り免官となり三十一年憲政黨內閣成るに際し特旨を以て懲戒處分を免せられ遞信次官に昇任す其間高等商業學校商議員、法典調査會委員、鐵道會議々員、農商工高等會議員、同農商工統計に關する特別調査委員長等其他各種の委員に推薦せらる三十七年第十九臨時議會に列し三十九年四月日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる方今國民黨員にして其職に在り又報知新聞社長たり（東京市牛込區東五軒町四七、電話番町五三八）

溝口安之助

君は有名なる京都の銅鐵名工龍文堂家元なり明治元年丹波龜岡に生る、其先四方安平（鑄物安）丹波龜岡より京都に來りて龍文堂金壽泰と號し風呂釜製作業を創む二代龍文堂安之助に至り鐵瓶の製作に從事し其作品頗る精巧を極め名聲嘖々として天下に鳴る爾來連綿五世に至り家道漸く衰頽して復た立つ能はす是に於て親戚溝口氏入りて保護者となり其業を繼き拮抗營々家業に盡力して以て今日あるに至る、內外各種公私の諸會に出品し金銀銅賞牌を受領する枚擧に遑あらず今や四方家再興に力を致し劃策經營しつゝあり、嗜好點茶、生花（京都市下京區富小路通四條北入大文字町二五）

水木歌元

女史は橫濱の踊師匠なり佐藤源藏の末女、嘉永元年六月十八日江戸に生る、維新以前は車屋と稱し幕府塗物御用を勤めり後ち鈴木家に嫁す通稱ケン、藝號を水木歌元と稱す、幼にして踊曲を好み夙に初代水木歌壽に師事して十六歳の時技既に塾し門戸を開き子弟の敎授に從事す明治二十五年橫濱に移住して益々盛に後進子弟を誘掖しつゝあり其得意の技は三枚目にして世既に好評あり女史嘗て神奈川縣下水害の際率先して罹災者救護の爲め義捐し縣知事周布公平氏より感謝狀を受領す（神奈川縣橫濱市若竹町四一）

宮野直道

君は金澤市の實業家なり舊金澤藩士宮野宗平の長男、嘉永六年十二月二十八日加州金澤に生る、夙に漢籍を藩立明倫館に修む明治二十五年以來市會議員、市參事會員たり殊に市會議長として在任十ヶ年、三十六年縣會議員に選擧せられ次で其議長に推さる嘗て日本硬質陶器株式會社を發起創設して社長に擧げらる又金石馬車鐵道株式會社の創設に與り後ち推されて專務取締役となり現に其職に在り方今縣會議長、加能精練株式會社長、北陸興業株式會社、日本硬質陶器株式會社、金澤製氷株式會社、石川新聞株式會社等取締役にして政友會に黨籍を有す、嗜好酒（石川縣金澤市茨木町）

宮里正靜

君は鹿兒島市の實業家なり宮里孫兵衛の四男、弘化三年三月二十二日生る、致遠齋と號す明治元年東京に遊學し漢洋學を修め六年駒場農學校雇技師エドワルト、モンチの助手たること三年、九年農商務省御用掛となり次で大島郡長に轉ず後所感ありて官を辭し專ら糖業視察の爲め淸國及南島に巡遊す歸來

商工會議所會頭となり商業會議所條例の發布と共に又商業會議所會頭に就任する十年餘明治二十七年來鹿兒島紡績所長に擧げられ又興產株式會社長、電氣株式會社專務取締役、薩摩煙草株式會社長、鹿兒島米糖取引所理事等の職に就けり方今市參事會員にして株式會社鹿兒島實業新聞社長、鹿兒島電氣株式會社常務取締役たり其著に化學對譯辭書、染工新書、染工全書等あり（鹿兒島市山下町四四五）

三浦弘夫

君は靜岡市の歌人なり天保四年十一月駿河國庵原郡蒲原に生る、夙に伊勢桑名の歌人富樫廣蔭の門に國學歌道を修む後ち德川慶喜公の師たり明治初年以來靜岡紺屋町小梳神社内に皇學舍を起し爾來專ら徒に授く現に同神社の神職にして從七位たり（靜岡縣靜岡市水落町）

水上房吉

君は靜岡縣の實業家なり先代平右衛門の長男、文久元年十一月生る、家世々茶商にして平右衛門を通稱とし二百年來の老舗たり家號を萬屋と稱す曾て煙草製造業を兼營せしが官營となるに及び專ら製茶推茸商を業とし爾來業務を擴張し營々以て今日の盛況に至る方今靜岡茶業組合議員たり（靜岡縣靜岡市桶屋町三、電話二五一）

宮澤長治

君は長野縣の辯護士なり宮澤治平の長男、明治二年八月十五日信州上水内郡榮村に生る、家世々農を業とす明治二十一年十月東京明治法律學校に入り二十四年七月優等の成績を以て卒業す二十六年十一月辯護士試驗に及弟し翌年三月長野地方裁判所々屬辯護士となり法律事務所を長野市に開き以て諸般の事務を執り今日に至る二十九年上水内郡會議員に選擧せらる此年十月郡參事會員に擧げられ次で徵兵參事會員を兼任す三十二年九月縣會議員に當選す三十六年總選擧の際再選せられ次で議長となり爾來累選今猶議長の席に在り卅九年破產管財人に命せられ現に其任に在り方今籍を政友會に列し北信支部の專任幹事たり、嗜好、園藝（長野縣長野市櫻枝町）

宮川保全

君は女子敎育家なり舊靜岡藩士山崎三輪之助の長男、嘉永五年二月十七日生る、後出で丶宮川三七郎の養嗣となる夙に沼津兵學校に學び數學に長す明治七年文部省十三等出仕に補せられ長崎縣師範學校に在勤すること年餘尋て東京女子師範學校敎諭に任し敎場監事を兼ぬ在職十年此間敎育上頗る貢献する所あり十八年職を辭す君當時女子敎育の虛飾浮華に流れ家政の實用に粗なるを慨し遂に共立女子職業學校を創設して家事經濟に必要なる諸種の工藝を敎授す服部一三、手島精一其他の同志大に盡す所あり竟に諸般の設備を完成す今尙同校理事として校務の改善に精勵せり傍ら書籍業を營み中央堂と稱す二十二年佐久間貞一氏等と大日本圖書株式會社を創設し爾來其專務取締役たり方今前記の外東京書籍株式會社取締役、株式會社國定敎科書共同販賣所監査役の任に在り（東京市小石川區原町三一、電話番町二九六五）

水上源吉

君は臺灣の實業家なり、慶應三年正月甲斐北巨摩郡中田村に生る、實父は小宮山幸太郎、君は其の長男、幼にして鄕校に學び十七歲の時、笈を負ひて東京に出で、麻布區三河臺町養正義塾に入り漢學及び數學を研究す、明治二十三年より二十四年に至る二年間、九州鐵道に奉職、小倉及博多等の驛長を勤め、二十五年春、思ふ所あつて渡韓商事に奔走し、二十六年浦鹽斯德に渡り、同市に雜貨商を開き商運日に盛ならんとするに際し日淸の開戰となり、故を以て閉店、義勇兵を募集、同志と共に渡韓、平壤に至り、時の兵站監部に就き兵站事務を取り、凱旋後直に東京工兵會議所内に於て勳功調査の任務に當り、二十九年渡臺水上回漕店を開始し、支店を各地に設けて經營怠りなく三十三年大阪に支店を設け次で韓國仁川京城其の他に支店を設け、弟と共に力を協せ一致して回漕業に鞅掌、社會の信用頗る厚く、甲州葡萄株式會社、内外運輸株式會社等に關係して其の重役たり、（臺灣臺北北門街二ノ八）

右田年英

君は東京の畫家なり、豊後舊臼杵稻葉藩士右田淸彦の男、文久三年六月生る、通稱豊彦、年英は其號、別に梧齋の號あり幼にして繪事を嗜み明治九年出京し漢籍を高谷龍洲に學び次て三菱商業學校に入り傍ら洋畫を國澤新九郎に修む師の歿後其高弟本多錦吉郎を師とす十八年思ふ所ありて斷然日本畫を修めんと決し月岡芳年の門に入り研究す二十年中始めて「ひらがな」新聞の挿畫を描き二十二年錦畫を出版す幾もなく「ひらかな」新聞廢刊し次て東京朝日新聞の挿畫を擔當す今尙之れに從事せらる方今錦畫の再興に盡瘁する所あり（東京府南品川獵師町九二）

宮川松安

丈は大阪の浪花節講演家なり森岡甚右衛門の長男、明治十九年十一月一日生る、家世々農を業とす實名安太郎、藝名宮川松安と云ふ夙に大阪北野靑物市場に奉公す十五歲の時宮川松朝に就き浪花節を研究すること四年後ち吉田奈良丸に從ひ技大に進む三十九年第四師團步兵第八聯隊に入營し四十一年除隊となり歸朝す在營中品行方正、成績

良好の故を以て模範兵として稱賛を受く後ち奈良丸に隨ひ各地に巡業して好評を博し地方有志家より緞帳卓子掛等の寄贈を受く其得意の讀物は義士、景清源平盛衰記等なり（大阪市西區南堀江三番町）

御法川 直三郎

君は東京の製糸器械製造家なり舊秋田藩士御法川林太の二子なり安政三年七月秋田城下に生る、明治六年同地士族の創立せし六德組なる團體あり八年之を川尻組と改稱し盛に伊佛諸國に蠶種を直輸出せり時に君組合員として此事業に盡力せり後伊佛に於て蠶病驅除法を發明し日本蠶種の供給を要せざるに當り同組合も亦解散するの己むを得ざるに至れり君是に於て感ずる所あり十九年上京して農商務省試驗場給費生となり在學中蠶業家の尤も困難せる繭蛹熱殺器を發明して特許を得卒業後同試驗場に出仕し二十一年需給社講師に聘せらる二十二年獨立し府下本郷三丁目に講社を開らき更に坐操器を發明製作して之か販賣に從事す翌年第三回內國勸業博覽會に出品し且つ製糸法を縱覽に供して高評を博し有功三等賞を授與せられたり二十四年大日本蠶糸會を發起して其幹事となり翌年蠶事新報を發刊して當業者の指鍼とせり爾後專ら大器械の考案に工夫を重ね先つ六百七十五回を以て復舊する揚返綾振機を發明し鐵製器械に裝置して需要に供し米國の織元に於て好評を博せり又六口取糸操器械を發明し二十八年第四回內國勸業大博覽會に之を出品し進歩二等賞を授與せらる二十九年大に事業の規模を擴張し居を小石川區戸崎町に移し且つ工場を設け大に世の需要に應ず三十年君が機械發明の功勞を賞し秋田縣知事より金牌一個を贈與せらる君更に從來乾燥法の火力に依り火災の危險あるのみならず一回卅餘時間を要し繭の光澤を損し解舒を不良ならしむるを慨嘆し剞苦研究の結果遂に卅二年三時間以內を以て乾燥するものを大成し斯業に裨益を與へたり君亦製絲實驗新報を發行して蠶絲新報を承繼し蠶絲業の發達進歩を奬勵しつゝあり其特許を得たるもの前記の外製糸器械、還繭器、坐操器、揚返綾振器、枠止器、生繭乾燥器、製絲用煮鍋あり（東京市小石川區戸崎町九四、電話長番町二四一）

三浦 北峽

君は東京の畫家なり横須賀舊花輪藩士山田事氏の三男、明治十五年十一月東京に生る、少時三浦家に入り養嗣子となる、通稱孝、北峽は其號なり君夙に畫を寺崎廣業氏の門に學び三十五年東京美術學校に入り三十八年優等の成績を以て卒業す頗る人物山水を描くに長ず餘技鐵筆を能くし又圍碁を嗜む（東京市本郷區彌生町三、ろノ一一）

三宅 吳曉

君は京都の畫家なり三宅仁平の長男元治元年三月生る、名は守廣、通稱清三郎、吳曉は其號、別に心遠齋の號あり明治十五年以來森川曾文に就き畫法を學び苦心を以て一家を成す三十年京都美術工藝學校教諭に任じ在職十ヶ年職を能む二十四年以來日本青年繪畫共進會審査委員、新古美術展覽會出品委員、京都後素協會委員、愛知縣全國繪畫共進會審査委員等に擧げらる其間博覽會、共進會等に出品し銀銅賞牌を受領すること十數回、嘗て東京美術協會展覽會に秋畦狗子の圖を出品し宮內省御用品たるの光榮を荷ふ、餘技、俳諧を嗜みて水月庵夜雪と號す（京都市上京區釜座通押小路北入）

宮地 茂助

君は名古屋の實業家なり父を茂兵衛と云ひ三州幡豆郡平板村の人にして家世々三河の名族たりしも家道傾き文政年間名古屋に出でゝ白木屋宗兵衛方に奉公す天保十四年一家を搆へ獨立履物商を開始し、後ち尾州藩の十七人衆格御用達となり士分に準せらる君は其長男なり、嘉永三年八月二十七日生る、幼にして聰明なり少時他の店員と伍し商事に驅使せらる十七歳の時に己に家業の一般に通じ父の代理をなす當時江戸の履物及び其附屬品は名古屋に比し遙かに優等なりしより烱眼早くも爰に着目し父に請ひ數千金を携へ上京して小倉鼻緒を仕入れ之を販賣し大に高評を博せり夫より進で關東小倉地の狀況を詳査し其製產地なる桐生足利の間に屢々往來し苦心研究大に努め後年名古屋產の小倉鼻緒をして天下に賞稱を博するに至るの素因を作れり而して家業の發展に伴ひ慶應三年現在の位置に轉居す同年三月家督を相續し全家經營の重任を負ひ營業の規模を擴め海外より輸入せるゴロフクを以て鼻緒の製造を試みり時好に適して聲價を高む爾來店員を四方に派し社會嗜好の變遷を觀察し專ら外觀の美と實用の利とを全からしむに苦心し能く其實を擧げて全國の需用概ね名古屋に傾注し來るの慨を現はすに至らしむ、明治二十七年日清戰役起るや平和克復後に於ける社會狀態の變遷を豫知し此風潮に乘ずべき思考を廻らし東西各地の人情風俗を考察して東京向、大阪向等の區別を爲し之れか製作方に留意して各地の嗜好に適應するの策を立て之を第五回內國勸業博覽會に出品し有功三等銅賞牌を受領す其他各種公私の諸會に於て金銀銅等の優等賞を得る數次四十三年同市開設三府二十八縣聯合共進會に於て一等金牌賞を受領す君又各種會社團體等に關し盡瘁する所少からず名古屋實業銀行、名古屋電燈株式會社、同劇場株式會社、各取締役、名古屋米穀取引場理事、又は監査役、愛知育兒院理事、關西府縣聯合共進會名古屋履物組合長、同組合賛同會委員長たり方今名古屋履物卸商組合組長、愛知縣五二會常務幹事、名古屋劇場株式會社取締役、日本赤十字社特別社員なり、嗜好、俳諧を能くし端雲と號し佳作少からず又書畫を愛し所藏甚だ多し（愛知縣名古屋市傳馬町六丁目、電話一一九）

三田村古眞

君は東京の描金家なり上州舊前橋藩士三田村彈三の三男、明治十二年三月生る、通稱三之助、古眞は其號なり歳十四、田中直次郎に就き蒔繪術を學び後古川公眞を師とす二十二歳師門を辭し獨立開業す四十年東京勸業博覽會に秋草の圖小筥を出品し褒狀を受領す現に漆工會員たり、嗜好、球突（東京市下谷區徒士町二ノ三四）

三好賢古

翁は神戸の畫家なり三好吉之丞の長男、天保十年五月十日阿波國板野郡三吉村に生る、家世々農を業とす翁青蓮子又竹香と號す夙に繪事を嗜み十四歳にして帝室技藝員守住貫魚の門に住吉派の畫法を學ぶ文久三年十八歳師の勸に隨ひ江戸に遊び住吉内記の門に研鑽十五年歸國後板橋貫雄に就き武具の故實を修め又高野山に登りて佛畫を研究し造詣する所頗る深し嘗て伊勢神宮大宮司冷泉爲紀伯の推薦に依り京都祇園八阪神社御造營の際拜殿に揭くる三十六歌仙の畫を揮毫し、又四國八十ヶ所の内阿波十九番靈場立江寺本尊八十八幅、兵庫須磨寺十二天像十二幅、京都南禪寺十牛圖の襖等は翁の傑作として既に名あり翁頗る細小緻密の畫に長じ最も佛畫を能くす方今專ら丹青を事とす嗜好生花を愛し池坊を能くす（神戸市仲町四丁目）

翠川鐵三

君は長野縣郡部選出の代議士なり先代良左衛門の三男、萬延元年正月八日生る、夙に法律學を研究して辯護士となり法律事務所を松本に開き專ら其事務に從事し後業務を擴張して東京麹町區永田町に出張所を設く曾て長野辯護士組合會長、同副會長等に擧げらる四十一年五月同縣郡部より衆議院議員に選出せられ四十五年五月總改選に際し再選して現に其職に在り黨籍を立憲政友會に列し兼て株式會社倉庫銀行の取締役たり（長野縣松本市地藏清水町、東京市町麹區永田町二ノ六六、電話新橋二五五一）

宮地嚴夫

君は國學家なり舊高知藩士手島俊藏の三男、弘化三年九月三日生る、先考俊藏氏は增魚と號し國學に通せり君幼にして父に從ひ業を受く後出でゝ同藩士宮部重岑の養嗣子となる年十八平田篤胤の門に學び後伊藤祐命に就て歌道を研究す爾來百家の書を涉獵し造詣する所深し明治三年職を高知縣に奉ず五年敎部省に轉じ神宮司廳に出仕す二十一年宮内省に轉じ掌典となり樂部長を兼ぬ方今從五位勳五等にして前記の職に在り又御歌所參候たり其著に本朝神仙記傳あり資性極めて恬淡居常謠曲、圍碁を嗜み以て餘齡綽々胸中の閑日月を示す（東京市麹町區永田町二ノ二九、電話新橋二一〇七）

三椙玉潭

君は東京の畫家なり三椙梅園氏の次男、明治十五年四月埼玉縣北埼玉郡志多見村に生る、父梅園名は至誠（後思誠）と稱し詩文を能くせり君通稱之雄、玉潭は其號又天民の號あり姑め福島柳圃に就き南宗派の畫法を學び後東京美術學校に入り在學年餘にして浪學し川端玉章翁に師事し傍ら洋畫を中村不折に學ぶ最も人物を畫くに長じ彩色又巧なり曾て陸軍被服廠の囑托を受け陸軍服制沿革誌の圖畫を擔任揮毫す四十三年大阪に千歳畫會を創設し斯道の奬勵に盡力する所あり方今專ら丹青を事とす嗜好奇石を愛し篆刻を能くす（東京市本所區龜澤町二ノ一〇）

三河貞次郎

君は德島縣の機業家なり安政五年五月阿波國名西郡石井村の農家に生る、幼にし恬恃を失ひ親戚間に養はれて十六歳德島市東船場町の材木商大橋吉兵衛方に奉公し勤續十三年辭して小倉織機業を開始して德島師範學校を始め其他學校の被服請負を爲す後和歌山縣警察署の御用達となり進で全國鐵道驛員の被服請負に從事す三十七年日露戰役の際陸軍省の御用命を蒙り盛に製織せり卅九年現地に居宅及工場を新築し爾來益々業務般賑なり方今德島公論株式會社取締役、德島市會議員同商業會議所議員たり、嗜好、淨瑠璃（德島縣德島市富田浦町仲之町三丁目、電話三二七）

三宅右一

君は神戸の實業家なり中原柳助の次男、明治六年九月備中國小田郡堺村に生る、幼にして學を好み夙に漢籍を學び諸書を涉獵し詩文を善くし對山と號す嘗て岡山縣立師範學校を卒業し縣下吉田高等小學校長として育英に從事する多年明治三十三年同縣淺口郡寄島村の三宅家に入り養子となる是より一轉して實業界に入り翌年神戸に出て養家支店の管理者となり爾來拮抗精勵業務の發展を計る養父歿後益々其擴張に努め遂に今日の隆昌を見るに至る（兵庫縣神戸市加納町六、電話一二五七）

見野文次郎

君は大阪の金融家なり先代彌三郎の長男、明治元年十二月二十五日天王寺勝山に生る、家世々農を業とし維新前は公人と稱し四天王の祭日に當り式事役を勤め苗字帶刀を許されたる舊家たり君嘗て西成郡役所の收入役を勤務する久しく三十年附近町村の市部に編入せらるゝに際し之を辭す後ち南區會議員に選擧せらる、方今金錢貸付を業とし所得稅調査委員たり、嗜好、觀世流謠曲（大阪市南區天王寺勝山通一丁目）

箕作元八

君は文學博士なり舊作州津山藩士箕作秋坪の三男、文久二年五月二十三日生る、夙に東京英語學校に入り英學を修む明治十八年帝國大學理科大學を卒業して理學士の稱號を得翌年獨乙國へ留學を命せられ在留七年「ドクトル、デル、フイロソフイー、マキスデルアルチユーム」の學位を受け更に墺、伊、佛英の諸國を歷遊し歸朝後東京帝國大學文科大學教授となり次て文學博士の學位を授與せらる方今正四位勳四等にして同大學教授たり（東京市本郷區駒込曙町一六）

三上治三郎

君は京都の漆器商なり、先代治助の長男、明治十二年京都に生る、家世々漆器商を業とし家號を大和屋と稱す、君夙に新古美術蒔繪に留意し大に業務の擴張を計り盛に海外に輸出し家聲益々發揚す各種公私の諸會に出品し金銀銅賞褒狀を受領する拾數回に及ぶ其間屢々宮內省御用品たるの榮を蒙る又數々審査員に推薦せらる方今京都商業會議所會員、京都漆器同業組合會議員たり（京都市下京區高辻通柳馬場西入、電話四四八、振替口座東京四五一一、大阪一三〇六）

南楠太郎

君は和歌山市の實業家なり南喜代松の次男、文久三年九月七日生る、明治二十四年米穀賣買株式會社の創立に與り其支配人となり在任二ヶ年餘後和歌山倉庫株式會社の創立に際し米穀市場理事となる三十年德島米穀株式取引所仲買人となり增資に關して斡旋する所あり翌年和歌山市に歸還し直に織布株式會社を設立し其常務取締役に擧げられ爾來重任し今尙其任に在り方今前記の外和歌山紡績株式會社長にして和歌山商業會議所議員、日本赤十字社正社員、和歌山尙武會々員たり（和歌山市南休賀町一〇）

水野清孝

君は大阪の吉凶鑑定家なり明治元年一月十九日大阪博勞町に生る、家世々典舖を業とす、通稱奈良次郎、清孝は其號、夙に家相方位周易の術を好み研鑽年あり遂に眞理を解得するに及んで業を捨て觀相、家相方位等の鑑定を以て業とし明達の聞へあり、嗜好、骨董（大阪市東區博勞町一）

三井養之助

君は東京の資產家なり先代高喜の二男、安政三年三月二十二日生る、明治九年二月分家す嘗て鐘淵紡績株式會社長、合名會社三井銀行監査役等の任に在りき方今堺セルロイド株式會社長、三井物產株式會社取締役、東神倉庫株式會社監査役たり（東京市日本橋區濱町二ノ一一、電話長浪花二七）

溝呂木華谷

君は東京の畫家なり溝呂木信藏の五男、明治十九年九月十三日相摸國愛甲郡厚木町に生る、家世々穀類問屋を業とす、名は道、字は士田、華谷は其號なり君夙に東京に來りて普通學を修め甫め飯沼珠城に師事し繪畫を學び年十七にして鈴木華村翁の門に拮抗研鑽年あり其筆最も山水、花鳥、人物に長す其作品は名古屋市開設東海美術協會繪畫展覽會に（猿面圖）於て三等銅賞牌を受領す其他各種の諸會に於て銅賞褒狀を受領する數回、方今專ら丹青を事とす（東京市淺草區瓦町二八）

三好德三郎

君は臺灣の實業家なり三好德次郎の長男、明治六年五月京都宇治に生る、家代々製茶を業とし家號を辻利と稱し茶名天下に普し君性英邁夙に學を鄕校に修め臺灣島の我領有に歸するや同島に航し茶商を營み宇治銘茶及臺灣名產烏龍茶同紅茶を販賣し辻利茶舖と稱し極めて繁榮す明治三十年六月臺北商工談話會を起し其の幹事に推さる爾來臺灣實業協會評議員、臺灣大同會々長、大日本武德會臺北支部常議員、小學兒童保護會常議員、臺北商工會幹事、臺北體育倶樂部理事、臺北公園評議員、東洋協會評議員、大日本赤十字社臺北支部委員、百斯篤豫防委員、愛國婦人會評議員、帝國義勇艦隊臺灣支部委員、地方稅調査委員等に擧げられ盡力する處多し兼て總督府の許可を受け臺北府前街に郵便受取所を設け方今前記の外新竹製糖株式會社監査役、本島官煙販賣合名會社總主管、臺灣製茶株式會社監査役、大日本赤十字社特別社員等の職にあり家運益々隆昌す（臺灣臺北府前街四丁目角、電話九四）

三井得右衛門

君は東京の富豪商なり先代高生の次男明治四年十月十一日京都に生る、諱は高信、幼名守之助後則兵衛と改め十六年更に今名に改む出で丶三越正次の養子となり二十六年十月家督を相續して三井と復姓す先是二十年特旨を以て從七位に叙せらる二十一年海防費獻金の賞とし敕定の銀製黃綬褒章を賜はる二十七年三井吳服店元締役となり翌年三井鑛山會社理事に轉す二十九年正七位に陞叙せられ三十一年三井鑛山會社監査役に轉じ三十五年更に三井物產株式會社監査役となり爾來勤續今尙其職に在り又現に三井合名會社監査役たり（東京市麴町區一番町四〇、電話番町二二二）

峰島竹泉

君は東京の畫家なり、峰島茂助の二男、明治廿四年五月東京本所區相生町に生る、家世々典舖を業とす通稱謙三字は別盧竹泉は其號なり幼にして畫才あり小學校在學中圖畫科は常に級中優等の位置を占む長じて佐竹永邨翁に師事し南宗畫を學び後畫風を變じて野村文擧の門に入り四條風の畫法を研鑽する年あり此間師文擧氏は君の畫才を愛し指導頗る懇篤なり君又其意を諒とし拮抗精勵す師の歿後專ら寫生に從事し

獨修す後川合王堂の門に遊び技大に進む其筆山水に最も長し花卉人物之れに次ぐ方今專ら丹青を事とす（東京市小石川區久堅町八六）

宮原鶴之助

君は吳市の金錢貸付業（岡吉屋）なり宮原爲允の長男、元治元年四月十八日生る、家世々農を業とす年甫めて十二家督を相續して戸主となる明治廿三年村會議員に選擧せらる卅五年十月市制實施の際市會議員に選擧せられ爾來累遷今に及ぶ方今株式會社吳起業銀行取締役頭取朝日劇場株式會社取締役旭株式會社監査役たり嗜好將棋相撲（廣島縣吳市莊山田胡町三四九電話三七四）

宮原一人

君は吳市の醫士なり宮原三達の長男、明治三年十月生る、家世々醫を業とす祖考周伯氏外科を以て名あり君夙に學を修め後ち上京して濟生學舍に入り明治二十七年卒業す後ち世業を繼ぎ外科專門を以て濟生に從事す三十七八年日露戰役に際し軍國の爲め盡す處あり後ち從軍記章を授けらる嘗て醫師會長たり嗜好圍碁（廣島縣吳市登町電話一八一）

三木清七

君は大阪の盆栽家（三樹園）なり嘉永四年四月大阪難波に生る、家世々盆栽を以て業とし代を經る三代とす先代清助氏は清花亭と稱し菊花朝顔の培養を以て名あり君は其長男なり君嗣襲以來益々業務を擴張して庭園業を兼營し盛に營業す第三回內國勸業博覽會に里松盆栽を出陳し「老幹蟠屈し雅致を存じ盆栽上の位置最も宜しきを得たり」と賛辭を得て褒章を受領す此出品宮內省御用品たるの光榮を荷ふ爾來庭園に關し宮內省の御用命に浴すること數次現に鴻池別邸二萬坪の庭園設計を委囑せられ其考案中に在り曾て大阪園藝會の發起創設に與り其幹事に推擧せられ「華」なる園藝雜誌を發刊し大に園藝趣味の普及に勉む方今都下有數の盆栽家たり嗜好書畫骨董（大阪市北區天滿野崎町五〇〇）

宮川久次郎

君は銀行員なり東京の人宮川彦五郎の三男、文久二年二月三日生る、夙に外國語を研究して最も英語に塾達し又獨佛兩語に通ず明治十一年始て外務省に出仕し專ら飜譯事務に從ふ十五年英國公使館員となり倫敦に在勤す、十八年倫敦發明品博覽會及び獨逸「ニュルンベルヒ」萬國博覽會事務官補を命せらる次で外務書記生となり佛國公使館在勤を命せられ公使館會計主務となる十九年交際官試補に陞任し高等官六等正八位に叙せらる二十一年外務省通商局勤務を命せられ兼て東京高等商業學校教授に任ず此年白耳義國皇帝下陛より贈與せられたる勳章を受領し佩用を允許せらる二十二年副領事となり清國廣東に赴任し仙頭及瓊州兼任を命せらる次で物品會計官となり又領事代理となる二十三年出納官吏となり香港在勤に轉じ後領事代理として廣東仙頭及瓊州兼轄を命せられ高等官五等に陞叙す廿四年正七位に叙せらる廿六年馬尼拉領事館に轉じ一等領事に任せらる後里昂領事館在勤となり出納官を命せられ此年歸朝して從六位に叙せらる二十八年紐育領事館出納官物品會計官となり又大藏省現金前渡官を命せられ次で歸朝す三十年九月橫濱正金銀行の聘に應じ非職となる三十三年非職滿期に付退官賜金を受領し現に橫濱正金銀行神戸支店長にして本店外國課長を兼ね（神戸市中山手通一ノ七七）

美濃部達吉

君は法學博士なり兵庫縣の人美濃部秀芳の次男、明治六年五月七日生る、明治二十六年帝國大學法科大學に入り三十年七月卒業して法學士の稱號を得て內務屬となる三十二年一月比較法制史研究の爲め獨佛英の三國へ留學を命せられ歸朝後東京帝國大學法科大學教授に任せらる三十六年八月法學博士の學位を受く方今從五位にして現に其職に在り兼て東京高等商業學校教授たり（東京市小石川區竹早町一二四電話番町五〇六）

三谷軌秀

君は大阪の公證人なり安政五年正月二十五日土佐國長岡郡東豐永村に生る、三谷岩作の二男、明治十五年笈を負ふて上京し和佛法律學校に入り法律を專攻し十九年卒業す翌年公證人登用試驗に及第し廿二年公證人を命せらる先是同校々友間に發刊せる政法雜誌に執筆し其記事保安條例に觸れ退去を命せられ橫濱に遊ぶ後ち大阪に來るや憲法發布に際し大赦になるに及ひ公證人事務を開始するに至る廿四年大阪商業會議所特別會員に選擧せられ爾來累選今日に至る二十七年大阪時計製造會社の創立に與り其監査役たること數年後ち帝國物產會社、大阪電燈株式會社、明治紡績株式會社、唐津興業鐵道株式會社等の顧問たり三十二年大阪府會議員に當選し翌年大阪臨時勤業委員に推さる尋で大阪商工協會特別會員に推擧せらる三十六年府會議長となる方今府會議長、市民會々長、大阪合同紡績株式會社監査役內外水產株式會社相談役たり、其著に市村制義解、對比市町村制等あり嗜好、圍碁（大阪市西區靱中通一ノ六四電話西一一〇）

水野早苗

丈は東京の女優なり東京帝國座女優養成所の第二期卒業生にして現に帝國座附女優として人氣頗る高く技藝亦巧

なり（東京市京橋區楠町七）

宮西惟助

君は東京本郷根津神社の社司にして現に其職に在り（東京市本郷區根津須賀町二七）

御手洗南陽

君は東京の書家なり、御手洗國藏の二子明治十年二月十一日大分縣豊後國佐伯に生る、家世々農を業とす名は嘉南陽は其號別に晴暉山房の號あり幼より書を好み年十九大阪に出て甫め湯川梧窓の門に入り書法を學び明治三十八年上京し日下部鳴鶴翁の門に業を受くる年あり後靜岡、伊勢等の各地に歴遊し諸名家の門を訪び得る所少からず君又篆刻を嗜み能く之を刻す足立疇村に私淑し其指導を享く其他觀世流謠曲を能くし盆栽を好む（東京市京橋區三十間堀町二ノ一〇）

宮川香山

君は横濱の陶工なり京都の人天保十三年十一月生る家世々洛東眞葛ヶ原に住し製陶を業とす因て眞葛の號あり夙に業を家庭に受く萬延元年世業を繼く最も仁清乾山の風を摸するに巧なり慶應二年幕府より御所へ献上する茶器調製の命を受く明治元年備前伊木長門公より蟲明窟古器摸造の師範として聘せらる業半ばにして偶々薩州小松帶刀公に招かれ往て苗代燒の改善に努む後島津公の用人梅田、伊集院等の諸士より製陶所を横濱に移し海外貿易に從事せんことを慫慂せらる當時横濱は漁村蜃戸の境に過ぎず興業の地にあらざるも君自ら期する所ありて三年遂に製陶所を此地に移すに至る爾來自ら天城山に陶土を探り或は工夫を釉藥に凝らす等苦辛經營殆んど十有餘年竟に精巧雅趣の作品を案出し眞葛燒の名國の中外に喧傳せらるゝに至る其作品内外公私の博覽會、共進會展覽會等に於て名譽金牌金銀銅賞牌褒狀等を受領する實に枚擧に遑あらず又是等諸會の審査員に擧げらるゝこと數々なり其他日本美術協會委員、日本貿易協會委員、京都美術協會委員等に推され斯業界の爲に貢献する所尠からず明治三十六年十二月官君が多年の功勞を賞し勅定の綠綬褒章を賜ひ其善行を表彰せらる方今帝室技藝員の任にあり（横濱市南太田町富山下電話一七八六）

三島慶造

君は大阪府の人文久三年六月二十五日生る、先代半六の長男、家世々農を業とす初め大伴村の用掛たり明治二十二年町村制實施の際村助役となる爾來村會議員に擧げられ今尚ほ其任に在り二十八年村長となり次で郡會議員、所得稅調査委員、郡會議員たり三十七八年事件の功に依り勳八等に叙せらる四十一年府會議員に選擧せらる嘗て葉室

街道の改修、學校の建築、橋梁工事等の爲め盡瘁する所少からず方今大伴村長、郡會議員、府會議員たり、嗜好、圍碁（大阪府南河内郡大伴村大字北大伴）

峰松示芳

師は日蓮宗の僧なり明治元年三月十三日肥前國三養基郡北茂安村字大島に生る、舊鍋島藩士大曲平八の三男、明治十二年一月肥前小城郡岩松村敎仙寺住職峰松示賢師に就き得度す二十年舊八區相林内示學林へ入學し二十二年卒業後訓導補となる二十五年七月檀林學科二級に昇進す二十九年八月四級試補に補せらる三十年一月攝津國豊能郡東瀬村善福寺住職となる此年一月二級試補に進む三十二年四月準講師に叙せられ法嗣となる三十七年九月講師に陞叙す三十九年二月善福寺を退職し同年六月大阪東區西高津中寺町蓮光寺住職となり以て今に及ぶ後ち大講師に進み四十三年世壽となる、嗜好、圍碁、（大阪市東區西高津中寺町五二三蓮光寺）

三輪繁次郎

君は京都の染模樣紙形彫刻家なり、安政元年七月美濃國海津郡今尾村に生る、夙に京都に適き斯業を研究すること年あり明治八年小紋用模樣紙形彫刻業を開始し小紋二枚形彫刻を巧にして名あり後業務を擴張して友禪模樣形彫刻を兼營し營業頗る隆昌なり明治三十年四月京都染物同業組合會議員に選擧せらる四十二年同組合彫刻部商議員に推され現に其任にあり（京都市下京區猪熊通六角南入）

美濃部俊吉

君は銀行の頭取なり兵庫縣の人美濃部秀芳の長男、明治二年十二月六日播磨國加古郡高砂に生る　明治二十六年七月帝國大學法科大學政治科を卒業し法學士の學位を受け直に農商務屬に任じ次て商工局勤務同局工務課長となり二十九年六月商工業視察として歐洲へ出張し歸朝後農商務省參事官に任じ商事課長を命せられ從七位に叙す後工務局工業課長商工課長、兼務等となり正七位に叙す三十一年十月農商務大臣秘書官を兼ね尋で大臣官房秘書課長を命せらる三十二年九月農商務省特許局審査官兼同省書記官兼勤を命せられ從六位に進む三十五年大藏省理財局書記官に轉任し正六位に陞叙し總務局書記官同大臣官房秘書官を兼ぬ後職を罷む方今株式會社北海道拓殖銀行頭取たり（東京市下谷區中根岸町一〇三、電話下谷二一三七）

宮原辛三郎

君は呉市の實業家なり先代幸三郎の長男、文久二年十二月一日生る、家世々農を業とす幼名種吉後ち襲名す、明治十二年莊山田村組頭たり十四年二月

驛遞局四等郵便取扱を命ぜられ十六年四月村會議員に當選す十九年五月三等郵便局長に任ず爾來郵務研究會、郵便協議會等の幹事及會長となる三十年二月職を辭す其間在職十六ヶ年間郵務に盡瘁し地方文通機關をして遺憾なからしめし爲め官賞を受くる十數回其退職するに莅み金百圓を給與し其功勞を賞せらる二十一年九月吳高等小學校建築委員を囑托せられ次て莊山田尋常小學校建築委員となる二十八年四月村會議員に當選す翌年三月莊山田村外三ヶ町村組合會議員に擧げらる三十一年三月吳私立衛生會商議員に當選し以來數回其職に在り次で內國生命保險株式會社名譽贊助員、水交社吳支部名譽社員たり先是二十九年八月株式會社吳貯蓄銀行取締役に擧げられ三十五年之を辭す此年朝日株式會社專務取締役に推さる三十一年衆議院臨時總選擧に當り縣の第一區より推されて當選す三十二年九月郡制實施の際郡會議員に擧げられ三十五年四月村會議員に再選す尋て吳市制期成同盟會評議員、吳實業會名譽會員となる同年十二月市制實施の際市會議員に當選す三十六年九月縣會議員、縣參事會員に推擧せらる同年十月大日本武德會廣島支部委員の囑托を受く三十八年日本海員救濟會特別委員に推薦せらる三十九年一月市參事會員となる此年八月吳馬車鐵道會社專務取締役に推さる四十年六月之を辭す後ち日本生命保險會社商議員を囑托せらる十二月市會半數改選に際し再選す四十一年十月市會議員を辭す四十年九月縣會議員となり同年十月縣會郡部會議長に擧げられ翌年十一月縣會議長に選擧せらる爾來吳丁未株式會社顧問役、青物市場監査役、朝日劇場株式會社取締役、吳私立教育會評議員、大日本產業組合廣島支部評議員、縣會議長、吳市米穀商組合長、朝日信用購買組合理事長、吉浦喞筒製造株式會社取締役社長等に推擧せらる又三十三年以降莊山田村干害の際盡力せしを賞し金六百圓を贈與せらる三十五年十月吳貯蓄銀行に盡せし功に依り紀念として銀瓶の贈與を受く四十年七月堺川築堤の件に盡力せし廉を以て市參事會より金一千圓を贈與せらる、其他受賞數十回方今縣會議長、郡會議長、吉原喞筒製造株式會社長、吳朝日株式會社專務取締役、吳陽倉庫、朝日劇場株式會社各取締役、吳青物魚市場株式會社監査役、吳丁未株式會社顧問、吳朝日信用購買組合理事長、吳私立衛生會商議員、吳私立教育會評議員、吳市米穀商組合組長、大日本產業組合中央會廣島支部評議員、日本海員救濟會特別委員なり（廣島縣吳市莊山田）

三　由仁作

君は山口縣の實業家なり重岡久平の次男、明治七年四月生る、後出でゝ三由家を嗣ぐ家世々海產物の販賣を業とす君十四歲下關市商業學校に入り明治二十四年卒業す爾來實業に從事し益々業務を擴張して肥料販賣を兼業す爾來下關商業會議所議員四十物商組合取締役等に擧げらる方今下關商業會議所議員たり、嗜好、球突（長門國下關市岬之町、電話特三三二）

南　鷹次郎

君は農學博士なり南仁兵衛の次男、安政六年三月肥前國東彼杵郡彼杵村に生る、少時舊大村藩黌に漢學武藝を修め十五歲長崎に出で廣運館に入り後ち長崎英語學校に轉じ英語を學ぶ明治七年上京して工部大學豫備校に入り十年工部大學校入學試驗に及第す時に開拓使に於て札幌農學校學生募集の擧あり是に於て初志を翻へし札幌農學校に轉學す十四年同校を卒業し農學士の稱號を得此年東京駒場農學校に在て尙ほ研鑽する事二年餘十六年札幌農學校助教授となり廿二年教授に進む二十六年農業視察の爲め米國に渡航す三十二年農學博士の學位を授與せらる後從五位勳五等に陞叙し農學及園藝學を擔任せり四十年九月東北帝國大學農科大學教授に任じ同大學農場長を兼ぬ四十二年八月再び米國に差遣せらる方今正五位勳四等にして現に其職に在り（北海道札幌區北三條西一ノ一）

三原宗泫

君名は重業、如意庵宗泫と號す安政元年九月七日薩摩國鹿兒島に生る、三原經典の三子、父翁の藩職は代官格たり君慶應三年十五歲にして藩の城下警衛隊に編入せらる明治初年藩主上洛の際其護衛隊として隨行す着京後京都御所の守備隊となり奧羽戰鎭定後歸國す同二年藩の常備隊に編入せられ上京す幾もなく函館に亂興る命に依り同地に向ふ事平定の後に屬し直に歸國す四年御親兵となり再び上京して宮城の警衛に勤む同年秋海軍に出仕し五年一月水路部測量生徒となり七年實地研究として軍艦に乘組み九年海軍武官となり十年鹿兒島の亂に從軍す十七年朝鮮暴動興り警備として廻艦す二十六年現役を去る此間航海長たり二十七年現役に復し日淸の役に從軍す二十八年平和克復後現役を去る三十七年又現役に復し日露の役に從軍す三十八年平定后海軍少佐となり退役となる此間累進して從六位勳四等に至る世嗣は現下海軍少佐にして現役たり先是明治七年以降君茶事に趣味を有し千家表流義を汲み公務の餘暇娛む所あり後東京芝白金臺町に住するや中田宗閑師を師とし九年京都家元第十一世玄々齋宗室師より免狀を受く宗閑師易簀後二十六年第十三世圓能齋宗室より總傳を受け二十七年十二段臺子秘傳を授かり宗泫と命名せられ師範代となる今や澤庵禪師の遺蹟品川東海寺の寺中に居を卜す庭中偃蹇たる一大老樹あり之れ禪師が愛玩せし當時の盆松にして洗衣石、石燈籠、塵穴石等の珍品奇石に富む是に於て甞て紫阜清嚴和尙の揮麗になれる山居の扁額（洗衣石の添書）を東海圭窓和尙より得て玄々齋宗室師の考案設計に係る草庵を結び名付けて少抹庵と號し悠々自適茶

道三昧に餘命を娯めり方今茶道協會の幹事たり（東京府荏原郡北品川長者町二四八）

宮崎平七

君は京都の婚儀用道具商なり明治七年二月十五日生る其先は安兵衛と云ふ維新前若狭國遠敷郡奥名田村より京師に到り指物師を業とし禁裡御所の御用達たり後業を更め婚儀用道具製造販賣を營む君は其長子にして幼時父を喪ひ母に鞠育せらる母かつ女は幼兒を抱へて二十有餘名の職工從弟を監督指揮して大に業務の擴張を計り盛に營業す君長ずるに及で母を助けて家業に從ふ明治二十九年三月君歳二十三、母の曾て計劃經營せる規模擴張の事業を賛して新式陳列場を設立し婚儀一切に關する商品を陳列して時勢の要求に應ずるの設備完成す其裝飾善美を盡し四隣爲に嘆賞す後ち家業を繼承するや勉めて陳腐の考案を去り蔚新の意匠、高尚優雅の圖案に據り之れが製作に改善を加へんことを計り毎年春季一回懸賞を以て立體圖案を全國に渉り募集せり是れ蓋し本邦懸賞圖案募集の嚆矢なり以來其優等圖案に據り道具を調製し大に高評を博し斯業界に異彩を放つに至る尋で秋季に至り婚儀一切の道具を三荷、五荷、七荷、九荷、十三荷等に區別し順次之を陳列し、調度價格も亦其順序に依り差等を附し公衆の縱覽に供する等大に業務の發展に努力す各種公私の諸會に出品し金銀銅褒狀を受領する擧げて其數を知らず其間宮内省御用品として御買上の光榮を擔ふこと數次、殊に四十一年有栖川宮家御婚儀の際箪笥調製方御用命を被る方今京都漆器商組合評議員、京都美工會幹事、京都市美術工藝學校商議員たり（京都市上京區夷川通堺町角一三）

水野敏之亟

君は理學博士なり舊福岡藩士水野又藏の長男、文久二年六月二日生る、明治二十三年帝國大學理科大學を卒業して理學士の稱號を得第二高等中學校傭となり尋て第三高等中學校教授第一高等中學校教授を經て三十一年二月京都帝國大學理工科大學助教授に任せられ翌年物理學、電氣學研究の爲め獨乙國へ留學を命せらる三十三年九月理學博士の學位を授けられ三十四年十二月歸朝す翌年一月同大學教授に進む方今正五位勳五等にして現に其職に在り（京都市上京區堺ノ段櫻木町）

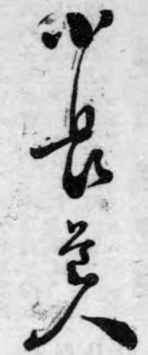
三輪富太

君は臺灣臺南の藥業家なり、養元堂藥房と號し家運隆盛にして頗信用あり（臺灣臺南市（打銀街）町七四一、電話四三）

し之部

志貴小兵

師は眞宗大谷派正覺寺住職にして書僧なり、前住職志貴松塢の三男、嘉永四年正月十日江戸神田に生る、其先は元祿十三年四月車屋仁兵衛と稱し諸大名の人夫御用を勤む爾來子孫代々業を襲ぎ荷車頭を以て世に知らる維新後父祖の遺業を其子分に讓り今仁兵衛の長男、嘉永



君は東京の翫具人形故實家なり先代は其子分に讓り今

六年十一月十七日生る、名は瑞芳、小岳は其號又金西城北樓の別號あり幼より書を好み叔父橋本桂園に就き繪本を摸寫し克く宗學及儒を研究し明治初年父の職跡を繼ぐ爾來益々書道に堪能し師桂園歿後浪華大家諸士を訪ひて筆意を質し遂に一家を成す最も山水に長ず嗜好、煎茶、（大阪市北區今井町二正覺寺）

し之部

清水清風

猶繼承すといふ、君通稱仁兵衛、晴風は其號又芳華堂主人の別號あり、幼より風雅の道に趣味を有し、家業を厭ひ書書器物類を集むるの癖あり、十二歳の春一時他に奉公し多少の金錢を得ればる紙筆を購ひ夜間潛かに繪畫を研究す居ること二年辭して歸宅し餘暇あれば四方に奔走し書畫を蒐集す之れが動機となり遂に玩具に趣味を感ずるに至る長じて其癖益々增長し眼界亦隨て高尚に赴き作品の巧拙、彩色の工合より遂に時代の區分、作地、作匠に至る迄で容易に鑑識することを得明治十三年知友等相謀り竹馬會を起し向島に會す偶々餘興として翫具二三を陳列するものあり兒童時代の觀念忽ち湧出し其感想實に言ふ可からず爾來毎會所持の玩具を持ち寄り、交換を始む是より蒐集の念益々加はり、二十六年頃積て三百點を數ふ、以來毎年東京彫工競技會開設あるも未だ教育的玩具の著書なきを遺憾とし、同志と相謀り提携以て材料の蒐集に努め、著述に從事し、一小冊を編纂し名付て「うないの友」と稱し、之を彫工競技會に出品し、大に高評を博す爾來四十四年迄編を重ぬること五編に至る、元祿時代より稿を起し時代を分ち今日迄で、三千點の多きに達す、方今尚其著述に從事し名聲頗る高し、餘技又俳諧を能くす（東京市神田區旅籠町一ノ七）

椎名僊山

君は東京の畫家なり奥州舊水澤藩士阪本平九郎氏の次男、明治六年四月北海道札幌に生る、後出でゝ椎名家に入り養嗣子となる通稱常次郎、僊山は其號なり君甫め醫學に志し十六歳笈を負ふて上京し學を中學校に修む後志を變じ二十二歳にして久保田米僊の門に入り繪畫を學ぶ三ヶ年、此間兼て美術院に入り研究す師の歿後橋本雅邦翁を師とす其筆人物を描くに最も妙あり山水之れに次ぐ其作品日本美術協會展覽會を除の外各種諸會に於て優等賞を得る數回方今專ら丹青を事とす、嗜好、盆栽（東京市芝區白金志田町一五）

侯爵 四條隆愛

侯は貴族院議員なり舊公卿四條隆謌の九男、男爵九條隆平の弟明治十三年六月八日生る、幼名龍也三十一年家督して襲爵仰付らる三十三年六月陸軍士官候補生となり尋て陸軍騎兵少尉に任ぜられ後ち中尉に進む方今從四位勳六等にして貴族院議員たり（東京市麹町區富士見町二ノ四二、電話番町一四七五）

鹽崎利平

君は高岡市の實業家なり先代利平の長子、安政三年四月十日生る家世々銅器製作を業とす幼名利太郎明治三年三月父病歿後家督を相續し襲名して父祖の業を繼ぐ君夙に時勢の趨向を達觀し東京を始め各地の製銅業を視察して鋭意熱心斯業の改善に力を竭し明治三十二年富山縣工業會を創設して東京より圖案專門家を招聘し銅及漆器其他工藝上意匠圖案の進歩を計る等專ら地方公益の增進に努む四十年銅器同業組合を設置し推されて組長となり常に意を國産銅器の進歩に注ぎ鞠躬盡瘁到らざる處なし此年農商務省の招きに應じ上京し銅器改良の諮詢に對へ且つ金質着色改良の要點調査を囑托せられ後之を報告す四十一年一月官其功勞を賞し勅定の藍綬褒章を賜ひて其善行を表彰せらる四十二年八月農商務省より英國製鎔鍊器械を貸與せられ爾來此器に據り大に便益を得つゝありと云ふ方今高岡商業會議所議員、日本赤十字社正社員、にして政友會に屬す、嗜好、骨董（富山縣越中國高岡市木船町六七）

白松六治郎

君は靜岡縣の醫師なり文久二年十二月遠州小笠郡西方村に生る、本姓有海氏明治十七年白松家を嗣ぐ夙に小學校を卒へ靜岡師範學校に入り次て中學校に轉ず在學三年其間常に級長たり十二年御巡幸の際献文の榮を荷ひ賞として金若干を賜はる十三年醫學に志し上京、して私立獨逸學校に入り修了後東京大學醫科大學部に入り卒業して醫術開業免狀を受く時に明治十九年十二月なり

二十年四月歸鄕して開業す二十四年城東郡醫會長兼聯合醫會議員に選擧せられ爾來累選今猶其任に在り又公共慈善事業に赤誠盡力す二十七八年及三十七八年の役軍人遺族保護金を寄附し尾濃震災等に義捐したる廉を以て賞狀を賜る、最も產科婦人科に長じ內に產婆看護婦講習會等の設ありて醫院大に整頓す、同郡堀ノ內相草村及榛原郡勝間田村に出張所を設け各々自ら薫陶せる者を以て當直醫とし君亦定日を以て出張す、方今大日本私立衛生會遠江支部評議員、日本赤十字社正社員、大日本醫會遠江地方部理事たり（靜岡縣小笠郡西方村）

松月堂呑玉

君は大阪の講談家なり明治十年二月十四日生る、舊淀藩士久國元明の三男、年十七、落語家桂文治の養子となる實名三榮、藝號を松月堂呑玉と稱す、始め大阪堂島中學校に修め後ち商業に從事するも屢次失敗し、遂に身を藝事に委し各務樣林の門に入りて講談を研究して樣旭と稱し三十六年呑玉と改號す其得意の讀物は荒木又右衛門記、柳澤騷動記等なり（大阪市東區德井町二ノ一〇）

庄田耕峰

君は東京の畫家なり舊幕士庄田安康の二男、明治十年九月二十五日東京神田に生る通稱完、耕峰は其號甫め南畫を研究す年十八尾形月耕の門に入る爾來專ら歷史人物畫に意を潛め美人畫を得意とす曾て中央新聞社に入り挿畫を擔當す在勤一ヶ年にして之を罷む明治四十年公設文部省美術展覽會に出品し銅賞牌を受領す後ち感ずる所ありて出品せずといふ居常狂詩狂歌を嗜み雲乃屋峰助の號あり（東京市下谷區日暮里字金杉一三四）

庄晋太郎

君は山口縣の淸酒釀造家なり庄俊輔の長男、明治三年三月長門國厚狹郡宇部村に生る、家世々毛利家の宿老福原家の臣父は維新の際勤王の志士たり君夙に鄕校に學び東上して明治法律學校に入り明治二十四年卒業して山陽採炭株式會社を創設して其專務取締役となり經營數年にして解散し更に野田吉兵衛氏と株式會社三炭組を發起創設し其專務取締役に推さる後之を辭して同社の顧問たり方今淸酒釀造業を營み山口縣水產同業組合理事として現今に至る嗜好乘馬圍碁（長門國厚狹郡宇部村）

志甫三郎平

君は高岡市の實業家なり先代三郎右衛門の長男、安政二年二月九日生る、家世々綿布太物を業とし代を經る君に至り五世とす明治十一年の頃家督を相續して父祖の業を繼ぐ爾來家聲益々揚る明治二十五年市會議員に選擧せられ

三十四年議長代理となり以來勤續三ヶ年後ち議長に推され今尙其職に在り次て高岡商業會議所議員たり嘗て高岡染業株式會社を發起創設し其社長に擧げられ現に其職に在り先是明治二十七年以來所得稅調査委員となり今猶其任に在り方今前記の外北越呉服株式會社長生布取引株式會社、高岡呉服株式會社、高岡木材株式會社等取締役、高岡干糖合資會社業務擔當社員、高岡捺染業組合組長、大日本佛敎慈善財團地方取締たり、嗜好、謠曲、圍碁（富山縣越中國高岡市木船町六一）

島田靜三

君は東京の表裝家（錦珪堂）なり島田藤一郎氏の長男、明治十三年八月二日東京市京橋區元數寄屋町に生る、家代々扇子、團扇商を業とせり君幼名靜三郎後今名に改む始め高林芳谷に就き南宗畫を學び明治二十三年繪畫展覽會に雜魚圖を出品し褒狀を受領す後志を表裝業に轉じ二十三歳にして表裝家先代川喜多忠兵衛の徒弟となり業を受く八年、技大に進み四十三年師家を辭するに當り其忠勤を賞し特に金品の贈與を受く同年九月現住所に獨立斯業を自營す其特長とする所は畫帖、折手本にして金砂子之れに次ぐ四十四年秋季巽畫會主催表裝競技會に軸物双幅を出品し褒狀を受領す方今玉泉堂の表裝を專門とし市内豪商紳士の用命を蒙り業務太だ盛なり（東京市神田區今川小路二ノ一〇）

清水吉兵衛

君は廣島縣の織物商なり先代吉兵衛の長男、明治六年十月生る、家世々太物商を業とす明治二十四年父歿後家督を相續し襲名す夙に廣島織物同業組合組長に推され斯業の改善發達に盡力する處少からず今猶其任に在り嗜好抹茶（廣島縣廣島市堺町二丁目電話九四）

清水公賢

師は華嚴宗の僧なり戸田忠義の長男、安政三年八月十六日攝津國大阪に生る、家世々大阪城與力たり、師幼時、恰も王政維新の際海内騷然、兵亂頻りに起る師難を避けて奈良東大寺に託せられて僧となる、成年に及び還俗して官界に馳驅すること多年、明治二十九年再び東大寺に入りて執事となり寺務の刷新を計りて功あり時會々大佛殿大修繕の計劃あり師は專ら其衝に當り日夜其事に鞅掌し貢献する所甚だ多し今や東大寺内の秩序整ひ大佛殿修繕の一大工事は着々其功を奏するに至りしは師が奮勵の結果に俟つ所多し方今同寺の執事にして塔中上生院、寶嚴院の住職たり、嗜好、圍碁、盆栽、讀書（奈良市東大寺塔中寶嚴院）

下條鏘太郎

君は名古屋の文學家なり舊尾州藩士下條甚七の長男、萬延元年八月生る、祖考享齋氏は書を能くし先考金陵と號し儒にして書畫を能くせり、君名は雅字は士琴始め邃庵と號し九華と改む、夙に家學を受く後ち增田紫陽、佐藤牧山等の門に漢籍を修め兼て書法を祖父享齋に就き學ぶ爾來子昂の書風に臨摹して修得す嘗て家塾を開き傍ら職を第一中學校に奉せり方今明倫中學校の漢文習字の敎授たり、嗜好、和歌、書畫點茶、（愛知縣名古屋市桑名町四ノ三）

下山順一郎

君は藥學博士なり舊犬山藩士山下健治の長男、嘉永六年二月尾張國犬山に生る、明治三年貢進生として大學南校に入り獨乙學を修め後大學醫學部に入り製藥學を修め十一年卒業して藥學士の學位を受け十三年四月東京大學醫學部助敎を托せらる翌年陸軍藥劑官に任じ東京大學助敎授を兼ね正七位に叙す十五年十一月山林學校敎授を兼ね十六年日本藥局方編纂御用掛となり次で製藥學修業の爲め三年間獨乙國留學を命せられ二十二年六月歸朝後醫科大學敎授に任じ翌年第一高等中學校敎授を兼ね三十一年正五位勳六等瑞寶章を叙賜せられ三十二年藥學博士の學位を受け勳五等瑞寶章を賜ふ此間藥劑師試驗委員たる數回陸軍一等藥劑官に進み方今正四位勳二等にして帝國大學醫科大學敎授たり（東京市下谷區下根岸町九八電話下谷四一）

白井卜星子

君は東京の占卜家なり姓は花房、名は正孝、卜星子は其號なり故白井卜星翁の外孫にして花房正治の長男、慶應元年四月十九日因州鳥取に生る、家世々池田侯に仕ふ、明治六年居を東京に移す先是廢藩置縣に際し嚴父は巨資を投じて商業に從事す事志と違ひ漸く家道衰頽に瀕す當時君猶幼にして天資至孝なり鋭意父を翼けて備さに艱難を嘗む君始め佛典を學び醫學を修む既にして悟る所あり礧然學を易道に潜む蓋し因る所あり父正治氏の藩中あるや槍馬の術に長し又漢籍に達し俳句を善くし易學を重して自ら娛しむ故を以て君に勸むるに易道を以て身を樹んことを以てす、是に於て君奮然意を決し明治十三年、歳甫めて十六、外祖父白井卜星翁に就き斯道を修め傍ら諸名家を訪ひ研鑽怠ることなし學大に進み翁の信任益々厚く遂に願問とせらる十七年始めて門を開き三才堂と稱す當時斯界に於ける最年少者にして而かも業務繁盛にして俊才の聞へあり二十三年二代目卜星子となり其衣鉢を繼承して名聲愈々高し又敬神家を以て聞へ神道の職を兼ること久し方今有數の卜占家たり（東京市日本橋區青物町二五）

公爵島津忠重

公は貴族院議員なり公爵島津茂久の

四男、公爵島津忠滿の甥、明治十九年十月二十日生る、後ち家督し襲爵仰付らる夙に海軍武官となる方今前記の任にあり正五位（東京府荏原郡大崎町下大崎二三四、電話長芝三七九、三七八）

島本栄枝

君は名古屋の俳家なり先代權左衛門の長男、嘉永二年十一月一日生る、家世々魚鳥問屋を業とし熱田に於ける舊家たり鱗光亭と號す幼にして俳道を好み初め梅谷庵是空の門に學ぶ師の歿後專ら諸書に渉り研鑽修得す明治三十八年嗣子信太郎氏に家督を讓り俗事を抛ち以來松浦羽洲翁を友とし俳諧三味の身となる、嗜好、松尾流抹茶（愛知縣名古屋市南區熱田町木之免町六二電話長四〇七）

松旭齋天勝

女史は女流奇術家なり本名を中井勝子と云ひ松旭齋天勝は其號なり故松旭齋天一の教養を受け屢々歐米に航し歐風奇術の奥秘を研磨し各國貴紳の稱揚する處となる女史容姿艶麗其行ふ處の奇術は觀者をして奇想天涯に遊ばしめ一度女史一座の來を聞けば觀衆糾然として席を壓するの有樣實に我國第一流の奇術家と云ふも過賞に非ざるべし

下村正太郎

（東京市本郷區丸山新町四一）

君は呉服太物商大丸屋總本家の主人（多額納稅者）なり其先楠氏の苗裔にして山城國伏見町に住し數代連綿たり中世の祖始めて呉服太物商を今の地に開き支店を東京、名古屋、大阪等に設け盛に營業して本邦第一の呉服商と稱せらる、君は十一代の主なり明治十六年七月一日生る、字は兼剛、京都中學校修了後早稲田大學に入學し商科を專攻して卒業す、明治十年以來內國勸業博覽會、美術博覽會、京都博覽會、關西聯合共進會、關東聯合共進會、萬國大博覽會等に織物、染物、刺繍等を出品し每に優等の賞を受領せり又能く學校、病院、盲唖院、衛生、罹災等に捐金し銀盃、木盃等を受くる前後其數を知らず二十年海防費七千五百圓を献じ金製牌を下賜せられ正七位に叙せらる其他義勇艦隊に千圓を寄贈す嘗て見學の爲に歐米各國を視察歷遊し四十一年六月歸朝す後家政整理の爲め一時東京呉服支店を閉鎖するに至る君又能く祖法を守り業務の改良を怠らず優に同業者間に重せらる方今下村家一族を以て株式合資會社を創設し現に其社長たり、嗜好、寫眞術、讀書（京都市上京區烏丸通丸太町北入春日町、電話一三七）

庄田鶴友

君は京都の畫家なり舊大和柳生藩士庄田喜三太の長男、明治十二年九月生る、名は常喜、鶴友は其號、別に碧山莊の號あり夙に京都に出て始め京都美術學校に入學し明治三十年卒業後山本春擧の門に入る次で軍籍に入り三十二年第四師團工兵第四大隊に入營す三十五年十二月歸休す三十六年鄕里に在りて專ら丹青を事とす三十七年二月召集せられ同四大隊付として出征沙河臺役に參加し第二軍司令部副官付となる同時に曹長に陞進す三十九年一月凱旋す後勳七等功七級に叙せらる再び京都に適き春擧氏の門に研鑽すること前後六ヶ年第一回文部省公設展覽會に海邊の圖を出品し又第二回同會に秋溪の圖を出品し共に選拔せらる其他博覽會、共進會等に於て賞牌賞狀を受領する數次常に旅行を好み到る所の山川勝地を寫し深く造詣す（京都市上京區堺町通丸太町南入）

島本風外

師は曹洞宗の僧にして大阪の畫家なり明治六年三月十四日大阪に生る、名は碩翁、風外は其號なり、明治三十年正泉寺の住職となる性繪畫を好み夙に姫島竹外翁の門に入り南宗派の畫法を研鑽す又詩は石橋雲來に、書法を張堂寂俊に學ぶ其得意とする所は佛畫にして又之を能くす方今專ら丹青を事とす嗜好、讀書（大阪市北區西寺町二丁目正泉寺）

下村市太郎

君は京都の染物業家なり先代嘉兵衛の長男、明治十六年八月十四日生る、家代々絹布藍染を業とし天保八年の創業にして代を經る四代とす、明治十五年父隱退し君其家督を相續し家業を繼

承す明治九年六月始めて京都博覽會に出品し褒狀を受領す第四回内國勧業博覽會に於て有功三等銅賞を受領す其他各種の諸會に於て賞牌賞狀を受領する拾數回（京都市下京區西洞院通松原北入）

宍倉晴軒

君は東京の鑑定家なり宍倉孫右衛門の長男、安政五年七月上總國山武郡東金町に生る、家世々書肆たり、字は惟善、通稱敬太郎、晴軒は其號なり又別に晩霽閣の號あり夙に漢籍を刀圭家田浪養拙、鶴岡芦洲等に修め、詩文を森春濤、市川秋村等に學びて經史詩文に通し、又書法を秋原秋巖に就き研究し、後晉唐時代の古法帖に臨して造詣す又繪書を能くす性頗る書畫を愛し其鑑識に富む君不幸曾て祝融の災に遭ひ業を廢し明治三十六年居を帝都に移し爾來專ら新古書畫の鑑定に從事す最も南畫儒者物の鑑識に特長を有す（東京市本郷區湯島三組町八二）

下村專之助

君は京都の染物業家なり、嘉永元年十一月十五日京都に生る、明治十六年絹布藍染業を開始し爾來鋭意業務に勵め大に家業を隆にす後數々操染の際生地を破損し不慮の損失を招くを遺憾とし之れが改良に苦心するや久し遂に明治四十年に至り絹布百疋の操染僅かに一時間に染上げ且生地を破損するの憂なき機を發明して回染器と稱し、實用新案登録を受け又其回染機に據り操染したる生地を自在に絞り得る新式護謨「ロール」器を考案工夫し斯業界の爲めに裨益を與ふる實に鮮少ならず今や大に高評を博し家業倍々進む是より先三十二年三月京都染物同業組合藍染部長に推され在職十二年、同組合は其功勞を表彰し金賞牌を贈與せらる三十七年四月京都創設二十五年紀念博覽會審査員に推薦せらる又其製品は各種公私の諸會に於て金銀銅賞牌褒狀を受領する拾數回、方今專ら家業に從事し其名都下に高し（京都市下京區西堀川通錦小路北入、電話三五四）

志村源太郎

君は日本勧業銀行總裁なり山梨縣人志村宇平の長男、慶應三年三月一日生る、夙に帝國大學法科大學に入り明治二十二年首席を以て卒業後農學校に教鞭を執り翌年高等文官試驗に合格し農商務省に入り尋て參事官に任じ二十五年秘書官となり又特許局審判官、兼農商務書記官に任せられ文書課長となり記錄課長を兼ぬ第四回内國勧業博覽會出品課長として功あり藍綬褒章を賜はる二十六年再び參事官となる二十八年法制局參事を兼ね此年九月清國新開港地視察を命ぜられ三十年農商務省工務局長に陞任三十一年官を辭し日本勧業銀行理事役となる三十二年二月同行を去り横濱正金銀行に入り檢査役に任ず海外各支店を檢閲して三十四年歸朝同本店外國課長となる尋て之を辭し再度日本勧業銀行に入り方今從四位勳四等にして其總裁たり又東京商業會議所特別議員の職にあり（東京市小石川區指ケ谷町一四七、電話番町一五八）

春秋庵準一

君は京の俳家なり第七世春秋庵幹雄氏の長男、明治十四年一月東京日本橋蠣殻町に生る、姓は三森、名は準一又通じて[illegible]とす（始め桂窓と號す）幼より業を家[illegible]に受く長じて錦城中學校を卒業す、二十八年六月志願兵となり近衛歩兵第[illegible]聯隊に入營す次で日露の戰役に從事[illegible]あり少尉に進み正八位勳六等に叙せらる四十三年十一月父翁天壽老人と改號し隱退せらるゝや君其衣鉢を繼承し春秋庵第八世となる爾來明倫教會、俳[illegible]明倫雜誌、古池教會等を擔任經營す爾て少教正に補せらる先是明治二十九年以來會員の風交及び斯道研究の便利を計り全國各地に十數名を一團とせる古池連を組織し各之れに連頭を置き其事務を處理せしむる等斯道奬勵に盡す所あり現に明倫教會長、俳諧明倫雜誌主幹、古池教會長たり（東京市深川區冬木町一〇）

滋岡從長

君は大阪の神道家なり安政元年十二月大阪に生る、明治六年十一月權訓導に補せらる七年六月權少講義となる八年十月生國魂神社の主典に任せらる此年十一月少講義に補せらる十一年九月天滿神社の社掌に轉任す次て内務省令第九十一號公達を以て神社改正せられ生國魂神社主典は解任せらる十七年十一月中講義に補す先是明治十六年八月大阪神道分局設立以來維持の方法に付盡力する所少からず官其篤志を賞詞す十八年一月權大講義に補せらる十九年大講義に昇任す二十一年三月權少教正に補す二十四年少教正に進む三十五年九月大阪天滿宮神社の社司に補せらる三十七年十二月大阪府皇典講究所分所商議員を囑托せられ後ち其評議員となる卅八年七月同所商議員解職となる現今神社境内を擴張し本殿其他の改築に執掌しつゝあり、嗜

好、和歌（大阪市北區此花町二丁目）

椎塚蕉華

女史は東京の畫家なり、岸田實の長女、明治十七年二月東京に生る、後出でゝ洋畫家椎塚修房に嫁す明治四十三年夫修房病歿す女史、通稱春子、蕉華は其號、甫め村田丹陵の門に土佐派の畫法を學び後水野年方に從ひ大和畫を修め歴史風俗を能くす其作品第一第二第三回公設文部省美術展覽會に出品して入選す方今專ら丹青を事とす（東京市下谷區谷中天王寺町三九）

下村玉廣

君は京都の圖案家なり明治十年十二月七日京都に生る、下村米吉の長男、通稱悌藏、玉廣は其號なり、別に華山の號あり幼にして畫才あり始め幸野楳嶺の門に畫法を修む後染織模樣圖に心を潛め市内の古社寺、島原角屋に保存せる元祿時代の流行模樣の衣裳、其他浮世繪、印刷古畫類を參考して嶄新優美の圖案を考案編纂し明治卅八年五月始めて元祿模樣の名を以て發刊するや高評忽ち四方に揚り呉服商染織業家等皆翕然此書に據り殆んど舊時の模樣に一大革新を加ふるに至る是より名聲大に聞ゆ後又源氏模樣、縞模樣、四季草花、重ね衣等の著書續出して染織界に裨益を與ふる鮮少ならず、爲に京都府知事大森鍾一氏より特に感謝狀を贈與せらる方今京都圖案會發刊京都圖案の編輯主任たり、嗜好、寫眞術（京都府葛野郡朱雀野村字壬生、防城佛光寺南西）

謝群我

君は臺灣の實業家なり、明治四年六月臺南下南河街に生る、實父は謝亦若、君は其の次男、幼にして漢學を武秀才に就きて修む、明治三十八年臺南三郊商業組合副長となり、三十九年專賣局彩票元賣人となり、四十年維新製糖會社々長となり、四十一年二月河片煙膏取次人の指定を受け、四十二年地方稅調査委員を命ぜらる、君頗る公共心に篤く、現に帝國義勇艦隊特別委員、日本赤十字社特別社員たる外、各種の公共事業に金品を寄附して賞牌賞狀を受けたる一々枚擧に遑あらず、栽花を嗜む、（臺南下南河街辛九四）

下河原政治

君は醫學士なり明治十一年五月巖手縣盛岡市に生る、明治三十九年、京都帝國醫科大學を卒業し四十二年一月中立賣病院を獨立經營し爾來眼科專門を以て濟生に從事す（京都市上京區東洞院通押小路南入）

自念金藏

君は兵庫縣の人嘉永五年播州印南郡大鹽村に生る年十八神戸に出で勞働者となり濱口人夫たり後郵船會社神戸支店の人夫小頭となる明治廿二年同社門司支店に轉じて專屬人夫頭となり大に手腕を振ひ配下に集るもの數百人を以て數ふ四十二年合資會社自念組を起し勞働請負及海運業を經營して君之が社長たり現に勞働人夫千餘名を使役し盛に活動しつゝあり（福岡縣門司市仲町六丁目、電話四四、同一一二）

白莊司芳之助

君は臺灣の實業家なり、文久三年五月、大阪北區線屋町に生る、祖父の代まで在所にありて農を業とせしかど、實父甚吉の代に至り、大阪に出でゝ材木商を營めり、君は其の次男、小學校卒業進んで府立師範學校に入り、卒業後、教鞭を執るの傍、河野蓼園、本城梅屋、近藤南州等に就きて漢學及び漢詩等を學び更に法律を大阪關西法律學校に學び、明治十八年大阪商船會社に入り、監督課に勤務次で庶務課長、文書課長等を經て大阪支店長となり、三十八年渡臺、安平打枸支店長となり、四十三年二月基隆、臺北淡水支店長に轉勤以て今日に至る、孤山と號し詩及び俳句を善くす（臺灣基隆）

島内松南

君は東京の畫家なり明治十四年二月高知縣香美郡野市村に生る、通稱貫藏松南は其號なり夙に鄕里の畫家種田豊水、柳本素石等に學ぶ明治三十五年上京して始め橋本雅邦翁を師とし後梶田半古の門に螢雪の苦を積む頗る人物花鳥山水に長し筆致溫雅にして清新の氣に滿つ第一回文部省公設展覽會に於て三等賞を受領す爾來第三第四回共に褒狀を受領す方今青年屈指の畫家たり現に巽畫會員、二葉會幹事たり嗜好寶生流謠曲（東京牛込區南榎町四五）

島伊兵衛

君は富山縣の藥種商なり先代伊兵衛の長男、明治十五年一月二十九日生る、其先は同國射水郡八島村の人にして世々農を業とし代を經る君に至り五代とす父伊兵衛氏は富山市に移住し藥種卸商を開始す君幼名正助明治三十九年父歿後家督を相續し襲名して家業を繼承す先是三十七年日露戰役に從軍し三十九年十月功に依り勳八等に叙し一時金及從軍記章を賜ふ爾來專ら家業に從事す方今富山藥種業同盟會委員、日本赤十字社員たり、嗜好、謠曲、圍碁（富山縣富山市梅澤町、電話四三〇）

鹽原每之助

君は東京の表裝家なり福島縣の人明治二十一年四月生る本姓小林氏後鹽原家に入り養嗣子となる養父は鹽原孝太郎と云ひ家世々表裝を業とし代を經る七代とす養父孝太郎氏は特志家にして性頗る慈善に富み又美術界に貢献する所多く感謝狀の如きは積んで山を成すといふ君夙に鹽原家に入り業を先代孝太郎氏に受け熱心研究すること多年業

完く成るに及て徴兵適齢に達し明治四十三年赤阪第一聯隊に入營す其在營中養父病歿す君除隊後其箕裘を繼ぎ爾來專ら斯業に從事し家聲益々揚る君が家は鹽原太助の親戚なり太助氏の像君が家に所藏す曾て福島縣教育會開設に際し教育品參考の資に供し該會長神子伴助氏より感謝狀を受く（東京市日本橋區久松町二）

島村善助

君は京都の染呉服（赤井筒福壽）なり慶應二年六月生る島村八左衛門の長男、維新以前は舊薩州藩、紀州藩等の御用達たり君幼名竹次郎、立道と號す年十二、廣岡伊兵衛氏方に仕へ營業部主任となり熱心美術染物に考按を凝らし染物美術上の發明枚擧に遑あらず君主家に忠勤すること十ヶ年後別家して一家を爲し名を善助と改め染物呉服商店を開き爾來時流に適する物品を製し大に高評を博せり内外各種公私の博覽會、共進會、品評會等に品し金銀銅等の優等賞を受領する事五十回又屢々各種の諸會審査員に推薦せらる方今京都美術染物に熱中して他を顧るに遑なきもの〻如し、嗜好居常禁酒禁煙高潔自ら奉じ閑を得れば則ち書冊を繙き或は唯書畫を觀賞するのみといふ（京都市下京區不明門通萬壽寺南入）

鹿多正規

師は眞宗の僧なり安政三年三月播磨國印南郡千代崎村心勝寺に生る、父は井村智寶と云ひ本派本願寺文學寮の學頭たり君は其三男、後ち出で〻鹿多家に入り養子となる養父は正義と云ひ妙正寺住職にして本寺は寺格高く又由緒ある寺なり以前は蓮光寺と稱せしか十六代門跡より妙正寺の名を賜りたり代を經る十三代とす君漢學は明石の儒染田葦洲に學び佛典は尼ヶ崎源光寺住職力精師を師とす師の遷化後は九州博多の萬行寺住職七里剛順師に就き修す君夙に本山の爲めに盡す所多し始め文學寮理事とし二十七年日清戰役の當時本山より推されて從軍して戰地の布教に從事し一旦歸山す二十九年以降廣島に在て布教に從事すること三ヶ年其間呉市の素封家澤原爲綱氏と共に呉海軍部内に布教を爲す是れ蓋し師を以て海軍布教の嚆矢とす又郷里に於て幹事として專ら力を致すは三智協會なり此會は衛生、教育、農事の三者にして此三大事業は終始君が身邊に纏り君も亦大に盡す所あり一方本山の爲めに東奔西馳其日も足らざる處あるに拘はらす又屢々歸郷して三智協會の爲めに盡瘁到らさる所なしと云ふ四十年の頃北海道旭川軍隊に一時布教の廢絶を見しが此頃再興の議あり君又本山より推されて再興の事に努め事成り四十一年十月北陸金澤に布教中神戸市善福寺の整理方の任命に接し倉皇神戸に到り同寺の爲めに盡す所頗る多し整理漸く其緒に就くや四十二年八月別格別院となり師は其監事たり今や君布教の爲め勤むる所殆んど一生の全半は爰に其精を蒐め其地域の廣き各方面に渉り全國其足跡を止めさる所なしと云ふ方今妙正寺住職にして親授職たり嗜好、農事に關する書（神戸市下山手通八ノ五〇別格別院善福寺）

白石良藏

君は東京の筆匠（硯海堂）なり先代平兵衛の長男、弘化二年長門國下ノ關に生る、家世々一郷の名門たり曾て七卿の長藩に遁るゝや途次君の邸に宿す祖父白石半藏氏の兄正一郎及廉作の二氏共に國事に奔走し勤王の士たり後贈位あり君明治二十年居を東都に移し書筆專門業を開始す二十三年の頃舊津山藩儒植原鐘郎氏に會す談偶々書筆の事に及ぶ同氏の曰く雅邦翁の未だ意に適するの筆匠を得ずと此に於て君其紹介を得て雅邦翁に謁し翁の年來望む所を聞き之を試作して翁に示す翁我意を得稱賛措かす是より書筆を兼業し爾來書畫筆を以て專門とす天資温良恭謙にして頗る義理に堅く精力又群を拔き克く商務を整理し販路を擴張して家業益々進む陸海軍省、諸會社、書畫家、其他朝野鉅公に顧客を有し盛に營業す其嗣欣次郎氏父翁を輔け專ら家業に鞅掌せらる方今都下有數の筆匠たり、嗜好、表千家流點茶及金春流謠曲、（東京市京橋區日吉町一七、電話新橋二一七七）

柴田友藏

君は神戸の燐寸軸木製造家なり高谷伊三郎の二子、明治二年六月淡路國津名郡塩田村に生る家世々豪農にして園藝（果樹の培養）を業とす後ち出て〻柴田家に入り養子となる養父は友吉と云ひ神戸市に於ける有數の洋服商なり君明治二十三年別家して一家を構へ後ち北海道に渡り燐寸軸木に就き調査の結果廢物利用の途を拓き燐寸黑軸木の製造を開始して成功す後ち又北海道の原料と同樣のものを發見伐採して黑白軸木の製造に轉じ爾來堅忍克く其業に勵み遂に今日の隆昌を見るに至る三十八年五月北海林業株式會社を親族間に起し自ら社長となり滿韓地方に輸出して旺に營業す君曾て市政の革新と地方自治の發達の急務なるを自覺し四十三年市會改選に際し進で二級より候補者となるや衆望の歸する處直ちに當選し現に其職に在りて大に盡瘁する所あり嗜好圍碁西洋草花の培養（神戸市湊町三ノ六電話七七四）

鹽崎逸陵

君は東京の畫家なり、鹽崎重一の長男、明治十七年十一月一日富山縣高岡市横田町に生る、通稱一郎、逸陵は其號なり明治三十五年富山縣工業學校卒業後笈を負ふて上京し東京美術學校に

入り日本繪畫科を專攻し傍ら寺崎廣業氏の門に遊び其指導を享く四十年三月同校を卒業す其筆人物花鳥に長す其作品を巽畫會研精會其他各種の諸會に出陳し受賞する數回現に國華倶樂部會員巽畫會員、美術研精會委員たり（東京市本郷區動坂町一〇〇）

宿澤鑿

君は名古屋の有名なる義齒製作業家なり、山梨縣東山梨郡の人、汲泉鑿と號す、夙に義齒の製作に志し、陶齒の工夫に腐心し幾多の苦辛を經て遂に完全なる、陶齒を製出して、外國製品を凌駕するに至れり、爾來益々研究を重ね技大に進み、今や眞を欺くの妙境に達せり是れ蓋し木邦義齒製作業の鼻祖にして、獨得の技倆を有し、內外人の高評を博し、業務頗る旺盛を極む、（名古屋市赤塚郵便局、區內千種町字池ノ內）

徐杰夫

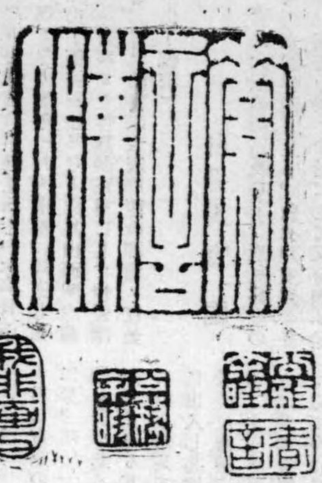
君は臺灣の篇志家なり。故嘉義廳參事徐德新の長子、明治六年、嘉義南區に生る、長ずるに及び、臺灣巡撫邵友濂に知られ、嘉義縣學生員に進む。明治二十八年、臺灣島の我に屬するや、父德新と共に商業に從事し、三十三年、思ふ所ありて嘉義公學校に入學、三十六年二月卒業、同年五月、父德新、嘉義南區街庄長の職に任せらるゝや、君、父を贊けて晝夜其の勞を怠らず、會々嘉義に震災あり、故を以て、山仔頂庄に避難居住す。然るに時の嘉義廳長北原種忠、君の才の用ふべきものあるを知り、遂に明治四十一年十二月、抽んでゝ山仔頂區庄長に任ず。かくて君の名漸く著はる爾來君の心愈々堅く區內の利弊を察し熱心之れが洗除に盡す所あり殊に區民に勸誘して煙草栽培を盛ならしめ、專ら農事の改良進歩に盡力せり。今日、煙草栽培を以て庄民の利益を均沾せるもの君の力多きに居る。三十七年の日露戰役に際しては、軍資を献納し、嘉義慈惠院基本金、山仔頂警察官吏派出所建築費を寄附し、赤十字社特別會員に列す。其の他、義擧として人に先じざるなく、故を以て賞牌等を賜はりたる枚擧に遑あらず。（臺灣嘉義西堡山仔頂四五六ノ一）

品田正壽

君は東京の鎚起家なり高松德藏の三男、明治三年五月新潟縣古志郡上組村字平島に生る、家世々農を業とす後出でゝ品田家を嗣ぐ通稱末藏、正壽は其號なり少時上京して鈴木長二齋に就き

鎚起業を修むる年あり明治二十九年師家を辭し獨立斯業を自營す是より先き二十七年日清事件起るや召集せられて近衛第五聯隊に入營し次で出征の途に上り各地に轉戰し功あり勳七等に叙せらる爾來勤勉克く業務に服し營業頗る隆盛なり曾て其作品彫工會競技會美術展覽會等に出陳し受賞する數回（東京市小石川區水道端一ノ二三、電話番町二二三三）

島田東稻



君は名古屋の書家なり舊尾州藩士島田正胤の長男、明治二年七月二十八日生る、字は秋星、素言と號す別に似蟠の號あり、明治六年家督を相續し十八年小學高等全科修了後奥村石蘭の門に四條派の書法を學ぶ十九年以來愛知縣收稅部、稅務局、葉煙草專賣所、煙草專賣局等に勤務すること凡三十九年此間木村金秋に就き土佐派の畫を修め又尾崎浪音に從ひ金剛流の謠曲を學ぶ三十七年家元金剛謹之助に就き傳授を受く嘗て皇太子殿下御慶事の際奉祝の爲め能樂高砂の圖を献納し御滿足に被思召旨の御沙汰を拜す三十六年岐阜繪畫品評會に於て銅賞牌を受領す、三十七年同市全國繪畫展覽會に於て銅賞牌を受領す其他全國書畫展覽會、美術奬勵會、繪畫共進會等に於て受賞する數回、又熱田第二尋常小學校へ菅公の圖、名古屋第四高等小學校へ兒島高德の圖を寄贈し各感謝狀を受領す方今名古屋市水道事務所に勤務し傍ら丹青を事とす餘技又和歌を能くす（愛知縣名古屋市中區上前津町六九）

釋大眞

師は眞言宗の僧なり明治五年丹後國宮津町に生る、幼名千之助、明治十四年四月丹後國與謝郡府中村西國二十八番札所成相寺に入る翌年一月同寺住職小野等戒師の養子となる初め漢籍を宮津の儒長澤養浩に修め後ち坂田明敬、島田欽一等に學び傍ら西法寺老和尚南光坊、天靈和尚、井貝知賢和尚、律嚴和尚等に法を修す、明治十五年一月得度す、後ち上京して雲照和尚に就き參學す尋て京都に赴き天龍寺峨山和尚に從ふ師物故後は伊豫の香山和尚に就き參禪すること八ヶ年、二十一年十月交衆補となり次で度牒に補せらる二十二年二月名を秀戒と改む二十三年二月敎師試補となる三十九年十一月律師に進む

四十年二月京都高尾槇尾山西明寺副住となり小僧都に累進す四十一年一月中僧都となり翌年一月大僧都に陞進し如意山了德院正住となり槇尾山西明寺福住を兼務す資性謹嚴正肅にして情愛深し、嗜好、讀書（大阪府西成郡浦ノ江如意山了德院）

白男川實福

君は大阪の西區長なり、鹿兒島縣の人嘉永四年四月生る、白男川玄良の長男、家醫を業とす幼にして父を喪ふ始め太政官西院二等筆記となる西院の制廢せられ元老院となるや同院に轉じ書記生たり明治十三年大阪に來り大阪府屬に出仕し土木課長に任せらる二十二年市制實施に際し西區長となる二十九年職を罷め爾來大阪コークス株式會社長、紡績株式會社專務取締役、關西引船株式會社長等たり後ち辭して暫く東京に遊ぶ再び招れて三十七年西區長の職に就き以て今に及ぶ、三十七八年事件の功に依り勳六等に叙せらる（大阪市西區靱下通二丁目）

篠原卯之助

君は東京の表裝家なり小林信次郎の二男、明治十二年東京根岸に生る、家世々農を業とす後出て丶篠家に入り養嗣子となる其實兄表裝家寺内銀三郎氏に就き修業す後兄と共に東京美術學校に出入し其指導の下に同校の古書畫の表裝及修繕に從事し大に得る所あり明治二十一年兄銀三郎氏の同校を辭するや、君其後繼となり爾來職務に從事して以て今に及ぶ（東京市下谷區茶屋町五）

白石文吉

君は東京の呉服商（上總屋）なり先代千造氏の長男、嘉永六年五月十三日生る、家代々呉服商を營み代を經る四代本所區に於ける屈指の呉服店たり父千造氏の歿後明治四十一年二月商業の組織を改め彌一郎、竹三郎氏等の兄弟相提携し合資會社とし君其代表社員となり本業を繼續す爾來拮抗經營業務の擴張を計り同區相生町三丁目に新書及書絹の支店を設け盛に營業す息子幸三郎氏別に一家を爲し典舗を業とし家道又頗る隆昌なり、嗜好、觀世流謠曲（東京市本所區相生町五ノ三六、電話浪花一一七一）

柴田彌三郎

君は臺灣の運輸業者なり、明治元年十月、淡路津名郡志筑町に生る、家は世々農業、實父は岩藏、君は其の次男、明治十二年、歳十二大阪に出で、船場硝子屋に奉公せしかど、主家の破産に遭ひ、十八年三月神戸郵船會社に入りて仲仕を業とす、二十七年日清の役に際し、人夫頭として旅順、大連に赴き、二十八年九月渡臺、淡水に住し、海陸運輸組の事業に從事す、二十九年二月、基隆商船會社航路開展の際、基隆に來りて運輸事業を主とする高砂組を設け其の後、大坪與市と合資會社を設けたれども意見合はず、臺北に赴き、後また大坪氏の招きに應じて再び基隆に來り、目下商船會社に附屬する大商組を設けて盛に活動しつゝあり、現在使役せる人員百五十名、内六十名は臺灣人なり、義太夫を嗜む（基隆碑子頭街六九）

篠原彌次兵衛

君は德島縣の實業家なり慶應元年五月生る、家世々農を業とし素封家を以て知らる君の代に至り製鹽業、運送業、酒造業等を營み頗る聲望あり嘗て縣會議員たり性豪邁武を好み夙に佐阪常篤に就て心形刀流の劍法を學び明治十八年其目錄を受く次で山根正雄に從ひ貫心流中位の卷を受け更に又井後哲五郎を師とし三十年其免許を受く爾來鳴門武德會を起し會長となり專ら後進の指導誘掖に從事す三十二年大日本武德會德島支部委員に推され現に其職に在り方今前記の外鳴門新聞社の經營者たり其他嗜好として詩文に長じ、潮廼本草泉の號あり（阿波國板野郡鳴門村字高島）

白石博康

君は金澤市の銀行支配人なり小竹博篤の二男、歳三十三、舊金澤藩士白石經營せる家臣學舍に入り漢學を學び後ち金澤藩儒河並有道の門に修む明治九年小學校に奉職し兒童教育に從事すること六ヶ年辭して小松町役場の筆生となり爾來累進して助役に至る三十八年職を罷め地方有力者と謀り三十二年株式會社加賀實業銀行を發起創設して支配人となり以て今に及ぶ曩に三十七八年事件の功に依り勳八等に叙し白色桐葉章を下賜せらる、嗜好、銃獵（石川縣能美郡小松町字小松町助町）

芝景川

君は東京の畫家なり京都加茂の神職鳥居大路如平氏の長子、明治七年五月東京に生る後故ありて實兄良平氏に家督を讓り出て丶同神職芝家に入り嗣子となる、君名は興平、字は子德、景川は其號、又別に南星、蓮痴、柳契、仙峻等の數號あり年十七、畫を大倉雨村に學ぶ、後今尾景年の門に業を受くること七ヶ年、卒業後東都に歸り尋て足利地方に漫遊し同地に於て寫生の必要を鼓吹し大に其奬勵に力む居ること七年、當時同地の畫家未だ寫生の必要を感せず君の奬勵に依り斯道の發展を見るといふ明治三十七年歸東し爾來專ら丹青を事とす先是二十九年四月日本漆工競技會に出品し三等銅賞を受領す四十年十一月日本美術協會覽展會に於て三等銅賞を受領す四十一年四月第一回全國繪畫共進會に於て銀印賞を受領し此年

六月正派同志會繪畫共進會に於て二等銀賞を受領す後明治畫會を發起創設し主任幹事に推され盡力する所少からず今尚其職に在り四十二年五月日本美術協會展覽會に於て三等銅賞を受領す其他第四回勸業博覽會、日本青年繪畫共進會、歴史風俗畫展覽會、名古屋新古美術展覽會等に於て受賞する數回、方今有數の畫家たり、嗜好、骨董、印材（東京市牛込區加賀町二ノ二四）

下坂藤太郎

君は政治法學家なり會津若松の人先代藤次郎の長男、明治元年十月生る、明治十七年東京に遊學し二十七年法科大學を卒業し法學士の稱號を受け大藏省に出仕し二十九年四月秋田縣收税長に轉じ尋で大藏省參事官に任せられ三十年同主計官に轉じ幾もなく大藏書記官に轉任し三十一年十一月同省參事官を兼ね以て政府委員仰付らる三十二年臺灣銀行創立委員を命ぜらる此年職を辭し直に臺灣銀行理事となる方今同銀副頭取兼總務部長たり（東京府豐多摩郡戸塚村大字源兵衛向原一一二、電話番町四六六）（臺灣臺北）

鹽田眞

君は美術家なり舊對馬藩士天保八年六月三日江戸藩邸に生る、字は從之棘軒と號す嘗て職を工部省に奉ず明治六年我邦澳國博覽會參同の擧あるに當り抜擢されて一級事務官となり維府に派遣せられ其審査官となる九年米國費府萬國博覽會の擧あるに際し出品課長として同國に出張を命ぜらる後官を罷め納富介次郎氏と謀り東京江戸川に製陶所を設け陶磁傳習事務に從事せり十七年故ありて之を罷む爾來工藝美術界裡に出入し屢々内國勸業博覽會、府縣聯合共進會等の審査官に推薦せられ受賞拾數回に及ぶ廿二年美術工藝に關する功に依り藍綬章を賜ふ二十八年累進して正七位勳四等に叙せらる三十一年佛國博覽會參同の擧あるに際し臨時博覽會專務局評議員に擧げられ三十三年二月佛國に差遣せらる後東京美術學校囑托員たり三十六年清國政府の美術顧問に聘せられ農商務省技師の官命を帶び清國に航し天津に至り工藝陳列館の設立及館内陳列品の整理裝飾等の事務を擔任す是に於て清國貿易の必要内外人の唱導する所となり同館は同國貿易上に至大の關係を有するに至る三十八年歸朝す君外國に渡航すること實に前後六回に及ぶ後日英博覽會に際し同博覽會協會の顧問となり斡旋盡瘁する所多し方今博覽會協會設立の發起人にして日本美術協會の特別會員たり、嗜好、書畫骨董（東京市下谷區仲徒士町四ノ三一）

島德平

君は德島の實業家なり嘉川寅吉の次男、嘉永三年十二月生る、後出でゝ島家を繼ぐ幼名芳次郎家督を相續して襲名し阿波產煙草業に從事し四國一圓に渉り卸商を爲し家聲大に揚る後專賣法實施と共に煙草賣捌人となり兼て荒物卸商及質商を兼業す明治三十七年撫養煙草元賣捌合名會社を組織し君其代表社員となる現に其任に在り（阿波國板野郡撫養町）

秋夜庵勝次

君は東京の俳家なり舊戸田藩士松本勝之助の長男、嘉永元年十月信州松本に生る、本名山本勝次秋夜庵は其號なり又別に守哉の號あり君漢籍を安井素軒に學び後芝の攻玉舍に入る卒業後同舍にありて敎鞭を執る明治十年内務省に出仕し尋て農商務省の新設に際し同省に轉任し技師として職を奉ずること六年此間博覽會、共進會、展覽會等の開設ある毎に審査官たり二十七年官を辭し爾來悠々俳道を以て娯む君夙に俳諧を好み上京以來初代秋夜庵中谷冬樹（默翁）に就き研學す後行庵酒雄（後有終と號す）に就き學ぶ所あり明治十五年初代秋夜庵臨終の遺言に據り其衣鉢を繼承し襲名して秋夜庵第二世となる、君曾て柴田利本、橘とせ子等に就き和歌を學び之を善くす又柳生眞影流の擊劍に達す居常茶事を嗜み石州流を汲むといふ（東京市牛込區市ヶ谷田町二ノ一九）

柴田邦彦

君は名古屋の觀世流能師なり先代穀彦の長男、明治二年名古屋市長島町に生る、家世々舊尾張藩の抱能師たり夙に業を家庭に修む明治三十年父病歿後上京して其家元觀世の門に修業すること四ヶ年後ち歸鄉して箕裘を繼ぎ柴田舞謠會を興し盛に門弟の敎授に從事す嗜好、生花（愛知縣名古屋市長島町三丁目）

柴田隆一

君は東京の金屬彫刻家なり實業家柴田政治の長男、明治十七年十月愛知縣三河國額田郡岡崎町に生る、通稱隆一勝美は其號なり七歳の時居を帝都に移す十四歳にして滑川貞勝の門に入り彫金術を修業すること八ヶ年師の歿後辭して獨立自營す爾來刻苦奮勵專ら裝身具品の彫刻に從事し多年の經驗に成れる技能を發揮して高評を博し業務頗る旺盛を極む現に金工會彫工會の會員たり居常繪畫を嗜み之を能くす（東京市神田區東紺屋町一九）

島田雅雄

君は阿波小松島の素封家なり先代辯五郎の長男、明治八年一月生る、鐵眼と號す家世々同地の大地主たり夙に德島中學校を卒業し後上京して早稲田專門學校に入る其在學中明治二十八年一年志願兵となり近衛歩兵第三聯隊に編入せられ二十九年解隊後再び早稲田專

門學校に入り政治科を專攻し卒業して不二新聞記者となる居ること年餘辭して都新聞社に入り操觚に從事す其在職中父の病報に接し辭して歸鄉す三十五年父歿し家督を相續す三十七年日露の役起るや後備旅團に入り從軍して遼陽の劇戰に參加し負傷して後送せられ遂に兵役を免せられ功を以て金鵄勳章を授けらる後町長に推され今回尙其職に在り四十二年縣會議員に當選す、嗜好、俳諧（德島縣勝浦郡小松島町）

柴田甚四郎

君は石川縣の淸酒醸造家なり濱尾吉次の二男、安政元年十二月七日生る、後ち出で〻柴田甚一の養嗣子となる明治十六年十二月家督を相續す家世々酒造を業とし油販賣を副業とす君嗣襲以來益々業務の擴張を圖り鋭意以て品質の改良に力め社會の信用を得る頗る深し君自治制實施以來町會議員として今猶其職に在り資性篤實にして公共慈善の志に厚く道路の開修學校の建設其他の劇戰に參加し負傷して後送せられ遂に兵役を免せられ功を以て金鵄勳章を授けらる後町長に推され今回尙其職に在り四十二年縣會議員に當選す、嗜好、俳諧（德島縣勝浦郡小松島町）

芝山翠圃

君は東京の畫家なり芝山宗明の長男明治二十二年八月十五日東京下谷區新坂本町に生る、家世々介甲彫刻を業とす通稱利明、翠圃は其號なり夙に繪事を嗜み中倉玉翠氏に就き四條派の畫法を學び技進み師の紹介を以て橋本雅邦翁の門に入り刻苦研磨年あり師翁歿後一家を成す最も花鳥に長ず後陸軍省被服廠に奉職し明治十九年以來陸下御服の變遷圖を時代を遂ふて描寫す會て美術協會展覽會、研精會二葉會等の展覽會に出品し受賞すること前後數回殊に二葉會に出品せる早春の圖は參考品として該會の買上を受く方今二葉會員にして陸軍被服廠に勤務せらる（東京市本所區南二葉町九）

式守蝸牛

君は東京の相撲膏始祖なり明治八年九月本所區元町に生る、先代式守蝸牛（不爭と號す）の長男、幼名靜雄、後家憲に依り襲名して蝸牛と改む家世々相撲膏藥を業とす其先は式守伊之助と稱し相撲の行事たり江戸大相撲の創業者にして一代を以て斯道より隱退し業を徒弟に讓り自ら相撲膏を製造販賣して蝸牛と稱せり爾來行事職に就くもの皆君の宅に入り師弟の約を結ぶの古例あり代を經ること八代とす會祖蝸牛（誠意と號す）甫めて茶道に志し千家表流義を汲み斯道界に名あり爾來子孫皆其遺風を承け茶事を嗜む君又幼にして心を茶道に傾け乃父の膝下に在りて敎を受け其技に長ず乃父大久保北隱翁と交り深く翁屢々君の家に來りて淸遊を試む爾來親しく翁の指導を享け遂に其蘊奥を究むるに至る後父の衣鉢を繼承して蘿裝庵吳楓と號す餘技篆刻南宗畫を能くす畫は佐竹永村翁を師とし永祥と號す（東京市本所區元町九）

島田墨仙

君は東京の畫家なり舊福井藩士父の名は廣意字は樗園通稱範左衛門雪谷と號し武術を好み槍術に名あり又書を能くし畫を巧にす、岩尾雪峰磯西崕渡邊華山等に學び風流韻事を以て終る君は其二子にして明治三年一月福井縣福井市に生る、君名は豊、始め雪信と號し後墨仙と改む歳十四にして父を喪ふ天資繪畫を好み父の遺墨に據り自修すること久し君兄弟五人あり父歿後互に苦學具さに錐肱の苦を嘗む年二十一鄉里の師範學校高等學校等に歷任す明治二十八年志を抱き上京して橋本雅邦翁の門に入り研學す在學中僂痳質斯病に罹り右手の自由を失ふ三十年福島縣中學校に出仕し左手筆を執り圖繪科を擔任敎授すること九ヶ年職を辭し再び上京す先是廿九年始めて美術展覽會に大石義雄の圖を出品し三等銅賞を受領す此出品宮內省御用品の榮を荷ふ第五回內國勸業博覽會に於て三等銅賞を受領す四十一年東京勸業博覽會に馬の圖を出品し褒狀を受領す第一回文部省公設展覽會に俊寬圖を出品し選拔せらる四十三年春季二葉會展覽會に山水の圖を出品し大に好評を博し名聲現はる會て二葉會玉成會展覽會の審査員たり最も山水を描くに長ず現に二葉會委員たり其室節衣女史夙に畫を跡見玉枝女史に學び和歌を小杉榲邨に修め四十四年二葉會に「花ふゞき」の圖を出品し一等褒狀を受領す女史又挿花を好み古流に達す君は圍碁を嗜み初段の資格を有す（東京市芝區三田臺町一ノ三〇）

白井一太郎

君は丸龜の醫師なり白井祐齋の長男元治元年二月讃州三豊郡松崎に生る、家世々同地の產科醫たり夙に學を鄉里に修め次て縣立醫學校に入り卒業後日本赤十字社病院長醫學博士橋本常綱、櫻井郁次郎緒方是淸氏等に親炙して產科婦人科の蘊蓄甚深く明治二十八年多度津に醫業を開き三十一年丸龜に歸り白井產科婦人科醫院を設け專ら濟生に從事す其老塾の技倆と懇篤とを以て知らる現に丸龜市驅梅院長にして市會議員なり、嗜好、俳諧を能くし醉醒の號あり（香川縣丸龜市風袋町）

澁谷天外

丈は喜劇俳優なり大阪南區馬喰町紀伊國屋事妙中和助の長男、明治十五年一月生る、本名を妙中博喜智と云ふ澁谷天外は其藝名なり甫て九歳劇道に入り各地に巡業して熱心藝事を研磨す、十一歳父に禁せられ他業に就くも身修ま

ぢす遂に又梨園界に入る、十七歳の時鶴屋團十郎の門弟團五郎に就き團治と名乗り各席に出演す、居ること二ヶ年故ありて京都の栗亭玉翁の一座に加はり大阪に歸り爾來益々滑稽劇に長じ好評あり、後中島氏と共に喜劇の革新を圖り一座を作り邦内各地に巡業し益々高評あり（京都市下京區建仁寺町通龜井町）

周安邦

君は神戸の海産物貿易商なり清國厦門の人明治四年十二月生る、歳十七、臺灣臺南に移住し德紀洋行に店員たり後ち陳中和の經營せる洋行横濱支店に入り能く商機を察し店主の爲に盡力し神戸支店を經て德昌支店長となる明治三十九年獨立して米糖業を開始して協昌と稱す爾來事務の發展に努め大に世の信用を博す四十二年海産物貿易業を兼營して業務益々進む方今海産物取扱を主とし大に斯業界に勇躍しつゝあり（兵庫縣神戸町榮町二ノ四五、電話一一四五）

島田登美

女史は神戸の舞曲家なり立石忠右衛門の二女、安政三年七月二十日大阪淡路町に生る、家世々藥種問屋を業とせり、本姓立石、藝名を島田と稱す女史六歳の時母を亡ひ、父に養育せらる、幼にし舞技を好み始め石田某に就き學び琴を菊地檢校に修む十一歳又父に永別し爾來備さに世の辛苦を嘗む二十一歳兵庫柳原に來りて島田勝の門に舞技を修む師歿後島田を襲名して二代目となり爾來專ら子弟の指南に從事して以て今に及ぶ（神戸市花隈町六）

新谷蓼石

君は横濱の書家なり新谷利兵衛の六男、明治十七年二月生る、父は山月庵梅似と號し俳諧の宗匠たり君通稱孫平蓼石は其號二十歳にして書法を三好芳石の門に學び又漢籍は其長嗣寛氏に修むる八ヶ年最も行書を能くす君夙に父の指導を享け俳諧を能くし始め秀山と號し後ち晴翠と改め其名市内に高し、方今惟を下し專ら書法の教授に從事す（神奈川縣横濱市末吉町二ノ一六）

島田神水

君は富山市の書家なり舊富山藩士にして明治四年九月生る、通稱信太郎、神水は其號又萬尺堂の別號あり夙に漢籍を小西有義の門に學び後ち丸山杏立に師事す長じて詩文を木蘇岐山に修む性頗る書を嗜み明治二十年冬大西金陽の門に書法を學びて墨竹を能くす廿五年十月東京美術協會秋季美術展覽會に其作品月下雙竹書を出陳し宮内省御用品の光榮を被る三十五年十月同美術展覽會に斷崖風竹圖を出品し褒狀を受領し此出品宮内省御用品となる君嘗て高岡瑞龍寺管長故梅田和尚に就き參禪して能く禪味を解す居常詩文を嗜み之を能くす（富山縣富山市西中野町）

重田榮治

君は臺灣の綿布商なり、明治十年十一月、山口縣玖珂郡横山村に生る、實父は重田安次郎、君は其の次男、幼より商業に從事し、岩國物産たる吉川家の授産にかゝる義澄堂織物の販賣を專らとし、其の他神戸大阪等の織物を扱ふ、三十年三月、歩兵第四十二聯隊に入り、技術熟達品行方正の故を以て早く除隊せられ、三十三年六月豫備兵として召集せられ、北清事變に參加し、北京陷落まで戰地にありて功を奏し、同年十月歸朝十一月解隊、功に依り勳八等一時金百八十圓を下賜せらる、爾來、實家に歸りて家政の整理に從事し三十六年十月、綿布を臺灣人に供給するは實に國家的事業たるべきを知り、意を決して單身渡臺し、現住所に販賣店を開き、大に臺灣人に對して内地の純良なる綿布を供給し、事業の次第に盛況を呈して今や臺灣綿布業者中の五大店舗と稱せられつゝあり、園碁を嗜む（臺灣臺北文武街一丁目）

清水照華

君は甲府市の花道家なり明治九年十月三日靜岡縣濱名郡濱松に生る、通稱平八、博陽軒照華と號す明治二十四年九月始め濱松の織田利三郎に就て池坊花道を修む二十五年三月花道家元池坊小野專正に師事すること五ヶ年二十九年十一月靜岡縣華進社幹事に推薦せられ中泉町及見附町支部監督兼教授たり三十一年五月同縣小笠郡法多村支部監督に推さる三十三年三月紫幕床稱の格に昇進し花道家元池坊幹事となる三十四年五月私立濱松裁縫學校囑托教師となり花道を教授す此年華進社支部監督に推薦せらる翌年一月華進社本部教授たり幾もなく辭して上京し神田猿樂町女子美術學校（今の東洋女學校）に奉職し居ること數旬花道家元より山梨縣派出教授方を囑托せられ甲府市に出で業を開く三十八年二月以來私立玉聲裁縫女學校、山梨裁縫女學校、中川裁縫女學校等に奉職し茶花兩道を擔任教授す後ち縣立高等女學校に奉職し技藝教師の免狀を受け茶花の兩道を教授して現に其職に在り方今花道家元池坊尚花會長、山梨縣生花會頭職、特志看護婦會名譽講師たり君夙に遠州磐田郡中泉

町青山逼庵師に就て宗逼流の茶道を修め共に師範たり、嗜好、圍碁、郊外散歩（山梨縣甲府市春日町一九）

澁谷幸太郎

君は和歌山縣の殖産家なり先代惣十郎の長男、明治元年二月八日生る、家世々郷中の豪族にして代を經る君に至りて二十一世とす父は舊芳養村外四ヶ村の庄屋を勤め後ち戸長たり君郷校に修め後ち永田周造に就き漢學、算術を學ぶ明治二十九年始めて村收入役に推され在職二年餘、三十一年村長に推擧せられ三十五年滿期再選せられ幾もなく之を辭す其在職中治績あり郷黨の敬慕する所たり爾來專ら耕耘を事とし傍ら公共の事に盡瘁し畜産農事改良、肥料研究其他林業、銀行等に關し貢献する所多し現に郡會議員、郡參事會員、村農會長、同信用組合組長、熊野山林會評議員、西牟婁郡木炭同業組合評議員、和歌山畜産會西牟婁郡委員、同郡産牛組合副組長、田邊銀行取締役、紀伊汽船株式會社專務取締役たり、居常淨曲を嗜み三絃の曲に遂し素人淨曲界中錚々の名あり（和歌山縣西牟婁郡上芳養村）

篠川利祐

君は大阪の篤志家なり天保十年十二月三十日越前國田生郡吉江村小字西番に生る、本姓三好氏、萬延元年鄕を去つて大阪に出て二十四歳、生玉の米商篠川家に入り養嗣子となる、幼名主馬藏後ち今名に改む明治二年の頃堂島米穀取引所の米屋取締役たり時に堂島米穀取引所の廢止論盛に行はれ將に其命令に接せんとするや仲間の恐慌一方ならず君は其保存說を主張し有志を求めて之れが救濟の方法を講して四方に奔走し屢次要路者に訴願する所あり遂に府令を以て保存するに至れり是より名聲頓に揚る六年戸長となり在職十三ヶ年辭して暫く府屬たり先是明治十二年府會議員に選擧せらる、二十七年第二期府會議員に再選す此間地方公共の事に貢献する所尠からず上本町筋六百五十間を始めとして谷町筋六萬體町より阿部野街道に至る三百七十間逢阪及松屋町筋の六百間等狹隘なる道路を四間半巾に改築して交通運輸の便利を圖り又天王寺附近に清水池、三朋下地と稱する三千餘坪の池沼を開堀し毘沙門池、川底池等を浚渫修繕し比年旱害を被る三十餘町歩の耕地に灌漑の便利を與へたるが如き又博慈愛善の念熾にして震災、火災、水害等に義捐を吝まず殊に天王寺に盡せし功績甚だ多しといふ三十五年以來自ら誓ふ所あり金一萬圓を以て公共慈善の資に供せんと豫め之を資産の内より割出し事に當り之を喜捨して吝まず意中の事十中六に至りて既に三千餘圓の不足を生じたり後ち府廳は平素公益に盡せる廉を以て木盃三組を下賜せらる又興風會より白絹一卷を贈り其善行を表彰す其他賞を得る甚だ多し四十三年三月天王寺の有志相謀り紀念の爲め銅像を建立す方今四天王寺信徒總代となり身を閑地に置き悠々自適す、嗜好、觀世流謠曲（大阪市南區大阪下町四丁目、本宅生國魂前）

島田保之助

君は前代議士なり川村吉藏の次男、安政五年十月十三日近江國野州郡中州村に生る、明治二十五年島田家に入り家督を相續す二十七年淡海新聞を自ら經營し之が主筆たり三十五年江州新報の操觚に從事す三十七年縣會議員に選擧せらる四十一年郡部より選出せられて衆議院議員となり籍を政友會に有す方今大津商業會議所議員たり（滋賀縣大津市四ノ宮町）

清水辰三郎

君は東京の書畫骨董商なり清水嘉七の二男、元治元年八月二十日加賀國金澤袋町に生る、家代々加州家御藏御用人たり君七歳にして父を喪ひ母の手に鞠育せらる時に加州藩の老職横山山城守の典醫伏田淨雄氏頗る書畫骨董の鑑識に富み又篆刻の技に長するあり而も先考と友とし好し君之れに隨ひ其指導を受け書畫及古什器の研究を爲し美術の觀賞力を養ふに至る後去つて投機界に身を投じ忽ち敗北して大阪に出て又株式仲買業を開き業務に從事するに方り時恰も美術界の盛況の機に會す是に於て倉皇店を閉ち明治三十二年上京し一時下宿屋に寓して書畫骨董の仲次を業とし東奔西走孜々業務に勵み漸次朝野鉅公の信用を博し幾もなく巨萬の富を贏ち得遂に今日あるに至る後曩きに投せし下宿屋を買收し之れを本邸とす即ち現住所是なり三十七年四月以降毎月一回即賣會を開き天下の珍品を集め至便の方法に依り弘く好事者に頒ち家聲益々揚る爾來會を重ぬる百回にして賣買依托者の君の店舗に集まるもの日々多きを加ふ方今古物信托株式會社を發起し之れが創設に斡旋盡瘁しつゝあり（東京市神田區連雀町一八電話本局一六九六）

鹽入月堂

君は横濱の畫家なり鹽入定右衛門の長男、天保四年正月信州埴科郡南條村に生る、家世々蠶業を營む、字は敏政、通稱喜右衛門、月堂は其號、夙に漢學を鄕里に修む横濱開港の翌年同地に來り住す書法を古松二太夫に學び又南宗畫を清水研圃に修む後ち常陸兩總の各地を歷遊し造詣する所あり特に梅樹を描くを得意とす今猶ほ鑿鑿として筆硯を事とす、嗜好、俳諧を能くす（神奈川縣横濱市眞金町一一）

篠佐太郎

君は東京府の神道家なり夙に學を修め明治十三年府下北豊島郡上板橋村々

社氷川神社の祠掌となり以て今日に至る本社は神速須佐之男命を祀る靈驗著しき高麗清潔なる宮なり（東京府北豊島郡上板橋村氷川神社境内）

清水白雲

君は名古屋の畫家なり明治元年二月五日安藝國賀茂郡志和堀村に生る、幼にして繪事を嗜み研究す明治十七年京都に出で横山桃湖の門に入り四條派の畫法を學ぶ多年後ち四方に漫遊し頗る造詣する所あり已にして一家を成し肖像及圖案調製に特長を有す方今名古屋市に寓し專ら丹青を事とす、嗜好、園碁、銃獵、釣漁（名古屋市南桑名町三ノ五、本宅京都市三條通白川橋北裏堀池町）

島村抱月

君は東京の文學家なり通稱瀧太郎抱月は其號なり明治四年一月十日島根縣那賀郡久佐村に生る、佐々山一平の長男、二十四年故あり神奈川縣郡筑郡田村島村文耕の養子となる二十七年東京專門學校文科を卒業し後早稲田文學讀賣新聞等に記者たりし事あり傍ら專門學校に美辭學支那文學史等を講せり方今早稲田大學教授の任にあり（東京市麹町區飯田町五ノ一）

澁谷彌一郎

君は神戸の實業家なり、淺野謹爾の長男、慶應元年一月二十七日淡路國洲本町に生る、後故ありて澁谷家を繼く夙に淡路中學校に學び中途退校して大阪に遊學す後東京に出で英吉利法律學校に修め又大原簿記學校に入り卒業後千葉地方裁判所會計部に出仕す明治二十六年辭して大阪に出で共立物產會社に入り神戸支店長となり棉實綿布雜貨砂糖等の南清貿易に從事する多年其間同社上海支店の整理に盡瘁し次て臺灣臺南支店長となりて事業の擴張に努力し同支店の閉鎖と共に本社に歸り事務に鞅掌す卅五年同社を辭し笠井源藏氏等と謀り合資會社住原商會を起して海產物輸出入業を創始し其代表社員に推され爾來勤勉摯實内外の信用最も厚く現に神戸海產物同業組合副組長たり、嗜好、書畫、骨董、謠曲（兵庫縣神戸市榮町四、電話一二〇一）

島田三郎

君は横濱市選出の代議士なり舊幕臣鈴木知英の三男、嘉永五年十一月生る、沼南と號す二十歳出でゝ島田家を繼ぐ夙に昌平黌に入り漢學を修め又靜岡藩沼津兵學校に入り漢英數學を研究し次で大學南校、大藏省附屬英學校に英學を講習す明治七年毎日新聞主筆となり後元老院出仕、文部省權大書記官に歷任し正六位に叙せらる十年嚶鳴社を組織し各地に遊說し能辯家を以て鳴る十四年大隈伯桂冠して改進黨を組織するに方り其創立に與り後神奈川縣會議員

欠

欠

擔當者を置き又會て同業者の習慣たる毎月十七日休業例を廢して毎日曜日とし大祭日は午後三時を限り休業と改め十數名の店員を使役して盛に營業す方今大日本美髮會幹事たり君夙に荒木古童に就て尺八を學び又觀世流謠曲を山本金造に修め共に其技に堪能なり（東京市日本橋區芳町二）

島崎柳塢

君は東京の畫家なり名は友輔、柳塢すの光榮を荷へり又其作品は各種公私の博覽會、展覽會に於て優等賞を得たるは其號慶應元年江戸に生る、夙に和漢學を修む君性頗る繪事を好み學ばすして之を能くす明治十二年始めて櫻井久に就て洋畫を學ぶ後更に轉じて日本畫道に入り竹本石亭、松本楓湖、川端玉章氏等の門に歷遊し斯道の蘊奥を極め遂に和洋合法を案出して一家を成す最も花鳥人物に長ず二十五年以來久しく信越地方に遊び造詣する所深し曾て日本美術協會展覽會へ　皇后陛下、皇太子殿下行啓に際し招されて御前揮毫を爲ること數次又嘗て同志と謀り無聲會を發起創設し其幹事に推され斯道奬勵の爲め盡瘁する所あり方今專ら丹青を事とし傍ら川端畫學校教授の任に在り（東京市本郷區彌生町二）

子爵　新莊直陳

子は貴族院議員にして舊常陸麻生藩主なり、安政三年十一月生る、實は茨城縣士族新莊鐸橘の男、明治十一年當家を繼ぎ從五位に叙す十三年司法省十七等出仕に補し弘前裁判所に在勤す爾來同省十六等出仕判事補等を經て弘前東京等の始審裁判所芝區治安裁判所に勤務す十七年子爵を授けられ尋て岡山始審裁判所に轉ず此年正五位に叙す二十二年公

證人を命せらる翌年貴族院議員に互選せられ方今從三位勳四等、前記の外株式會社茨城縣農工銀行、雄勝スレート株式會社各取締役の職にあり（東京府豐多摩郡中野町中野宮前四〇六、電話番町一七一二）

柴田耕洋

君は東京の畫家なり舊仙臺藩士柴田黑左衛門の次男、明治十六年一月仙臺市東一番町に生る、通稱武雄、耕洋は其號なり幼にして繪畫を好み歳十六、偶々畫家熊耳耕年氏の漫遊し來れるに會し甫めて氏に就き繪畫を學ぶ明治三十九年上京して尾形月耕翁の門に入り人物畫を研究す後歸鄕し仙臺市發刊河北新聞社に入り挿畫を擔當す君思ふ所ありて四十四年春再び上京し爾來專ら丹青を事とす（東京市下谷區谷中本村一〇五〇）

柴谷兼三郎

君は堺市の實業家なり柴谷武次郎氏の長男、明治九年六月生る、家世々酒造を業とす夙に大阪市立商業學校を卒業す爾來專ら家業に從事す明治三十三年六月其組織を更め柴谷合名會社とし其專務役となりて益々社務の擴張を計り別に商店を熊野町に設置し販路又漸次に擴り內は全國及臺灣を始め外は滿洲北米に涉りて商取引を爲し社運隆々として繁榮を呈す最も東洋、菊壽、千穐等夙に名あり方今堺大西銀行取締役堺信托會社監査役たり、嗜好、經濟上に關する書冊（大阪府堺市九間町西二丁三）

白井壽美代

丈は東京の女優なり群馬縣の人明治二十五年生る、夙に東京に來りて人となる宵て横濱共立女學校に修め最も英語に長す明治四十一年九月帝國劇場の女優養成所に入り卒業後同座付俳優となり爾來熱心藝道を練磨し技益々進む（東京市芝區琴平町二、田保德松方）

深翠亭川柳

君は東京の川柳家なり中村良藏氏の長男、慶應元年九月江戸に生る、父良藏氏は明治五年根津に酒店を開き昇翁と號し俳諧を能くせり君後故ありて小林氏を冒す通稱釜三郎、深翠亭川柳は其號なり幼より俳諧を父に學びて松旭と號す明治九年日本橋小網町酒問屋高島屋に奉公し商業を見習ふ多年此間川柳に趣味を有し餘暇あれば之を研究す二十八年根津遊廓の移轉と共に現住所に移り酒類業を繼續す後主家を辭し家業に從事する傍ら七代風也坊川柳氏の門に學び後兒玉環氏の八代目（任風舍川柳）を繼承するや又氏に從ひ研究怠ることなし四十二年五月十代目平井翠堂氏の文檀を隱退するに當り君推されて十一代深翠亭川柳と改號し其衣鉢を繼承するに至る（東京市深川區須崎辨天町一ノ五）

柴四郎

君は福島縣の名士なり舊會津藩士柴太一郎の弟陸軍少將柴五郎の兄、嘉永五年十二月生る、東海散士と號す夙に漢學佛學を修め大學南校に於て英學を修む後米國桑港商業學校に移り理財學士の稱號を受け又米國經濟學大家ケーリー氏より社會學士の免許を受く西南の役に從軍し平定後戰記編纂掛を命せらる明治十九年農商務大臣秘書官と爲る此年大臣谷干城子に隨ひ歐米を巡遊す二十年歸朝後時事に感激し小說「佳人の奇遇」を著はす其筆流麗東海散史の名四方に喧傳す幾ばくもなく官を辭し二十四年縣の第四區より衆議院議員に選出せられ第七議會召集之際精勵を以て錄盃を賜はる三十一年憲政黨內閣成るに方り農商務次官に任せられ正五位に叙せらる此年十月官を罷む爾來憲政本黨常議員として政界に奔走し後ち同黨を脫し中立派となり其の重鎭たり衆議院議員となる事前後八回方今正五位勳四等にして閑地にあり（東京市麴町區永田町二ノ二八、電話新橋二八二九）

志方鍛

君は司法官なり舊岡部藩主安部家の世臣志方六郎正道の男安政九年五月武藏國大里郡岡部村に生る明治九年司法省法學生となり十七年卒業法律學士の稱號を受け直に判事補に任じ大阪始審裁判所詰となる明治十八年判事に進み爾來各地の裁判所に轉勤し三十一年大審院判事に補す次で正五位勳六等に進み兼て高等商業學校の囑托講師たり方今從四位勳三等にして現に其職にあり（東京市小石川區久堅町七四ノ四五號）

島小一郎

君は高岡市の實業家なり先代小一郎の二男、明治元年二月生る、家世々漆器及書畫骨董商を業とす幼名龜太郎、實兄早世、君家督を相續し襲名して家業を繼ぐ君幼より父の指導を享け能く書畫の鑑識に長じ小蓬の號あり方今市內有數の骨董商たり、嗜好、書畫（富山縣越中國高岡市鴨島町）

下村實栗

翁は愛知縣の茶道家なり先代鐵藏の男、天保四年九月尾州知多郡大高町に生る、父は丹山と號し狩野派の畫を能くせり翁榮甫と號す、幼にして風流閑

雅を好み夙に久田淸好師に就き同流の點茶法を學ぶ嘗て稱宮殿下名古屋市に行啓の際德川家より師と共に召され御前に於て點茶を献上して御嘉賞の榮を蒙り師に命じて皆傳を許させ給へり翁又伊勢桑名の輪崇寺僧花廼屋に就き狩野派の畫法を學び後ち土佐派に轉じて畫を能くし哉明の號あり明治三十年西行法師の像を得て庵を閑靜幽雅の地に結び西行庵と稱し茶道三昧の身となり悠々自適す方今茶名高し其嗣誠氏性頗る茶道を好むこと父に劣らず農事の傍ら翁指導の下に研鑽怠ることなし（尾張國知多郡大高町）

柴崎亘和

君は東京市赤坂氷川神社の社掌にして現に其職に在り（東京市赤坂區氷川町五二）

柴田令哉

君は東京の描金家なり先代是眞の長男にして夙に業を父に受け克く其の秘術を修め益々啓發する所あり其作品各種公私の博覽會、共進會等に於て金銀銅の優等賞を得る數次今猶盛に業務に從事しつゝあり（東京市淺草區上平右衛門町一一）

椎名直胤

君は東京青山熊野神社の社掌にして現に其職に在り（東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町大字原宿六〇）

志賀重昂

君は地理學家なり、三州の人矧川と號す舊岡崎藩士志賀倥堂翁の男なり文久三年十一月額田郡岡崎町に生る、性倜儻不羈にして大志あり曾て札幌農學校を卒業し農學士の稱號を得爾來地方に教鞭を執る年あり後上京して「雜誌日本」「日本人」等に執筆して國粹保存を鼓吹す君又著述し餘暇日本中學校講師たり次で進歩黨の一部將として憲政黨組織に盡力する所尠からず三十一年六月憲政黨内閣成るに方り擢でられて農商務省山林局長となり正五位に叙せらる後ち農學博士の學位を受領す尋で官を辭す憲政本黨常議員に擧げられ又中國民報主筆記者に聘せらる後之を罷む三十三年八月本黨を脱して立憲政友會に入り三十五年八月愛知縣郡部より衆議院議員に選出せられ翌年三月再選す後ち是を罷む其著す所南洋時事、英文歴史及論文、日本風景論地理學講義、川及湖等あり（東京市赤坂區靈南坂町三四、電話芝二二四）

白井壽雄

君は東京の神道家なり岡山縣の人明治四年二月生る、後ち出でゝ神職白井八彌の養子となり其氏を冒す初め學を皇學館に修め後ち文學博士本居豐頴に就き國學を修了し二十八年先代の後を襲ぎ駒込富士神社々掌となり更に駒込神社々掌を兼務し現今に至る（東京市本郷區駒込神明町三八三）

白石松擧

君は京都の畫家なり明治二年生る、通稱釜松、松擧は其號又登龍菴の號あり、幼にして畫を好み夙に鈴木松年翁の門に學び能く其筆意に入る最も山水花鳥に長じ人物之に次ぐ明治二十五年以降韓國、清國、臺灣等を歴遊すること三ヶ年此間到る處の勝地を探り又諸名家の門を叩き得る所あり日清事端起るや倉皇歸朝の途に就き其歸るや又山陰山陽、西海、北陸等の各地を遍歴し水紫明媚の地に遊び山水、花鳥、風俗等を寫し益々造詣す其作品は卅二年京都繪畫展覽會に於て一等賞金牌、卅六年金城繪畫共進會に於て一等賞金牌を受領す、卅六年七月以降大阪東洋美術奬勵會岐阜繪畫展覽會、米國聖路易萬國博覽會、全國繪畫展覽會、京都開設製產品評會等に於て金銀銅等の優等賞を受領す、卅七八年日露戰役の際陸軍省畫工として從軍し卅九年四月從軍記章を授けらる、四十四年帝國產業博覽會及内國製產品共進會審査主任を囑托せられ後其功勞を賞し金牌を受領す、嗜好、和歌、詩文、殊に松月堂古流の生花に通じ登龍庵と號す（京都市柳馬場押小路北入、假寓名古屋市西區早苗町）

白須心華

君は東京の畫家なり名は貞、字は季鑑心華は其號なり明治三年十月大分縣豐後國北海部郡臼杵町に生る、父は梧園と云ひ儒たり君乃ち家學を受け

後菊川南峰に修む詩文を廣瀬青村に學び書は郡家米岳を師とし爾來古法帖に據り研究す繪畫は幼より嗜み十二歳にして帆足杏雨に就き南宗の筆法を學び後僧の相馬城陽に師事す又甲斐虎山の門に遊び六法を聞く君深く倪、黄二家の要訣を探り沈石田孫無逸の眞髓を旨とす明治廿五年上京して職を海軍省に奉じ廿七八年日清事件に關し又三十七八年日露の役に參加し後職を辭し專ら後素を事とす君居常詩文を嗜み又書畫骨董を愛玩す（東京市小石川區音羽町八ノ一三）

柴田南玉

君は東京の講談師なり文久二年二月廿七日江戸神田今川橋染川亭に生る、本名大橋源三郎といふ幼にして講談を好み六歳の頃來客の中に混じて講談を聽く八歳二代目南玉に就き玉子と稱し講壇に上る九歳遊戯に耽け眼を傷ひ休止す十三歳南玉師と共に出演して南舍と改む十八歳にして主席を占む二十二歳の時漫遊に志し其途に上り各地を遍歴すること約十ケ年此間音信不通家人皆旅行中に病死せるものとす君漫遊中は自由黨の壯士となり信州地方に奔走し或時は講談師となり又壯士として政談演說を試み具さに辛酸を嘗む既にして悟る所あり再び講談師を業とし一生を終らんと期し倉皇歸東して師に會す師は南玉の名を襲がしめんとの意ありて君之を謝絶して小南玉の名を以て出んことを請ふ師は之を諾す此に於て眞打となり出演す爾來熱心業に服す明治三十年先代牧牛舍桃林氏の勸に依り柴田南玉を襲名して第三代となる其得意とする所は源平盛衰記、中山記等にして夙に好評あり方今東京講談組合委員通俗教育會演藝會員たり、嗜好、盆栽小鳥（東市京下谷區竹町）

新海竹太郎

君は東京の彫塑家なり山形縣の人新海宗慶氏の男、明治元年二月五日生る夙に漢學及漢書を學ぶ二十五年彫刻術を始む翌年小松宮南殿下の肖像を彫刻し尋で主馬頭の囑を受け、名馬八聲及閑院宮殿下愛馬クロカス號を彫刻す二十七八年の役近衛騎兵隊に召集せられて金州半島及臺灣に從軍す、翌年從軍紀章及勳八等白色桐葉章及年金を賜はる三十二年六月故北白川宮殿下御銅像の元型を彫刻す臨時博覽會監査員を命ぜられ次で彫刻術研究の爲め佛國に渡航す爾來屢々彫刻會競技會審査員に擧げられ又同會より銅賞牌其他受賞あり四十三年文部省發設展覽會に出品し三等賞を受領す（東京市本郷區彌生町三）

男爵 澁澤榮一

男は東京の紳商なり天保十一年三月十三日武州榛澤郡血洗島村（現今の大里郡八基村）に生る、市郎右衛門の男、幼名榮次郎後今名に改む青淵と號す家

藍製造を業とす男幼時家庭に學び好で稗史野乘を讀む稍々長ずるに及び父を佐けて製藍業に從事す已にして幕府政を失し尊攘の議海内に鼎沸す男乃ち時勢に感じ家業を擲ち去つて江戸に出で海保漁村の門に入り漢籍を修め千葉周作に就て劒法を學び將に大に爲すあらんとす後京都に至り各藩の志士と交を通じ竟に一橋家に仕へ其軍備を創設し財政を整理し公に隨ふて幕臣となり慶應三年二月民部公子（慶喜公の實弟）に隨從して佛國に航し泰西の文物制度を視察し明治元年十二月歸朝後靜岡藩勘定組頭を命せらる尋て之を辭し德川家の財政整理に就て献替する所あり同一年徴されて大藏省に出仕し租稅正となり累進して大藏權丞となり通商司を兼任し京阪の商家と協力して爲替會社廻漕會社商社開墾會社等を創立し之が整理監督の任に當る實に之を本邦合資營業の端緒とす次で大藏省三等出仕となる明治六年各省の定額論に就て衝突を來し井上大輔と共に辭職して民間に下り直に第一銀行を創立して自ら之が總監となり後其頭取に推さる又夙に意を商業教育に注ぎ始めて商法講習所を築地に設立す後ち之を府立商業學校となすや擧げられて其評議員となる之れ實に今の高等商業學校の濫觴なり十一年伊藤内務卿大隈大藏卿と謀りて商業會議所を創設し推されて其會頭となる之より先き明治七東年京府共有金取締となり次で營繕會議所會頭に擧げらるゝや養育院事業に盡す所尠なからず後東京府會の之を廢止するに當り男自ら奔走して之を獨立せしめ有志團體とし維持することを數年廿二年之を東京市に屬するに當り其常設委員長に推さる男又紡績事業に關し經營する所あり大阪紡績會社、三重紡績會社等は其創設に係るものたり海運事業に在ては男の大藏省在職中已に郵便蒸汽船會社を發起し其三菱會社に合併後共同運輸會社との競爭起るや之に關して盡力し其取締役たり然して又東洋汽船會社の成立に力を竭し鐵道事業に在ては日本鐵道株式會社或は筑豐興業鐵道、今の九州鐵道等又男の力與つて多しとす其他重なる銀行會社にして殆と干與せざるもの少し又公職に在ては東京市參事會員、深川區會議員、深川學務委員等に推され又二十三年帝國議會の開設に當り貴族院議員に勅任せられ翌年之を辭す後尙ほ臨時博覽會評議委員、臺灣銀行創立委員、農工商高等會議會長、北海道拓殖銀行創立委員、東京市區改正委員其他各種の委員等に推選せられ從四位勳四等に叙せらる男官を去て以來茲に四十年間實業界の王として日本商工業に盡力せし功勞大なり是を以て三十三年五月其功蹟を賞し特に男爵を授け華族に列せられ四十二年渡米實業團の團長として國民的交誼に盡す方今從三位勳二等に陞叙せられ第一銀行頭取、東京貯蓄銀行取締役會長、東京銀行集會所會長、帝國劇場株式會社取締役會長、東京市養育院長、等の職にあり（東京府下北豐島郡滝ノ川村西ケ原、電話下谷一六四九、二九四一）

實川延次郎

丈は大阪の俳優なり通稱天星庄右衛

門藝名實川延次郎と云ひ先代延若の長男なり方今各座に出演して藝名あり（大阪市南區鰻谷西ノ町）

靜間小次郎

丈は京都の新派俳優なり明治元年七月十五日山口縣玖珂郡岩國町に生る、舊岩國藩士靜間廉次の長男、名は光武雲外と號す小次郎は其藝名なり夙に廣島に出て南方一枝に就き漢籍を學ぶ後小學校に教鞭を執る數年、辭して身を政界に投じ四方に奔走す保安條例の發布と共に豫戒令を受け飄然悟る所あり爾來福井茂兵衛菅道親等と交り明治二十四年新派梨園界に入りて川上一座に加り始めて東京淺草島越中村座に板垣伯遭難事件を演ず爾後東京に居住し各座に出演して高評を博せり二十六年川上一座と分離し別に靜間派を興し初めて丈の脚本「雲間の月」を京都に演じ其名を都下に博せり後京阪の間に往來して各座に出演し傍ら指導誘掖す、嗜好武術を好み、撃劍を善くすといふ（京都市下京區祇園花見小路）

島川久吉

君は神戸の軸木製造家なり島川孝吉の長男、明治十一年十一月二十日播磨國赤穗郡山里村に生る、家世々農を業とす君幼時父は神戸に移住し海產物商を營む君小學修了後家業に從事し弱冠出でゝ南萬吉氏の經營に係る軸木製造所に入り修業す明治三十一年兵籍に入り姫路歩兵第三十九聯隊に編入せらる三十七年日露戰役に際し同聯隊補充大隊給養掛を勤務し次で師團司令部助手として後方勤務に服し陸軍歩兵伍長に任せらる三十九年功を以て勳七等に叙し青色桐葉章を賜ふ爾後軸木製造業に從事し南萬吉氏病歿するや其後を繼承自營す四十二年東尻池町四丁目に新に工場を增築し業務益々旺盛なり（兵庫縣神戸市東尻池町四丁目、電話二九四九）

下田歌子

女史は教育家なり舊濃州岩村藩士平尾錄藏の長女、安政三年八月八日生る、祖考東條琴台氏は先哲叢談を著し先考錄藏氏は藩の督學家にして共に名あり女史幼名せき夙に家督を受け七歳にして詩歌を能くす琴台翁之を戒め婦道必須の業を修めしめんとす女史快々樂まず遂に病を爲す父母憂慮の餘之を祖翁に謀る翁大に驚き女史を延て自ら薫陶す後八田知紀翁に就て歌道を修む翁上京するや女史亦上京して研鑽年あり業大に進み遂に蘊奥を極む年十五召されて宮內省に出仕し皇后陛下御歌の御相手を拜し下女官の教授となり皇后陛下より歌子の名を賜はる明治十二年下田猛雄に婚嫁し職を辭し桃夭家塾を開き和歌習字を教授す十七年夫猛雄病歿し後再び宮內省に出仕し權命婦となり次で宮內省御用掛を拜命するや元田永孚高崎正風、福羽美靜の諸老に學び更に英佛の語學を研究す後華族女學校の設立に與り教授兼幹事に任せられ十九年學監となる二十六年女子教育視察として歐米諸國を巡遊し歸朝後再び元職に復し常宮局宮御用掛に任せらる先是華族女學校の學習院に合併せらるゝや女學部長となる四十年職を辭し帝國婦人協會實踐女學校長として專ら女子教育に任ず方今從三位たり其著に國文小學讀本、家庭文庫、家政學等あり（東京市赤阪區青山北町六ノ五三、電話芝二六六六）

島田よね

女史は神戸の謠曲家なり丹生清兵衛の長女、慶應二年十一月生る、家業は呉服太物商たり、島田は其藝名なり女史幼にして舞技を好み始め島田らくの門に舞技及三味線を學ぶ年あり師歿後其二代目勝に就き修業す其得意の技は清姫、橋辨慶、紅葉狩等なり方今專ら門弟の教授に從事す（神戸市相生町四丁目）

島田文章

君は東京の畫家なり舊紀州藩醫島田元孝の長男、明治十二年十一月十五日生る、通稱孝次郎、始め春溪後廣歌と號し後又今號に改む別に思成堂の號あり幼にして繪畫を好み十歳榎本遊谷に師事し後大阪に赴き叔父湯川松堂の門に研究す明治三十三年五月上京して野村文舉の門に遊び得る所あり師文舉病歿後師を求めず專ら丹青を事とす其得意とする所は人物山水にして又之を能くす嗜好觀劇（東京市本郷區根津片町二三）

ひ之部

土方久徴

君は銀行員なり土方久巳の次男、明治三年九月十四日東京麻布鳥井阪町に生る、同二十年第一高等學校に學び二十八年七月帝國大學法科大學を卒業して法學士となり直に日本銀行に入り營業局に勤務す翌年十一月北海道支店の營業主任となる三十年十月銀行業視察として英、白兩國へ差遣せられ三十二年歸朝す此年十月檢査役となる三十四年營業局調査役に進み三十六年十二月出納局長心得となり翌年九月國債局調査役に轉じ次で國債局長に進む幾もなく營業局長となる三十九年四月日露事件の功に依り勳五等に叙し双光旭日章を賜はる此年八月國債局長となり營業局長を兼ぬ（東京市深川區西大工町一、〇、電話浪花三一九三）

平戸鄰

君は東京の畫家なり舊幕臣天保四年六月江戸に生る、名は鄰字は聞命、星洲と號す又別に退思堂、是青山房の號あり初め書を中根半仙の門に學び後川島蘭州を師とす師の歿后援攫せられて其箕裘を繼承す方今專ら子弟の教授に從事す（東京市下谷區徒士町一ノ四八）

平櫛田仲

君は東京の木彫家なり田中謙造の長男、明治五年一月岡山縣後月郡西江原村に生る、家世々農を業とし一郷の名門たり少時出でゝ平櫛家を再興し今姓に改む、通稱倬太郎田仲は其號なり十五歳にして大阪に出で親戚の家に入り商業の見習をなす六年、後志を彫刻術に起し翌年同市彫刻家中谷省六氏に師事し業を受くる僅かに一年病に罹り歸鄉す後瀧澤天友氏に就き指導を受け共に奈良に赴き古代美術品を討究し大に得る所あり廿六歳意を決し東上して高村光雲翁の門を叩き翁の指導を享け傍ら山崎朔雲、米原雲海氏等と交り聞く所あり技大に進み且つ塑像術に精通するに至る嘗て彫工會競技會に始めて讀書志人の木彫を出品し三等銅賞を受領す後佛國巴里大博覽會へ出品し撰拔せらる、次で日本美術協會「君が代」木彫を出品し大に好評を博し名聲頓に四方に揚る此出品宮内省御用品として御買上の榮を荷ふ其他内外各種諸會に出品し銀銅賞牌を受領する拾數回又東宮殿下宮内省御買上の榮を蒙ると貳回君又嘗て伊豫の大寶寺住職西山禾田和尚に就き參禪せりといふ方今日本美術協會彫工會の委員にし

て郡下有數の木彫家たり（東京市下谷區茶屋町九、原籍廣島縣沼隅郡今津村）

平岡好文

君は東京の神社家なり、平岡好興の男、慶應三年三月二十一日江戸京橋佃島三番地邸に生る、其先は河内國平岡神社の神職にして中古故ありて津守氏を冒す寛政七年幕府の命に依り舊姓平岡氏に復す天正十八年八月平岡權太夫好次攝津國西成郡佃村住吉明神の分靈を奉じて江戸に下り安藤對馬守、石川大隅守等の邸内に住吉明神分靈を奉祭す寛永年間幕府に請ひて鐵砲洲向干潟地の下附を受け始て築島工事を起し正保二年に竣工す生地の村名を採り佃島と稱し之を社地と定め社殿を造營す今の佃島是なり正保二年六月住吉三神、神功皇后及德川家康の神靈を奉還祭祀し爾來世々神職にして代を經る君に至りて十代目とす君明治六年三月より三輪義方に就て漢學の句讀を受け傍ら加藤千浪に就て習字を始む八年南八丁堀村田小學校に入學し十二年六月島田重禮の門に漢籍を修め十五年九月小中村清矩に就て國學を學ぶ十七年九月東京大學文學部古典講習科圖書課に入學し二十一年七月卒業す此年十二月佃島小學校新築費寄附の廉を以て褒狀を受く二十二年五月皇典講究所學階二等司業となる六月佃島住吉神社副祠官を拜命し廿七年四月同神社々司に補せらる三十年六月二十七八年日清戰役の際軍資献納の廉を以て褒狀を受く此年六月二十九年府下水災救恤費寄附の廉に付褒狀を受く後又東京府士族授産金を京橋區内小學校に寄贈し感謝狀を受く三十一年九月、二十九年嚴手、宮城、青森三縣下海嘯の際救恤金寄贈せし廉に依り褒狀を受く三十四年七月東京府神職管理所理事に選擧せらる八月皇典講究所五等學正の學階を受け十月願に依り住吉神社々司を免せられ次で長野縣國幣中社生島足島神社宮司に補せらる三十五年三月正七位に叙せられ此年三月東鹽田村小學校教員等に歴史國語の教授を爲す次で長野縣神職合議所參與を囑托せらる爾來同神職合議所囑托講師、長野縣皇典講究所分所試驗委員又各郡神職講究會講師を兼ね三十八年六月願に依り宮司を免せられ後ち長野縣神職會議所長より在職の功勞を賞し紀念木盃及感謝狀を受く此年八月歸京して神職試驗委員となり、佃島住吉神社々司に補せらる三十九年十二月東京府神職會參事員に擧げられ、四十年七月皇典講究所祭式科優等證を受け同所祭式科講師を囑托せらる爾來香川、石川、岐阜其他各縣の講習會講師として出張を命せらる四十一年十二月皇典講究所講究課詰となり四十二年三月東京府神職會參事員に再選す此年十二月勳六等に叙し瑞寶章を賜はる四十四年三月東京府神職會參事員に再選せられ今現に其任に在り君又和歌を能くす近時述懷一首を得たり「千萬のしわさの上にはなれぬは只眞心のひとつなりけり」（東京市京橋區佃島三番地）

伯爵 土方久元

伯は舊土佐藩士なり土方利右衛門久用の長男、天保四年十月十六日生る、幼名楠左衛門、又大一郎と稱す後今名に改む素山と號す幕末藩の周旋方として京都に往來し三條公等七卿に隨ひ長州に走り又扈して筑紫に下り頗る王事に勤勞し薩長調和に盡瘁す維新後徴されて太政官に出仕し内史より内務少輔に累遷し明治十二年轉じて宮内少輔に任せらる十八年内閣書記官長に任ぜられ後侍補、宮中顧問官等に歴任す此間歐州巡視を命ぜられ獨逸公法學者「モッセ」氏に就て政體憲法に關する講談を聽問す二十年井上條約改正案に對し尾崎三良氏等と其中止を唱ふ此年七月農商務大臣に任ぜらる幾もなく宮内大臣に轉ず爾來其職に在ること殆ど十年の久しきに及び累進して正二位勳一等に至り二十七八年事件の功に依り華族に列し特に伯爵を授かり二十九年六月職を辭し特に大臣の禮遇を賜ふ後帝國制度調査局總裁心得を命せらる方今議定官の職に在り（東京市小石川區林町六二、電話番町一六〇）

男爵 平田東助

君は貴族院議員なり舊米澤藩士伊藤昇廸の二男、嘉永二年三月二日生る、安政三年出でゝ平田亮伯の養嗣子となる曾て露獨二國に官遊し明治三年大學南校大舍長となり十一年大藏兼大政官權少書記に任ぜられ三等檢査官大藏兼太政官大書記官に進み、參事院議官補兼書記官法制局參事官同部長、臨時内閣書記官長心得、樞密院書記官長等に歴任す此間伊藤參議に隨ひ歐州に差遣せられ又參事院審理委員、帝國議會政府委員たること二回臨時政務調査委員條約實施準備委員、法典調査會委員等に擧げられ二十三年貴族院議員に勅任す三十四年六月桂内閣成るに當り農商務大臣に親任せらる次で從三位勳二等に陞叙し同年日英同盟の條約成るに及び特に男爵を授けられ三十六年六月官を辭す後再び臺閣に列し内務大臣となる四十四年諸相と共に掛冠す方今正三位勳一等貴族院議員たり（東京市神田區駿河臺袋町一二、電話本局九二八）

平野德太郎

君は德島縣の酒造業家なり先代德兵衛の長男、弘化四年四月生る、其先淡路國志知より撫養町に移住し此地の鹽濱を開き鹽田業を興し大に地方の製鹽業を波舞振興す寛文七年酒造業を創め爾來子孫業を繼き君に至る君幼にして父を喪ひ親族三木與吉郎方に養育せられ十四歳の時歸宅して父業を繼く爾來意を酒造の改良に傾け諸國に巡遊し醸造家の情態を視察し研究する所あり由

來此地の酒造方は濃口の酒類にして純良なる薄口を醸造するものなし君爰に着眼し杜氏の技能、水質の撰擇、醸酵の方法、醸造場の構造、器械の改善等に苦辛研鑽すること多年竟に宿志を達して同業者等を覺醒し薄口造酒家の名聲四方に盈つ即ち鳴門正宗是なり四十二年縣知事は其功を賞し銀盃を授與せらる四十二年十一月全國酒類共進會に出品し二賞銀牌を受領す其他各種公私の諸會に於て金銀銅の優等賞を受領する十數回曾て町會議員、町學務委員、撫養酒造業組合組長たること多年今や家業を嗣子喜太郎に讓り專ら公共の事に盡力しつゝあり、嗜好、將棋（阿波國撫養町大桑島村四五、電話長二、同三）

土方寧

君は法學博士なり舊高知藩士土方直行の長男、安政六年二月十二日生る、明治十五年東京大學法學部を卒業して法學士の學位を受領し尋て文部省御用掛となり爾來東京大學法科大學助教授に任じ從七位に叙任す二十年六月英國に官遊し二十三年英國倫敦ミッドル、テンプルに於てバリストル、アットローの學位を受領し正七位に進む二十六年法典調査會査定委員を命せられ後累進して正六位勳六等に陞り瑞寶章を授けらる三十一年六月法典調査會委員として其整理に從事せし勳勞を以て單光旭日章幷に金盃一個を授賜せらる又明治二十八年以來屢々文官高等試驗臨時委員を命せられ次て正五位勳六等に陞叙し後法學博士の學位を受く四十三年五月歐米各國へ差遣せらる方今從四位勳三等にして東京帝國大學法科大學教授たり（東京市麹町區一番町四七、電話番町八四六）

平岡廣高

君は東京の料理店花月樓主なり平岡彦左衛門の長男、萬延元年三月生る、同家は都下屈指の純日本式料理を以て稱せられ常に貴紳の扛鼎絶ゆる時なく好評嘖々たり（東京市京橋區竹川町二一、電話特長新橋二〇五〇）

平澤與一

君は長野縣の人宮内傳右衛門の二男、嘉永六年八月十五日信州下伊那郡下久堅村に生る、明治二年出てゝ平澤家に入り養子となる養家は鄉士たり明治十年長野縣小學師範科を卒業し五等訓導に任せられ村内小學校に奉職し兒童教育に從事す爾來學事會議員、村會議員たり明治十九年十二月上久堅村外五ヶ村聯合村戸長となる廿二年町村制實施に際し村長に推擧せられ在職十九年其間村治に關し貢献する所少からず爲めに受賞多し殊に二十七八年事件の功に依り御紋付三組木盃を下賜せらる又三十七八年の日露役に功あり勳七等に叙し一時金五十圓を賜ふ次て郡會議員、郡參事會員、縣會議員等の職を兼任す三十八年株式會社信產銀行常務取締役に推さるゝや村長の職を辭し專ら銀行業務に從事す次で所得稅調査委員となる方今株式會社信產銀行取締役、南信新聞株式會社監査役、村會議員たり、嗜好、書畫（長野縣下伊那郡下久堅村）

平田藤太郎

君は臺灣の雜貨商なり三重縣伊勢の人小川庄兵衛の長男、明治二年十一月三重縣三重郡天ヶ須原に生る、幼時父を喪ひ母うう、の連子として平田家に入る歲十一出でゝ同地の富田酒店に奉公し十七歲期充ちて歸宅す然るに一家和合せず去つて魚商を營み多少の蓄財を生ず故を以て鰹節の行商となり諸國に涉る後ち美濃の關町に一家を構へ海產物商を營む明治二十九年臺灣に航し臺北西門街の上野商店に入る幾もなく同商店破產の悲運に遇ひ五ヶ月間の俸給として家に施せる造作を以て代價を受け之を賣却して百餘金を得て魚商を開き數ヶ月にして千五百金を利す玆に於て雜貨行商となり孜々として家運の隆昌を斗り漸く基礎確立す三十一年二月臺北に店舗を設け漸次時運に叶ひ家產を增大し支店を臺南、彰化等に開き營業益々繁榮なり（臺灣臺北新起街二丁目）

比留間彦作

君は東京の神道家なり比留間彦輔の長男、明治五年三月十一日生る、明治二十一年二月皇典講究所に入學し幾もなく退學して高等普通學校に修む二十五年十一月皇典講究所六等司業となる二十七年二月吉澤卿堂に就て雅樂を學び兼て麻布區鄉社氷川神社に入り事務の見習を爲す二十八年四月扶桑教權中講義に補せられ尋で中講義に進む翌年十一月豐多摩郡中澁谷金王八幡神社々司となり外八社の祠掌を兼務す、四十年十一月皇典講究所祭式科を卒業し、四十二年九月東京神職會普通祭式作法を修了す、方今金王八幡神社々司たり（東京府豐多摩郡澁谷町字青山北町七ノ三六）

廣澤虎造

丈は大阪の浪花節講演家なり明治十年十二月生る、井上新三郎の次男、實名政次郎、幼より浪花節を好み小菊丸と稱し熱心に研究す後ち都家三勝と共に大阪天滿の國光亭に出演し好評あり爾來九州各地を巡演し明治四十二年春歸阪す天性の美音に修養の妙節を加へ勸進帳政談物等の緻密なるものを研究し且つ「ケレン」を修め漸次に妙技の域に進みつゝあり四十三年五月京都の福眞亭に座長を勤め高評を博せり方今親友派の評議員たり（大阪市西區九條町九三ノ四）

日向輝武

君は群馬縣郡部選出の代議士なり舊

上州倉ヶ野藩士日向重平の長男、明治三年八月三日生る、幼名武後今名に改む年十七前橋に在りて廢娼論を唱導し自由黨の青年有志として頗る激烈なる運動を試む己にして悟る處あり上京して東京專門學校に學ぶ當時家計裕かならず君獨立自營の道を講じ益々勉學す明治廿一年決然米國に航す着後嚢中僅に三十金を携ふのみ是に於て諸般の勞役に服し餘暇を以て研學する三年多少の學資を整へ始てバシフキック大學に入り政治經濟の諸科を講究す幾もなく所感ありて學を捨て身を實業界に投じ因て得たる資を以て太平洋沿岸を探檢す後新聞紙を桑港に發刊して內外政治を評論し又愛國同盟會を組織して在留同胞の利權伸張に盡せり當時著す所の英文條約改正論、太平洋趨勢論、日本外交史等廣く內外人の間に行はれたり滯留十年歸途布哇に於て白人の橫暴に憤慨し抗爭して獄に下さる幾もなく免ぜられ、明治三十一年歸朝す爾來專ら力を實業の經營に盡し日米間の貿易、殖民事業を以て己の任とす又銀行、石油、鐵工等各部面に手を下し太平洋を橫斷すること前後八回君曾て我邦移民業者の規模小にして徒に競爭するの弊を慨し途に其同盟を策して幹事となり後又之を合同して副長に擧げられ盡すところあり第十七議會總選擧に際し鄕里より選出せられて衆議院議員となり爾來改選毎に選出せられ今尙其席に在り四十年日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる現に政友會所屬代議士にして草津鑛山合資會社代表社員株式會社日本電報通信社、同京濱銀行新津鑛業株式會社、日本木材輸出株式會社等の監査役たり（東京府北豐島郡瀧之川村字田端八〇〇、電話特長下谷一二四一）

日吉市之助

君は東京の鷺流能狂言師なり先代蒼之助（通稱彦兵衛）の男、嘉永二年十一月江戸に生る、家代々德川氏の抱へ能狂言師たり代を經る十代とす君夙に業を父に受く後業を廢し小學校に教鞭を執る三十ヶ年辭して專ら和泉流の能狂言を業とす今や鷺流の家元は斷絕して唯翁あるのみ、君書を能くし又俳諧を嗜み茗荷庵子弘と號す（東京市本所區石原町四五）

日比表吉

君は滋賀縣の實業家なり日比總平の男、嘉永三年江州長濱に生る、父總平氏は米穀及機業を營み刻苦勤勉家道を興せり君弱冠家督を相續し爾來機業を廢し米穀生糸商を業として家聲益々揚る卅七八年日露戰役の際市街宅地增稅に反對し地方代議士等と謀り大に奔走盡力す君町會議員として勤續すること最も久し其間長濱町小學校建築又農學校創設等に與り盡す所多し明治二十九年蠶業學校設立の議起るや率先其敷地を町民より寄附せしめんことを發議し爾來有志と協力し之が勸誘斡旋の勞を執り又同縣蠶糸業組合財政の困難に際し專ら維持方法を講究し以て其基礎を確立する等地方公共の事に貢献すること鮮少ならず三十一年三月同組合は銀盃一個を贈り其功勞を表彰す其他農學校建築等に關し感謝狀を受領する甚だ多し（滋賀縣阪田郡長濱停車場前）

平松三郎

君は愛知縣の畫家なり明治十七年四月三日生る、名は參通稱は三郎、海洲は其號なり、幼より畫を好み、山本梅莊翁の門に入り翁の指導を享け南宗派の畫法を研究す（愛知縣知多郡八幡）

平沼專藏

君は橫濱の石炭雜貨及洋糸織物仲買商なり平沼安兵衛の三男、天保七年正月二日武藏國高麗郡飯能町に生る壯年出でて橫濱の石炭商渡邊治右衛門氏の店員となり刻苦辛酸備さに嘗む慶應元年六月始て獨立の業を企て唐糸金巾羅紗類の仲買商を以て京濱の間に往來す同三年米作不良に當り支那米の輸入に乘じ其賣買を試みて一朝巨利を博し其名漸く京濱の間に知らる爾來幾多の商算機に當り家資頓に膨脹す當時金融界の不振を慨し資金の供給に力め益以て富豪を極むるに至る明治廿三年自ら橫濱銀行を創立して其頭取となり尋て株式會社金叶貯蓄銀行を創立し又頭取となる卅二年平戸清八等と謀り公通會を起して其會長に推され卅三年堀田隆治鈴木善兵衛氏等と橫濱中央銀行を設立して其頭取に推され方今共に其任にあり又橫濱蠶糸銀行頭取、東京瓦斯紡績株式會社等の取締役、橫濱米穀取引所理事等の任にあり又橫濱市會議員、同市參事會員、橫濱道路改修委員長、同水道事務所長、同區域擴張委員等の公

務に盡瘁せり殊に公共事業の爲に捐金せしもの多く曾て海防費金五萬圓を献金し特に從五位に叙せらる其他學校衛生道路罹災救助等に依り金銀賞杯賞狀等の受賞枚擧に遑あらず又夙に貧民子弟を教育すべき慈善的學校なきを慨嘆し三十年之か設立を企圖し時の神奈川縣知事淺田德則氏前文部次官辻新次氏等に謀り自ら資金拾餘萬圓を投し一大校舍を建築し貧民就學を奬勵す爾來頗る隆盛を極む而して其貧民生徒には常に不備の金品を施給し殊に寒暑二季の初めに於て各生徒毎に反物一反を惠與するを例とす三十三年貴族院議員に當選し三十四年九月之を辭す翌年市部より衆議院議員に選出せらる四十年日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる方今前記公私職務の外尙横濱中央貯蓄銀行頭取、横濱共同電氣株式會社、横濱電氣株式會社、横濱倉庫株式會社等の取締役、日清紡績株式會社取締役會長、千代田瓦斯株式會社、鬼怒川水力電氣株式會社等監査役にして市參事會員、商業會議所議員等の任に在り（横濱市本町二ノ二七、電話特長九九七）

平野榮次郎

君は山口縣の實業家なり先代榮次郎の長男、明治十年五月生る、父榮次郎氏は大阪の人維新前毛利公禁裡守護として上洛の際之に從ひ功あり後ち馬關に移住す革政後論功の事あり士分に列せんとす父之を辭して身を商業に委し海產物荷受問屋を開業す爾來勤勉力行業務漸次に隆盛し燦然斯業界に頭角を現はすに至る明治三十三年父隱退して名を德兵衛と改む君家督し榮次郎を襲名して家業を繼ぐ此年四十物同業組合取締役に擧げらる方今下關市物品問屋組合會議長、市會議員、下關商業會議所常議員たり、嗜好、謠曲大弓（長門國下關市岬之町）

日比谷平左衛門

君は東京有名の洋糸及紡績問屋なり新潟縣の人大島榮造の三男、嘉永元年二月廿一日、南蒲原郡三條町に生る、舊名吉次郎明治十一年六月出でゝ日比谷氏を冒し後今名に改む年甫て十三江戸に出で棉花商松本屋齋藤彌助方の丁稚となる機才あり重用せられ十八歳にして支配人に擧げらる三十歳日比谷家に入り棉花商店を開く君夙に紡績業の有望を看取し明治廿九年同業者と謀り東京瓦斯紡績會社を創立し推されて其專務取締役となり專ら經營の衝に當る君多年斯業に從事し其形勢に通じ常に市場の需要を察して緩急製品を按排し社運日に隆盛を加ふ後托せられて富士紡績會社の事務を整理して其衰運を挽回し機を見て遂に兩社合同の策を劃し之を斷行せしむ君又公共の事に盡し爲に賞牌を受領するもの數次、方今鐘淵紡績株式會社取締役社長、第一生命保險相互會社、富士瓦斯紡績株式會社、東京毛織物株式會社等の取締役、日本煉瓦製造株式會社監査役、日清紡績株式會社相談役にして東京商業會議所副會頭の任に在り（東京府荏原郡品川町北品川御殿山二〇三、電話長芝三八八）

平井晴二郎

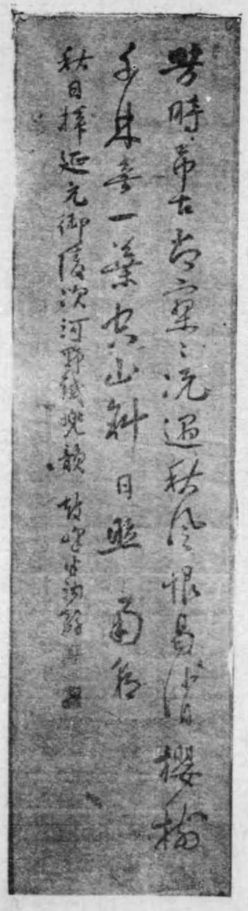
君は工學博士なり舊金澤藩士平井貞三の次男、安政三年十月十六日生る、夙に藩立英學校致道館に入學し英人「ヲスボーン」三宅又一（今の醫學博士三宅秀）等に就きて學び、明治四年藩選を以て大學南校に入る八年文部省より工學修業として米國留學を命ぜられ紐育「トロイ」府「レンセラー、ポリテクニツクインスチユート」を卒業し「シウイル、エンジニーア」の學位を受く次で同國陸軍省工兵課雇となり「ミシシツピイ」川治水工事に從事し又「シイ、ビイキユウ」鐵道會社に入り鐵道事業に從ひ十三年歐洲大陸を巡視して歸朝翌年開拓使御用掛として札幌に在勤し採炭及び札幌々內間鐵道建築を擔當す爾來屢官制改正あり工部權少技長、農商務權少技長、同少技長、北海道廳少技長、同二等技師等に歷任し正六位奏任官二等に累進し終始北海道事業に從事す二十年春北海道鐵道事務所長に兼任し同會計主務を命ぜらる翌年奉非職となり大阪鐵道株式會社技師長を囑托せらる此年六月工學博士の學位を授けらる尋で函館水道工事全般を依囑せられ又讃岐鐵道建築工事監督を囑托せらる廿二年冬複職し翌年夏再び非職となり直に北海道炭鑛鐵道會社技術長となり室蘭空知間及び夕張支線工事に從事す廿四年同社鐵道課長を命ぜられ翌年春同廳官長より同會社理事を命ぜらる二十六年夏同會社を辭し翌年遞信省鐵道技師に任じ從五位に叙せられ鐵道局監理課長たり二十八年遞信技師に任じ鐵道會議々員に擧げられ尋で二十七八年事件の功を以て勳六等瑞寶章及び金五百圓を賜ひ從軍紀章を授與せらる二十九年內務大臣より大阪築港計畫調査を囑托せらる次で遞信省鐵道技監に任じ高等官二等正五位に叙し東京市區改正臨時委員たり幾もなく勳五等に叙し更に遞信技監兼鐵道技監に任じ又鐵道作業局部長を兼ぬ爾來鐵道局監理課長心得、作業局運輸部長兼汽車部長心得、鐵道技監兼同作業局部長等を經更に鐵道技師兼作業局部長に任じ同局運輸部長を命ぜられ勳四等に叙し三十二年冬再び鐵道會議々員仰付られ次で從四位勳三等に陞叙し三十七年七月鐵道作業局長官に進み四十年四月帝國鐵道廳總裁に任ぜられ尋で鐵道院副總裁となり以て今日に至る現に正四位勳二等にして鐵道會議々員を兼ぬ（東京市芝區汐留町二ノ一官舍、電話新橋一二六二）

樋口茂助

君は舊灣の海運業者なり、薩摩の人樋口義七郎の長男、明治九年八月、鹿兒島市築町に生る、小學卒業後、鹿兒島中學校に入り、明治二十九年卒業後神戸に出で英人「ビショップフォース」に就き英語を研究し、神戸商館に入りて輸出入の事を取扱ひ三十一年、神戸商船會社に入り、初めて香港に航す、

三十二年、臺灣淡水支店詰となり、三十三年五月、福州に出張して止まること五年、三十八年安平支店詰となり、三十九年打狗支店主任となる、室福江子、嗜好、銃獵、（臺灣打狗哨船頭街）

秀嶋鼓峯



君は佐賀縣の人幼名司馬次郎名は醇三、字は子曠鼓峰は其號なり安政二年七月七日、肥前國東松浦郡嚴木村に生る、始め漢籍を祖父信齋翁の五惇塾に學び後ち草場船山翁の本立堂私塾に入る晩年和歌を岡吉胤翁に學で得る所あり又芝竹を作る頗る雅致あり明治九年山梨縣屬となる十三年大分縣に轉任し十九年再び山梨縣屬となり二十六年東北巨摩、南都留等の郡長たり此間累進八代郡長に轉任し爾來南巨摩西山梨、從六位に至る四十三年三月休職となる先是二十七八年日清戰役の功に依り金幣を賜はる又三十七八年事件の功に依り勳五等に叙し金四百圓を下賜せらる君又詩歌に通じ兼て書畫を能くす今や閑散專ら筆硯を友とす（山梨縣甲府市伊勢町）

平岡萬次郎

君は東京の辯護士なり平岡太吉の長男、萬延元年三月八日播磨國印南郡志方村大字上宿木村に生る、夙に漢籍を修め小學校に敎鞭を執る明治十四年上京して明治法律學校及び專修學校に學び卒業後石川縣專門學校講師を囑托せらる後辯護士となり法律事務所を東京に開き爾來熱誠其業務に從事し傍ら裁判粹誌の編輯に與り又破産管財人を命せらる第十一議會解散後三十一年三月兵庫縣第五區より衆議院議員に選出せらる其解散するに及び再選せられ以て今日に及ぶ其間常に院内の正義に與し關西會を起し推されて其幹事となれり三十五年八月滿期總選擧に際し憲政本黨兵庫支部の推薦に依り郡部より衆議院議員に選出翌年三月再選せられ後之を能め爾來專ら前記の業務に從事し以て今に及ぶ（東京市京橋區彌左衛門町一五、電話長京橋二一〇）

平井毓太郎

君は醫學博士なり三重縣の人木場治兵衛の長男、慶應元年十月十一日生る、後出で丶平井家を繼ぐ、明治二十三年七月帝國大學醫科大學を卒業し醫學士の稱號を得て同大學助手となる、二十七年三月京都府立療病院に入り内科部長となり三十二年五月小兒科學研究の爲め獨逸へ留學を命せらる三十三年十一月京都帝國大學醫科大學助敎授に任じ三十五年十一月歸朝後敎授に進み三十七年四月醫學博士の學位を受く現に從五位同大學敎授たり（京都市上京區富小路通丸太町南入桝屋町）

平尾賛平

君は東市の賣藥化粧品卸商なり岳陽堂と稱す平尾賛平の二男明治七年八月八日東京深川に生る、幼名貫一、明治廿二年慶應義塾を卒業す二十四年六月父に勸めて齒磨「ダイヤモンド」を製造せしめ後ち專ら之に從事し或は全國各地を跋渉して普く其商況を調査する所ありたり三十一年一月初代賛平の病歿後賛平の名を繼ぎ第二世となる尋で東西銀行取締役となり又五二會中央本部評議員に推され翌年同會東京小間物部々長となり更に又東京小間物卸商組合副頭取に擧げられたり此年農商務省の囑托を受け宮崎縣に開設せる第三回五二會品評會審査官となり功勞賞として銀牌を受く、又遠江濱松に開設せる東海實業區品評會審査主任に擧げらる今や「ダイヤモンド」の製造販賣頗る隆盛を來し神田、岩井河岸を始め其他各所に分工場を有し名聲四方に高し現に東京小間物卸商組合副頭取たり（東京市日本橋區馬喰町一ノ六、電話特長浪花六五二、同五二八）

日比久太郎

君は滋賀縣の實業家なり日比久衛の長男、安政五年六月十六日生る、家世々農を業とす夙に練習學校を卒業す明治二十五年以來町會議員として今尚其職に在り其間郡會議員、株式會社長濱銀行の重役たり、先是明治十一年十月家督を相續す方今株式會社長濱糸米取引所理事長たり、嗜好、俳諧、淨瑠璃（近江國阪田郡長濱町字三ッ矢）

廣岡庄八

君は高岡市の實業家なり廣岡庄兵衛の長男、慶應三年五月七日生る、明治二十六年四月同姓庄二の養嗣子となる養家は世々醬油醸造業及典舗を營む養父庄二氏は嘗て市參事會員、市會議員、商業會議所議員其他銀行會社等の重役となり地方公共事業に盡力する處少からず君明治三十六年一月家督を相續し家業を繼ぐ夙に漢籍を喜多康齋の門に修め明治二十五年市參事會員に選擧せらる爾來株式會社共立銀行、株式會社高岡貯蓄銀行等の監査役たり曾て八王子由木銀行を買收して高岡實業貯蓄銀行と改稱し其頭取となり現に其職に在り又鹽專賣法の實施せらるゝや北陸鹽株

式會社を設立し其社長に推され今猶其職に在り方今前記の外高岡銅器株式會社取締役、株式會社高岡共立銀行、株式會社高岡蓄金銀行等監査役、高岡質商組合取締役、日本赤十字社特別社員大日本佛教慈善財團地方委員たり、嗜好、圍碁（富山縣越中國高岡市横田町、電話八）

廣濱宗休

君は東京の茶道家なり舊幕臣廣濱市郎右衛門の三男、嘉永四年十二月二十六日江戸に生る通稱幸三郎、不言庵宗は其號なり幼より風流の道を好み始め石州流の茶道を學び後今日庵宗知翁に師事し千家裏流義を修め蘊奥を研む又俳諧を孤山堂無外に學び桃華園素角と號す嘗て女子技藝學校に奉職し斯道の教授たりしも多病を以て辭し方今自宅に在りて後進の指導誘掖に從ふ（東京市本郷區春木町三ノ四〇）

廣澤菊春

丈は京都の浪花節講演家なり佐々木善四郎の二男、明治十七年三月十三日京都千本今出川に生る、家世々植木商を業とす、本名善三郎、廣澤菊春は其藝號なり、幼より浪花節を好み二十四歳家を脱し大阪に出て廣澤菊路に師事し初めて神戸の楠公神社内菊の屋定席に佐倉宗五郎記を講演して大に好評を博す幾もなく座長に進む其得長の讀物は加賀美山記、松前五郎兵衛傳、安中宗三郎記、水戸黄門記等なり方今親友派會員たり（京都市上京區七本松通今出川南入）

樋詰正治

君は臺北の醫師なり、明治十三年一月、山形縣庄内に生る、實父修行は舊庄内藩士、維新の際功勞尠からざりし人、君は其の長男、普通學を鄕校に修め、三十二年、仙臺醫學專門學校に入り、三十六年卒業し醫學得業士となり、後直に京都に出で、京都帝國大學醫學大學教授藤波博士に就きて病理學を研究する二ヶ年、三十八年九月、渡臺、臺北醫院内科に勤務、四十二年五月、職を退きて獨力臺北府中街に内科小兒科醫院を開設して以て今日に至れり、資性溫厚篤實、頗る業務に熱心なり（臺北府中街三ノ三七、電五四七）

廣瀨東畝

君は東京の書家なり土佐舊佐川領の鄕士猶治氏の三男、明治八年二月廿六日生る、名は濟、東畝は其號なり幼より繪事を好み寫生を事とす偶々雲州松江の書家天野瘦石翁の來遊に際し乃ち就きて學ぶ師の歿后更に種田豊水翁に就き南宗派の書法を修む明治三十二年上京して荒木寛畝翁の門に入り南北合派の筆意を研究し三十五年東京高等工業學校に出仕し助教授となり圖畫科を擔任教授し以て今に及ぶ先是三十二年以來日本美術協會覽展會に於て褒狀を受け三十三秋季同會へ老松猛鳥の圖を出品し宮内省御用品の榮を蒙る又日本畫會覽展會に於て百畫當選の一に入る米國聖路易萬國博覽會に曉雉の圖を出品し銀賞牌を受く曾て英國コンノート殿下、獨逸皇族、シヤム皇族等の御席揮

毫を勤む、又寛畝塾讀畫會の主幹に推され現に其職に在り方今日本畫會委員日本美術協會委員、土曜會幹事たり（東京市下谷區上野櫻木町三四）

平沼騏一郎

君は法學博士なり舊津山藩士平沼晋の二男、慶應三年九月二十八日生る、明治二十一年帝國大學法科大學を卒業し法學士の稱號を得尋て司法省參事官試補となり二十三年判事補に轉じ芝區治安裁判所に勤務す後判事に進み爾來東京、千葉、横濱等各地方裁判所に轉勤す此間數々執達吏登用試驗委員長に擧げらる二十八年東京控訴院部長に轉補し從六位に陞る三十一年同院部長に補し更に同檢事に任ず三十三年警察監獄學校講師を托せられ從五位に叙し大審院檢事に補せらる、三十九年司法省民刑局長を兼ぬ翌年三月司法制度視察の爲め歐米へ差遣せられ次で法學博士の學位を受く方今從四位勳三等にして現に其職に在り（東京府豊多摩郡大久保村大字西大久保四二〇、電話番一一八一）

比志嶋義輝

君は退役陸軍武官なり舊薩摩藩士其先は清和源氏村上頼重に出つ頼重の子榮尊始めて島津氏に仕へ薩州滿家院の地を領し比志嶋郡に居る其子祐範始めて比志嶋太郎と稱す子孫相繼で武功あり天文慶長の頃蒲生吉田等の地頭に補し島津家の老職たり是より數世の孫藏に至る藏諱は國定細工奉行たり文久年間英艦と砲戰し功あり高奉行となる之を君の父とす君は其長男にして弘化四年九月三日鹿兒島郡西田に生る君幼にして小姓に擧げらる當時至孝の譽れ高く萬延文久中屢々賞賜せらる次て奥小姓となる慶應二年社寺方を以て軍務局に出仕し翌年島津久光の警衛小隊頭として京師に入り禁闕を守る戊辰の役伏見鳥羽等に戰ひ次て奥州白河に轉戰して銃創を蒙り平憊後再ひ會津に出戰す明治二年藩の常備歩兵半隊長に擢てられ翌年徵されて上京し四年陸軍小尉に任し御親兵小隊附となる五年大尉に累進す七年佐賀及征臺の役に從ひ功あり平定後清國に差遣せらる九年近衛聯隊中隊長に補す十年西南の役京都行在所を護衛す後戰地出張を命せられ征討別働第二旅團に編入し尋て近衛歩兵大隊長となり出征第一旅團に編入し少佐に進み各地に轉戰す翌年功を以て勳四等に叙し年金百三十五圓を賜はる十六年中佐に任し十八年參謀本部第一局第一課長に補し次て勳三等に叙し旭日中綬章を賜はる十九年歩兵第十九聯隊長に轉し翌年大佐に進み廿二年同第一聯隊長に補し翌年累進して從五位に叙せらる廿五年第一師團管軍法會議判士長を命られ尋て第四師團參謀長に轉補す幾もなく休職となり故山に歸臥す廿七年日清戰役に際し復職し留守第二旅團長となる翌年後備歩兵第一聯隊長に轉補し南征混成枝隊司令官に補せられ出征し澎湖島に上陸し須臾にして全島を占領し武名天下に振ふ爾來守備數十日疫病隊を侵し悲慘を極む君愛護具に至り兵士感泣す既にして臺灣に移り軍務に服す其功少からす此年八月少將に昇任

し臺灣兵站監に補し次て功四級に叙し金瑪勳章を賜ふ翌年正五位勳二等に叙し瑞寶章を賜ふ次て臺灣守備混成第三旅團長に轉す君能く下を愛す之を以て蠻民亦頗る其德に懷き又其威武を稱して鬼將軍と呼へりと云ふ卅一年四月歩兵第十五旅團長に轉補し卅四年豫備役仰付けらる卅七年日露戰役に際し留守歩兵第二旅團長に補せられ次で後備歩兵第九旅團長として功あり從四位勳二等功三級に陞叙せらる方今大日本體育會長、在鄕軍人會千駄ヶ谷分會長たり君文事を好み又和歌を能くす（東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町千駄ヶ谷九〇三）

廣澤辨二

君は獸醫學家なり靑森縣の人文久二年五月十九日生る、明治十八年駒場農學校を卒業し獸醫學士の稱號を得て農商務省に出仕し農務局に勤務す後農商務省技師に任せられ累進して從六位に叙せらる次で農務局牧馬課長となり三十四年六月牧馬視察の爲め歐米に差遣せられ翌年歸朝す後馬政局設置と共に入つて馬政官に任し第一部牧馬課長となる、方今從五位にして第三課長たり（東京市麻布區霞町一）

平野よう

女史は名古屋の敎育家なり高井半八の四女、明治五年六月二日美濃國安八郡大垣町に生る、十八歳出でゝ平野家に嫁す後ち東都に住し居ること六ヶ年にして良人を失ふ明治二十九年三月渡邊裁縫女學校（今の東京裁縫女學校）に入學し三十年卒業後進て高等科に入り在學一ヶ年卒業して名古屋市に出て三十一年職を同市高等女學校に奉じ在勤九ヶ年職を辭す三十九年四月私立平野裁縫女學校を自ら設置經營し普通科速成科師範科の四科を設け百有餘の生徒を收容し熱心子弟の敎授に從事す、嗜好、茶道花道、國文學（愛知縣名古屋市中區南鍛冶屋町五ノ二）

日比翁助

君は東京の實業家なり舊久留米藩士竹井彌太郎の二男、萬延元年六月二十六日生る、後出てゝ日比氏を冒す夙に上京して慶應義塾に入り理財學を修め明治十八年卒業後海軍省天文臺に勤務せり後退きて堀越角次郎氏の毛斯綸商店に入り更に三井銀行に轉し和歌山支店長となる幾もなく本店副支配人に擧けらる三十三年三井呉服店改革に際し入つて同店の營業部長となり鞠躬盡瘁其基礎を確立し遂に擧げられて其專務取締役となり今現に其職に在り兼て帝國劇場株式會社取締役たり（東京府荏原郡品川町大字北品川宿三三九、電話芝一三三三）

日比忠彥

君は工學博士なり舊福井藩士日比登の二男、明治六年一月廿日生る、同三十年東京帝國大學工科大學を卒業し工學士の稱號を得京都帝國大學理工科大學助敎授となり卅五年土木學研究の爲め獨佛に留學を命せられ三十七年歸朝後工學博士の學位を授與せらる三十九年同大學敎授に任し累進して從五位に陞叙し現に其職に在り（京都市上京區河原町通二條北入松蔭町）

日比野寛

君は敎育家なり織田文信の三男、慶應二年十一月三日尾州中島郡日下部村に生る、後ち出てゝ海東郡佐依木村字柚木、日比野家に入り養嗣子となる、養家は里閭の名族たり、君名は寛、双翠と號す、愛知縣中學校修了後東京高等學校を經て帝國大學に入り法科を專攻し明治二十八年七月卒業して法學士となり農商務省に出仕す三十一年五月鑛山局監督局に轉任し同年六月新潟、山梨、長野地方森林會議員に擧げられ次て神奈川地方森林會議員に推され在職四ヶ年、三十二年七月愛知縣第一中學校長に任す爾來赤誠學生の薫陶に盡瘁し學生も亦君を敬慕すること赤子の慈母に於けるが如し三十七年累進從六位に至る、四十一年私立育英學校を名古屋市に創設して國民科、實業科、中學速成科、中學豫備科等を設け敎育上に盡力す其著に英國工業史、日本臣道敎科書、日本臣道論靑年子女隨落の理由、國民必讀日本臣道等あり、嗜好、讀書（愛知縣名古屋市南久屋町九三）

伯爵 廣澤金次郎

伯は貴族院議員なり舊山口藩士贈正三位廣澤兵助の三男、明治三年七月十三日生る、父兵助（眞臣）王政維新の際國事に盡し明治二年參議の職に在り刺客の爲に斃さる十二年亡父生前の勳功に依り特旨を以て華族に列せられ十七年伯爵を授けらる二十一年英國に留學を命せられ二十四年從五位に叙し次て正五位に進む卅年貴族院議員に互撰せらる翌年山縣内閣成なるや擢任せられて内閣總理大臣秘書官となる三十二年官を辭し再ひ貴族院議員となる方今從三位勳四等に累進して今尙其職に在り（東京市麻布區材木町二八、電話芝一九九六乙）

廣田謙吉

君は岡山市の醫師なり舊藩醫廣田周碩の長男、文久三年六月生る、夙に學を修め明治九年岡山縣病院に入り醫學を修むる年餘にして去つて大阪に出で十一年大阪府立病院に入り醫學を學び傍ら英學を講究す後大阪專門學校の創立に際し直に同校に轉學す幾もなく廢校となるに及んで上京して東京大學別課醫學校に入り傍ら獨乙學を修め十九年卒業後諸大家に就き内科を專攻すること一年餘にして歸鄕す後箕冢を繼き醫業を開く三十二年再び上京し東京醫科大學及び長與胃腸病院に於て内科及

胃腸病を研究し歸鄕後專ら消化機病の治療に從事し名聲極て高し養春堂と稱す（岡山縣岡山市東中山下八九）

廣谷源治

君は函館の實業家なり靑森縣の人廣谷利助の長男、安政元年十月二十七日生る、後北海道函館に出で實業に從事し現今株式會社函館銀行頭取、函館汽船株式會社、樺太漁業株式會社、陸奥汽船株式會社、北見株式會社等の取締役株式會社百十三銀行、同函館貯蓄銀行、渡島鑛業株式會社、北海道セメント株式會社等の監査役たり（北海道函館區富岡町五）

平山成信

君は貴族院議員なり舊靜岡藩士平山省齋の長男、安政元年十二月六日生る、明治四年左院權少書記五等書記生に任じ六年博覽會事務局出仕に轉し墺國に差遣さる爾後正院出仕一等書記生佛國在勤等を經て明治十四年以降大藏少書記官、元老院少書記官、同權大書記官大藏大臣兼內閣總理大臣秘書官、內閣書記官長、樞密院書記官、行政裁判所評定官等に歷任し帝國博物館評議員に擧げられ二十七年貴族院議員に勅任せらる方今從三位勳二等宮中顧問官、有栖川宮別當、貴族院議員たり（東京市小石川區原町三一、電話番町六七六）

平野白峰

君は京都の肖像畫家なり明治十三年七月福岡縣小倉に生る、畫家平野蘭溪の二男、通稱國男、白峰は其號なり、幼より畫を好み明治二十一年福岡縣工業學校に入り製圖科を專攻し二十四年卒業す後京都に到り專ら肖像畫を研究し東西諸名家の筆蹟に臨摹し折衷參酌遂に一家を成すに至る方今京都日の出新聞社に入り揷畫を擔當し傍ら江湖の清囑に應ず（京都市下京區西洞院通魚棚南入）

廣瀨金七

君は横濱の實業家なり靜岡縣の人廣瀨源兵衛の長男、嘉永二年九月朔日遠江國引佐郡金指町に生る、家世々農を業とす君慶應三年横濱に出で製茶業に從事し刻苦黽勉頗る苦辛を極む明治十三年横濱商館オット、オイメルス會社員となり次て同社代表員に拔擢せられ盛に內外輸出貿易の衝に當り遂に今日の成功を得たり爾來專ら力を鑛山事業に竭し三十九年三月大又鑛山合資會社長となり次て唐戸屋鑛山合資會社、惠美須森鑛業合資會社の各代表社員に擧げられ爾來重任して今尙其任に在り此年十二月八葦鑛山合資會社長に推され現に其職に在りて專ら鑛山事業に掌す三十八年十月淸水倉庫合資會社の代表社員に推され翌年十月横濱肥料製造合資株式會社取締役社長となり四十年二月磐城セメント株式會社取締役に選ばる君嘗て天龍川舟揖往來の積弊を慨し自ら經營して運搬業を開始し遂に之を一掃し同地方に非常の便益を與へり後故ありて古河鑛山會社に讓れり、方今製茶及蠶糸商を營み兼て前記諸會社の事業に從事し益々盛況を見るに至る（横濱市元濱町一ノ七、電話長二二四）

平塚房次郎

君は東京の水飴製造家（武藏屋）なり先代長吉の三男慶應元年四月江戸京橋區南金六町に生る、維新前本業に兼ぬるに武具販賣を業とせしが後之を罷め方今專ら前記業務に從事し汎く海外に輸出しつゝあり君好んで古書畫を愛翫し又其鑒識に富む（東京市京橋區木挽町一ノ一四、電話京橋一一九三）

男爵 平野長祥

男は貴族院議員なり舊大和田原本藩世先代平野長裕の男、明治二年十二月三日藩地に生る、幼名龜松丸五年家督を相續し十七年男爵を授けられ從五位に叙せらる三十年貴族院議員に互選せらる四十年日露事件の功に依り勳四等旭日小綬章を賜ふ方今正四位に進み其職に在り（東京市本所區小梅町二四四電話浪花九二四）

平野吉兵衛

君は京都の鑄金家（英靑堂）なり初代桂田德兵衛氏天保年代に鑄造業を開始す、其嗣平野吉兵衛英叟と號し萬延年間に先代の業を繼承し明治の初年周漢の古銅器を研究し專ら支那趣味の製品をなし明治十三年鑄銅器に一種の象眼を發明す所謂之を目鎭象眼と稱し當時盛に輸出したりき、後更に鑄造の七寶を新製して名聲を博す君は二代目平野英叟氏の三男なり、明治元年七月生る字は泰、通稱吉兵衛、松泉と號す、幼にして繪事を嗜み巨勢小石、市村水香等に繪を學び又書法を貫名海屋、小林卓藏等に修む明治二十七年襲號して其業を繼ぎ二十八年第四回內國勸業博覽會に出品して宮內省御用品となり爾來屢々御用品の榮を蒙る伏見稻荷大社の町狐、堺住吉大社靑銅燈籠（高一丈二尺）等は其傑作にして近時又從來の靑銅器に改良を加へ靑銅の着色、合金等に就き研究する所あり三十三年關西府縣聯合共進會に之を出品し二等銀盃を受領す三十五年京都美術協會、新古美術展覽會に於て二等銀賞を受領す三十六年第五回內國勸業博覽會に靑銅八瓊壺花瓶を出陳し一等賞を受領し此出品宮內省御用品となる三十七年米國聖易博覽會に於て金賞牌を受領す其他各種の諸會に於て金銀等の優等賞を受領せざることなし先是三十六年七月市より淸韓國に於ける金屬製品取調方を囑托せられ爾來普く古銅碑、古石碑、古文字、陽職陰職及點畫、欵紋等古昔名工の遺品を目擊して大に得る所あり又三十五年以降平安遷都紀念相輪棠日露戰役紀念靑銅燈籠（百二十個）長濱八幡神社銅造俊馬、福井縣氣比神社靑銅俊馬、高野山淸淨心院靑銅燈籠（高一丈三寸）南禪寺法堂風鐸、槇村男爵紀念銅碑（高一丈）等は傑作物として世に知らる又三十五年以來第八回關西府縣聯合共進會第五回勸業博覽會、戰時紀念五二會品評會、第九回關西聯合共進會等の審査員、淸韓貿易調査委員、日英博覽會京都出品協會評議員、同協會出品調査委員等に擧げらる殊に第五回勸業博覽會審査事務に盡せし廉を以て銀盃一個を下賜せらる曾て精金會を發起創立して盡力す方今京都美術協會常務委員、五

二會京都金屬部副部長、京都市美術工藝學校商議員、京都精金會幹事たり（京都市上京區寺町通姉小路北へ八）

廣澤菊路

丈は大阪の浪華節講演家なり明治八年三月一日奈良縣高市郡高市に生る、本名安田富造、藝號を廣澤菊路と稱す十八歳廣澤虎次の門に研究して幾もなく上達し二十二歳の時座長となり各地に巡業して好評を博す最も義士傳、水戸黄門記、伊賀水月等の讀物に特長の技を有す殊に各地の有志家より緞帳卓子掛等の寄贈を受くる甚だ多し方今親友派評議員たり（兵庫縣武庫郡西ノ宮木町）

肥田平次郎

君は群馬縣士族肥田有年の長男明治四年十二月二十八日生る、二十八年七月帝大法科卒業法學士の稱號を得て衆議院屬となり此年高等文官試驗に及第し以て衆議院書記官に被任爾來外務省參事官、公使館二等書記官、高等捕獲審檢所事務官、特許局事務官、農商務省參事官等に歴官し四十三年十月行政裁判所評定官に被任此間從五位勳五等に陞叙し現に其職に在り（東京市赤阪區溜池靈南坂町二二、電話芝二八四〇）

平野溫重

君は筑前小倉の辯護士なり平野平三郎の長男、慶應三年正月豊前國企救郡曾根村に生る、家世々農を業とし一鄉の名門たり父平三郎氏は幕府長州征討の際農兵として參加し戰死す明治四十一年小倉招魂社に合祀せらる君明治二十三年明治法律學校を卒業し此年九月判檢事登用試驗に及第して司法官試補となる爾來宮崎縣延岡區裁判所飫肥區裁判所等に歴任し三十一年職を辭し辯護士となり爾來專ら法律事務を執り老練の聞へあり四十一年市會議員に選擧せらる方今市參事會員、水道委員、小倉瓦斯株式會社取締役たり、嗜好、遊獵（福岡縣小倉市紺屋町）

平田重光

君は東京の金屬鑵起家なり先代重之の長男安政三年正月生る、通稱鈴太郎重光は其號別に三陽齋の號あり父重之金屬鑵起を業として君幼より就て其業を修め刻苦十年遂に一家を成し其名大に著はる明治十二年年二十四銀製茶具を第一回内國勸業博覽會に出品し始て花紋銅牌を賞賜せらる、二十六年以降彫工競技會委員に推され二十八年其部長に推さる又日本美術展覽會其他公私諸會の審査員たる事前後十數回其優作も亦頗る多く出品毎に賞牌褒狀等を受領す又嘗て鐵製香爐をシカゴ萬國大博覽會に出品して銅牌を得三十三年巴里萬國大博覽會に銀製獅の置物を出品し亦銅牌を得方今專ら其業務に從事せり

（東京市神田區末廣町一七）

姫島竹外

君は大阪の書家なり名は純字は子純通稱解三、竹外は其號、別に玄洋釣徒の號あり天保十一年三月筑前國福岡に生る、黑田侯の世臣たり年十八、村田東圃の門に遊び南畫を學ぶ數年、師の京師に遊ぶに及んで又師を選はず鄉人石丸春午當時南畫を以て名あり君之と交を結び共に研鑽する幾んど四年其易簀後專ら和漢の名畫、古今の傑作に據て修得する十有餘年時に會攘の說紛起り海内漸く多事なり其長州の事變興るや藩命を奉じ各地に往み尋で奥羽の地に轉戰し後ち屢次京阪に來往す此間苟も間あれば則ち名家を訪て畫論を講じ以て自修す維新後職を福岡縣に奉ず後所感ありて之を罷む明治十一年京阪に遊び更に東海の奇勝を探り東上して居を卜し專ら心を丹青に寄す十二年春前田侯の特命に應じ在朝の縉紳、在野の文客と會し染筆の需に應ず此年夏二條家に慶事あり特に招を辱ふし九條公より明宮殿下御座の御用品揮毫の内命に接し乃ち松石佳靈の圖を納む金帛の恩賜あり十五年秋再び浪華に留まり自後各地の共進會等に出品して銀牌二個銅牌二個を其他褒狀數多を得又數々宮内省御用品たる恩命を蒙り繪畫共進會審査員に推薦せらるると前後七回方今關西有數の書家たり（大阪市中ノ島六丁目）

樋口孝道

君は京都の尺曲家なり舊尾州藩士鈴木得道の三男、安政三年三月十五日尾州名古屋に生る、後出で、樋口家を嗣く養家は新羅三郎義光十三世の苗裔にして音樂に因あり君始め尺八曲を舊尾藩士村瀨竹翁に學び後同藩士兼友西園に從ひ其蘊奥を極む後居を京都に移し斯道を業とし專ら徒に授く明治二十三年大日本明暗教會を創設し自ら會長となり本手三十六曲の譜傳を敷き大に斯道の奬勵に力め既に京都及び近畿に會員を有する三千餘名の多きに達し門葉甚だ盛なり、嗜好、茶花兩道及香道に通ずといふ（京都市下京區松原大和大路東入二丁目）

平田盛胤

君は東京の神道家なり戸澤飯治郎盛恭の長男、文久三年八月美濃國羽栗郡笠松町に生る、幼名盛定明治十九年八月出で、平田家を嗣ぎ今名に改む幼にして穎悟學を好む始め角田錦江に就て漢學を學び兼て廣江彦藏に就て和算を修む十一歳父を喪ひ岐阜縣廳の給仕となり餘暇を偸み勉學怠ることなし遂に知事の認むる事となり十六歳擢られて同縣師範學校に入學し卒業後鄉里の敬恪小學校長となり兒童教育に從事する數年此間孝養以て母に仕へ能く二名の實妹を教養し一は女子師範學校を、他は女子高等師範學校を卒業せしめたり

明治十三年東京に出て叔父星野泰俊に國學を學ぶ後文學博士根本通明に就て漢籍を修め又文學博士星川眞穎に從ひ國學を學び更に帝國大學古典講習科國書課に入り十九年七月卒後す爾來東京高等女學校教諭、帝國大學農科大學囑托講師となり哲學館、京華中學、大成中學校、東京府師範學校、東京府教員傳習所、淨土宗大學林等の講師を兼ぬ二十七年轉じて神田神社々司となり後東京神職取締長に推され盡す所あり（東京市小石川區第六天町一七）

廣崎眞郷

君は明治十年、大分縣宇佐郡豐川村に生る、普通學を鄕里に於て修め、三十年渡臺、小松利三郎の小松商會に奉職、忠實熱心に勤務して頗る信用を博し、目下小松商會材木部主任として盛に活動しつゝあり、玉突を嗜む（臺灣基隆鼻仔頭街）

久川善太郎

君は東京の劇場頭取なり舊水戸藩士久川鐵五郎の長男、安政二年九月江戸水戸藩邸に生る、幼より專恣横逸にして十六歳家を脱し始め袋物商店に奉公し後京橋八丁堀の吳服店佐野屋卯兵衛方に入り更に轉じて辨當屋の出前を勤め次で横濱に出で鰻屋に奉公す幾もなく去つて再び東都に歸り先代成駒屋の男衆となり後又中村三五郎の男衆に轉じ親方と共に大阪に赴く其滯留中親方三五郎が先代雛助の養子となるに及んで歸京して先代翫雀の門弟となり藝名を尾上扇藏と名乘りて各座に出演し爾來熱心藝道を研磨し其名漸く表はる後推されて市村座の頭取となり爾來益々座務に盡力し大に旺盛なり（東京市下谷區二長町五二）

日南田宇八郎

君は富山縣の實業家なり日南田宇八の長男、元治元年十一月十七日生る、家世々賣藥業を營む君明治二十二年始めて市會議員に選擧せられ爾來累選今猶其職に在り三十四年四月富山縣賣藥同業組合創立委員に推され斡旋盡力し後ち其理事となり現に其職に在り三十五年富山信用組合創立委員を囑托せられ設立後事務長に擧げらる君嘗て賣藥時報社を起し斯業の機關として賣藥雜誌を發刊す方今前記の外富山上新川水産組合組長、神通川漁業信用販賣組合長、富山縣聯合水産組合評議員、日本赤十字社正社員にして立憲政友會に屬す、嗜好、圍碁（越中國富山市大工町二七、電話六一二）

飛田周山

君は東京の畫家なり飛田正氏の長男明治十年一月茨城縣多賀郡北中郷村に生る、家世々農を業とす父正氏は村長を勤め多年公共事業に盡力する所あり君通稱正雄、周山は其號なり、幼より畫を嗜み、學を鄕校に修め長じて京都に赴き初め久保田米僊の門に學び後竹内栖鳳に師事し研鑽年あり明治三十四年東京に來りて橋本雅邦翁の門に遊び榜ら師翁の經營せる美術院に入り業を卒へ三十九年文部省に出仕し教科書圖畫を擔任し現に其職に在り兼て時事新報の挿畫を擔當す筆致遒健頗る人物畫を能くし花鳥山水之れに次ぐ第一回文部省公設展覽會に唯摩故事の圖を出品し拔選せらる、嗜好、謠曲（東京市本鄕區湯島四ノ一八）

廣澤正春

丈は大阪の浪花節講演家なり明治十九年一月大阪難波河原町に生る、旅館岡崎友吉の長男本名淺次郎、藝名を廣澤正春と稱す夙に高等小學を修了し大阪東雲學校に入學し一年半にして退學す十八歳の時廣澤當昇の門に入り浪花節を研究し爾來各地に巡講す四十二年一月座長の位置を占む其得意の讀物は加賀騒動、石山軍記、寛永御前試合、水戸黄門記相馬大作等たり方今靑年革新派に於ける屈指の講演家たり（大阪市南區難波河原町二丁目）

平井楳仙

君は京都の畫家なり、平井彌助の三男、明治二十二年一月五日生る、通稱秀三、楳仙は其號、明治三十七年京都美術工藝學校卒業後專攻科に入り研鑽二ヶ年特待生となり更らに一ヶ年修業す第一回文部省公設展覽會に宮苑の朝圖を出陳し第二回には晩春圖を第三回には沒落の圖を出陳し共に選拔せらる其他京都美術協會新古美術展覽會に於て賞を受くる數次又日英博覽會に壽永の秋圖を出品して受賞あり尤も山水畫に長す、嗜好、歴史の讀書、殊に水泳術に長す（京都市下京區寺町通四條南入大雲院内南陽軒）

菱川吉衛

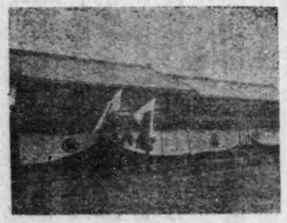
君は岡山縣の土木請負業家なり菱川半二郎の四男、弘化元年石見國美濃郡安富村に生る、君十歳の時父家産を失ひ家亦貧に陷り岡山市に移住し些少の資金を以て諸種の商を營み家計を助く後大工職となり具さに苦酸を嘗む十九歳建築請負業を創め刻苦勤勉三年、二十三歳舊岡山藩邸に出入を許され爾來功績あり苗字帶刀を免さる君又夙に至孝の聞へ高く隨ふて世の信用を得る太た厚く家業大に進み漸次産を積むに至る維新後岡山市に於ける公私の大工事は殆んど擧げて君の請負にならざるものなしと云ふ明治二十三年岡山市會議員に擧げられ四十二年市參事會員となり次で岡山商業會議所議員に當選し現に其職に在り（岡山縣岡山市磨屋町）

平山英三

君は特許局審査官なり、貴族院議員平山成信の實弟にして安政二年十二月

十五日江戸神田於玉ヶ池に生る、明治三年大學南校に入り尋て外務省洋語學所に轉す飜譯掛別席へ出勤を命せらる九年二月維府博覽會事務官隨行を命せられ遂に私費を以て同府に留學し美術工業學校に入る此年勸業寮雇を以て同國留學を命せられ十一年十二月歸朝後內務省御用掛となる十四年四月農商務省御用掛に轉じ爾來商務局、博物局勤務、藝術課事務取扱、農商務一等屬等を經て十七年十二月獨國「バイエル」國「ニュルンベルグ」府金工萬國博覽會に事務官補として同國へ派遣せらる十九年三月宮內屬に任じ二十一年博物館屬に轉じ此年七月農商務省特許局審査官補となる爾來同局第一課長、東京工業學校商議委員、同局第二課長第七課長、工業教員養成所工業圖案科講師等を經て三十一年六月東京工業學校商議委員を辭し勳六等瑞寶章を叙賜せらる次で特許局審査課長を命せられ三十二年六月特許局、意匠審査課長、商標審査課長を命せられ從六位に累叙す三十三年一月特許局審査課長兼務を免せられ爾來累進して從五位勳四等に陞叙し現に農商務省特許局技師兼審査官たり（東京市牛込區市ヶ谷仲ノ町二〇）

樋口仁三郎



君は臺灣の運輸業家なり慶應元年備中國淺口郡鴨形村に生る、明治二十三年一月郷里を出で九洲鐵道土木工事に從業同年九月韓國釜山に渡り仲仕の帳場となり次て送迎組を組織し其組長に推され、明治二十四年陶器及び煉瓦等の製造を開始せしも思はしからず翌年東亞貿易新聞を創立し幾もなく廢刊し二十六年大阪に歸り山陽樓を開業し二十八年之を止め勢和鐵道測量監督となる二十九年渡臺大倉組の專屬運漕業となり三十年四月沿岸航路、澎湖島、打狗塗葛堀の代理店となる三十六年十一月臺中に移轉三十八年五月十五日臺灣縱貫鐵道全通するや六月其の諸貨物運送を取扱店となる三十九年十一月三井物產會社の專屬荷物扱に從事す爾來專ら運輸業に盡瘁す先是三十年病を得て半身不隨となる君常に橫臥の儘店員を督勵し業務に當り能く四方の信認を擔ひ今日の盛況を視るに至る嗜好、書畫骨董（臺灣臺中停車場前）

平井順吾

君は富山縣の町長なり平中甚五郎の長男、天保四年九月二十五日越中國下新川郡三日市村に生る、家世々此地に住す寬永十六年二月藩主始めて三日市に宿驛を設け旅屋を建て旅屋守烏見の役を置く（旅屋は藩主江戸參勤交代の時又は領內の民情視察の時鷹野と稱して出馬の節旅館に充つ烏見は民情風俗を密告するの職掌とす）君の祖先久介之を拜命し代々襲職す君性風流閑雅を好み和歌俳諧茶道に通じ一化園又五調庵慶哉と號す安政六年十二月三日町取締を命せらる元治元年銃卒教授方勢子役兼火藥取締役となる此年十一月水戸浪士武田耕雲齋等信州和田峠より飛彈國を經て越中國に入る因て新川銃卒斗柄隊命を受けて飛彈の境猪谷村並に長棟村を警衛す君亦之れに赴く時に年三十二なり行くに莅み口吟して曰く「なんのその熊をもとめん三十三」と既にして耕雲齋等越前路へ轉進す乃ち引上げたり慶應二年四月三日市町肝煎役に轉す四年六月町年寄に列す明治二年秋塚越村忠次郎の一揆起り竹槍席旗を以て新川郡十三組の里正及役家等を燔き拂ふ時に入善村の素封家米澤順之助下布施組の里正たり其御用所を君の家に移し君と相提携して鎭壓に從事し大に功あり廢藩置縣後組合長、戶長、區長等に累任して恪勤の名あり明治十年二月地租改正總代に補せられ常願川以東上市川以西百二十九ヶ村を擔當す中に塚越村及之に等しき各村ありて人情頑固殊に古來未だ曾て有さる地租改正を行ふが爲めに困難尋常にあらず之が爲め二三の總代交替して其難局に當り遂に二ヶ年にして改租を完ふせり時に越前國に地租改正の騷亂あり君命を受けて之れに赴かんとす母强て之を辭せむ十一年八月石川縣富山支廳詰となる此年十二月下新川郡書記を命せられ、二十一年町村制區劃作成主任となりて鞅掌し、二十二年四月富山縣屬に轉任し六月非職となる後ち三日市町長に當選し爾來累選今猶其職に在り、君三日市町長の職に在りて克く地方自治の發達を圖り專ら力を教育の普及に盡し學校の改築、警察分署の新築登記所の設置、道路橋梁の改修、惡疫の豫防其他農事の改良、基本財產の增殖に力を致す等鞅掌多年遂に官之を賞し、明治四十二年勅定の藍綬褒章を賜ひて其善行を表彰せらる、先是二十四年初めて所得稅調査委員となり在職八ヶ年、又二十六年菅野新作氏と協定し櫻庄銀行を起し以て地方の金融に資し其取締役となる、三十九年三十七八年事件の功に依り勳七等に叙せらる、嗜好、和歌俳諧點茶（富山縣越中國下新川郡三日市町字三日市村）

廣澤虎春

丈は大阪の浪華節講演家なり明治十六年一月八日奈良縣南葛城郡御所町に生る、上村與九郎の二男、家世々米與と稱し米穀商を業とす實名嗣吉、藝名廣澤虎春と稱す十六歲郷里を辭し神戶に出て洋菓子を販賣す二十一歲にして井上虎吉に從ひ浪花節の聲曲を研究し

師の虎吉と共に各席に出演す其得意の讀物は加賀騒動、景清記、義士傳等にして青年浪界中屈指の講演家を以て稱せらる方今親友派青年者の監督役たり（大阪市西區松島花園町廣澤席内）

子爵 久松定弘

子は舊伊豫今治藩主なり先代從四位定法の嗣子、實は從五位大河内正晴の長男、安政四年正月二日上總大多喜に生る、幼名弘太郎、後改む明治四年大多喜藩貢進生を命せらる此年十二月久松家を繼ぎ從五位に叙す七年獨國に留學し在留四年歸朝後内務省御用掛となり十七年子爵を授けらる翌年警官練習所兼務となり尋で内務權少書記官警官練習所幹事を兼ね二十年内務省參事官に任じ正五位に叙す、爾來公使館書記官、第一高等學校教諭、教授を歴て二十三年貴族院議員に當選す二十五年從四位に進む三十年改選期に際し再選す次で正四位に叙せらる後之を能む、方今從三位勳四等にして東亞火災險相互會社取締役會長の任に在り（東京市下谷區下根岸町八六、電話下谷一〇四〇）

子爵 平松時厚

子は貴族院議員なり其先式部卿葛原親王の子、大納言平高棟の裔西洞院正三位參議行時十世の孫從三位權中納言時庸岐れて一家を立て平松と稱す子は十三世の孫正三位時言の男、弘化二年十月京都に生る、安政二年八月元服を加へ昇殿を聽され甲斐權介に任ず文久二年正月累進して從四位下に叙せらる夙に幕府の專横を憤り諸藩の志士と結托して企劃する所あり爲に幕府の忌諱する所となる、元治元年八月終に勅勘を蒙る慶應三年正月先帝の御凶事を以て參朝を許さる戊辰の變に際し征討將軍仁和寺宮に從ひ伏見に出軍し尋て大阪に出陣し常に書記兼軍監取締として市中の巡邏を督す後凱旋するに常り軍防事務局親兵掛となり尋で參與職辨事宮内大權新潟縣令等に歴任し更に又裁判官に轉し爾來職を地方内務、司法等に奉ず十七年二月子爵を授けらる翌年七月勳五等に叙し旭日雙光章を賜はる二十三年六月元老院議官に任せられ同院廢止に際し錦鶏間祗侯を命せらる此年貴族院議員に當選す尋で勳四等に叙し瑞寶章を賜はる。二十六年六月從三位に叙す三十年議員改選に際し再選せらる君又書を能くし大日本選書奬勵會副會頭に擧げらる兼て軍人遺族救護會副會頭となり三十一年以降東京物品火災保險會社社長たり方今正三位勳三等にして前記の職に在り（東京市赤阪區青山高樹町一二七）

平林探溟

君は東京の畫家なり加藤源八の男、嘉永二年四月相州足柄下郡早川村に生る、通稱由松、探溟は其號、年十四始て岡本秋暉に就て畫法を學ぶ翌年師歿し樋口探月の門に入る明治七年師の實家平林氏を冒す慶應二年師鹿兒島に適遊するに及び各地に遊び獨修以て畫趣を練る明治二年師の上京すると共に君亦東都に來る十三年二月職を大藏省印刷局に奉じ在職三十有餘年の久しきに亘る十八年狩野探美の許可を得て號を探溟と改稱す二十五年五月東京府工藝品共進會に出品して褒狀を受く爾來各種公私の諸會に於て受賞數十回に及ぶ又屢々宮内省御買上の榮を被る三十四年以來日本美術協會其他展覽會の審査員たること數回現に日本美術協會々員たり（東京市赤阪區丹後町五一）

廣澤當昇

丈は大阪の浪花節講演家なり明治二年四月十五日生る、本名豊田元吉、藝名を當昇と稱す父は廣澤岩助と云ひ浮かれ節三弦を以て業とせり丈は幼にして伊勢の子安觀音前旅館母方の實家松本彦太郎に養育せられ十二歳の時津市の金物商店の丁稚となる十九歳曾我廼家十郎と俱に大阪に到り兩親に面會し後ち製燈社の燐寸工場に入り機械部長となり傍ら浪花節を研究す明治二十七年之を能め始めて藝人となり當昇と名乗りて道頓堀の錢屋亭に出演す爾來各席に巡講す二十八年二月眞打となりて泉州堺の旭座に出演す三十三年座長に進み神戸西ノ宮三浦座に講演して大に好評を博す三十六年八月上京して小石川扇亭、麹町山市場亭、神樂坂若福亭等に巡講し三十七年二月神田市場亭に講演し其名大に揚る後ち歸阪して青年革新派を起して自ら會長となり京阪其他各地に會員を派出講演せしめ其牛耳を執り傍ら定席亭を經營して大阪千日前集寄亭、京都新京極の當昇亭等を設立し大に後進者の教養に努めつゝあり（京都市下京區寺町錦小路北入）

平島松尾

君は福島縣の前代議士なり舊藩士平島正就の長男、安政元年十一月十七日生る、幼にして舊二本松藩黌に入り漢學を修む明治六年小學教職に在り次で大藏省及び地方廳等に歴官す後之を辭し爾來政界に奔走し自由黨に入り專ら黨務に當る十五年福島事件に坐し河野廣中愛澤寧堅等の數氏と共に獄に下り輕禁獄六年に處せられ二十二年憲法發布に際し特赦出獄す次で大同團結を賛し始終河野氏と進退を共にせり帝國議會開設以來屢々候補を安部井磐根氏と爭ひ志を得ず二十七年始て勝を制し代議士たり第七議會に列し銀盃を賜ふ次で再三當選す三十五年滿期改選に際し郡部より選出せられ翌年三月復た當選し第十九臨時議會に列し後日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる四十一年三月總選擧に際し亦代議士の席に列す滿期後出でず現に立憲國民黨に籍す（福島縣安達郡二本松町）

鰭崎英朋

君は東京の畫家なり實業家大畑清兵衛の長男、明治十三年[illegible]橋區築地に生る、後故ありて鰭崎[illegible]を冒す、通稱彌太郎、英朋は其號、又別に綯堂、揚齋の號あり幼時履物商に奉公す天資繪

事を嗜み十八歳にして辭して右田年英の門に入り浮世繪を學び傍ら漢籍を名倉松窓に就き修め師より絢堂の號を選定せらる後川端玉章翁の門に遊び山水花鳥の筆法を學ぶ爾來萬朝新聞社に入り盆栽の寫生を擔當す三十四年朝日新聞社に入り其客員となり相撲取組の挿畫を揮毫し名聲都下に聞ゆ三十五年春陽堂編輯部を兼務し今猶共に其職に在り四十一年文部省の囑托を受け教科書挿畫に從事しつゝあり方今都下有數の畫家たり餘技俳諧を能くす（東京市赤阪區丹後町二九）

平野伊之太

君は德島縣の實業家なり先代嘉代太の長男、元治元年六月生る、明治十七年家督を相續し鹽田業を經營す後鹽業制限三八法案に反對し大に地方に遊說して頗る聲望を博せり二十四年鹽問屋を始め本齋田改良鹽炭會社を發起創設して其副社長に擧げらる二十六年輸出品同業組合法の實施せらるゝや君其創立に與り推されて組長となる後之を本齋田產業組合に改め其理事長となり今尙其任に在り三十三年醬油釀造業を開始す君甞て製鹽釜を改良し斯業の爲に盡す所あり、方今官鹽元賣捌業に從事し兼て官鹽海漕株式會社監査役、町會議員、郡會議員、郡參事會員たり、嗜好、圍碁（阿波國板野郡撫養町字小桑島村、電話一三）

平山信

君は理學博士なり東京の人平山詮の二男、慶應三年九月九日生る、明治二十一年帝國大學理科大學を卒業し理學士の稱號を得尋て大學院に入る後英獨二國に留學を命せられ二十七年歸朝す翌年帝國大學理科大學教授に任せられ次で理學博士の學位を授與せらる方今從四位勳三等同大學教授たり（東京市麻布區永阪町一）

菱田竹峰

君は京都の圖案家なり明治十三年五月生る、通稱嘉三郎、竹峰は其號なり夙に西田竹雲に就き圖案を專修す又獨修畫を能くす曾て京都圖案展覽會に出品し優等の賞を受領する數回方今專ら丹青を事とす、嗜好、酒、謠曲（京都市下京區淨福寺通上立賣北入）

肥田直次郎

君は大阪の銀行家なり慶應二年六月十七日河內國中河內郡南高安村大字恩知に生る、其先は楠公の家臣恩地左近の末裔にして父を大東富三郎といふ君は其二男なり父中老の頃世塵を避け北高安村大字神立に閑居す君父に隨ひ膝下に在りて同地の小學校に通學す明治十二年修了後吉川武次郎、藤澤南岳等に漢學を修め傍ら數學を研究す次で測量術を學び久しく實測に從事す二十年中河內郡北高安村役場の書記たり二十

四年大阪南區鍛冶屋町肥田彌三郎の養子となり虎屋銀行業に從事す二十七年分家して現住所に移る卅七年六月大阪市會議員に選擧せられ後ち市學務委員を兼任す四十三年二月府會議員に當選す方今合名會社虎屋銀行取締役、株式會社大阪國文社監査役、府會議員、市會議員たり、嗜好、圍碁將棋、球突、謠曲（大阪市南區鍛冶屋町四一、電話南六三六）

東奭五郎

君は實業教育家なり、長野縣の人東太郎兵衛の三男、慶應元年七月十七日生る、始め佐賀中學校に學び明治十七年長崎外國語學校を卒業し後上京して東京外國語學校に入り更に東京高等商業學校に轉じ二十年卒業し直に函館商業學校教諭に任せられ翌年長崎商業學校教諭に轉じ二十五年同校長に進む後熊本簡易商業學校長を經て三十年熊本商業學校長に任せらる翌年同高等商業學校に轉じ三十六年一月神戸高等商業學校教授に任じ次で校長となる、四十一年商業實踐及簿記研究の爲め米國及英國へ留學を命せられ紐育大學に於て「ドクトル、オブ、コムマーシャル、サイエンス」の學位を受け四十三年歸朝す方今從五位同校教授兼校長たり（神戸市葺合熊內町）

仁杉英

君は東京の人仁杉八右衛門の長男、嘉永六年八月江戸日本橋北島町に生る、家世々舊幕町奉行組與力たり幼名五郎八郎後今名に改む夙に漢籍を坪井秀藏海保辨之助等の門に學び後東京大學に通學す慶應二年與力見習となり翌年本勤並となる明治元年召されて鎭臺府附となり尋で市政裁判所東京府等に奉職す二年七月罷職後東京府中學、洋學第一校等に學び獨乙語を研究す十一年代言人となり十九年代言人組合常議員に擧げられ副會長となる二十六年辯護士となり又副會長に推さる二十年以來東京府會議員、同常置委員、同副議長等に擧げられ三十一年之を能む先是二十四年二月東京市會議員、市參事會員、區會議員、同學務委員、徵兵參事委員等に推され三十年八月日本橋區長となり翌年十月淺草區長に兼任す三十二年兼任を解かれ三十五年五月區長を辭し更に市會議員に選擧せられ次で議長となる此年八月郡部より選出せられて衆議院議員となり十二月解散後之を罷む翌年一月市會議長に當選す三十六年十二月深川區長に任せられ三十八年八月本鄕區長に轉ず翌年五月小石川區長に兼任し次で兼任を解かる三十九年四月日露事件の功に依り勳六等に叙せらる四十一年六月本所區長に轉じ以て今に及ぶ君居常俳諧を嗜み壺中無一の號あり（東京市日本橋區濱町一ノ一）

廣岡伊兵衛

君は京都の友仙染呉服商（井筒屋）なり先代伊三の長男、明治七年九月京都に生る、夙に普通學を修め專ら友仙染法を研究す明治十六年世業を繼ぎ爾來染法の改良に心を碎き又屢々懸賞圖案會を催し斯業の發達を圖る三十年無綜友仙染を發明す此製品宮內省の御用品

となり頗る江湖の賛賞を博せり京都美術協會爲に其功勞賞狀を贈る又博覽會共進會等に出品し金銀銅等の優等賞牌を受領する頗る多し現に盛に營業す君又俳諧を善くし觀山と號す（京都市上京區室町通五條北入坂東屋町二九、電話三四〇）

平井權七

君は京都の龍吐水器製造家なり平井權三郎氏の二男、嘉永五年生る、家世々該製造を業とす、幼名武次郎、後權七と改む、夙に意を商事に委ね鋭意熱心販路を擴張し關西地方は始んど取引せざる所なし曾て舶來龍吐水器の高價なるを憂ひ研究年を積み善良品を製造するに至る其嗣眞太郎氏京都市高等學校を經て慶應義塾大學部理財科を卒業し今や父を輔けて專ら家業に從事し規模を擴張して大阪に工場を設置し消防器具等の諸器械を製造して當地を販賣店と爲し義兄秀次郎氏をして其局に當らしめ東西相對して以て盛に營業す君公職としては明治十五年府會議員に選擧せらる十八年再選す二十年之を辭し二十七年又選ばれて府會議員となり爾來累選今尚ほ其職に在り君嘗て京都倶樂部の陝隘なるを遺憾とし五條橋畔に地を卜し自ら一大倶樂部を劃策經營し既に其功を竣へ設備整頓頗る美觀を極むといふ（京都市下京區寺町通松原町南入植松町、電話一八四二）

平田吾一

君は廣島縣の醫師なり平田萬吉の長男、明治九年二月備後國御調郡久井村に生る、夙に岡山市に出て普通學を修め次で岡山高等中學校醫學科に入り明治三十六年卒業して醫術を三原町に開く四十一年獨逸に遊學し彼國「グライフ、スワルド」醫科大學に入りシュルツ博士に就て內科を專修し次で伯林醫科大學に入りエワルド及ビツケル兩博士に從ひ胃腸病を研鑽し「ドクトル、メヂシネー」の稱號を受け四十三年四月歸朝し爾來專ら濟生に從事す（備後國御調郡三原町）

平井熊三郎

君は京都の銀行家なり明治七年三月生る、本派本願寺の舊臣にして本姓土倉氏なり後故ありて平井氏を冒す、明治十九年起業銀行支配人代理として營業部主任となる三十四年下關支店の支店長たり三十七年本店支配人として歸京す三十八年同銀行專務取締役となる爾來銀行整理の任務を帶び盡瘁する所少からず後本山金庫銀行を囑托せらる四十年三月京都市會議員に選擧せらる四十二年五月商業會議所議員となり次で市參事會員に擧げらる現今前記の職に在りて京都市同友會員たり、嗜好、銃獵、球突（京都市下京區新町、室町の間松原南入德萬町二〇〇、電話七二五）

廣瀨長江

君は東京の畫家なり廣瀨長次郎の次男、明治十七年一月東京日本橋區鐵砲町に生る家世々漆器業を營む通稱長三郎始め勝仙と號し後改む幼より繪畫を好み始め結城素明氏を師とし後倉岡秋水氏に就き狩野派の畫法を修め明治三十六年美術院に入り研學す其特長とする所は歴史人物にして運筆頗る巧なり現に紅兒會員たり餘技俳諧を嗜み之を能くす（東京市日本橋區鐵砲町一四）

日高秩父

君は東京の人日高頼長の長男、嘉永五年十二月五日下野國栃木町に生る、明治元年東京に出て、八年職を書軍省に奉じ、幾もなく奈良縣に轉任し、翌年東京府出仕を命せられ、爾來精勤七年の後召されて職を宮內省に奉じ、卅三年梨本宮家令に任せられ、三十六年內大臣秘書官を兼ぬ、後更に侍從職に兼勤す、四十年內大臣秘書官として、小松宮家令を兼任し尚梨本宮御用掛を兼ぬ、四十三年小松宮家令兼任を免せられ、現に正六位勳五等內大臣秘書官にして、侍從事務を兼勤し梨本宮御用掛故の如し、君又書を能くす、現に學校教科用習字帖廣く世に行はる（東京府豊多摩郡澁谷町青山北町七ノ一、電話芝二七二）

平野又十郎

君は遠州濱松の銀行家なり嘉永五年遠州濱名郡北濱村字貴布禰に生る、天資朴直にして公共慈善の事業に力を竭し殊に殖林開拓事業に熱心なり方今株式會社西遠銀行取締役頭取、株式會社永生銀行、帝國製帽株式會社、天龍運

輸株式會社、天龍木材株式會社、濱松倉庫株式會社等取締役たり、嗜好、弓術、陶求術（靜岡縣濱名郡濱松町利、電話二六〇）

平田松堂

君は東京の畫家なり男爵平田東助の嗣子明治十五年二月東京牛込に生る、通稱榮二郎、松堂は其號別に素心の號あり餓鬼より畫を好み始め東京中學校に入り傍ら畫を河合玉堂の門に學ぶ中途中學校を退き東京美術學校に入り明治三十九年卒業す其筆花卉を描くに長ず四十年東京勸業博覽會に群雀圖を出陳し三等賞を受領す爾來公設文部省美術展覽會に於て褒狀三等賞を受領する數々なり方今巽畫會評議員、研精會委員、玉成會幹事たり君居常和歌を嗜み佐々木信綱を師とし研究す（東京市神田區駿河臺袋町一二）

平井三郎

君は京都の表裝家なり明治八年二月生る、先代三郎兵衛氏の男、家累代眞宗興正寺本山の繪表補所預りにして佛畫表裝を以て名あり君夙に業を家庭に承く、性頗る書畫の表裝を好み明治二十一年自ら進んで伏原春芳堂の徒弟となり書院床掛表裝の技を專攻すること十ケ年遂に其蘊奥を究む殊に考古の趣味を有し師家を辭するや其趣味を共にする高橋正意翁の女を娶り三十五年家督を相續し爾來專ら業務に從事し家聲益々揚る四十二年京都表具競技會の開催に際し市長の囑托を受け審査員となりて盡す所あり曾て世に珍重せられし細金押しの衰頽して僅かに眞宗佛畫にのみ其命派を保持するを歎し今や之れが挽回の劃策に苦心しつゝあり方今都下有數の表裝匠たり、嗜好、謠曲（京都市下京區油小路通北小路玉本町、電話四二一五、三〇三五）

平井郁太郎

君は神戸の醫師なり平井謙藏の長男明治十三年高知縣安藝郡奈半利村に生る、家代々醫を業とす夙に鄉校に學び次で東都に來り獨逸協會に入り後第三高等中學校醫學部に修め明治三十六年同校卒業して京都帝國大學醫科大學に入り小兒科を專攻し醫學博士平井敏太郎氏の薫陶を享くること三年、三十九年神戸市相生町に開業す治療室の設備完全にして採暖の如きは液體燃料を以て酸素吸入器を備へ空氣療法に資する等間然する所なし方今專ら濟生に從事す（兵庫縣神戸市相生町三丁目、電話二九九八）

廣瀨平治郎

君は東京の棋局家なり慶應元年九月美作國苫田郡東苫田村に生る、廣瀨義一の二男、家代々酒造を業とす君學を鄉校に修め後播州三ヶ月儒岸南岳に就き漢籍を修め大阪に出て此花新聞に執筆する年餘尋て上京し農商務省特許局に出仕し在職七年此間餘暇圍碁を樂とす廿七歳にして方圓社に入り二段となる爾來連りに進み卅五年五段に至る方圓社に在ると十數年後圍共進歩、圍碁初歩等の雜誌に執筆して今日に及ぶ方今同社五段の古參にして筆頭たり今や六段格あり常に本因坊修齋の手相なり其著に布石通論あり（東京市麴町區元園町二ノ一八）

菱田保正

君は愛知縣の花道家なり菱田留造の二男、明治十一年生る、夙に祖父宗十郎に就き花道を學び後ち村上愛岳の門に末生流の花法及千家表流の茶道を修め諸國總會頭となる爾來專ら後進の指導に從ふ、嗜好、畫（愛知縣海東郡七室村沖ノ島）

土方篠三郎

君は東京府の人刀圭家土方圓の長男文久二年四月武州南多摩郡七生村に生る、夙に學を修め始め醫學に志し研學數年免狀を受けたるも業に就かず明治十七年以來村治の左翼に與り盡す所あり十九年徴兵參事會員に擧げられ所得稅調査委員を兼ぬ廿四年村長に推され在職多年辭して郡會議員、郡參事會員たり後郡教育會長に擧げらる次で東京府會議員となり幾もなく郡部會副議長に推さる東京府農工銀行の創立に與り後其重役に擧げらる三十三年二月職を辭し東京市牛込區長に推され三十五年六月轉じて東京府庶務課長となるや區民の熱望に依り辭して再び牛込區長となり在職三ヶ年三十八年十一月東京府土木課長に轉ず復區民の請に餘義なくせられ三度牛込區長の職に就き區の爲めに盡す所多し四十五年芝區長に轉じ現に其職に在り（東京市牛込區辨天町一五六、電話番町二八〇七）

平田定之助

丈は東京の淨曲三絃家なり平田喜之助の長男、明治十一年七月二十一日大阪に生る、藝名を鶴澤寛三郎と稱す幼にして叔父鶴澤仲助に就き淨瑠璃三味線を學び鶴澤寛之助と稱す十二歳豐澤團平の門に入り初めて彦六座に出勤す翌年九州四國地方を巡業し十八歳稻荷座に出て燕太夫の糸を勤む廿二歳東上して歌舞伎座に於て菅太夫を勤め大に喝采を博す夫より奥州を巡業して大阪に歸り明樂座に出勤し菅太夫、鍛太夫等の糸を彈く卅四年鍛太夫と俱に再び上京し歌舞伎座に出勤して妙技を揮ひ好評益々高し後伊達太夫に從ひ各席を巡業す三十七年日露戰役の際大阪明樂座解散す爾來大島太夫の一座に加り切前山城太夫及都太夫を勤め大島太夫の歸阪するや丈獨り東都に止まり專ら門弟の教養に從事し以て今に及ぶ（東京市日本橋區下槙町九）

平尾竹霞

君は京都の畫家なり名は經德、字は明卿、竹霞は其號、安政三年五月丹波篠山に生る、明治七年笈を負ふて京都に適き始め贄を鹽川文麟翁の門に執り圓山派の畫法を學ぶ師翁歿後田能村直入翁の門に南宗派の筆意を修む爾來專

ら後素を事とす方今南畫協會幹事たり嗜好、詩賦（京都市下京區室町通三條南入）

男爵 日高壯之亟

男は豫備陸軍武官なり舊鹿兒島藩士宮內清之進の三男、嘉永元年三月四日生る、元治元年同藩士日高藤左衛門の養嗣子となる明治二年藩選を以て海軍兵學寮に入り同八年卒業す是より先男年十六藩の游軍隊に加はり祇園臺場に於て英艦と戰ひ次で伏見會津等の各地に轉戰して功あり後祿八石を加增せられ十年西南の役軍艦日進に乘組み陣中少尉に任せらる爾來累進して四十一年八月海軍大將に陞り四十二年八月豫備役仰付ける其間參謀本部海軍部第二局第一課長、同第二課長、金剛、武藏、龍驤、橋立、松島各艦長、海軍兵學校長、常備隊司令官、竹敷要港司令官、常備艦隊司令長官、舞鶴鎭守府司令長官等の要職に歷補せらる日清役の功に依り勳五等雙光旭日章幷に功四級金鵄勳章を賜ひ日露役の功を以て一等旭日大綬章幷に功二級金鵄勳章を賜はる四十年九月華族に列し、男爵を授けられ從二位に陞叙す（東京市麻布區新堀町七）

廣部清兵衛

君は東京の質商なり先代清兵衛の長男、慶應二年六月二十六日江戸日本橋本銀町に生る、幼名清太郎家質商を業とす夙に藤樹私塾に入り讀書算術を學び十五歲にして元濱町の質商尾紙屋蜂島方の店丁となり忠勤能く勵み節儉能く厘毛を貯蓄して苟も徒費せず頗る主家の信用を博せり十八歲にして辭し歸宅す明治十五年父隱居して清左衛門と改名す君其家督を相續して襲名す爾來勤儉益々產を作り信用愈々加ふ二十年五月日本橋區本町四丁目に廣部銀行を創立して自ら行主となり以て之を經營するに至れり現に其行主にして株式會社尾張屋銀行、同忍商業銀行等の取締役たり（東京府荏原郡目黑村字八幡五七〇、電話芝二〇一六、同日本橋區本町四ノ一〇、電話本局九三三二、營業店）

平井省三

君は東京の川柳家なり黑田久兵衛の三男、弘化三年五月二十五日江戸淺草に生る、家世々德川舊幕府の御用商たり少時出でゝ平井家に入り養子となる夙に俳諧を施無畏庵甘海に學び又川柳は叔父花咲爺と稱せし假作家小山柳麓に修めて俳號を月鳴と稱し川柳は狂句堂柳翁と號し第十世たり十一世柳翁を小林翠亭（通稱釜次郎）に讓り方今俳檀を隱退す君又書を能くし曾て高齋單山に學びて栩堂と號す（東京市淺草區千束町三ノ五八）

望野香溪

君は京都の書畫家なり刀圭家望野尙亭の長男、弘化二年七月十七日攝津國三島郡五領村に生る、名は億、字は正大、香溪は其號別に三島子、松柏山房等の號あり夙に岡田、江の門に入り南宗派の六法を學び傍ら小原竹香を師とし詩文を修む後專ら元明の書畫に臨摹して得る所あり明治十八年居を京都に移す後大日本南畫協會設立せらるゝや推されて顧問たり方今專ら後素を事とす嗜好、詩文（京都市上京區兩替町通二條南入）

物集高見

君は文學博士なり舊杵築藩士物集高世の長男、弘化四年五月二十八日生る、夙に藩醫辻玄洋、藩儒元田百平等に就き漢籍を修む又玉松操、平田鐵胤等の門に國學を學び後近藤眞琴の私塾攻玉社に入り英學を講究せり明治三年宣敎史生に任ぜられ、爾來權大講義中錄月山神社宮司兼湯殿山神社宮司又文學部準講師、東京師範學校御用掛等を歷て十九年二月宮內省內事課勤務を命ぜらる翌三月文科大學敎授に轉じ文部省參事官を兼ね次で文部省書記官に兼任す二十二年同省記錄課長となり二十

三年六月學習院教授を兼ね三十二年三月文學博士の學位を授與せらる後官を罷む此間累進して從六位勳六等に至る先是明治十九年以來廣文庫の編纂に着手し爾來二十有餘年今尚之に從事しつゝあり（東京市本郷區千駄木林町二〇九、電話下谷三七七六）

諸井恒平

君は東京の實業家なり埼玉縣の人諸井泉衛の二男、文久二年五月二十六日生る、隨所又我好と號す年前て十五獨立して商業に從事し傍ら漢英學を修む十八歳生糸輸出業を營む本所生糸會社頭取に選ばる其蠶糸業組合となるに方り之か組長に擧げらる明治十九年本所郵便電信局長に選任し尋て埼玉郵便電信局長協議會の創立に際し其會頭に推さる先是明治二十年日本煉瓦會社創立に與り其支配人となり三十四年一月取締役兼支配人となる爾來勤續多年方今同會社の專務取締役にして東京毛織物株式會社常務取締役を兼ぬ（東京市本郷區眞砂町一七、電話下谷五四）

望月磯平

君は栃木縣の實業家なり望月磯兵衛の長男、明治四年二月生る、家世々金物商を業とす明治四十三年六月推されて町長となり現に其職に在り此年栃木電氣株式會社の創立に與り其社長となる方今栃木商業會議所副會頭、栃木町農會長、栃木瓦斯株式會社長、栃木電氣株式會社長、日本赤十字社栃木支部商議會社長、望月度量衡器製作合資會社長、日本赤十字社栃木支部商議員たり（栃木縣下郡賀郡栃木町、電話三）

守濱是吉

君は德島の實業家なり先代吉兵衛の長男、嘉永五年正月九日生る、家世々商を業とし松屋吉兵衛を通稱とす明治初年諸紙商を開業す二十二歳にして町年寄たり町村制實施以來町會議員の職に在ること多年又商業會議所の創立に與り爾來同所議員たること二回德島市制實施の際市會議員に當選す方今市參事會員にして家業は嗣子淳吉に讓り公共の事に盡瘁する外居常書畫を愛玩し又裏千家流の茶道を嗜み悠々樂む所ありと云ふ（阿波國德島市佐古町、電話長四二七）

森雄山

君は京都の畫家なり畫家森寛齋翁の孫にして直愛氏の長男、明治二年八月京都に生る、諱は愛象通稱勇太郎、雄山は其號、別に踏雲の號あり、夙に畫學を家庭に承く又漢籍は西谷淇水翁の門に學ぶ最も山水畫に長ず三十三年東京美術協會展覽會に瀑布山水の圖を出品し宮內省御用品となる後又東京日本畫會に鷹の圖を出品し東宮職の御用品として御買上の榮を荷ふ其他各種の諸會に於て褒狀賞牌を受領する數次、（京

都市上京區御幸通夷川北入）

茂木保平

君は横濱の呉服太物商及絹織物卸商（野澤屋）なり、愛知縣の人瀧定助の實弟、明治五年六月十五日生る、後出でゝ茂木氏を冒す初名泰次郎後改む明治二十八年養兄茂木惣兵衛氏と共に合名會社茂木銀行を創立し其代表社員となり後又茂木家一族を以て合名會社茂木商店を創設し其業勇擔當社員となる三十年横濱火災海上運送信用保險株式會社の創立に與り其取締役に推され又株式會社第二銀行同横濱貯蓄銀行の取締役となり今猶共に其任に在り四十年日露事件の功に依り勳五等に叙し双光旭日章を賜はる又曾て實業上に盡力せし功に依り正六位に叙せらる方今前記業務の外横濱生命保險株式會社、株式會社横濱七十四銀行等の取締役株式會社第十九銀行、帝國撚糸織物株式會社、等の監査役にして横濱商業會議所議員たり（横濱市辨天通二ノ三〇、電話長四六）

森國三郎

君は現貴族院議員なり福井縣の人先代廣三郎の長男、明治三年十一月十四日生る、舊名廣輔後家督を相續して襲名す縣下の大地主にして多額納稅者を以て知らる夙に福井縣會議員、岡參事會員等に擧げられ後互選を以て貴族院議員となり三十九年四月日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる現に土曜會員たり（福井縣今立郡國高村）

森確也

君は三重縣の銀行家なり森本佐左衛門の男、文久二年四月志州志摩郡鵜方村に生る、家世々一郷の豪農たり得堂と號す夙に上京して中村敬宇翁の同人社に學び卒業後歸國して專ら鉛槧を事とす後ち縣會議員、縣常置委員等の公職を帶ぶ尋て第五區より選出せられて衆議院議員となり兼て農工銀行取締役三重銀行取締役等に推擧せらる方今三重縣農工銀行頭取、津商業會議所特別議員たり、其著に憲法論、政黨論、地方自治論、實氏經濟學全書等あり（三重縣津市塔世馬場本籍志摩國志摩郡鵜方村）

森丘覺平

君は富山縣の殖產家なり先代覺平の長子、明治七年五月越中下新川郡大布施村大字中新村に生る、家世々農を業とし資望最隆く豪富を以て聞ゆ代を經る君に至り十一世とす維新以前は山廻り新田裁許たり先代覺平氏は區長たり君幼名信義後ち家督を相續し襲名す夙に鄕校に修め年十八上京して始め東京專門學校に學ぶ後ち轉じて慶應義塾に入り理財科を專修し優等の成績を以て卒業す歸鄕後先輩田村惟昌、添田民夫

氏等と提携して改進黨に入り大に政治界に奔走する所ありき資性篤厚にして慈愛の心に富み三十五年下新川郡稻熱病の災あり布施山開地最も悲慘を極む君が所有の田地數萬歩あり所得亦尠からず而して悉皆之を免除し一石も收めず更に進で金品を賑恤して小作人の困憊を救濟せり嘗て公職に歷就せること多く郡立圖書館長、郡會副議員、郡教育會長、縣會議員等たり君教育に熱心にして學事に盡す所多しと云ふ三十八年十月縣參事會員に擧げらる四十一年縣會議長に推され現に其職に在り先是三十七年以降村長たり三十九年三十七八年事件の功に依り勳八等に叙せらる方今前記職の外相續稅審査委員株式會社生地銀行、株式會社櫻庄銀行等取締役、日本赤十字社特別社員たり、嗜好遊獵（富山縣越中國下新川郡大布施村大字中新村）

森　寛一

君は丸龜の醫師なり本多寛順の次男明治元年六月讃州北宇和郡岩松に生る家世々醫を業とす君斗瓢と號し俳諧を能くす、夙に京都府立醫學校を卒業して同府療病院に醫員として在職年あり明治二十三年北清事件に際し廣島陸軍豫備病院に勤務し後功を以て勳六等に叙せらる、三十四年丸龜に醫業を開き專ら濟生に從事し老練家を以て聞ゆ方今丸龜市醫員、香川縣醫師會中多度津丸龜支部幹事たり、嗜好、書畫（香川縣丸龜市鹽飽町）

森井喜式郎

君は京都の染物業家なり明治十年一月京都市佛光寺西洞院街に生る、該業は慶應元年の頃乃父の始めて經營する所にして茶染と稱し絹布諸種の色染を業とす維新以來外國染料の輸入に際し率先「コールター」色素を使用し紫色を操染し本紫色に代用して偉大の功績を收めたり君夙に學を修め京都市立染織學校に入學して染色科を專修し明治二十七年卒業す二十九年島根縣松江市より招聘せられ巡回教師として同地染色業家に指導を爲すこと年餘功あり同地染色組合及松江市より謝狀金牌を贈與せらる三十年三月清國に航し蘇州、杭州、南京、九江、漢口等の各地を遍歷し彼地染織業の視察調査を爲すこと四ヶ月得る所あり同年七月歸朝す爾來又を輔けて家業に從事し傍ら市の特產たる絹布綾繻の輸出を海外に計るの策を講じ其嗜好如何を試んが爲めに三十三年佛國巴里博覽會開設を機として之れに出品し次で三十六年米國聖路萬國博覽會に亦出品して大に觀覽者の注意を惹起し同國人の嗜好に適し珍奇の品として歡迎するの傾向あるや君鋭意熱心其輸出に努めり爾來該綾繻の輸出は全く茲に其萠芽を現はし漸次輸出の途を招くに至れり三十七年父隱退するや其業を承繼し勤勉摯實家勢益々發揚す

内外各種公私の博覽會共進會品評會等に出品し名譽金牌以下金銀銅等の優等賞を受領する前後其數を知らず、殊に名古屋市工業學校を始め其他學校出身者にして君の工場に就き實地の練習を受くるもの頗る多しといふ、方今京都市染織學校商議員、京都染物同業組合茶染部長にして絹布綾繻染、各種紋付染を以て都下に名あり、嗜好、謠曲及能樂（京都市下京區佛光寺通西洞院東入）

森田金藏

君は神戸の貿易商なり森田和平の長男、慶應二年七月但馬國美方郡湯村に生る、父和平氏は松江侯に仕へ桑樹を栽培し功を以て賞狀を賜はること數次なり君七歳にして父を喪ひ母に鞠育せらる十二歳の時豐岡町に出で商家に奉公し十四歳歸鄉し十五歳にして獨立生糸商を營み二十歳の時蠶業視察の爲め宮崎縣に出張し歸鄉後專ら養蠶及生糸商に從事す二十四歳海外貿易の事に志して横濱に出で日下寫眞館に入り竊に外人間の商況を視察探究すること一年志を變じ宗教家たらんとし京都に新島讓氏を訪ふ不幸同氏は他界の人たり既にして意を決し米國桑港に航し商業事情を研究すること五ヶ年母の勸に依り一旦歸朝し二十八年大澤商會に入りて神戸の支店長となる二十九年商務を帶び桑港に航す三十年北清貿易視察の爲め渡清し三十三年「シドニー」に支店を置く年を踰へ君之が視察の爲め渡航し三十五年「シドニー」地方の商界不振に陷るの報を得て再び渡航し自ら之が整理に從事す三十八年二月歸朝し此年八月更に又渡航して「ニュージーランド」地方を視察し各都市に日本商品陳列所を設置して外人の嗜好を察知し四十年二月歸朝以來彼國に適する商品を輸出し益々事業の發展を圖る現に神戸に在りて海外貿易の事情に精通するもの君を措て他に其比儔を見ずと云ふ（兵庫縣神戸市北長狹通三丁目）

森川脩藏

君は廣島縣の實業家なり萬延元年五月九日生る、明治十九年家督を相續す爾來縣會議員、市會議員等に擧げられ地方公共の事に盡瘁すること二十有餘年方今廣島縣參事會員、市會議員、廣島度量衡器株式會社長、廣島縣革新倶樂部員たり、嗜好、旅行、讀書（廣島縣廣島市塚本町、電話二二）

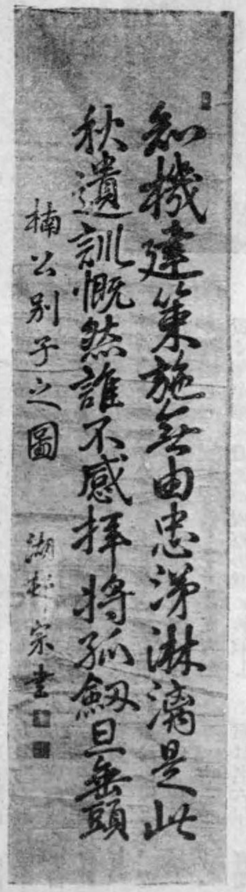
森藤助

君は名古屋の實業家なり先代藤助の長男、慶應二年九月二十四日生る、幼名初太郎父歿後家嘗を相續し襲名して改む父藤助氏姑め鳥羽原料商を營む君其遺業を繼ぐや益々其業を擴張して鼻緒の製造販賣を兼營し原料は市内を始め東京大阪京都を主とし又鼻緒は北陸の各地に渉りて盛に營業す其製品は各

種公私の諸會に於て金銀銅等の優等賞を受領す四十三年名古屋市開設關西府縣聯合共進會に於て紀念銅賞牌を受領す（愛知縣名古屋市旅籠町一一九、電話長一五四五）

森　湖邨

君は東京の書家なり安政二年五月二十四日江戸に生る、通稱宗次郎、湖村は其號なり初め歌川道泰氏に就き和歌及書法を學び後晉唐宋明等の古法帖に據り研究す又詩文を伊藤聽秋氏の門に修む草書は晉唐時代、楷書は顏眞卿、篆隸書は漢魏時代の書風を慕ひ筆意穩健にして氣韻崇高なり、君一時身を官海に投じ後又久次米銀行等實業界にあること二十有餘年現に株式仲買業家の顧問役たり、常に和歌を嗜み之を能くす（東京市京橋區木挽町二ノ一二）



茂木鋼之

君は日本郵船會社監督なり舊靜岡藩士茂木茂の長男、安政五年六月六日生る、明治五六年の頃芝近藤眞琴の私塾攻玉社に入り數學を修む十四五年の頃始て三菱會社に入り船長となり本邦沿海及び支那沿海を航行す社の郵船會社となるに及び引續き在職す嘗て土佐浦戸港に於ける至難の地圖を製し之を海軍水路部に提出し賞狀を受領す二十七八年戰役の際御用船神戸丸船長として輸送の大任を完ふし功を以て勳六等に叙し瑞寶章及び從軍記章を賜る後尾張丸衝突事件に際し出張取調の結果會社に監督助役を設置するの必要を認め之を會社に建議す會社は即ち之を容れ直に其役欵を定め君を擧げて其任に當らしむ爾來勤續し三十四年九月加藤副社長等と共に朝鮮及び支那沿岸視察として出張し近海航路及清國內地の河川航路を調査す日露戰役に際し佐世保及海軍根據地に出張して輸出事務を監督し功に依り勳五等に陞叙せらる三十九年同社監督に進み次で大藏省臨時建築部の顧問を托せらる四十年內務省港灣調査會臨時委員に擧げられ現に其任に在り（東京市小石川區原町一三、電話番町一三二四）

茂木習吉

君は東京の洋畫家なり慶應元年四月

武州南埼玉郡鷲ノ宮村に生る、本姓小林氏後故ありて茂木氏を冒す通稱迦十郎、習古は其號なり十二歲にして始めて高橋有一に就き洋畫を學び後ち横濱に到り英人ワクマレ氏に就き研究す師の歿後五性田照海を師とし拮据精勵年あり明治四十二年英國に航し日英博覽會の事務に鞅掌し後功に依り特に功勞賞を授與せらる翌年佛國に遊び「セロン」に滯留し大に研鑽し得る所あり四十三年九月歸朝す爾來專ら丹青を事とす（東京市本所區横網町一ノ三）

森下忠怒

君は福岡縣の醫師なり森下重成の長男、明治五年高知縣高岡郡日下に生る、夙に高知中學校を修了し明治二十七年第三高等中學校醫學部に入り三十一年卒業して直に岡山病院に奉職し小兒科助手醫員となり在職二ヶ年福岡病院に轉任し產科婦人科部長代理たり次で福岡縣產婆養成所の講師となる福岡醫科大學設置に際し福岡病院長高山尙平氏渡歐中代理院長となる氏歸朝後福岡醫科大學助教諭となる三十九年七月辭して產科婦人科の醫院を福岡に開き專ら濟生に從事す、嗜好、書畫骨董（福岡市）

本居豐穎

君は文學博士なり舊紀州藩士本居內遠の長男、天保五年四月二十七日生る、幼名稻楠後中衡又平造と云ふ後又今名に改む秋の舍秋齋と號す明治二年權中宣教使に任せられ次で宣教權中博士となる三年從七位に叙し四年大祀御用掛を命せらる爾來神祇大錄、宮內省六等出仕、平野神社大宮司、神田神社祠官等に歷任し六年以來權中教正、權大教正たり十七年大教正に補せられ十八年大社教副管長に補す曾て帝國大學文學部古典講習科講師を囑托せらる二十五年以降女子高等師範學校講師、東京音樂學校和文講師、高等師範學校兼女子高等師範學校教授に任せられ從六位に叙す二十八年帝國文科大學講師に轉任す後東宮職御用掛となり次で東宮侍講に任し高等官二等正五位に進む三十年御歌所寄人を兼ね三十三年勳四等に叙し旭日小綬章を授けらる三十四年從四位に叙せられ三十七年勳三等瑞寶章を賜ふ三十九年正四位に陞叙し此年帝國學士院會員仰付けらる四十年高等官一等に進み翌年富美宮、泰宮兩殿下御用掛を命せらる四十二年文學博士の學位を受く其著に秋廼舍歌集、古今和歌集講義、本居雜考等あり（東京府豐多摩郡青山原宿一〇六）

毛利敎定

君は東京の洋畫家なり舊尾州藩士毛利敎房の二男、明治十二年十一月生る、父は香牛と號し篆刻を能くし和歌を嗜む君幼にして畫を好み明治三十八年東京美術學校日本繪畫科を卒業し後拔擢

せられて農商務省實業練習生として清國に留學すること三年歸朝後感ずる所ありて專ら意を洋畫に注ぎ藤島武二氏に親炙し研究す曾て名古屋市開府紀念共進會に問答圖を出陳し三等賞銅牌を受領す其他各種の博覽會、展覽會等に於て受賞する數次、嗜好、實生流謠曲大弓(東京市淺草區小島町二六)

毛利敎武

君は東京の木彫家なり舊尾州藩士毛利敎房の三男にして毛利敎定の實弟、明治十七年生る、初め高村光雲翁に就て木彫の技を學び傍ら東京美術學校彫刻科に入り明治三十七年卒業す曾て公設文部省美術展覽會に出品し三等銅賞を受領す、嗜好、球突大弓(東京市淺草區三筋町二一)

本村庄平

君は久留米市の實業家なり先代幸右衛門の二男、嘉永五年十二月十四日生る、舊名安平明治十二年一月先代庄平の養嗣子となり家督相續後襲名す夙に國產久留米絣縞及內外紡績糸商を業とし松庄と稱す曾て久留米紡績株式會社及六十一銀行等の取締役に擧げられ又久留米絣同業組合副組長、同組合名譽評議員市會議員同參事會員、商業會議所議員同常議員、久留米私立商業學校商議員等公私の任に在り、又第五回內國勸業博覽會審査員に推され其他博覽會、共進會等各種の諸會に出品し受賞拾數回に及ぶ方今本村合名會社代表社員、赤松絣本村合資會社顧問にして日本赤十字社特別社員たり(福岡縣久留米市通町九五)

森晋之助

君は東京の美術家畊雲堂なり有名なる經史家森春濤の長男、文久三年二月尾州名古屋に生る、後故あり村田氏を冒せり夙に家學を受け桑南と號す、幼にして書畫を嗜み父翁の膝下に在りて觀賞力に長じ克く古書畫を鑒す就中南宗畫、儒者物最も得意とする所なり二十五歲の時帝都に來りて書畫の鑑定を業とし他を顧るの念なきが如し資性篤實にして事に當りて懇切なり方今門に鑑定を乞ふ者、書畫の販賣を委托する者、頗る多し(東京市下谷區御徒士町二ノ一六)

森禎藏

君は岡山市の書肆なり、土倉重三郎の男、安政三年十月備前國都窪郡中洲村に生る、後出でゝ森家に入り養子となり家督を相續す素人と號す夙に漢學を修む岡山市第一期市會議員に選擧せられ又岡山商業會議所議員となり後副會頭に推さる方今山陽書籍株式會社取締役、市參事會員たり(岡山縣岡山市中之町、電話三六四)

森田勇次郎

君は靜岡民友新聞主筆記者なり森田市郎次の三男、慶應元年四月一日肥後國天草郡志岐村に生る、明治十四年上京して慶應義塾東京專門學校等に於て政治、經濟學科を修む二十二年靜岡大務新聞社に聘せられ二十四年十月靜岡民友新聞を創立す爾來二十有五年其主筆記者たり曾て靜岡商業會議所書記長となり次で特別會員に擧げらる三十六年三月衆議院議員總選擧に際し進步派より推されて當選す四十一年郡部より選出せられて再選す四十五年總選擧に際して復た出す方今前記の外靜岡商業會議所特別議員たり(靜岡縣靜岡市四番町二九)

門田增太郎

君は廣島縣の醬油釀造家なり宇田勝太郎の男、安政六年備後國沼隈郡水呑村に生る、後出でゝ門田常助の養子となり家督を相續す爾來勤儉力行大に資產を增殖し地方屈指の資產家を以て稱せらる方今福山町會議員、郡會議員、福山商工會常議員たり、嗜好、旅行、(備後國深安郡福山町、電話一六)

森山儀文治

君は長野縣の辯護士なり赤羽彌一の三男、後ち出でゝ森山家を嗣ぐ夙に松本師範學校に學び後ち英學を東京に修む次で明治法律學校に入り法學を專攻し明治十六年代言人の免狀を得て事務を東京に執る後ち事務所を松本市に移し爾來專ら訟訴事務に從事す三十五年町會議員となる翌年郡會義員に選擧せられ次て議長に推さる四十年市會議員に當選し直ちに議長に擧げられて次て市參事會員となり現に其職に在り嗜好園碁(長野縣松本市片葉町)

本出保太郎

君は大阪府郡部選出の代議士なり先代小左衛門の長男、慶應三年九月生る幼にして妙心寺の禪堂に學ぶ歸鄉後專ら父を助けて家業に從事し傍ら地方公共の事に盡す所勘なからざるも多年戶主の地位に立ざりし故を以て常に公職を帶びず明治三十四年四月始めて家督を相續するや直に郡會議員に擧げられ爾來深く郡政に與り熱誠以て之に當れり又殖產興業の事を助けて爲す所勘なからず君嘗て政見に期する所ありて立憲政友會に入りしも後感ずる所ありて之を屛し非增租繼續を主張せり三十五年八月郡部より衆議院議員に選出せられ十二月解散し翌年三月當選す第十九臨時議會に列し後日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる爾來當選すること二回方今復政友會に籍し同會所屬の代議士たり(大阪府西成郡西中島村大字川口)

森懋

君は和歌山の辯護士なり舊紀州藩士にして安政二年生る、夙に漢籍を修め經史詩文を能くし惕若と號す嘗て法律政治學を研究して代言人となり爾來其業務の傍ら法學舍を設け斯學に貢獻する所あり明治廿二年市會議員に選擧せられ爾來累選其議長たる久し後ち和歌山實業會長、五二會和歌山縣本部監督、同茶業會監督、同實業青年會長同自治

會長等に推擧せらる又商業會議所、物産陳列場等の創設に與り斡旋の勞を執り大に力あり其他南海鐵道、河川浚渫、和歌山築港等の公共事業に盡瘁す嘗て故西郷侯の選拔に依り風俗改良會和歌山支部副部長となり鄕黨の風紀を清肅ならしめしもの君の精勵に俟つ多し三十六年三月市部より選出せられて衆議院議員となり三十七八年事件の功に依り勳四等に叙せらる又嘗て勸化養育院を創設し貢獻する處ありしも今や擧げて縣廳に寄附せり四十三年以來公職全部を辭し辯護士の職に熱心從事す方今政友會和歌山縣支部支幹たり、嗜好、詩文、漁魚（和歌山市七番町）

森戸鉦太郎

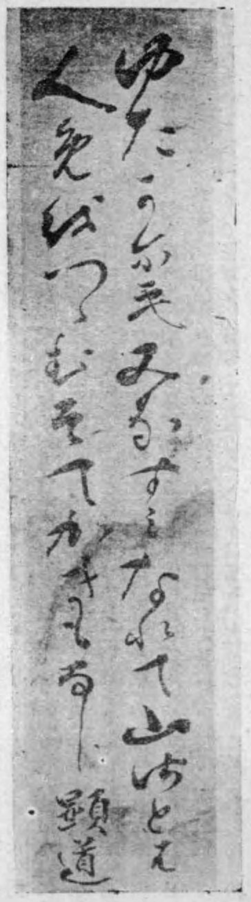
君は東京の株式仲買商なり舊藩後福山藩士森戸源吉の長男、慶應二年五月江戸に生る、父は福山藩の劒道師範役たり君幼時福山に歸り廣島中學校を卒業して備中笠岡小學校に教鞭を執る時に年十八なり明治二十二年父に隨ひ東京に出て改進新聞記者となる幾もなく辭し實業界に入らんと欲し寄に其機を窺ふ三十二年澁澤倉庫會社の重役の推擧に依り某株式仲買店の整理を托せらる日清戰役後經濟界の大混亂に際し中央銀行の金利引下の事あり君此間に處して一躍十數萬金を贏得して以て着々業務を整理し是より新機一轉横濱に支店を設け「英文日本株式必勝案内」を著し大に外商人を我株式界に吸收せんと盡力す後思ふ所ありて該仲買店を辭す明治四十年八月澤仲買店を買收し獨立して其買賣高は斯業界に冠たるに至る業を營み縱横に奇才を揮ひ數年を出すして爾來毎期株式取引所より表彰せらるゝ と云ふ君常に時弊の矯正に盡瘁し信用益々厚く營業愈々盛なり（東京市京橋區明石町一九、電話特長京橋二二二二〇、出張所日本橋區兜町二）

籾山邦季

君は東京の美術家なり舊幕臣籾山茂作の三子、安政五年八月江戸に生る、舊姓平井氏後德川初代將軍家康公より姓を籾山名を茂作と賜ふ爾來代々嗣子を以て茂作を襲名するを家憲とす君名は邦季、東洲と號す、夙に漢籍を島崎榮貞、岡松甕谷等に學び、繪畫は初め僧の臨江に就き四條派の筆法を修め後竹本石亭に南宗派の畫法を學び後年下條桂谷に從ふ、書は書と共に僧の臨江を師とし後鼎楓軒日蓮宗の僧瑞雲等に就き研究す爾來小學校に教鞭を執る多年此間四ッ谷小學校創設に與り盡瘁する所あり職を罷め明治法律學校に入學し兼て佛語を研究す明治二十年以來陸軍省軍法會議に出仕し在勤九年此際日清戰役の功に依り勳八等に叙せらる三十四年日本美術協會、展覽會に漁魚の圖を出品し三等銅賞を受領す爾來各種の諸會に於て受賞する數回、三十九年以降三越呉服店に入り圖案部の主任たり方今顧問役として意匠圖按の考案に從事せらる餘技詩歌を能くす其嗣作次郎氏天資才能に富み他の指導に依らず自ら軍艦の模型を作るに妙手を有す嘗て皇孫殿下の御教育用玩具品として献納し嘉稱せられ賞金の桑を荷ふ今又海軍省の委囑に依り平戸軍艦の模型製作に忙殺せらる（東京市麹町區元園町一ノ二六）

森岡顯道

君は三重縣の神道家なり先代良右衛門の二子嘉永五年十一月十六日尾張國知多郡横須賀に生る、家世々農を業とし里正たり君北崖又南亭と號す夙に舊尾州藩儒中山棋軒に就き經學を學ぶ後ち藩黌明倫堂に修めて詩賦を能くす又國學は植松茂岳、石橋蘆窓等を師とす明治十九年以降神宮院（今の神宮奉齋會）に奉職して今日に及ぶ卅二年大宮司冷泉伯の赴任以來同伯に就き歌道を研究す卅五年京都の僧横井藻譽に從ひ書法を修む方今神宮奉齋會幹事たり嗜好小川流煎茶の秘奥を究め又南畫を能くす（三重縣宇治山田市浦田町一〇一）



望月圭介

君は廣島縣の鑛業及運漕業者なり望月東之助の二男、慶應三年二月二十七日生る、夙に東京攻玉社、明治英學校、共立學校等に學び別に英語、政治法律等の諸學を修む、明治三十一年縣の第六區より衆議院議員に選出せられ卅六年三月郡部より選出せられ第二十九議會に及び四十五年五月總選擧に際し之を罷む方今專ら前記の業に從事せり、（廣島縣豊田郡東野村）

森林太郎

君は醫學博士なり舊石州津和野藩醫森静男の長男萬延元年正月十九日生る家代々津和野侯の典醫たり慶應三年藩費養老館に入り經史を修め又蘭學を學ぶ明治九年上京し進文學舍に獨逸語を修む六年東京醫學校に入り十四年全科を卒業し醫學士の稱號を受く尋で陸軍省に出仕し十七年陸軍衛生及普通衛生學、軍事衛生學研究の爲め獨國に赴きライプチヒ、ドレスデン、ミュンヘン、伯林等の大學に於て衛生學を修め傍ら實驗に從事す廿一年歸朝後陸軍

二等軍醫正となり陸軍々醫學校教官に補し又陸軍衛生會議々員を命せらる曾て東京市區改正委員家屋建築等條例草按に與りて力あり後慶應義塾東京專門學校東京美術學校等に審美學及美術的解剖學を講ずる傍に依田學海福羽美靜等に學び文筆を能くし東京醫事新誌の主筆となり更に醫事新論を刊行し兼て衛生新誌に執筆す君又文學を好み鷗外漁史と號し水沫集、舞姫等の著あり、廿五年醫學博士の學位を受領し次で陸軍々醫監に進み內閣恩給局顧問醫となる廿七八年の戰功を以て功四級金鵄勳章を賜はる次で正五位勳四等に進み第十二師團軍醫部長となり後第一師團軍醫部長に轉ず三十七八年の戰功に依り勳二等功三級に陞叙せられ四十年十一月軍醫總監に陞任し累進して正四位に叙せられ次で文學博士の學位を受く方今陸軍省醫務局長の職に在り（東京市本郷區駒込千駄木町二一電話下谷九六四）

森田靜夫

君は神戸の罐詰製造家なり森田治兵衛の男、明治九年六月志州志摩郡御座村に生る、家世々農を業とし里正たり父の代に至り海產物問屋業を營み家業大に進む君夙に名古屋中學校に學び卒業後同地に留り實業の見習を爲す明治三十七年陸軍省御用達商たり後ち清國向罐詰業を企圖し神戸に移住して斯業に從事す爾來品質の精良と誠實なる取引とを以て勤勉力行して大に世の信用を博し今や各種の罐詰を製造して盛に海外に輸出しつゝあり、嗜好、書畫骨董、（兵庫縣神戸市海岸通五丁目、電話一三二九）

森廣陵

君は東京の畫家なり、森霞巖の男、明治八年十一月群馬縣利根に生る、祖考森東溪先考巖霞共に畫家たり君字は子巖通稱廉太郎、廣陵は其號なり、君乃ち畫を家庭に學ぶ明治三十五年上京して寺崎廣業氏の門に入り研鑽す其筆頗る唐人物山水畫に長ず三十七年八月全國繪畫展覽會に小督局の圖を出品し銀賞牌を受領す後北陸繪畫協會春季展覽會に唐美人圖を出品し三等銅賞を受領す三十八年五月日本美術協會展覽會に於て二等銀賞を受領す其他各種の諸會に於て受賞する拾數回方今有數の畫家たり君又書を能くし五體と號す又篆刻の技に通ず（東京市下谷區南稻荷町四六）

元田肇

君は大分縣の人猪俟英翁の二男、安政五年正月十五日豊後國東國東郡來浦に生る、幼名政右衛門後政吉と改む家世々醫を業とす少時村僧長野養應氏に就て漢學を修め能く庭訓を奉す九歲已に四書五經を誦し又能く史を讀み詩を作る天資至孝能く親に仕ふ鄉黨常に之を嘆稱す年甫て十三元田直に就き國史を修む氏其志想の凡ならざるを見て以て其女に配せんとす君其厚遇に感じ之を諾す於是元田氏を冒し名を改む明治五年開拓使學校貸費生となり洋學を研究す後共慣義塾、開成學校を經て十年東京大學に入り法律學を專攻し十三年卒業して法學士の學位を受く尋て代言業務に從事す爾來東京代言組合會長に擧げらるゝ三回此間屢々難訟疑獄に與り民權を伸べ聲譽を博す曾て東京法學校の創立に際し增島、高橋等諸氏と薩埼正邦氏を助け之が講師となり又三田慶應義塾大學部法律科に教鞭を執る年あり明治十六年大隈案條約改正に反對し大同團結の趣旨を贊す而も見る所あり領袖後藤伯に意見七條を陳し去つて大分に遊ぶ時に改進派大に振ふ君毅然此間に介立し二十三年其第一區より衆議院議員に選出せらる此時に當り、改進、自由の兩黨互に鎬を削りて帝國議會將に紛擾の府たらんとす君之を憂慮し大成會を組織して政見の中庸を得せしめんとせしも其志を達するを得ず是に於て二十五年同志と議り國家主義を以て國民協會を組織し會頭に西鄉侯を副會頭に品川子を推選し各黨の間に樹立して一旗を掲ぐ第二議會解散後其職を罷め專ら業務に從ひ傍ら對外政策に關し對外硬派團體と結ぶ第五議會解散後及び其第五區より選出せられ第七議會召集の際精勵を以て銀杯を賜はる爾來重任して以て現今に及ぶ其間國民協會政務委員に擧げられ第十議會に際して豫算委員長に推され第十二議會に於て副議長に勅任せらる三十二年帝國黨の創立に斡旋し其委員に擧げらる三十三年歐米に遊び政況を視察して歸朝す後帝國黨を脫し立憲政友會に入り其總務委員に擧げられ又副議長に推さるゝこと三回に及ぶ曾て日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜はる四十四年拓殖局總裁に親任せられ現に其職に在り（東京市麴町區紀尾井町、電話番町八九〇）

守田勘彌

君は東京の俳優なり先代勘彌の二男明治十八年十月生る、本名守田好作、勘彌は其藝名阪東三津五郎の實弟なり明治二十四年三田八と名乘り三十五年先代歿す後ち十三代勘彌を襲ぎ名題に進み實に和事師として青年俳優中の首位を占む（東京市京橋區日吉町一、電話新橋四二八九）

守屋善兵衛

君は岡山縣の人守屋彌作の長男、慶應二年一月二十五日生る、十五歲の時上京して獨逸語を學び傍ら英語を修む十八歲に至り家道漸く衰へ學費の供給を絕たり是に於て學を廢し歐亞學館經營の衝に當る後ち制度取調局御用掛、文部屬等に歷任し明治廿七年日本衞生新報を發行す廿八年陸軍省に出仕し檢疫事務に從ふ後ち辭して大日本私立衞

生會常務委員兼編輯委員たり更らに轉じて臺灣總督府衛生顧問附書記となる二十七年五月伊藤公に隨ひ臺灣に至り親しく同地の事情を視察す三十一年三月再び後藤男爵に伴はれて渡臺し此年五月臺灣日々新聞を發刊し紙上常に穩健の筆を以て同島の啓發に力め三十七年歐米各國の新聞事業及印刷工場を視察し歸臺以來着々其進歩改良を圖る等實に十有二年之れが主宰者として百難を排し精勵奮鬪今日の隆盛を見るもの蓋し君の劃策經營其宜しきを得たるに由る四十三年五月病を以て同社を辭す其去るに莅み多年の貢献に對し佐久間總督より感謝狀を贈らる四十四年聘せられて滿洲日々新聞社長となり現に其席に在り（東京市赤坂區青山高樹町一二ノ一六、電話芝四一四）

元良勇次郎

君は文學博士なり舊攝州三田藩士杉田泰の次子、安政五年十一月藩地に生る、後元良家を繼ぐ明治八年京都同志社英學校に入り在學九年餘已にして米國「ボストン」大學に留學し專ら哲學を修む十八年十月更に「ジョンスホプキンス」大學に入り心理學を研究す尋て同校「フェロー」に選まる二十一年同校に於て心理哲學社會學科を卒業し「ドクトル、オフ、ヒロソヒー」の學位を受く此年九月歸朝後直ちに帝國大學文科大學講師となる幾もなく教授に進み二十四年八月文學博士の學位を授けられ猶ほ高等師範學校教授を兼ぬ三十二年從五位に叙せられ次で正五位に進む方今從四位勳三等同大學教授たり其著に心理學、倫理學、心理學十回講義等あり（東京本郷區駒込西片町一〇いノ一二）

森青山

君は東京の裾模樣圖案家なり松本松郎氏の次男、明治十一年愛媛縣伊豫國溫泉郡道後湯月に生る、父松郎氏は茶道に精通せり君出でゝ森家に入り養嗣子となる通稱保一郎、青山は其號なり幼にして畫才あり師を求めずして寫生に從事し又古今名家の遺墨に據り修得す後京都に赴き南禪寺、大德寺等に入り禪學を修し傍ら諸名家を訪ひ交りを通し聞く所あり、日露戰役中兵籍に入り始めて東京に來る除隊後居を東京に移し三越呉服店に勤務し染模樣圖案を擔當す後辭して獨立自營し爾來熱心力を嵌新意匠の考案に傾注し遂に「ドロンウオク」を友仙模樣に調和するの新案を發明し始めて三越呉服店陳列會に出陳し大に好評を博し名聲頓に都下に揚る方今家勢頗る盛なり（東京市日本橋區本石町二ノ一一）

森岡平右衛門

君は東京の銅鐵物商なり先代平右衛門の二男、明治四年十二月二十二日生る、幼名久和治郎廿六年一月家督を相續し襲名す家號を今津屋と稱し銅鐵物丸釘卸問屋を業とす其家業元祿年以來の老舗にして都下有數の舊家を以て知らる現に帝國貿易合名會社を創設し其代表社員として專ら直輸入業に從事し且つ市内各所に貯藏倉庫を有し盛に營業す又株式會社富倉貯蓄銀行頭取、東京銅鐵株式會社取締役たり（東京市日本橋區本材木町一ノ二八、電話長本局六六〇、同二九一四）

望月金鳳

君は東京の畫家なり、平野淨惠の次男、弘化三年三月三日大阪に生る、後出でゝ望月家を嗣ぐ幼名數馬後學と改む金鳳は其號別に小蟹の號あり夙に漢學を修む初め森二峰の門に圓山派の畫法を學び後西山完瑛を師とし四條派を修む十七歳の時東海東山、京畿の各地を歴遊し深く造詣する所あり遂に動物を專門として一家を成す花卉山水又妙味あり明治八年以降官途に在ること十有餘年職を罷め爾來專ら筆硯を事とす其作品は繪畫共進會、内國勸業博覽會會に於て金銀銅の優等賞を受領する數次二十六年日本美術協會展覽會へ殘菊曉鶉の圖を出陳し皇后宮職御用品たるの光榮を荷ふ爾來屢々宮内省御用品の恩命を拜す三十一年日本畫會、日本美術協會等の審査員に擧げられ三十三年佛國巴里萬國博覽會開設に際し美術品鑑査役を命せらる又美術協會、日本畫會等に於て特別功勞賞を受領する數回現に文部省公設美術展覽會審査員にして有數の畫家たり（東京市淺草區松清

本山豊實

君は東京の書畫骨董商（幽篁堂）なり本山彦治郎の二男、明治十年十月一日新潟縣東頸城郡大島村に生る、家世々農を業とし一鄉の名族たり父彦治郎氏書畫骨董に趣味を有し深く之れを愛玩し所藏頗る多し而して又能く之を鑒す明治二十二年居を帝都に移すや平素の趣味一轉して業となる君幼より父の膝下に在りて其指導を享け家業に從ふ天資頴悟眞摯にして質を父に承け書畫骨董を嗜むこと散て劣らず頗る南宗畫の鑑識に長す三十五年父齡耳順を踰へ隈退せらるゝに及び君其箕裘を繼き爾來自ら經營の任に當り忠實業務に勵み篤實人に接して城壁を設けず交際圓滑人望太た高し方今有數の美術家を以て稱せらる（東京市本所區龜澤町一ノ二六）

森松次郎

君は和歌山縣の教育家なり安政元年生る、姓は澄山氏後ち森氏を冒す、明治八年大阪師範學校卒業して三等訓導に任す後ち和歌山二十二番區中學養成學校在勤を命せらる、十一年二十一番中學區湯淺駐在となり、十三年田邊十三ヶ町西ノ谷村湊村學務委員となる、十四年學事諮問會員に當選す十五年田邊小學校教員となり兼て第一小區學務委員たり十六年更らに同小學校二等訓導に任せらる爾來第二、三、四番組合小學校生徒試驗委員となる十七年終身小學高等師範學科考績證書を受く十八年田邊小學校訓導たり三十年田邊尋常高等小學校訓導兼校長となる後ち學務委員に擧げらる三十二年西牟婁郡教員養成所講師を囑托せらる爾來數回講師として郡內教員を養成して功あり君が西牟婁郡教育の爲めに三十有餘年間鞠躬瘁精し君が訓育の下に人と成りしもの郡內到る處に遍く鄉黨皆偉德の名士を以て君を稱す（和歌山縣西牟婁郡田邊町）

諸井春畦

君は東京の實業家なり諸井泉衛の三男、慶應元年二月十四日武州兒玉郡本莊町に生る、父泉衛氏は水竹と號し筆札を能くせり君字は智卿、小字時三郎、春畦は其號、又別に山紫閣の號あり年十八、上京して漢籍を修め後實業界に入り修養練磨年あり天資頴悟夙に時勢の趨向を達觀し明治三十三年合資會社ビル、ブロカーを率先發起創設し爾來經營宜しきを得て業務漸次に昂り頗る繁盛す世君を推して都下ビル、ブロカーの始祖とす後綿糸合資會社を起し其代表社員を兼務す又東洋製革株式會社の相談役に擧られ盡力する所あり先是君嘗て大阪紡績會社に支配人たり一日閑を得て書を見るに及で感ずる所あり以來餘暇を求めて研鑽大に努む二十六歲再び上京して西川春洞翁の門に書法を學び出藍の譽あり後書道の振はざるを歎じ自ら工夫して斯道に入り易き方法を講究し先づ形體上より入るの門を啓き三四角の書法を唱導鼓吹し書房を山紫閣と稱し誘掖する所頗る懇切なり私かに嘲笑する者あり君之を聞て曰く書道の振はざる是を以てなりと是より名聲四方に鳴る三十八年明治書道會を創設して益々其普及を圖り盡瘁する所あり今や門に敎を乞ふ者數百を以て數ふるに至るといふ（東京市日本橋區濱町一ノ二四、電話浪花一〇五七、諸井手形部、日本橋區葺屋町、電話三二五、二三一六）

森成

君は舊下總關宿藩士森俊治の長男、嘉永四年六月生る君九歲の時より同藩家老御用部屋に勤務し維新革政の際脫藩して上野彰義隊の一隊に入り幕軍の爲に力戰し軍敗れて武州金剛寺に隱る後捕はれしも年少の故を以て罪を免され常陸の下館に出で同藩廳に出仕し府縣制實施の際藩政引渡の事務に從ふ辭して井上家に入り家政整理に任し終結後身を教育界に投じ爾來各地の小學校に教鞭を執る明治七年東上して赤阪小學校の訓導たり次で勸業寮に入り編輯の事に膺る多年十八年以來李園界に入る現に歌舞伎座演藝幹部たり君居常俳諧を嗜む夙に先代太白堂に就て斯道を修め桃三堂孤仙の號あり（東京市神田區美土代町一ノ二二）

望月玉泉

君は京都の書家なり天保五年六月生る、名は重岑、字は主一通稱駿三、玉泉は其號なり家世々書を以て立てり、君夙に家學を受く嘉永五年火燹す後私塾を開き子弟を教授す、安政二年五月皇居御造營及慶應三年八月御即位の節を始め其他今日に至るまで宮中御用書仰付られ屢々褒賞を拜す明治十一年我國美術の衰微を憂ひ畫學校創立の事を建白して聽され其開設に及び教員となり高等女學校寫生畫教授を兼勤す十八年七月東洋畫會總裁宮殿下より學術委員を囑托せらる二十一年城州の古祠名刹勝景の變更頽廢を慨して平安百景會を起し一は山水の妙趣を現はし一は後世に實影の沿革を知らしめんが爲め洛近四方の景勝一百を選ひ其略幅畫を作成し會員に頒ち廿八年第四回勸業博覽會審査官となり金員及賞牌を贈與せらる先是明治十年六月以後內外博覽會共進會等に製畫を出品し金銀賞牌を賞與せられし事卅有餘個、博覽會、共進會の審査員其他の委員及び學校等の各種委員を囑托せられし事數十回に及ぶ方今嗣子玉溪に其業を傳へ日々數百の子弟に教ふ其著に學校教科書あり（京都市上京區室町通九太町南入道場町一〇）

本山白雲

君は東京の木彫家なり舊高知藩士本

山茂武の次男、明治四年八月十五日土佐國幡多郡宿毛村に生る、通稱辰吉、白雲は其號なり夙に英漢學を修む君幼より彫刻を好み其志を懷くも維新以來の風波は君の家を荒らし家計意の如くならず母堂曾惠子は能く其難關に處し家計を整理し愛子を保育し君が趣味を美術に有するを看破して宜しく長所を選んで成功するに勉よと敎へたり於是決然起て鄉關を出で東都の途に就く途中大阪に至るに及び囊中餘す所僅かに三圓頗る苦酸を嘗め二十一年六月京に着す夫より舊主伊賀男爵を訪ふ爾來同男及岩村通俊男等の眷顧に依り東京美術學校に入り傍ら高村光雲翁に就き技を磨くこと五星霜、卒業後職を同校製作業に奉じ西鄕隆盛銅像木型の製作を補助す二十九年警視廳監獄彫刻敎師に任ぜられ在職年餘之を辭す時に男爵岩村通俊氏曩きに本邦古今偉人傑士の肖像を精査して後世に存せんこと計劃し先づ維新元勳に及ほす君乃ち聘せられて其主任となる此時に當つて板垣伯福岡子等の主唱にして井上角五郎氏の其任に當れる故後藤伯銅像設立の擧あり又之れが模型(檜材一丈二尺)を擔當して遂に竣功を告ぐ爾來井上角五郎氏の知遇を得、品川子爵、高島嘉右衛門、澁澤男爵永井中將等の銅像を彫刻し次で西鄕元帥、川村大將、雨宮敬次郎、前佛國公使アルマン氏、東鄕大將、甲府の素封家網野善右衛門川路大警視等の銅像原型の製作をなす四十二年五月報恩の爲め岩村男爵の銅像を製作し鄕里宿毛村高等小學校内に自ら建設す後榊少佐の紹介に依り英國皇族「コンノート」殿下の隨員「シモアー」元帥の肖像を製作し四十四年二月竣功し爲に特に感謝狀を受く殊に東鄕大將の肖像製作の竣りを告ぐるや同大將より有其誠者則有其神との揮毫書を贈與せらる現今井上子爵、板垣伯爵の銅像原型に從事しつゝあり(東京市小石川區大原町一九)

森本東閣

君は京都の畫家なり明治十年五月三十一日生る、畫家幸野楳嶺の長男、後出でゝ森本家に入り養嗣子となる、通稱角太郎、東閣は其號、別に弗空の號あり始め野村文擧を師とし後京都畫學校に入り卒業す爾來專ら丹青を事とす嗜好寫眞術(京都市上京區室町通下長者町南入)

森正因

君は名古屋の花道家なり舊尾州藩士森正直の二男、明治元年五月四日生る、父は晃圓齋正因と號し東山流花道の家元たり君通稱米吉明治二十四年父歿後其箕裘を繼承し襲號して晃圓齋正因と號す夙に業を父に就き學び其奥儀を究む君二十年以來名古屋市褒賞常小學校に敎鞭を執ること二十三ヶ年此間傍ら花道を門弟に授く後ち職を能め爾來專ら子弟の敎養に努め家門繁榮して日々に盛なり、嗜好、書畫骨董(愛知縣名古屋市黑門町二四)

諸星成章

君は東京の畫家なり、舊鶴舞藩士諸星成長の男、明治三年九月千葉縣市原郡鶴舞町に生る、通稱連一郎、甫め玉連と號す後改めて成章と號す、君垂髮の頃より筆硯を弄し繪畫を見れば紙筆を執て之れを描寫し戸外の遊戯を好まず、好んで龜を描き人の激賞を受く初め父は君をして醫を學ばしめんと欲し第一高等中學醫學部に入らしむ、校長長尾精一氏能く繪事を解す乃ち更に勸誘する所あり父亦其志の奪ふ可からざるを悟り退學せしめ、川端玉章翁の門に入り、兼て東京美術學校に學ぶ卒業後、詩文を武田成二に修め又武術を新館正義に受け神道無念流の目錄を得たり多年兩總、兩野、信越、豆相、甲駿、羽後等の各地を歷遊し名山勝川を探り名士と交り得る所あり其筆花鳥山水に巧にして人物之れに次ぐ明治二十年以來日本美術協會、日本畫會日本繪畫協會全國繪畫共進會其他三府並に公私の諸會に出品し銀銅賞牌木杯、褒狀を受領し屢々東宮職宮内省御用品たるの榮を擔ふ二十六年青年繪畫協會の委員に擧げらる三十一年日本畫會幹事及評議員の囑托を受け三十二年東京美術學校豫備校幹事となる三十三年佛國巴里萬國博覽會に秋夜の白鷺及落雁の圖を出品し監査

も之郎

に合格す、此年東宮殿下御慶事に際し日出に鷹の圖を献納し、嘉賞せらる、三十四年日本女子美術協會理事の囑托を受く、爾來日本畫會審査員、日本美術協會歴史部商議員同協會審査員、兼陳列掛同會展覽會委員等の囑托を受く四十年日本畫會へ東宮殿下行啓の際御席畫揮毫の榮を蒙る此年美術協會展覽會の審査員に推薦せらる四十年日本畫會の審査員たり次で正派同志會展覽會の審査員に擧げらる同年日本畫會へ韓國皇太子殿下行啓の際御席畫揮毫の命を拜す爾來明治繪畫協會評議員及主幹美術協會出品整理委員等を囑托せらる四十二年同會へ東宮殿下行啓の際又御席畫揮毫の光榮を荷ふ方今日本畫會幹事兼會計役、日本美術協會委員にして有數の畫家たり、嗜好、詩賦、擊劍、山川の勝地を跋渉し風景の描寫（東京市小石川區原町三）

森田三郎右衛門

君は福井縣の大地主（多額納税者）なり嘉永三年正月十六日生る家世々醤油醸造兼船荷卸商を業とし明治三十年七月株式會社森田貯蓄銀行を創立して其頭取となり三十六年十一月同森田銀行を起し又其頭取に推され今猶其に其任に在り又株式會社森田銀行倉庫部を設け其社長として現に其經營に盡しつゝあり（福井縣坂井郡三國町）

毛利昌敎

君は東京の神道家なり幕臣奥村榮之助の六男、嘉永二年江戸四谷に生る、年甫めて十三、講武所に入り砲術を學ぶ、尋て横濱に於て佛蘭西式兵法を修業すること三年、慶應二年江戸に歸り第二第三傳修隊の教授方となる夙に勤王の志深く維新の際第三參謀斥候分隊長となり奥羽征討の軍に參加し各地に轉戰し功あり明治二年倉根藩の教授に聘せらる居ること三年、六年東京市小石川區林町氷川神社々掌毛利教繼の養子となり其氏を冒す尋で養父の後ちを襲ぎ氷川神社々掌に補せられ方今に至る（東京市小石川區林町五二）

森村市左衛門

君は東京の貿易商なり先代市左衛門の長男、天保十年十月二十八日生る、幼名市太郎後市左衛門と改む家世々商を業とし土州邸の用達を勤む君數々藩士板垣細川氏等と相往來して西洋文明の一班を開知し將來の趨勢を察し奮然志を立て新開港場横濱に到り舶來雜貨店を開く當時幕府御雇騎兵教師佛人デシャラム氏日本舊式馬鞍の實用に適せざるを以て洋式鞍具の製造を開始するの急務なるを說く君卽ちデ氏に就て其製法を傳習し遂に洋式輕騎兵用馬鞍を製出して幕府及諸侯に納む蓋し本邦に於ける洋式鞍の嚆矢なり戊辰の役官軍若松城を攻む參謀君に託するに砲銃彈藥被服の調達及運搬を以てす君產を擧て其用を達し彈雨の間を往來し軍需を辨ず明治八年君弟豊氏を米國に渡航せしめ紐育市に一商店を設け日本雜貨の小賣を開始す當時資力極めて薄弱頗る困域に在り已にして政府外國貿易を保護するの議あり爲替資金幾十萬を横濱正金銀行に交附し直輸出商に貸付せしむ而かも君其保護政策の非を論じて獨立獨行素志を貫徹せんとす此時に當り森村組其保護商會の影響を受けて幾度か危殆に瀕す君等兄弟東西に在つて拮据經營僅かに商店を維持す幾もなく森村組の基礎漸く定まり業務次第に擴張し遂に一ヶ年五千噸以上の雜貨を輸出するに至る君平常米穀取引所、株式取式所の如き投機的機關を惡むこと蛇蝎の如く其弊を熱罵し此が改良を促がして熄まず嘗て東京府知事米穀取引所を開始せんとして可否を東京商業會議所に諮問す時に君議員たり熱心其否を論じて遂に議員を辭す明治十五年日本銀行創立の際監事となり、爾來在任十有八年に及ぶ二十九年勳四等に叙す三十三年同行理事となり、多年其職に在り其間美術商工信用組合總長、横濱生糸合名會社員を兼ね方今合名會社森村銀行代表社員、富士製紙株式會社、富士瓦斯紡績株式會社等の相談役たり、（東京市芝區高輪南町三三、電話芝三三三）

森田茂

君は京都の辯護士なり明治五年八月十七日高知縣香美郡佐岡村に生る、夙に學を修め法學を研究し明治二十六年十二月辯護士試驗に及第して辯護士となる三十二年高知縣地方裁判所破產管財人を命ぜらる此年高知縣會議員に選擧せらる三十四年四月司法省に出仕し檢事に補せられ京都地方裁判所檢事となる次で從七位に叙し翌年九月高等官六等となる後職を罷め京都帝國大學法科選科に入學し更に辯護士名簿に登錄を受け辯護士となる三十六年京都地方裁判所破產管財人を命ぜらる三十七年十二月六條生命保險株式會社監査役に推擧せられ大谷派本願寺債方相談役の囑托を受く三十九年十一月破產管財人を命ぜらる嘗て高知縣有志者より代議士候補者に推薦せられたるも中途之を辭し他に讓れり方今政友會員にして專ら法律事務に從事せらる、嗜好、相撲（京都市上京區烏丸通二條南入）

森田五郎

君は尾州大野の金物商なり森治兵衛の五男、明治七年十一月生る、二十六歳の時出でゝ森田家に入り養嗣子となる養家は世々金物商を業とし代を經る六代目とす君漢學を名古屋の和田儲齋に學び詩文を能くす嘗て在郷軍人會長たり方今學務委員に推擧せられ地方教育の事に盡瘁しつゝあり、嗜好、詩文、園碁、書畫骨董（愛知縣知多郡大野町一三四、電話二二）

森　半逸

君は岐阜市の畫家なり嘉永元年四月八日尾州葉栗郡島村に生る、字は子靜、通稱は嘉兵衛、半逸は其號、別に一寸庵の號あり幼より繪事を好み始め山本梅逸の門に入り南宗派の畫法を學び傍ら村瀨太乙に就き詩文を修む後ち村瀨秋水、前田半田等の門に遊びて得る所あり其筆山水花鳥に長ず嘗て各種公私の博覽會、展覽會、共進會に出品し銀銅賞牌を受領する數十回褒狀を受領する八十回に及ぶ方今專ら丹青を事とす（美濃國岐阜市笹土居町）

森　岡　眞

君は東京の電氣器械商なり舊豐岡藩士森岡六右衛門の二男、弘化二年十二月三十日生る、明治四年大藏省に出仕し後宮內省に轉じ更に岩手、石川、群馬、熊本等の諸縣書記官に歷任し正六位勳六等に叙せらる二十七年官を辭し身を實業に投じ貿易業を開始し森岡商店と稱す又移民事業を企圖し竟に布哇に航し實況を視察し得る所あり後其業務を擴張し布哇及「ベリユー」「ソマ」府に支店を設置す三十二年十月株式會社京濱銀行頭取に擧げられ銳意社內の改革を圖り劃策其宜しきを得て遂に健全なる發達を見るもの君の力與りて多きに在り後帝國家畜保險會社の創立に幹旋する所あり方今前記業務に從事し尙合資會社戶倉森林代表社員、合資會社森岡商會社員たり（東京市京橋區山城町四、電話長新橋三一一二）

森　脇竹藏

君は和歌山縣の村長なり中烏勘藏の三男、明治四年二月二十三日紀州西牟婁郡岩田村に生る、後ち出て丶森脇家に入り養子となる家世々農を業とす夙に學を修め明治二十三年以降簡易小學校に教鞭を執る二十四年兵籍に入り步兵第八聯隊に入營し二十六年歸休す二十七年日淸役に召集せられ二十八年從軍して功あり二等軍曹に進む二十九年勳八等に叙せられ三十二年鮎川村收入役に選擧せられ次で助役たり三十四年村長となり勳績多年村政大に功あり三十七年補充を以て召集せられ日露戰役に從軍す三十八年除隊となり翌年功を以て勳七等に叙せらる四十年再び村長に推擧せらる四十三年宅地償調査委員となる嘗て兵役滿期に際し善行證書を附與せられ又村內より日露戰役の功に依り紀念として銀盃を贈與せらる其他學事、衞生、軍事等公共事業に盡力せし廉を以て功績を表彰せらるゝこと數次方今鮎川村長たり（和歌山縣西牟婁郡鮎川村二六八五）

森　春岳

君は京都の畫家なり天保七年加賀國金澤に生る、名は正、字は素道、春岳は其號なり年十七、笈を京師に負ひ岸連山の門を叩き其薰陶を享け研鑽年あり嘗て宮內省より、衝立、屏風等の揮毫を仰付けらる其作品は內國勸業博覽會、米國聖路易博覽會其他各種の諸會に於て受賞する十數回、又北越繪畫博覽會審査員たり方今專ら丹青を事とす（京都市上京區御池通高倉東入）

森村金造

君は東京の實業家なり舊鳥取藩士故和右衞門の長男、萬延元年正月十八日生る、夙に鳥取中學に修學し明治九年上京し教導團に入り其生徒を以て西南の役に從ふ十一年近衞附下士となり十八年之を罷む在隊中多く文事の職を執る爾來專修學校東京英語學校（東京法學院大學）國民英學會等に學び傍ら數學を修む就中簿記學に力を用ゐ大に造詣する所あり十九年の頃內國通運會社に在り當時增資の時期に際し其會計整理に從事す二十一年轉じて東京火災保險會社の支配人となり二十七年共濟生命保險會社の創立に當り其支配人となり次で安田製釘所の支配人となり三十一年の頃再び共濟生命保險會社支配人となる三十五年七月日宗火災保險會社支配人となり又共濟生命保險會社の協議役、日宗生命保險會社顧問役、王城炭鑛株式會社監査役等の任に在り方今東洋生命保險株式會社常務取締役たり其著に簿記學原理、官用簿記例題等あり（東京市神田區三崎町三ノ一）

森　顯禪

師は曹洞宗の僧なり、森新十郎の次男、弘化元年八月十五日鳥取縣因幡國氣高郡吉岡に生る、祖先は作州津山の領主美作守森忠正の四世長成の末裔たり、嘉永六年美作國正覺寺住職顯外和尙の徒弟となり修法數年具さに苦楚を嘗む十六歲諸國を行脚す慶應二年紀州岩田三寶寺洞外和尙に從ふ師物故後其後住となり留錫す明治十二年上京して本鄕駒込吉祥寺內宗門敎校に入り妙諦羅漢の道程を踏破す後ち西牟婁郡田邊町法輪寺に轉錫す當時寺門衰頹の極に在り師留錫以來銳意復興を計り二十九年本堂を再建し三十年各寺に率先して慈船禪師の大法會を修し一時廢頹したる法輪寺を再興の域に向はしめたり後ち越前大本山永平寺代理として中國各縣を巡錫す方今東京宗門議員たり（和歌山縣西牟婁郡田邊町法輪寺）

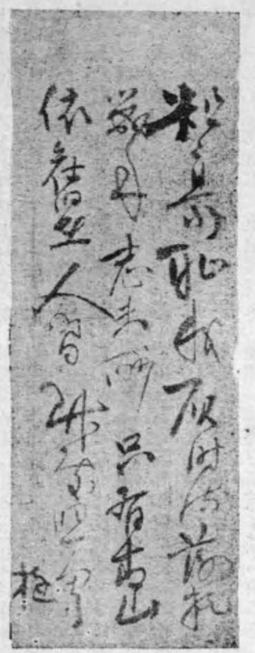
森田吉之助

君は京都の羽二重精練業家なり明治十年四月生る、本姓大西氏後出で丶森田家に入り養嗣子となる夙に京都染工講習所に入り化學及精練法を專攻し卒業後專ら家業に從事す明治三十二年一月別に一家を爲し斯業を開始して家號を東近吉と稱す爾來拮据經營業務大に發展し四十一年規模を擴張して一大工場を新築し蒸氣機罐を据付け別に又乾燥場を設け之れに乾燥器を備へ工場の設備實に間然する所なき洋式的模範工場と稱せらる以來益々羽二重精練の改善に熱心し名聲斯界を壓し家勢頗る隆盛す其製品は各種公私の諸會に於て金銀銅等の優等賞を受くる拾數回に及ぶ方今京都染物同業組合會議員たり、嗜好、謠曲（京都市上京區小川通出水南

入、電話一三四五）

四等に叙せらる君居常詩賦を嗜み音村と號す（廣島縣廣島市小町六五、電話五五五）

森田卓爾



君は廣島縣の辯護士なり森田當三郎の二男、慶應二年二月二十二日生る、夙に上京して慶應義塾に學ぶ後ち東京專門學校（早稻田大學）に入り法學を專修し明治十八年卒業す二十年試驗に及第して代言人となり事務所を東京に開く二十二年廣島に還り爾來辯護士會長に推さるゝこと數々なり今猶其會長たり三十五年八月衆議院議員總選擧に際し郡部より推されて當選し翌年三月再選す四十年總選擧に際し累選して衆議院議員たり嘗て日露事件の功に依り勳

森田俊左久

君は廣島縣郡部選出の代議士なり先代當三郎の長男、元治元年四月二十八日生る、明治二十年一月家督を相續し爾來村長として、在職多年其間村會議員、郡會議員、同議長、廣島縣會議員同常置委員、同議長等に推擧せられ地方公共に盡す所少からず四十年日露事件の功に依り勳七等に叙せらる四十一年郡部より衆議院議員に選出せられ四十五年五月再選して現に其席に在り又株式會社吉田貯蓄銀行監査役、中國牧畜合資會社代表社員たり（廣島縣高田郡根野村）

森本慶明

君は兵庫縣の人塗屋重次郎の男、天保十年播州龍野に生る、本名彌兵衛、嘉永六年十五歳神戸に出て布引の水車小屋に飯炊奉公を爲す後江戸に於て爲す所あらんと決し先づ京都に往き參勤交代の人夫となりて江戸に下り始め汁粉屋の下男に入り後仲間となる等艱苦辛酸備さに嘗む常に事志と相反し意の如くならず去つて再び神戸に戻り熊内の瀧本水車場に入り刻苦精勵する數年主人の周旋に依り柴屋六兵衛の養子となる文久二年二月養父歿後入つて其家督を相續して森本六兵衛と改む養父生前商業に失敗し當時家道頗る衰ふ君是に於て奮勵一番酒禮の行商に又味淋燒酎の仕込に從事し逆境に抗し勤儉力行怠ることなし明治初年外人對手の兩替店を開きて巨利を博せり爾來土地を購ひ借家を建設し順潮に乘し遂に今日の大成を見るに至れり君性醇朴にして篤行なり資産保有を劃策し合資組織を家に施設し老後を信仰の一念に依て慰めんと決し喜合に一宇の寺院を建て光德寺と稱し自ら六兵衛の名を長嗣六三氏に讓りて慶明と改名し禿顱黑衣の身となり專ら來世の幸福を祈りつゝあり（神戸市北長狹通四丁目）

森律子

丈は東京の女優なり辯護士森肇の二女、明治二十三年十月三十日生る、明治二十八年跡見女學校に入學し三十九年卒業す次で同校補習科に入り修業一ケ年、四十一年築地のサンマー語學校に通學し語學を專修す此年株式會社帝國劇場の女優養成所設立と共に第一期生の試驗に合格して歌舞の練習を受け卒業後帝國座附俳優となり其開場式に初めて賴朝に扮して好評を博せり方今技藝益々進む（東京市芝區西久保神谷町一八）

森田三郎

君は京都の辯護士なり明治元年一月滋賀縣甲賀郡宮村に生る明治二十九年東京帝國法科大學に入り英法科を卒業す後司法省試補となる三十年五月職を罷め辯護士名簿登錄を受けて法律事務を開始す三十七年京都市會議員に當選す嘗て市參事會員たり方今市會議員、破産管財人、東本願寺顧問、京都辯護士會副會長たり（京都市上京區柳馬場御池南入、電話一二三〇）

森田吉兵衛

君は京都の羽二重精練業家なり安政五年十月生る、家世々精練を業とし家號を近吉と稱す累代禁裡御所の御用を勤め其名都下に高し君幼より業を家庭に承け其秘技を究む嗣襲以來業務の發達に努力し家聲益々發揚す內外各種公私の諸會に出品し金銀銅賞牌を受領する枚擧に遑あらず明治二十四年京都染物同業組合創立委員に推薦せられ斡旋盡力す三十年同組合練物部長に推擧せられ在職十一年斯業の爲めに貢獻する所鮮少なからず方今京都市上京區第十六學區會議員にして市內有數の精練業家たり（京都市上京區油小路通下立賣北入、電話一三九〇）

森久保作藏

君は東京府郡部選出の代議士なり森久保庄五郎の長男、安政二年六月二十七日武州南多摩郡七生村に生る、曾て神奈川縣會議員、同常置委員、東京府會議員、同常置委員、東京市會議員等に擧げらる明治二十九年郡部より衆議院議員に選出せられ爾來累選すること四回現に政友會所屬代議士たり嘗て日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を賜ふ方今前記の外東京市參事會員にして江ノ島電氣鐵道株式會社、八王寺倉庫銀行、株式會社殖產銀行等の

取締役たり（東京市牛込區神樂町二ノ一六、電話番町二八一）

森島庫太

君は醫學博士なり岐阜縣の人森島玄仙の長男、明治元年四月七日生る、同二十六年帝國大學醫科大學を卒業し醫學士の稱號を得直に同大學助手を命せらる二十九年藥物學研究の爲め三年間獨逸に留學を命せられ三十三年歸朝後京都帝國大學醫科大學助教授に任じ次で醫學博士の學位を受け教授に進む四十三年七月清國へ差遣せらる方今從五位に陞叙して同大學教授の職に在り（京都府愛宕郡上加茂村）

森本清兵衛

君は大阪の米穀商なり服部甚九郎の二男、嘉永六年六月二十七日攝津國川邊郡尼ヶ崎に生る、幼名龜太郎、明治五年先代宗的の養嗣子となり十六年九月家督を相續して清兵衛と改む爾來清酒醸造を兼營とし松園又竹醉と號し家を名田家と稱す營業頗る隆昌す嘗て大阪府參事會員、衞生會委員、全國酒造組合聯合常議員、大阪商工協會評議員、大阪五二會本部評議員、大阪商工協會評議員、第五回內國勸業博覽會協賛常議員、其他府下に於ける公共事業として君の與がらざるなく其任枚擧に遑あらず、方今市參事會員、西區聯合區會議長、共同火災海上運送保險株式會社、株式會社百三十銀行の取締役たり、嗜好、觀世流謠曲（大阪市西區北堀江下通六ノ一〇八、電話西長六〇一）

森村宜稻

君は名古屋の畫家なり舊尾州藩士森林宜民の二子、明治四年十二月生る、先考大朴と號し儒を以て藩侯に仕へて名あり君名は宜稻又通して號とす別に雲峰、稻香村舍等の號あり夙に家學を受く又畫道は木村雲溪、奥村石蘭、日比野白圭、木村金洲等の門に歷遊して造詣する所深し克く土佐派の筆意に入り畫名四方に聞ゆ方今都下有數の畫家たり餘技平曲和歌皆堪能なり（愛知縣名古屋市小市場町五丁目）

森鳳聲

君は東京の彫刻家なり丹波舊舞鶴藩士森市郎保久の男、慶應三年五月生る、通稱磯雄、諱は倫久、鳳聲は其號、又別に竹崖、枕霞軒の號あり夙に藩儒速水實に漢籍を修め數學は岡本省吾に學ぶ幼にして繪畫、彫刻の事を好み戲れに菅公の像を木片に畫き自ら之れを彫刻し人をして驚嘆せしむ、長して彫刻に志し獨修研鑽す、年十四、京都に出で奈良に遊び古代彫刻を盜し專ら獨修す明治二十七年京都美術學校教諭となり彫刻科を擔任す二十八年第四回內國勸業博覽會開設に際し春江遊鯉の圖を薄肉彫額面に製作出品して內外人の賛稱を博す翌年職を辭し三十二年上京し專ら斯道研究の志を寄す第十五回彫刻競技會、日本美術協會展覽會等に出品し毎に銀賞牌を受領し其作品多く宮內省御用品となる又山階宮殿下の御命を拜し木彫小鍛冶刀打物の像（置物）を製作し御感賞の榮を擔ふ、第五回內國勸業博覽會に採色猛虎の彫刻（木彫）を出品し妙技二等賞を受領し大に好評を博す嘗て大谷光演師のシャム皇帝より御贈與になれる佛像を君に托して大理石に彫刻せしめ同國公使を介して同皇帝に献納せられ激賞を受くる等其名遠近に聞ゆ四十二年文部省公設展覽會に武田信玄、上杉謙信の木彫を出品し二等賞を受く之れ君の得意とする彫刻物たり君の技工は啻に木彫のみに止まらず彫金石工等に至り精巧を極む方今日本美術協會委員、彫工會委員たり、嗜好、書畫骨董及花道茶道に精通す（東京市本郷區動坂町一〇一）

森金周學

君は東京の寫眞師なり舊山口藩士文久三年十月、周防國玖珂郡横山村に生る、明治十五年帝都に來りて苦學す始め士官學校に入るの志ありしも後ち母の拒む所となりて轉して寫眞業に入り甫て小林泉谷に就て學ぶ明治二十三年辭して獨立自營す二十七年日清戰役の際龜井伯爵は國史編纂の資料を得んとて寫眞機を携へて第二軍に從ふ君は其從者として隨行し旅順激戰の狀を撮影し剛膽寫眞師の名內外新聞記者の間に喧傳せらる曾て毎日新聞社主宰に係る帝都寫眞師技術投票に際し第一等の位置を占む三十七八年日露の役大本營寫眞版第一軍及第四軍に寫眞版長として從軍し功あり三十九年四月勳六等に叙し單光旭日章を賜ふ是れ我邦寫眞術を以て國家に貢献するもの蓋し君を以て嚆矢とす君又地方公共の事に厚く嘗て日本橋區共和會總務幹事として盡力する所少からず方今同區共和會評議員、東京寫眞組合日本橋區幹事たり嗣子鼎一、歳十三、能書を以て聞ゆ書家樋口竹香に師事し竹山と號す明治四十二年及四十三年皇太子殿下季王世嗣殿下の御前に於て揮毫の榮を荷ひ教育敕語を細字し御賞詞を賜はれり（東京市日本橋區米澤町一ノ六）

本川啓次郎

君は臺灣の醫師なり舊大村藩士本川禎齋の長男、慶應三年三月長崎縣西彼杵郡溜戸村に生る、沖洲又溪山と號す父は大村藩醫たりき君夙に平戸藩楠本塾に入り漢學を修め明治十八年長崎高等中學醫學部に入り二十三年十二月卒業して鄕里に醫術を開業す二十九年選まれて郡會議員となり不黨不偏郡の爲めに盡瘁す三十六年二月思ふ所ありて臺灣に渡航し基隆醫院に職を奉じ外科産科婦人科を擔當す四十一年職を辭して獨力本川醫院を設立し爾來熱心業に從事し頗る繁榮す、嗜好、圍碁、義太

夫（臺灣基隆喞船頭）

毛利廣品

君は名古屋の神道家なり舊尾州藩士毛利廣成の四子、嘉永三年八月生る、實兄三子あり皆夭折し君爲めに家督を相續す明治四年以來陸軍中尉たり二十八年名古屋東照宮神社に奉仕し四十年其宮司となり以て今に及ぶ其嗣子廣安氏は德島鎭臺附陸軍少將たり君居常和歌を嗜み大島爲足翁を師とし堪能なり（愛知縣名古屋市南大津町二ノ二）

森琴石

君は大阪の畫家なり天保十四年三月十九日攝津有馬湯元に生る、梶木源治郎の三子出でゝ大阪森善作の養子となる、名は熊、字は青夢、琴石は其號、又別に鐵橋道人の號あり、幼より畫を好み一意筆硯を以て無上の樂とす、五歲にして大阪の畫家鼎金城の門に入り南宗派の畫法を學び始め金石と號す後ち琴石と改む師金城歿後忍頂寺梅谷に就きて研究し漢籍詩文を妻鹿友樵に修む明治十五年以來繪畫共進會等に於て褒賞銀銅牌を受くる數十回又屢次宮內省御用畫を命せらる殊に漫遊を好み壯年の時より諸國の奇景を探り奇絕の勝に逢は必ず寫生す淸人胡公壽書を贈り詩書畫三絕と稱す現に日本美術協會第一部委員たり其著に南畫獨學、題畫詩類、墨場必携等あり方今都下有數の畫家たり（大阪市北區北野高垣町二四三四）

森田音松

君は神戸の實業家なり森田源七の長男、明治二年十月生る、家世々白米商を業とす君八歲母を亡ふ夙に普通敎育を受け父を輔けて專ら家業に從事す明治十九年父亦鬼籍に入る爾來身を以て一家經營の任に當り勤儉自ら奉し刻苦家業に精勵して家產を興すに至る二十二年神戸白米商組合を創設し其組長に擧げられ爾來勤續今猶其任に在り四十四年神戸湊東區會議員に選擧せらる君性風流閑雅を好み俳諧を善くし生栩庵淸美と號す、又千家表流の茶道に堪能なりと云ふ（兵庫縣神戸市榮町二ノ一六）

紅葉山喜三郎

君は東京の卉花販賣業家なり紅葉山政右衛門の三男、明治十三年一月二十五日生る、君夙に生花の道に入り諸流に涉りて花道を研究し頗る造詣する所あり以來時勢の要求に應じ和洋草花を販賣す卉花の取扱に巧にして和洋婚禮祭典に通じ最も花輪の調製に長ず近時帝國ホテルの囑を受け室內の裝飾及食卓上の裝飾を擔當し又鐵道院の需に應じ展望車內の草花裝飾及食堂車の裝飾草花を取扱ひ營業頗る繁盛なり（東京市日本橋區檜物町六）

桃川若燕

丈は東京の講談家なり舊幕臣中澤政道の三男、明治八年十二月東京下谷區正南稻荷町に生る、六歲の時中島家に入り養子となる本名中島留五郎といふ十一歲初代放牛舍桃林の門弟となり始め桃甫と稱し各席に出演す後桃東又桃傑と改む三十四年若燕を襲名す三十七年日露戰役に從軍し三十九年第一師團司令部付となり凱旋後功に依り勳八等に叙せられ白色桐葉章を賜ふ爾來各席に出席して日露戰爭談、人情講談を得意とす方今東京講談組合員たり（東京市淺草區榮久町二九）

森本彌壽

君は東京の表裝家（雲錦堂）なり慶應三年十一月一日武州北葛飾郡幸手町に生る、森本彌吉の長男、家世々經師を業とす君夙に業を家庭に受く二十歲の時畫家高森碎巖翁の勸に依り東都に來り翁の紹介を得て神田和泉町經師水谷太一氏の許に在り、修業すること一ヶ年徵兵適齡の爲に一旦歸鄉し不合格となり二十三歲再び上京し後獨立斯業を自營す爾來經營怠らず顧客の信用甚だ厚く家道日に隆盛を加ふ明治四十三年秋季裝畫會主催第一回表裝競技會に軸物表裝を出品し褒章を受領す（東京市下谷區竹町二七）

森田とり子

丈は東京の長唄師匠なり、森田淸兵衛の長女、明治六年一月二十三日東京牛込區岩戸町に生る、幼より長唄を好み年甫て五歲杵屋彌三郎の門に入り修業すること多年、明治二十三年技完く成り藝名を杵屋小いつと稱し獨立して門戸を開き爾來專ら子弟の指導誘掖に從事す方今門戸頗る隆昌す（東京市牛込區神樂町三丁目）

守屋此助

君は東京の辯護士なり舊岡山藩士守屋仲太郎の次男、文久元年五月六日備中國小田郡大井村に生る、幼にして備中興讓館に遊び阪田朗廬翁の薰陶を受くる數年後出京して東京法學校に入り法律經濟學を修む業成りて代言人試驗に及弟して其免許を得る時に明治十六年なり爾來熱誠其業務に從事し名聲大に揚る二十二年條約改正の議あるや改進黨に入り斷行論を主唱し大に同黨の爲めに盡瘁する所あり二十七年岡山縣第四區より衆議院議員に撰出せられ爾來改選每に必ず選出せられ現に其席に在り甞て日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を授けらる方今國民黨

員にして法政大學理事たり又京濱電氣鐵道株式會社常務取締役、九州炭礦株式會社取締役を兼ぬ（東京市京橋區南佐柄木町五電話新橋七三〇）

桃川燕林

丈は東京の講談家なり慶應三年一月十一日江戸日本橋本銀町に生る、本名坂本忠一郎と云ふ夙に神奈川縣中學校を卒業す明治十八年講談師となりて菊水と號す二十四年阪本中洲と改め金剛艦に乘組みバンクーバー、桑港を始め北米各地を周遊し歸途布哇、ホノル、其他南洋諸島を巡歷す其間毎日艦内に講談師を容るゝ嚆矢なり歸朝後鬚髯を貯へ時世講談師と稱して各席に出演し高評を博す後桃川燕林を襲名するに及で髭を剃り通俗教育講談と稱して各席に講演し其名益々高し三十五年七月常宮周宮兩親王殿下に召され御前講演の榮を擔ふ爾來御召を蒙る數回是より貴顯紳士の招聘に應じ寄席に出演すること稀なり、嗜好、草花（東京市赤阪區赤阪田町六ノ一三、電話四七九九）

森部發

君は大阪の賀田組支配人なり慶應三年八月紀州海草郡に生る、舊紀州藩士森部好讓の長男、夙に鄕里の市川霞洞に就き漢籍を學び十八歳にして上京し慶應義塾に入り明治二十二年卒業す後ち鄕里の義德中學校に教鞭を執る年餘二十五年西村勝三氏の經營に係る塾皮會社の書記たり翌年該會社解散するに際し在米伴新三郎氏と謀り明治移民會社を神戸に起し經營一ヶ年にして病を發し一旦歸鄕す平癒後日本生命保險會社に奉職し契約課主任となり在職四年家事の都合に依り辭して歸鄕し爾來家事を見て遠く家を離れず後ち又大阪に到り大阪煙草株式會社の支配人となり事業計劃上社長と意見を異にし三十二年去つて賀田組に入り支配人となり以て今に及ぶ方今皮革部の主任を兼務し敏腕家の名あり、嗜好、詩賦を善くし奏水と號す其他球突、喜多流謠曲（大阪市西區立賣堀北通五ノ一〇〇、電話西四六九）

攝津大椽

丈は有名なる大阪の淨曲家なり森七三郎の男天保七年三月生る、實名二見金助市て五歳伊八の養子となる幼名龜治郎養父伊八淨曲を好み丈をして三絃を習はしむ後ち丈太夫たらんことを欲し安政五年故五代目竹本春太夫の門に入り始めて竹本南部太夫と稱す萬延元年故三代目野澤吉兵衛に引立られ江戸に出て吉兵衛の實父竹本越路太夫の名を相續す後ち歸阪し慶應元年師春太夫と共に文樂座に出勤す當時早く己に好評あり明治十年師春太夫歿後三味線豊澤團平と共に出勤し其名益々揚る十六年以降文樂座檜下太夫となり其名三都に鳴る最も艶物に長じ天下無双と稱せらる卅七年の頃宮殿下より攝津大椽の名を賜はり今猶ほ文樂座に出勤し淨曲家の泰斗として益々好評あり、嗜好、繪畫を能くす（大阪市西區土佐堀裏通一）

瀨川昌耆

君は醫學博士なり東京の人瀨川昌藏の長男、安政三年四月十七日生る、夙に醫學に志し明治十五年東京大學醫學部を卒業して醫學士となり斯界に貢献する處夥く後ち醫學博士の學位を受領し方今江東病院長、東京小兒科院長、南葛飾病院長等の職に在り（東京市神田區駿河臺西紅梅町一六、電話本局一九五五）

僊田研雲

君は東京の漆畫家なり愛知縣犬山の人、安政二年三月十日生る、家世々農及米穀商を營む通稱伊兵衛、研雲は其號、幼にして繪畫を好み初め名古屋の柴田芳洲に就て南畫を學ぶ二十七歳の時上京して具さに艱難を嘗む明治二十五年屏風、襖杉戸に漆を以て有職模樣を描くことを發明す其技頗る精巧にして雅致に富む曾て東京漆工競技會に出品し受賞す現に東京漆工會員たり君又松尾流の茶道に通ず夙に吉田宗知の門に學び種玉堂の號あり（東京市京橋區南紺屋町八）

千田峰吉

君は京都の醫士なり明治二年四月十六日岐阜縣益田郡萩原に生る、君始め岐阜縣師範學校を卒業し後同師範學校に出仕し教鞭を執る數年、職を辭し醫學に志し明治二十四年京都に出て同府立專門醫學校に入學し卒業後同府療病院の助手となり内科を實地研究す三十一年辭して内科專門を以て開業し爾來專ら濟生に從事す、嗜好、君幼より武を好み中途疾を發し之を止む故に刀劍

を愛する深し其他書畫骨董（京都市下一區京古門前通大和大路東入）

關口一也

君は東京の彫金家なり嘉永三年正月三十日江戸芝新錢座に生る、幼より畫を好み甫め後藤一乘の門弟杉岡一舉に就き繪畫を學ぶ元治元年正月より刀劍小道具金屬彫刻の技を並び研究す師の一舉京師に遊歴するに當り一乘の男、光來に就き學ぶ後其父一乘を師とす明治三年獨立自營す十年第一回内國勸業博覽會に於て花紋賞牌を受領す爾來第二第三第四第五回博覽會及共進會、日本美術協會展覽會、彫工會競技會等に引續き出品し銀銅賞牌褒狀等を受領す此間宮内省御用品の榮を蒙る數回、又日本美術協會展覽會、東京彫工會競技會等の審査員の囑托を受くる數次、其他各宮殿下御用品の彫刻、遞信省彫刻御用を勤むる數年、外務省の命に依り各國領事館の官印を刻し諸官衙の彫刻御用を勤む三十二年京橋區銀座三丁目生秀亭を設立し美術品陳列場を設く四十三年東京彫工會競技會へ皇后陛下行啓の際御席彫の榮を蒙る、嗜好、俳諧表千家茶道（東京市本所區向島新小梅町二〇）

雪中庵宇貫

君は東京の俳家なり元治元年九月江戸淺草花川戸に生る本姓飯野氏出て、杉浦氏を嗣ぐ、名は惟恭、字は蟹夫、通稱友藏、雪中庵宇貫は其號又虎丘の別號あり幼より書畫を愛す學は和漢に通し詩歌を善くす是れ概ね刻苦獨修より得たるといふ殊に俳諧の書に耽け深く芭蕉翁を慕ふ明治十六年贄を八世雪中庵梅年に執り幾もなく一列判者に擧げられ雪袞人の號を嗣ぎ俳名四方に聞ゆ爾來千代田日報、東京朝日新聞に筆を執る四十一年九世雪中庵庵雀志物故するや同門他派の齊しく推す所となり芭蕉翁傳統嵐雪第十世雪中庵となる方今有數の俳家たり（東京市下谷區上根岸）

仙石政敬

君は貴族院議員、仙石政固子の四子明治五年四月東京に生る、幼名兵助、後今名に改む漢學を若松甘吉に、習字を成瀧大城に學ぶ後學習院を經て東京帝國大學法科大學に入り三十一年卒業す三十年高等文官試驗に合格し次で志願兵として近衛師團に入營す三十三年足疾を得て現役を免除せらる尋で貴族院試補となる三十六年正五位に進み同院書記官たり四十三年從四位に昇進し同年德川侯爵渡歐に際し隨行して歐米各國を漫遊し同年十月歸朝す現に貴族院書記官たり（東京市芝區西久保神谷町一八）

子爵 仙石政固

子は貴族院議員なり舊但馬出石藩士（舊高三萬石）にして土岐正賢の男、天

保十四年十二月生る、幼名銳雄、字は藏卿、矯堂、又馨山と號す幕末尊攘の義を唱へ幕府の忌憚する所となる元治元年叔父仙石利久に養はれて其繼子となる甫め贄を田口江村、加藤長卿の門に執り後安井息軒、芳野金陵の二大家の門に遊び聞く所あり戊辰伏見の役、將軍慶喜江戸に走る子將軍に謁し時事を開陳す已にして其言容れられざるを悟り歸邑す明治二年學校權判事に任じ後大學太丞、大學少盥を歴て出石藩知事となり廢藩後少議官に任じ八年以降侍從宮内省七等出仕、内務權少書記官、同少書記官等に歴官す十七年子爵を授けられ十九年特旨を以て正五位に叙し廿三年貴族員議員に互選せられ廿九年正四位に進み卅年再選し卅五年從三位に進み四十四年正三位に叙せられ同年再選し現に貴族院議員にして土曜會員たり嘗て海上胤平翁を師とし和歌を研究し之を能くす（東京市芝區神谷町一八）

千田古梅

君は横濱の書家なり千田友之の長男慶應元年正月加州金澤に生る、名は秀之字は士芳、古梅は其號、別に環山、華洲等の號あり甫め書法を鄕里の山納蘭山に學ぶ明治十三年東京に出で石川鴻齋、岡鹿門等の門に入り書法詩文を修む後ち高林二峰、中村吳竹等に問ふ三十年横濱に移住し爾來子弟の敎授に從事す、嗜好、漢詩（神奈川縣横濱市戸部町二ノ六三）

關口眞也

君は東京の彫金家なり彫金家關口一也の男、明治十年二月東京に生る、通稱鐵次郎、眞也は其號なり、幼にして畫を好み明治二十四年橋本雅邦翁の門に狩野派の畫法を學び翌年より父の膝下に在りて彫金の技を修め傍ら村瀨玉田翁に四條派を、又山水花鳥を野村文舉に學び餘暇を求めて寫生畫を研究す二十六年以來内國勸業博覽會、日本美術協會、東京彫工會、日本金工協會等に彫刻品を出陳し每回銀牌、銅牌等の優等賞を授與せられ又審査員たること數回、先是年十九、皇太子殿下の美術協會へ行啓の際御命を拜し御前に於て銀製菜へ古歌並山櫻を刻し翌年日本金工會へ行啓に際し御前彫を爲し四十二年東京彫工會へ皇后陛下行啓の際又御前に於て銀製香箱清風高圓の圖彫刻御上覽の榮を荷ふ又宮内省御用品として御買上の恩命を蒙ること數回其他各種の諸會に繪畫を出品し銅賞を得ること數回に及ぶ、嗜好、觀世流謠曲、又柔道を好み高木眞楊流に達す（東京市本所區新小梅町二）

關山遊月

女史は東京の茶道家なり關山藍三郎の女、安政二年八月江戸日本橋室町に生る、家世々海産物商を業とし代を經る五代とす、通稱喜久、和松庵遊月と

號す、垂髫の頃より茶事を嗜み專ら宗
遍流を修む後千秋庵伺月師に就き茶道
を研究し兼て古流の花道を學び共に其
奥を究む方今茶花の兩道を以て子弟
の指導誘掖に從事せらる（東京市日本
橋區西河岸町一一）

薛允宗

君は臺灣の實業家なり、慶應元年十二月、清國福建省泉洲府普江縣城内東門街に生る、實父は薛武、君は其の三男、幼にして漢學を鄕里に於て修め歲十七にして始めて渡臺、商業に從事す明治二十八年、臺灣我が版圖に屬するや君擧げられて民政廳官祖の徵收を囑托せらる、三十二年、官許を得て、布袋嘴に鹽務總館を開設し、三十八年、更に臺南北勢横街に鹽務支館を開き、現今は、專ら支館の方に居住せり、君公共の事業に盡瘁するを己が任となし三十一年、日本赤十字社終身社員となりたる以來、各種の公共事業に盡力して賞牌又は賞狀を受けたる枚擧に遑あらず、性溫順、將棋を嗜む（臺灣臺南北勢横街庚九八七）

關谷鐵太郎

君は東京の歌人なり舊佐伯藩士關谷侃氏の長子、文久元年六月二十九日生る、祖老を粟屋美佐と云ひ國學を本間有信氏に學び和歌を能くせり君眞可彌と號す夙に歌道を嗜み甫め業を其祖父に受く又漢籍を鄕里の秋月橋門に修む後東都に來りて國學を海上胤平翁に學ぶこと十星霜、明治十九年内務省に出仕し、爾來累進府縣課長に至り二十九年官を罷め身を實業界に投ず初め藤田組に入り製造課長兼庶務課長たり三十年北海道炭礦會社に招聘せられて支配人となり居ること年餘、辭して東上し日本橋阪本町田中銀行に勤務し三十三年株式會社帝國貯蓄銀行に入り現に其取締役たり君國學に精通し最も長歌に長ず屢々若竹（歌道奬勵會發刊雜誌）に執筆し硯海の名現はる、方今業務の餘暇を以て呼子鳥考、萬葉集義解の編輯に從事しつゝあり其著に椎の若葉、人丸考等あり（東京市牛込區市ヶ谷甲良町四〇）

男爵千家尊福

男は貴族院議員なり舊出雲國造先代尊澄の長男、弘化二年八月生る、明治五年以降出雲大社大宮司、權少教正、大教正、神道西部管長等を經て十三年從四位に叙し十七年男爵を授かり島根縣華族に貫屬す後大社教管長となり特旨を以て從三位に叙し二十一年元老院議官に任ず二十三年貴族院議員に互選せられ二十五年文部省普通學務局長に任じ二十七年埼玉縣知事となり二十九年二十七八年事件の功により勳四等瑞寶章を叙賜せらる三十年靜岡縣知事に任じ勳三等に進む此年議員改選期に際し再選せらる三十一年東京府知事に任じ正三位に陞叙し四十一年司法大臣に親任せらる先是東京鐵道株式會社々長に推され更に東京商業會議所特別議員に擧げらる方今前記の職に在り勳一等たり（東京市牛込區新小川町三ノ三一）

關直彦

君は東京の辯護士なり舊紀州藩士關平兵衛の三男、安政四年七月十六日生る、幼にして藩校に入り又三浦安に師事し經史を學ぶ明治七年大阪英語學校に學び九年上京して大學豫備門に入り次て法科大學に移り十六年卒業す後日報社に入り操觚に從事す此年東京府會議員に選擧せられ次て東京專門學校、英吉利私法律學校の講師となる十九年井上外務山縣内務の一行に隨ひ北海道を視察し歸京後歐州に遊び法律經濟政治等の學を攻究し二十一年歸朝す後日報社長福地源一郎の後を繼ぎ其社長となり爾來同社に在ること五ヶ年此間麹町區會議長代理及東京市會議員同參事會員等に擧げらる二十三年帝國議會開設の際和歌山縣より選出せられて衆議院議員となり爾來改選毎に當選す二十五年日報社長を辭し辯護士となり專ら訴訟事務に從事す四十一年東都市部より衆議院議員に選出せらる曾て貴衆兩院協議會副議長及衆議院委員長たりき先是三十九年四月日露戰役の功に依り勳四等に叙せられ旭日小綬章を賜はる四十五年五月東京市より選出せられ衆議院議員となり現に其任に在り方今前記の外明治石油株式會社取締役、東京馬匹改良株式會社取締役たり（東京市京橋區南金六町一二、電話新橋一〇四七）

泉田鑄吉

君は東京の書畫骨董商（吟松堂）なり弘前舊津輕藩士小田切茂厚の二男、明治四年一月生る實父茂厚氏は明治八年の頃居を帝都に移し奠大小製造販賣を業とし十年西南役の當時一時巨利を博す其終局を告ぐるや需用頓に減し收支償はず此に於て身を投機界に投じ一敗地に塗れ家道衰頽す君小學校を半途に退校し質商に奉公し或は給事となりて家計の幾分を扶く後大學教授、水產技師松原新之助氏の知遇を得て漸く小中學科を卒へ高等商業學校に入るを得たり此間同家の學僕として松原家の少年少女の付添となり共に通學し其餘暇を以て家事に從ひ中學校を卒業す殊に松原氏の旅行勝なるより病身なる夫人を扶けて家事の百般を整ひ進て高等商業學校に入るや家事の整理は益々嵩み加ふるに病褥に在る夫人の看護に仕へ爲めに學事に遠ざかるの止むなき境遇に到れり幾もなく夫人は病歿す此間十二年遂に高等商業學校を退學せり時に明治二十六年の夏なりき翌年染料問屋柴田藤兵衛方に入り簿記法を敎へて始めて給料を受く後松原氏の緣故に依り泉田家に入り養嗣子となる同家は代々

養子を以て嗣を立つ君に至る迄既に十六代とす樹來美術品を海外に輸出せんことを計り養母の賛成を得て六千餘圓の書畫骨董を在米知己に托して送りたるに豫期の如く數旬の内に數千金の純利を得たるを以て益々前途の光明を認め第二回は多額の輸出を爲せり然るに不幸在米知己の失敗は遂に原價をも併せ失ふに至れりといふ三十四年十一月養父病歿するや資産の分配に與からんと來り會する幾多の縁戚に對し毫厘の微たも收めずして家産全部を放棄し皆之を分配せり事終りて君は新規に等しき營業を繼續し刻苦辛酸二年餘にして家勢倍舊し尚ほ十六代間甞て有らざる子福長者となれり最も陶磁器等燒物の鑑識に特長を有し今や斯界中の偉人を以て稱せらる現に株式會社東京美術倶樂部の重役たり、嗜好、實生流謡曲を能くし又歌澤の聲曲に通ず（東京市日本橋區箱屋町一七）

關　孝太郎

君は東京の辯護士なり舊秋田藩士關清之助の男、安政元年七月生る、名は光治樂山と號す萬延元年君甫て七歳同藩士豊間氏同藩士宇野氏に從ひ漢籍を學び文久三年藩立學校朝德館に入り更に同藩の儒者磯野翁に從ひ諸史經典百家の書を修學す慶應二年正月十三始めて藩主に仕へ大番組に編入せられ明治元年戊辰の役十五旗奉行付添役を免じ更に市中取締役を命せらる君其就職の旁ら磯野翁に從ひ尚漢籍を學ぶ十六歳の時翁の門弟數十名を托せられ明治六年十二月迄青年薫陶に從事せり此年十二月意を決して東京に上る七年一月より大井憲太郎に從ひ政治法律の二學科を學び八年元田直の開設に係る法律學舍に入り教授名村泰藏に就て學ぶ翌年同學卒業後代言人試驗に登第し長野縣松本裁判所管内に於て始めて代言事務に從事す十一年十二月東京に移住し爾來熱誠辯護士業務に從事す二十五年以來本郷區會議員及び東京市會議員に擧げられ業務の傍ら大に公共に盡せり、（東京市本郷區丸山福山町七、電話下谷二二〇一）

瀬川源平

君は尾張の名家なり天保十年十月尾州名古屋江川町に生る、舊尾州藩士たり幼時父を喪ひ祖父に養育せられて人となる二十歳會津征討に從軍す平定後蜂谷百枝に師事し志野流の香道を學ぶ明治十二年七月皆傳の證を受く爾來邦内各地を歴遊す二十三年岐阜縣土木課に出仕し在職四ヶ年職を罷め專ら門弟の薫陶に從事す方今職を岐阜高等女學校に奉じ香道を教授す（美濃國岐阜市常盤町三〇）

施　芳　德

君は臺灣の實業家なり（臺灣臺南戊一一四四）

瀬川喜七

君は伊豫松山の實業家なり先代與七郎の長男、文久二年十月一日生る、竹坡と號す、父與七郎氏は舊松山藩の設立せる藍役所取締役となり、明治十六年縞會社副社長として二十有餘年間伊豫織業に熱心盡力せり君夙に父業を紹き力を伊豫織物の改良に竭し明治十七年縞會社を解散し更に松山縞改良會社を創設し織物の買賣は各問屋に一任し該會社は專ら製造人の物品を監査し勉めて品質の改善を圖らんと欲し自ら幹事として當業者を監督奬勵せり後從來の半唐織を縦横木綿織に革め自ら意匠を凝らして製織の仕組をなし細民をして之を製織せしめ且同業者を勸誘して遂に之を決行せしむ又同業者中物品停滯の爲に資本の運轉に窮するものあれば周旋奔走して遂に製品の現在せるもの一千數百反を買收して之を賤賣し自ら負ふ所の損失四百餘圓に及べりと云ふ此に於て感ずる所あり組合區域を擴張する必要を認め明治廿九年更に伊豫織物改良組合を設立し奔走勸誘一市五郡數千の織匠を悉く組合に加入せしめ規約を嚴にして濫造を矯め自ら機業家の龜鑑となりて他を導くにあらざれば改善の目的を達し難しと信じ資金一萬一千圓を投じて原料を仕入れ其組織意匠等自ら之を掌り廣く細民をして製織せしめて模範を示し品評會を開き染織講習所を起して同業者を奬勵する等拮据多年聲價世に播き販路大に擴まる明治卅四年七月官之を賞し勅定の緑綬褒賞を賜ひ其善行を表彰せらる三十六年松山商業會議所副會頭に推擧せらる翌年伊豫織物改良同業組合は多年の功勞を感謝し銀盃を贈與す此年松山商工會長に推薦せられ三十九年日清戰役の際軍資献納の廉を以て賞勳局より木盃を賜ふ此年松山紡績株式會社長となる四十年日露戰役に際し軍資献納の廉に依り賞勳局より金盃を下賜せられ次て松山市教育設備調査委員を命せらる四十一年大日本大博覽會評議員を命せられ後愛媛縣協賛會副會長に推さる方今日本赤十字社愛媛縣支部評議員にして松山紡績株式會社長たり、嗜好、書畫（愛媛縣松山市本町一丁目）

關　和　知

君は前代議士なり千葉縣の人關八藏の長男、明治三年十月十七日千葉縣長生郡東浪見村に生る、夙に學を修め尋て上京し早稲田專門學校に入り卒業後郷里に歸り改進黨機關千葉民報主筆となり政界の木鐸となり當時大に偉彩ありき後廢刊に際し雜誌新房總を發刊し自黨の威力を示し三十三年米國に航し「ユール」大學に遊ぶ後ち轉じて「ブリストン」大學に入り政治經濟社會學等を修め三十九年優秀の成績を以て業を卒へ「マスター、オブ、アーツ」の學位を受け、歸朝し萬朝報に筆を執り又飜譯

の事に從ふ後東京毎日新聞編輯長に轉ず四十二年鄕里より推されて衆議院議員となる、方今操觚の事に從ふ（東京市四谷區阪町一七）

妹尾武

君は東京の書畫鑑定家なり文久元年十二月常陸國筑波郡筑波町に生る、妹尾萬壽吉の長男、累世鄕の名族たり父萬壽吉氏は慶應年間筑波山腹を開墾して田園を拓くこと數十町、衆皆其殊勳を稱す又公職を帶ひ縣治の左翼に盡力し籍を政友會に列し其幹事たり、居常書畫を愛玩し、頗る其鑒識に長せり君名は武、止戈と號す、君父の質を享け幼より書畫を嗜み、好て鑑定を事とす又其性を觀て指導する所益々厚し、成童の頃鑑識拔群屢々人をして驚嘆せしむ、又漢籍は土浦藩士木原元禮に就き修む後身を實業界に投じ初め川崎銀行の重役たり、尋て水戸鐵道の創設に與り斡旋盡力し後其理事に擧げられ在職多年官營となるに及で去つて北海道に赴き自ら實業に從事したるも不幸時運に會せずして失敗に歸す、於是斷然此地を去り東京に出て鑑定の業を開始せんことを決す、明治三十九年東都に來るや時恰も美術界の狀態は盛にして冲天の勢あり、紛々擾々玉石混淆僞を以て眞を欺き利を射んとするもの比々皆然り、君獨り超然として時弊に泥まず高潔已を持し赤誠以て事に當りて毫も利慾に惑はず是を以て業務漸次に發展し頗る隆昌を呈し嶄然斯界に其頭角を現はすに至れり方今儒者物の鑑識に至りては君の右に出づるもの稀なりと云ふ（東京市麹町區飯田町六ノ八）

關銀作

君は神戸の貿易商なり關伊吉の次男安政四年十一月遠州小笠郡中村に生る家世々醫を業とせり父の代に至り醫業を廢し漆器商を營む君十五歲、佐藤漆器商店に奉公し横濱支店に勤務する多年明治二十年辭して神戸に出て、漆器小賣商店を開き勤勉力行備さに艱難を嘗め漸次信用を得て業務稍々繁榮に赴く是に於て鄕里靜岡より職工を招き漆器製造業を創む是れ神戸市に於ける漆器製造の嚆矢なり爾來工場を葺合町に設け專ら外國向漆器を製作し內外各地より陸續注文を受く其製品を內外各種の博覽會、共進會等に出品し賞狀賞牌を受領する數次、方今米國「バンクバー」に支店を設け歐米各國に直輸出を試み製品の精良巧致を以て其名內外に高し（兵庫縣神戸市下山手通二丁目）

清風與平

君は京都の清水陶工なり播磨國印南郡大鹽村に生る、岡田良平の二男、父良平、畫を好み得鳳と號す、君幼より書冊を繙き好て禽獸蟲魚花卉等を描寫して樂めり年十三四の頃京都に來り田能村小虎の門に畫を學ぶ十五歲の時疾に罹り鄕里に歸養す翌春病全く癒しも父母遠く遊ぶを許さず偶々人の勸に因り陶工清風家の養子となる時に慶應二年なり是より專ら陶器の畫法を修め且製法を見聞して大に得る所あり由來清水燒陶磁器は古雅麗潔頗る風韻雅趣に富み優に外國製品を凌ぐに足るものなれとも之れが業に當るもの概ね藩志弱行にして只日常普通の製陶を以て足れりとし意匠を凝らし其精巧を發揮するものなきを以て外人をして其眞價を解せしむる能はざるを遺憾とし其改良に意を注き刻苦研鑽數年其技大に進み名聲遠近に聞ゆるに至る明治十年清風家を繼くに及で益々力を本業の發達に盡し其製品は漸次に精良に赴き清水燒の聲價亦次第に發揚し中外人をして其雅潔なるを愛重せしむるに至れり殊に君は化學に心を留め分析化合の方法を討究し頗る自得する所あり遂に大白磁塊白粕、浮起紋、細鱗紋、八重環瑤、白磁大氷烈紋の製法及秘色磁碼釉改良等を發明し古來未曾有の聲價を博するに至れり而して君は是等の製法を秘密に附せず同業者の閲覽に供し其說明を與へ以て補益する所尠からず又嘗て重要物產組合法の發布あるや同業組合の創立委員となり又工務委員に推されて工藝上の革新を圖り或は組合內に陶磁器蒐集所研究會、品評會等を開設し大に斯業を奬勵し盡瘁する所甚だ多し明治二十八年三月官之を賞し勅定の綠綬褒章を賜ふに至る君明治十五年以來內外博覽會、共進會等に出品し賞牌を受領すること六十餘回又審査員、委員等を勤めしこと二十餘回の多きに及ぶ（京都市下京區五篠大橋東五丁目清水坂）

關信之助

君は茨城縣郡部選出代議士なり關文雄の二男、嘉永六年二月生る、夙に漢學を修む明治十一年水戸法學館を設立して其幹事となり法學講究に資す十四年茨城自由黨を組織して其主幹となり十五年代言人となり爾來熱誠其業務に從事し代言人組合會長たり二十二年水戸市會議員に擧げられ翌年縣會議員に當選す此年再び代言人組合會長に推され二十五年縣の第一區選出代議士となり爾來累選第三十議會に及ぶ第七議會の際銀盃を賜はる後辯護士會長、自由黨茨城支部長等となり現に政友會に籍す（茨城縣水戸市上市裏五軒町）

關口彦三

君は富山縣の實業家なり關口彦四郎の長男、安政四年生る、夙に漢籍を阿和加修造に就き修む、君町村制實施以來町會議員として今猶其職に在り明治二十二年縣會議員に選擧せられ次で郡會議員となる爾來累選現に議長の席に在り嘗て魚津中學校の設置を縣會に建議し其設立せらるゝや盡力する處多く方今鰤網大敷株式會社取締役、日本赤十字社正社員たり、嗜好、書畫骨董又

俳諧を能くし禾年の號あり（富山縣越中國下新川郡魚津町字馬出町）

關澤霞庵

君は東京の詩人なり舊秋田藩士關澤邦清の長子、安政元年六月二十一日江戸淺草藩邸に生る、先考は墨仙と號し武術に達す性頗る風流閑雅を好み和歌に通じ南畫を善くし又謠曲を嗜めり、君名は清修、字は士節霞庵は其號又別に碧梧翠竹居主人の號あり夙に漢籍を羽後の岩崎藩黌講師渡東嶠に學び書を卷掖山桑野松霞等に修む慶應四年歸郷し眼病に罹り一時讀書を廢す病稍癒るに及び明治三年の秋再び上京し徒爾の餘、初學便覽を懷にし屢々詩作を試み遂に名古屋の詩人神波即山に師事す後森槐南に問ひ又晩翠吟社に遊び大に得る所あり明治十五年司法省に出仕し在職二十年、此間正八位に叙せらる三十五年職を罷む、日本百科大辭典編纂の擧あるや聘せられて和漢詩人傳記部を擔任し現に其職に在り資性和氣藹如にして人と交り坦然怡する所なし、書房蕭然、吟詠自適、其詩幽秀にして淡逸潔清にして朴老、雅は才氣を以て矜勝するを欲せず乃ち知足の心、室の狹を忘れ世に求むるなく、雲忙に笑て其性清然たり（東京府豐多摩郡千駄ヶ谷町字原宿一七八）

妹尾萬二郎

君は福岡縣の實業家なり先代萬二郎の長男安政四年四月十四日生る、幼名勝助明治十六年十二月家督を相續して襲名す家業は米穀商及醬油醸造業を營む、明治二十年機械精米所を設置し墺米諸國に輸出す二十七年日清戰役の際軍機界に入り大に利する所あり後陸軍兵營の用達となるに及んで忽ち工場の狹隘を告ぐ於是博多市所在の精米所八ヶ所を借受け軍糧の補充に努め三十一年自ら精米所を增築す三十七八年日露戰役に際し遺憾なく軍糧補給の責を全ふす三十九年浦鹽に精米所を設け朝鮮米の精米に從事し同地の需要に應じ盛に營業しつゝあり方今九州電氣軌道株式會社取締役、市參事會員第二會頭たり（福岡縣小倉市馬借町六〇）

關角之助

君は栃木縣の殖産家なり慶應三年十一月常陸眞壁郡關本町に生る、濱名信平の實弟なり幼にして漢學家玉井次郎の門に學び明治十五年茨城中學校に入り修業の後十八年野州關文右衛門の養ふ所となる爾來農桑を事とし殖産孝養を專らとし傍ら讀書、詩文を以て樂となす養父歿後家名を繼ぎ二十五年擧げられて村會議員となり二十九年郡會議員となり三十二年十月縣會議員に擧げらる君又小山地方商業の不振を慨し同志と圖り下野農商銀行を小山に創立し現に其取締役たり更に小山倉庫株式會社の取締役に推され現に其職に在り又多年自由主義を取り終始一貫節を變せず又慈善を喜び公共事業の爲めに捐資する所尠なからずと云ふ（下野國下都賀郡大谷村大字武井）

關川清兵衛

君は長野縣の吳服太物商なり天保三年正月十八日生る、本姓長岡氏年甫めて十二、信州松本市加賀茂吳服店に奉公し商業の見習を爲すこと十二年安政二年瀨川家に入り養子となる養家は古着商を業とす爾來斯業に從事すること十年慶應二年分家して吳服太物卸小賣商を自營し夙夜精勵孜々怠らず家道漸く進む維新以來織物の進歩著しく巧妙なる器械を利用し價格の低廉を競ふより粗製濫賣の結果遂に織物の聲價を失墜するもの比々之れあり君深く之を憂ひ斷然意を決し有名なる機業地を巡視し汎く機業家の意見を叩き詳に其實情を探り大に得る所あり是より五ヶの標準を作り一に原料の精撰、二に染色の注意、三に組織の完全、四に時流の適合、五に價格の低廉等を以て自家織物改良の方針とし爾來機業家を指導誘掖し大に其奬勵に力め其製品は又勉めて博覽會共進會等に出陣し之を公衆の批評に求むる等盡瘁する所少からず是より江湖の高評を博し需要日に多きを加へ竟に今日の繁盛を呈するに至る今や長嗣に家督を讓り悠々自適す其嗣幼名龜之助安政五年三月十一日生る明治三十七年三月家督を相續し襲名して家業を繼ぎ益々業務の發展を計り家聲大に揚る方今町下屈指の商店たり、嗜好、書畫、盆栽（長野縣小縣郡上田町字木町）

關甚吉

君は奈良の實業家なり荻田玄兵衛の二子、明治三年八月二十三日大和國添上郡東市村字横井に生る、後ち出てゝ關家に入り養嗣子となる養家は市内有數の太物類卸商にして家號を太すみやとす君幼名芳太郎家督を相續し襲名す爾來益々業務の發展を計り大阪本町三丁目に支店を設置し其販路は名古屋、東京、中國、九州、北越等の各地に商取引先を有し家聲益々發揚す各種公私の諸會に出品し金銀銅褒章を得る拾數回に及ぶ嘗て所得税調査委員たり又奈良實業協會の爲めに盡力する所あり、方今市會議員、奈良實業協會總務委員たり、嗜好、謠曲、奈良縣奈良市脇戸町電話一七、(大阪支店本町三丁目、電話東九九六)

關民山

君は東京の書家なり丹後舊田邊藩士關屯の長男、明治二年二月東京江戸橋の藩邸に生る、祖老は關壯右衛門盛之と云ひ藩儒にして先考は鐵筆を能くせり君名は鐘吾、民山は其號なり君夙に漢籍を祖父に學ぶ長じて京都に赴き安達乾中の門に入り漢籍及鐵筆を修め居ること八ヶ年後一旦歸鄉し二年を經て上京して篆刻を業とし各地に漫遊し諸名士の說を叩き得る所あり爾來專ら顏眞卿の書風を慕ひ能く其筆意に入り頗る楷書を能くす方今罐詰新聞社の意匠顧問たり居常盆栽を嗜み又寫眞術を研究し頗る其技に長す(東京市京橋區弓町一一)

關戸守彦

君は名古屋の銀行家なり關戸二郎の長男、明治二年八月二日生る、同六年家督を相續す、君は名古屋の素封家にして愛知、海東、海西の三郡に亘る大地主なり代を經る十二代此間二百五十年連綿として家系を繼ぐ維新以來舊藩財政上に多大の貢献を爲したり祖先は關戸播磨守と云ふ其子孫名古屋に移り商人となる德川家より地方爲換方御用を命せらる六代次郎世に功勞あり苗字帶刀を許され知行五百俵十五人扶持を賜はり町人の筆頭に據らる維新の際長州征討軍費三十萬兩を伊藤家と共に預り之を調達せり幾もなく維新の政變に遭ひ其藩債の處理に十有餘年間鞅掌し頗る困憊を嘗む今の關戸銀行は當時の紀念物たり方今株式會社丸八貯蓄銀行頭取、第十一銀行、愛知銀行各取締役の任に在りて關戸銀行の營業主たり、嗜好、書畫、和歌 實生流謠曲(名古屋市西區堀詰町一七、電話一〇〇六)

關藤次郎

君は奈良の實業家なり先代藤右衛門の長男、元治元年九月十五日生る、家世々絹布及麻布卸商を營み市内有數の商家にして現時麻布製造を兼營す君夙に大阪の儒藤澤南岳翁の門に漢學を修め篤行家の聲譽あり嘗て市會議員、市參事會員たり方今所得税調査委員、奈良實業協會評議員、奈良銀行監査役たり、嗜好、千家裏流點茶道に通し依水園と號す殊に筆札を善くす(奈良縣奈良市水門町、電話一七三、店舗電話二一九、同一九)

千田軍之助

君は舊和歌山藩士千田忠助の長男、安政三年二月十一日生る、竹里又龍門と號す幼にして孤夙に英漢二學を修む明治九年地租改正に際し縣下農民其不當を唱ふるや君年二十一其匡正を以て自ら任じ同志二十有餘名と頻りに當時の縣令に迫る官以て强願となし獄に投ず於是乎彼の紀州騷動なる農民の暴動あり大阪鎭臺派兵せらるゝに及で事漸く沈靜するに至る君獄に在ること幾と一年出獄の翌日縣令善行の意を以て君を縣官に任用す爾來學務衛生の諸課員となり縣治に功あり二十年故陸奥伯の歐化主義を唱ふるや君同志會を設立し之が會長となり更に紀陽新聞を興して其主筆たり此間十一年大阪に於ける愛國社の再興に力を効し後自由黨及大同團結を經て以て現時の政友會に至るまで始終一貫以て國事に奔走せり二十七年和歌山縣第一區より衆議院議員に當撰し三十一年更に第二區より當撰せらる第十三議會に於ける地租增徵案に對し硬說を主持して動かず遂に能く其歩合を減じ其年數を限りしが如き氏の力與つて多きに居るといふ(和歌山縣奈賀郡長田村)

關屋祐之助

君は實業家なり舊二本松藩侍醫關屋玄堂の長男、明治二年四月生る、父嘗て醫術研究の爲め長崎に遊學し當時國禁の洋書を修めて歸る之を以て君幼より自家に於て洋書を學ぶことを得たり十四歲にして福島中學校に入り次で第二高等中學に轉學し醫科二年級にして退學す二十二年奮然海外に航し獨逸新敎大學校に入り哲學科を卒業す爾來嚴父の長崎遊學中知遇者たりし神學博士フルベッキ氏並獨乙法學博士マイエット氏の飜譯其他文筆に從事す二十五年斷然身を實業界に投じ日本郵船會社に入り社費を以て布哇、魯領浦汐、朝鮮支那等の各地に出張せり日清の役起るや君大本營御用掛を囑托せられ專ら御用船の事務に鞅掌す二十八年十二月功を以て勳六等に叙せられ瑞寶章幷に金百五十圓を下賜せらる二十九年八月故參謀總長川上大將の中央亞細亞軍事視察の途に就るゝや伊地知、村田、明石等の諸將校と共に亦隨行を命せられ臺灣、厦門、油頭、香港、安南、東京、東滿塞、遼羅、馬來半島地方を視察し歸朝後佛蘭西國共和政府より、シワノード、ドラゴン、ド、ランナン勳章贈授せられ會社員にして外國勳章を拜授せしは君を以て嚆矢とす後廿七八年戰役從軍記章を下附せらる四十二年辭して太平生命保險會社專務取締役に聘せらる又日本鉛筆株式會社監査役、日本炭礦抹式會社相談役、總武實業新聞社長、やまと新聞社理事等の職にあり(東京市小石川區指ヶ谷町一、電話番町一四五四)

關　新右衛門

君は長野縣の藥種商なり先代新右衛門の長男、安政六年五月生る、幼名喜之助、後ち家督を相續し襲名す爾來營業組織を改め合資會社關新商會と稱し業務を擴張して貴藥、繪具染料、洋酒販賣を兼業とす君は其社長たり君年三十八にして嘗て舊藩主松平侯の着手せられて中途廢棄せる上州草津街山腹の新田開墾の再擧を企て始め侯の着手せし殘留の部分を開拓し次で上州草津街道に沿ふて更に新道を鑿築して交通に便じ之れに移民して日々米麥醤油等の日用品を供給せしも漸次移民の增加に從ひ經費漸く膨脹して日に巨額の費を要し到底一人の能く支ふる處にあらざるを知るや大井憲太郎氏に謀り其土地の拂下を官に請はんとするに方り地方に奸策を弄し妨害を加ふるものあり其計畫爲めに水泡に歸す是に於て斷然意を決し爾來獨立益々奮鬪刻苦經營數年漸く其收獲を以て移民自ら支ふることを得るに至る明治四十一年其土地の拂下を受け其一部を擧げて移民に分配し以て積年の宿志を伸ぶ既にして開墾して田園を拓くこと數十町、人皆其殊勳を賞す今や移民等相謀りて君が頌德碑を建設するの擧ありと云ふ方今北信藥業組合副組長たり、嗜好、酒（長野縣小縣郡上田町字原町房山入口、電話長三一五）

關　善次郎

君は臺灣實業界の元老なり九州福岡の人家世々黑田家の舊臣明治六年一月藩の撰拔により洋學研究生となり長崎へ派遣を命ぜらる七年江藤新平佐賀の亂あり歸藩を命ぜらる九年福岡先輩の書を齎して薩摩に赴き桐野利秋に寄りて私學校に入らんとせしも當時恰も丁丑の暴擧前に當り人心恟々形勢頗る不穩なり即ち去つて歸鄉す十年丁丑の亂起る福岡の志士と共に之に參與す事平定の後ち禁獄年餘に處せられしも六ヶ月にして特赦出獄十一年志士と共に向陽義塾を起し政治の結社と爲す即ち今の玄洋社是なり、明治十三年實業に志し在神戸英國商館に入り翌年大阪の故五代友厚氏北海道に殖產上の企圖あるや君即ち其先發として同地に航し事業の取調に從事す十五年野村忍助、大橋一藏、兩氏と共に朝鮮に渡航する或る目的を計畫せしも會々我政府と同國との間に外交事件發生せるにより之を中止し翌年松方伯、品川子等の首唱に係る共同運輸會社株主募集の爲め野村忍助氏と共に北越地方に出張し其儘同氏と共に同地に在任し會社の事務を分掌し十七年辭して出京し陸軍省の命に依り村田式銃々臺の上納を事とし第二回內國勸業博覽會の開設に際し委員を拜命し後ち塗器改良委員に擧げられ同原產地函根、金澤越後會津等の地を巡察し十九年其功に依り壹等賞狀を下賜せらる二十年日本製粉會社の起るや其取締役たり二十二年職を辭す翌年防水布の專賣特許を受け宮內省其他諸官衙の御用品となる第三回內國勸業博覽會開設の際漆器審査官補助を命ぜらる爾來陸海軍省農商務省鐵道局等の御用達を業とし傍ら土木建築鐵道工事等の請負に從事す明治二十七年日淸の役起るや野戰第二師團に從ひ遼東より轉じて臺灣臺南に入り糖業鹽業に盡力し其功尠らず爾來天日晒鹽及製糖の業に盡力し其功尠らず爾來天日晒鹽及製糖の業に盡瘁し且其他幾多の事業に奔走斡旋其功蹟枚擧に暇あらず實に方今臺南實業界の元勳として尊信せらる、嗜好、書畫（臺灣臺南城外海安宮街）

說田彥助

君は精酒問屋なり說田彥右衛門の長男、嘉永元年二月生る、其先藤原千常に出づ元と相良を氏とし九州の豪族なり中世說田を唱ふ中興の祖彥助江戶に出で南新堀に賣酒及び肥料の業を營む君は實に其三世彥助の長男なり歲八九歲の頃書を好み春木南溟に學び傍ら西島秋帆の門に漢書を攻む又商業を鹿島淵平に修む偶々饑饉あり君其慘憺を憂ひ主家鹿島一族の食料を麥飯にせんと謀り自ら八王子所澤等の所在に赴き麥を購ふて歸る鹿島氏竊に君が年少にして經營の材あるを歎賞す君亦商業攻修の傍ら三村伊賀右衛門の門に劍法を學ぶ戊辰の變父佐土原藩の軍務會計局に擧げられ京阪の地に出張し軍費の爲替事務に從事し大に力を盡す君亦年少の身を以て父を助け、靜岡名古屋等に赴き奔走周旋する所最多く亂平く後ち父子共に其功勞を以て白銀若干を賜はる當時官賊兩軍江戶京中に相對し將に兵災あらんとす市民悉く家を捨てゝ去る父彥助も亦家人を携へて難を近鄉に避く君心竊かに期する所あり獨り留まり頻りに酒を買入れ土藏納屋等酒樽を以て堆積す既にして亂平ぎ諸司百官等充溢し賑殷の帝都となり物價頓に騰貴す君乃ち曩に蓄ふる所の酒を販賣し巨利を博せしと云ふ廿歲にして家業を繼ぎ酒業の傍ら干鰯肥料の業務に從事す明治四年輸入の壜詰酒を發賣す本邦壜詰酒の嚆矢なり又君常に製酒詰の改良及需酒業者從來の弊を更革せんとし同業者廣岡某と相謀り遂に積習の惡慣例を打破して功あり五年君有志を募り靈岸島學校を創立す官賞して銀盃を賜ふ西南の役軍用綿撒糸を陸軍省に獻納し木盃を賜ふ十三年冬東京に大火あり君金圓若干を投じて罹災者を救恤し銀盃を賜ひ廿年海防費を獻じて銀製黃綬褒章を賜はる其他貧民救助惡疫豫防費養育院學校幼稚園等に金圓義捐寄附せしこと頗る多く爲めに賞盃賞狀前後數十回に及べり又君校務係區會議員等に選ばるゝこと數回十六年以後商工會員となり廿二年大日本酒問屋會社を起し其副頭取に選ばる此年支那に渡航し各地を漫遊して同國酒業の實況を視察し歸朝後本邦酒を壜詰と爲し彼地に輸出し又其販賣に係る精製酒の見本を英米獨の諸邦に輸出す獨逸の如きは之を藥料に供し病院用として使用するに至る之より先き廿一年西班牙博覽會に本邦酒を出品して有功賞の銅牌を受く廿四年東京

商業會議所議員に當選す又曾て攝州與業滊船株式會社の取締役に推選せらる又日本商船株式會社々長に擧られ日本酒問屋株式會社取締役となり方今前記の外日本防腐木材株式會社長留萠炭礦株式會社監査役たり（東京市京橋區南新堀町一ノ一一電話、長京橋一二七二）

瀬川露城

君は滋賀縣の俳家なり名は正夫、露城は其號、嘉永四年八月十八日播州姫路に生る、俳諧を以て地方に聞ゆ、初め俳諧を同地の世來翁に學び維新後學事に志して東京に出で一旦鄕里に歸りて教育事業に力を盡し爲めに家產を傾くるに至る後ち再び大阪に出で實業に從事せしも其間常に風雅は身邊を離れず一朝感する所あり年齒四十にして世務を拋ち俳諧三昧の身となり飄然諸方に遊び後ち浪華高津野邊に艸庵を結び野坡庵と號し始めて文臺を立つ時に明治廿三年春なり廿九年晩秋艸庵を須磨の浦に移し寢覺庵と呼びて暫く白砂青松の裡に俳神を養ひ卅五年夏再び浪華に出で商家軒を並べし堺筋の紅塵堆裡に門を張りて俳禪窟と稱せり四十年七月大津保勝會の聘に應じ芭蕉翁本廟無名庵に入り爾來同國の有志に謀り多年風霜の爲に廢頽せんとする本廟の再興を企て一千餘名の同志を得入庵後二星霜を出すして修理全く成り境內大に面目を改めり（滋賀縣大津粟津義仲寺）

關盧山

師は臨濟宗の僧なり小川久次郎の長男、慶應元年十月十二日生る、碧松軒と號す、明治十年美濃國土岐郡笠原村溪雲寺住職仁寶和尙に就き得度す後ち名古屋德源寺住職鷲巓和尙に師事すること二十ヶ年更らに京都妙心寺管長實叢和尙に就き修業し三十七年前師德源寺の後住となりて今日に至る（名古屋市新出來町德源寺）

關田華亭

君は東京の畫家なり舊水戸藩士關田關山の男、慶應二年四月生る、通稱淺次郎、華亭は其號なり幼より畫を好み渡逸華山椿椿山等の畫風を慕ひて獨修す明治二十四年上京し野口幽谷翁の門に入らんことを請ふ翁は老衰の故を以て固辭す友人齋藤栞を介して遂に其門に入る時に翁年齒既に七十に近く就學の餘年限あるを覺り切瑳奮勵大に勉む師翁歿後師を求めず獨學技を磨き一家を成す曾て宮內省圖書寮に出仕し在勤三年後日本畫會の創設に與り評議員に推擧せられ尋で主任幹事となる今尙ほ其職に在り二十六年以來日本美術協會其他各種の諸會に於て銅賞褒狀を受領する數回又屢々皇后陛下、皇太子殿下の御前に於て揮毫するの榮を蒙る其他出品畫にして皇后職、東宮職の御用品たること數次又各種諸會の審査員たり嗜好、盆栽（東京市神田區五軒町三）

君は舊岡山藩士關昇三の長男、安政元年九月生る、黃厳又清高閣主人と號す夙に家學を受け次で藩黌に學び又西彌山の門に修む明治七年上京して研學し傍ら諸種の新聞社に寄稿す後末廣鐵腸氏の紹介に依り曙新聞社に入り評論部に主任たり尋て評論新聞社の主筆となる九年小松英太郎氏に其主筆を讓り成島柳北氏の紹介にて大阪日報社に入り其主筆となる此年一月東京評論新聞紙上の政府轉覆論記事に關し其累を蒙り自宅に禁固せられ翌年解禁せらる十三年板垣退介氏の大阪に來りて君を誘ふ君思ふ所ありて應せず後河野廣中氏來りて愛國黨に入らんことを以てす君之を贊し愛國黨員となる次で新聞社を辭し元老院書記官に任せらる爾來太政官內務省大分縣新潟縣等の書記官に歷任し福井縣知事に昇任す此間累進して從四位勳四等に叙せらる後官を辭し大阪米穀取引所理事長となる更に轉じて大阪朝日新聞社に入り操觚に從事すること最も久し三十九年岡山市に移住し山陽新聞社長となり傍ら育英の事に任ず現に岡山縣教育會理事長、備作矯風會長にして岡山製紙株式會社、岡山市街電氣軌道株式會社等監査役、市參事會員たり、嗜好、詩文（岡山縣岡山市山下町、電話一〇七九）

千賀又市

君は愛知縣の實業家なり先代又市の長男、明治二年三月三州額田郡岡崎町に生る、幼名種次郎、父歿後家督を相續し襲名す家木綿、タオール製造を業とす明治四十年の頃地方政治上に黨派を生じ軋轢紛爭極りなく遂に一革新を斷行し推されて町長に擧げられ爾來勤續今日に至る君詩賦を能くし鶴堂の號あり（愛知縣三河國額田郡岡崎町管生七四）

鈴木秀芳

君は東京の畫家なり、鈴木平吉氏の長男、明治二十一年一月東京日本橋區村松町に生る。通稱恒久、秀芳は其號なり。幼にして繪畫を好み天性を能くす年甫て十四、小學校へ通學の傍ら戸田玉秀の門に入り其指導を享け門下の秀才を以て聞ゆ十八歳師の勸に依り始て日本繪畫展覽會に萬の畫を出品し大に好評を博し遂に選拔せられて大本營の御用品として御買上の光榮を荷へり明治四十年十一月北陸繪畫展覽會に櫻花雉子の畫を出陳し三等銅賞を受領す四十二年日本畫會展覽會に鶯の畫を出品し百畫當選の一に入る、四十四年四月第八回内國物産共進會に於て四等賞を受領し、又日月會に白菊畫を出品し宮内省御用品として御買上の光榮を被る、其他共進會、博覽會等に於て銀銅等の賞牌を受領する前後數回に及ぶ方今日本畫會、美術研精會、日月會、巽畫會等の會員たり、君又居常薩摩琵琶を嗜み之を能くす（東京市神田區同朋町二二）

鈴置保長

君は醫學士なり織田文信の六男、明治十一年十月尾州中島郡目下部村に生る、實兄織田一氏は農商務省特許局審判官たり、君明治四十一年出でゝ鈴置家に入り養嗣となる、始め日本中學校に學び後ち仙臺高等中學校に入學して明治三十四年修了し、尋て東京帝國醫科大學に入り三十九年卒業後福岡大學病院に勤務する事二ヶ年辭して名古屋に歸り、四十一年現住所に開業して内科を專門とし專ら濟生に從事す（愛知縣名古屋市南武平町一丁目、電話一〇〇四）

末廣茂吉

君は兵庫縣の實業家なり先代茂吉の長男、天保八年七月生る、家世々呉服商を營み扇屋と稱せり君家督繼承以來祖業を廢し醬油釀造を業とし爾來精勵家聲を揚ぐ明治二十三年株式會社龍野銀行を發起創立し其社長となり尋て龍野貯蓄銀行を組織し取締役たり後又九十四銀行の取締役に擧げられ今尚其職に在り曾て町村制實施以來町會議員の職に在り、嗜好、抹茶（播磨國揖保郡龍野町北龍野、電話長五）

鈴木可明

君は東京の畫家なり鈴木忠次郎氏の二男、明治二十二年十一月十一日東京市京橋區向川岸に生る、家世々左官職を業とす通稱豊次郎、可明は其號又別に壁雷の號あり幼にして畫才あり小學校に在學中圖畫は凡を拔き常に優等の成績を占む修了後父は君をして家業に就かしむるも君餘暇あれば必ず筆硯を事とす父遂に其志の奪ふ可からざるを悟り君の意に任せり君甫め書を尾形雲海翁に學ぶ七ヶ年、歳廿一にして尾竹

國觀に就き繪畫を專攻す尾竹門下に於ける秀才の名あり頗る人物畫に長ず現に百畫會を起し斡旋盡力する所あり、嗜好、盆景を能くす（東京市京橋區新富町四ノ九）

鈴木小右衛門

君は長野市長なり、先代小右衛門の男、嘉永六年六月生る、幼名源次郎後も、家督を相續し襲名す君夙に和漢學を修む明治十年職を警視廳に奉じ爾來茨木、栃木等の警察署に勤務す十六年以來栃木縣下都賀郡及長野縣更科郡、上水内郡等の書記たり二十三年辭して歸鄉し和洋雜貨商店を開始して駿河屋と稱す二十五年以來町會議員、區長、學委務員等に擧げらる二十九年市會議員に當選し次で市參事會員、破產管財人等となる三十二年五月市長に推され現に其職に在り三十五年皇太子殿下行啓に際し羽織地一反及金一千疋を下賜せらる三十七八年事件の功に依り勳六等に叙し旭日章を授けらる爾來長野縣共進會協賛會副會長、市水利部長たり、嗜好、盆栽（長野縣長野市大門町九）

須藤德甫

君は三重縣の花道家なり先代德三郎の男、安政元年二月十九日伊勢國一志郡矢野村に生る、家世々農を業とす通稱德二郎、廣正齋德甫と號す、幼にして花道を好み廣源齋隆甫の門に未生流の花道を修む三十七歳にして師範代となる先是明治二十二年村會議員に選擧せられ、次で村長に推され在職五ヶ年、二十七年職を辭し爾來專ら心を花道に寄す三十七年日露戰役起るや又推されて村長に擧げられ軍國の爲め盡す所多し平和克復後職を罷む後ち三十七八年事件の功に依り勳七等に叙せられ青色桐葉章及金若干を下賜せらる君二十七年以降村會議員となり改選毎に累選し現に其任に在り方今專ら花道の敎授に從事す君又千家裏流の茶道に精通す（三重縣一志郡矢野村二）

子爵 末松謙澄

子は文學博士なり末松臥雲の四男、安政二年八月二十日豐前國京都郡前田村に生る、初め村上佛山の門に入り漢學を修め詩文を習ふ明治四年東京に遊學し近藤塾に入り英數學を修め尋て外國語學校に入り學業大に進み後日々新聞の記者となり又正院御用掛、四等法制官、太政官權少書記官、陸軍省出仕等に歷官し朝鮮事件、西南の役等皆與つて功あり平定後英國公使館附書記一等見習として英國に航し官を辭し「ケンブリッチ」大學に入り三年にして技藝學士となり歸朝後文部内務各省參事官、同縣治局長、高等文官試驗委員等となり二十一年五月文學博士の學位を授けらる二十三年縣の第八區より衆議院議員に選出せらる先是子大成會を組織し名聲大に著はる二十六年以來法制局長官、内閣恩給局長等に歷任し二十七八年役後韓國財政整理の爲め派遣せられ功を以て男爵を授けらる二十九年貴族院議員補缺選擧に際し男爵中より互選せられ翌年改選期に當り再選す三十一年遞信大臣に親任せらる幾ばくもなく職を辭し憲政黨總務委員に擧げらる子又詩文を善くし青萍と號す又能く小說を作る其著日本文章論、英譯源氏物語、支那古文學略史等の外小說「谷間の姫白合」あり、行文流麗大に世に行はる四十年、子爵に陞る方今樞密顧問官、日本赤十字社常議員等の任にあり（東京市芝區城山町四、電話芝九三）

杉原太馬介

君は神戸の神道家なり舊廣島淺野藩士杉原功の二男、元治元年五月十二日安藝國廣島に生る、夙に神戸の啓蒙學舍に入り漢學を學び傍ら法律學を檢事木原章六氏に就き研究す後ち自由黨に入り政事上に奔走すること四ヶ年後ち悟る所あり去つて大阪に出て明治二十一年大阪難波金光敎會に入り神道を修む君蒲柳の質社會の劇務に堪へず父に詢る父又敬神の念に厚く大に之を賛す三十二年十一月現地に敎會所を建設し中講義に補せられ其會長となりて專ら布敎に從事して以て今に及ぶ（神戸市北長狹通六ノ三一）

鈴木榮曉

君は東京の畫家なり舊幕臣鈴木保至氏の男、明治三年四月十三日靜岡縣駿東郡沼津城内に生る、字は美保、通稱觀太郎、榮曉は其號なり家世々德川氏に仕へ祖父以來狩野派の畫を能くす父保至榮春と號し又之を巧にす君幼にして父翁に就き其筆意を修め兼て諸名家の遺墨を參酌す後轉じて南北合派を修め一家を成す其筆山水人物に長し花鳥之れに次ぐ第三回内國勸業博覽會美術協會、展覽會其他各種公私の諸會に於て受賞する拾數回方今日本美術協會員たり、嗜好、俳諧（東京市牛込區簞笥町一）

杉浦要太郎

君は敎育家なり舊芝村藩士杉浦英祝の長男、慶應元年九月七日大和國磯城郡織田村に生る、幼にして學を好み出藍の譽あり、小學校に在學中常に學績優等、賞を得る數次、殊に親に事ふる孝順、鄕黨の敬愛する所たり、長じて郡山中學校に學び尋で高等師範學校に修め明治二十二年卒業後職を仙臺師範學校に奉ずること三ヶ年二十五年奈良

縣師範學校教諭及附屬學校主事となり在職六ヶ年、三十一年奈良縣高等女學校長に轉任し三十三年三月愛知縣高等女學校長となる四十年三月同縣第二中學校長に轉任し現に其職に在り此間累進正七位に至る、嗜好、音樂、運動、（愛知縣三河國額田郡岡崎町大字康生乙二八二）

鈴木孫一郎

君は長野縣の實業家なり鈴木茂七郎の二男、明治五年十月十二日生る、夙に鄕校に學び後ち多湖安定に就て漢學を修め次て上京して東京英學校に研學す後ち軍籍に入り二十七八年日清戰役に從軍し功あり勳七等に叙し青色桐葉章及功七級金鵄勳章を賜ふ卅二年分家して一家を成し砂糖、米利堅粉、鰹節等の販賣營業に從事し爾來勤勉摯實家業頗る繁盛す君嘗て株式會社十四銀行破綻の際其監査役として整理上に盡力する所あり方今日本赤十字社正社員たり、嗜好、觀世流謠曲（長野縣松本市伊勢町、電話二六五）

助川貞二郎

君は北海道の實業家なり助川萬平の二男、萬延元年五月常陸國筑波郡吉沼村に生る、波南と號す年甫て十八、笈を東都に負ひ半途志を商法に傾け一擧して輸贏を博せんと欲し蹉跌快々樂まず明治十三年十月僅に十四圓を旅費となし函館に航し札幌に至り漁業を營み頗る得る所あり後札幌區總代人に擧げらる二十二年歸鄕大に政黨に奔走し縣會議員候補に擬せらる而して北地開拓の利を主張し同志を糾合す然れども咸な鄕里を去るを欲せざりしかば獨奮て家累を提げ再び札幌に移住す時に明治三十五年なり爾來專ら力を墾田拓地に竭せり今や石狩國上川郡東川村、夕張郡角田村、空知郡砂川村、兩龍郡深川村、樺戸郡新十津川村、石狩郡新篠津村空知郡歌志内村等に多大の墾成地を得其他札幌及郡村宅地數十戸分を有するに至る現今札幌區會議員、北海道會議員等の公職にあり兼て札幌石材馬車鐵道會社專務理事にして北海中央新聞社々主及政友會札幌支部評議員、札幌印刷株式會社取締役札幌商業會議所議員等の職にあり（札幌區南三條西七ノ五、電話三三四）

杉本新左衛門

君は京都の呉服仕入商にして茶商なり、明治六年八月生る、家世々呉服商を業とし代を經る七代とす維新の際大年寄を勤め後總區長たり方今呉服支店を大阪高麗橋四丁目、下總の佐倉及佐原に設け又出張店を東京日本橋區田所町に、販賣店を名古屋市玉屋町に置き盛に營業す、茶舗は呉服本店の附近に別に之を設置し三丘園と稱す明治四年の頃時の知事槇村正直氏の慫慂する所ありて双丘西麓の荒蕪地を開墾し其地

數町歩に茶苗を栽培し爾來發展して今や三丘園自製茶の名洛中に最も高し嗜好、點茶、京都市下京區綾小路通西洞院東入、電話七二四、茶園、電話八八五）

須原常次郎

君は京都の染業家なり慶應元年生る明治十九年十一月絹綿布裏地染物業を開始す爾來刻苦勤勉數年ならずして家業大に殷盛の域に達す後業務を擴張して中形染を兼營し益々奮鬪努力す今や嶄然斯業界に頭角を現はすに至る曾て京染美術商工同盟競技會に出品し二等銀賞牌を受領す第四回京染木綿品評會に於て三等銅賞牌を受領す其他各種の諸會に於て受賞する數回（京都市下京區西堀川通佛光寺北入）

末永清

君は神戸の實業家なり福井舊松岡藩士嘉永六年十月十六日越前國吉田郡松岡に生る、君少壯の頃家道大に衰へ多數の兄弟あり頗る苦學す二十歳故石堂勇吉氏を神戸に訪ふて同家の食客たり

鈴木祐次

君は東京の表裝家なり明治五年十二月五日東京芝區高輪に生る、幼にして表裝の技を好み歳十二、神田猿樂町の有名なる表裝家京鐵齋の徒弟となり修業すること多年、此間熱心業務に勉め當時石堂氏は兵庫縣中佐官として名聲あり爾來勤勉着實を以て同家に重用せられ主人歿後其遺産管理の囑托を受く明治三十九年絨類の委托販賣業を開始し刻苦精勵業務に勉め繁榮に赴くと共に人望又大に加はり町衛生組長たること最も久しく四十三年區會議員に擧げられ次で議長となり今尚其任に在り嗜好、寶生流謠曲（兵庫縣神戸市北長狹通四ノ一一三）

鈴江南景

君は大阪の畫家なり德島縣の人、明治五年十月二日生る、通稱秀雄、南景は其號夙に伯父森崎春潮に就き狩野派の畫法を學ぶ後ち浪華に來り北野文龍の門に四條派の筆意を修め爾來深田直城、西山琓瑛等の門に遊び造詣す方今專ら丹青を事とす嗜好刀劍（大阪市南區臼屋町二四）

菅野武次郎

君は愛知縣の特志家なり舊岡崎藩士孜々として怠ることなし師も亦其熱誠に感じ君を信ずる敦く隨ふて指導頗る懇篤なり遂に其蘊奥を極む後師の臨終に際し拔擢せられて其衣鉢を繼承し京鐵齋第二世となる、居ること八ヶ年、故ありて師家を辭し明治四十三年四月別に一家を現住所に構へ斯業に從事するに至る古書畫の表裝及修繕に至りては都下有數の表裝家たり方今盛に營業す、嗜好、居常古書畫を愛翫し又能く之を鑑す（東京市芝區琴平町二）

柳川孫右衛門の六男、天保九年八月十三日生る、年十六、出でゝ菅原家に入り養子となる君舊幕府時代は藩の奥勤めたり維新後京都に出て藩邸の留守居となり居ること數年、歸郷後藩の物産課に勤務す明治十六年以來學務委員となり地方教育上に盡す所多し二十二年町會議員に選擧せられ爾來改選毎に再選し今猶其任務に在り先是明治十六年自ら資金を投じて幼稚園を創設し其園主となり經費の如きも自ら負擔して毫も他に補助を仰がず獨立經營自ら教育に竭すを以て天職とす四十二年冬帝國教育會は其特志を賞し特に紀念章を贈與せらる性旅行を好み足跡殆んど海内に及ぶ殊に臺灣、韓國、滿洲等に單身杖を曳き到る所の人情、風俗、習慣等を視察し教育の一端に資するを以て唯一の樂なりといふ（愛知縣三河國額田郡岡崎町大字裏町三七）

菅原傳

君は宮城縣選出代議士なり舊仙臺涌谷藩士菅原應輔の二男、文久三年八月二十五日陸前國遠田郡涌谷に生る、明治十二年東京大學豫備門を經て大學に入り專ら政法學を修め刻苦精勵業大に進む明治十九年米國に航し「バシフイヅク」大學に入り政治、法律、經濟の學を研究し居ること二年にして時事に感ずる所あり自由黨に入り地を桑港にトし愛國同盟會を組織し其機關として第十九世紀（新聞紙）を發刊し本國の人民を警醒す時の政府認めて國安に害ありとし發賣頒布を禁ず君更に愛國新聞を紀元第廿世紀革命等の諸新聞を遞次發行す亦皆悉く禁刊の厄に遇ふ當時邦文又は英語を以て草したる論策條約改正十五策、日本人種興廢論、東洋趨勢論布哇島參政權論、對米論、日本海國論等皆一時の耳目を聳動せり二十六年布哇に航し布哇日本人參政權問題の起るに方り爲す所あり遂に布哇政府をして日本人に參政の大權を分與せしめたるは君が挺身斡旋の力多きに居る尋で歸朝し爾來廣く四方の士に交り二十八年朝鮮に入り八道を跋渉して歸り二十九年自由黨幹事に擧げらる三十年宮城縣第三區より選ばれて衆議院議員となり其解散後再選せられ第十四議會の際憲政黨院内幹事となり又同黨評議員に擧げらる此年人民新聞社を創立して其社長となり四十年日露事件の功に依り勳四等に叙せられ衆議院議員たること舊の如く主殺局長の職にあり（東京市麻布區永坂町六九、（電話長芝一〇〇九）

杉山源太郎

君は名古屋の花道家なり舊尾州藩士杉山伊三郎の長男、萬延元年十一月名古屋に生る、曉風園と號す、明治十六年頃より嵯峨流の花法を學び其奥義を極む後ち同流社員の推擧に依り副流長となり家元龍眠歿後同流諸般の事務に盡力す又盆景に達し心廣流の家元たり

雷て町總代、學務委員、帝國產業博覽會名譽委員、內國製產品評會幹事等に擧げらる殊に三十七八年日露戰役の際軍國の爲めに盡瘁し又陸軍病院へ金品の寄贈を爲し其他地方公共事業に義捐し縣知事より木盃、賞狀を受領する數次方今和風會員にして花道及盆景を以て門弟の教授に從事す、嗜好、千家表流點茶、古什器、（愛知縣名古屋市新道町）

杉本音吉

君は臺灣の運送業者なり。明治六年河內國南河內郡柏原に生る。實父は安平といひ農を業とせり、君は其の次男通稱を長舟といふ。歳十一、家を出でゝ大阪安治川口運送業者某の家に雇はれ同業を見習ふ。歳二十八、芳州丸に乘込み、初めて渡臺の航路に上る。然るに汽船八重山沖に於て暗礁に乘り場げ、組込人員一同非常なる困苦を嘗めたり、故を以て同乘したる人夫數十名大に怒りて船長を殺すと稱し、手に手に兇器を携へて亂暴に及ばんとせしかど、君一人、是に同せず、終に種々に言ひ宥めて制止したりき。基隆に上陸後は專ら運輸業に從事し、得たる所の金は、食ふことの外一厘だも身に附けず、悉く是を餘人に配分したるより、仲間の信用頓に加はり、いつとはなしに親分と言はるゝに至れり。其の後、淡水に轉じ、同じ運輸業に從事し居たりしに、或る時、外國船荷物取扱のことより、印度人と爭鬪するに至り、船長はピストルを擬したれば、他の部下は是を見て悉く散亂したるに、君のみは動かず、大手をひろげて彼に對せり。船長は、君に向ひて、赫す積りか二發まで發砲したれど、傷だも蒙らざりき明治三十年、淡水を去つて安平に來り輸船及び商船の取扱をなせり。安平に移りて後も、荷物運送船のことにて幾度か土人等と爭鬪したることあり、也も、其の後、續々新船を製造して是に備へ、彼等の船を使用せざるに至りて事なきを得たり。明治三十二年、土匪討伐に際し、召されて千人長に任ぜられしが、君はよく其の任務を果したりき。君が現に使用せる人夫は臺灣人內地人合せて一千人に下らずといふ。打狗、安平共に君が營める大阪組運送業最も勢力あり嘉義彰化にも出張所を有す。君、性扑直、仁俠に富み、一種崇高なる人格を有す。臺灣斯業界の一名物男なりといふべし。今左に君が處世法の一般を記して其の仁俠的人格を忍ばんとす。一　金づかひのキレイなるは既に記したる處なるが、君は、常に曰く、安平で儲けた金は安平で費ひ、打狗で儲けた金は打狗で費ふといふが已の主義ぢや、決して甲地で得た金を乙地に於て費はぬ。此の心得さへあれば、その地の人から決して惡く言はれるものぢやないと。二　君又曰く、己は土人を使ふ法を知つて居る。即ち能く働く者には相當の賃金をやる。働か

ぬものには更にそれ以上の賃金をやる働かぬ奴は必ず人の上に立てる奴なんぢや、そして働く奴から必らず尊敬される奴なんだからな。三 又曰く、己は、金を貸して證文を書くといふなら、いつでも三百年位の期限にしておけといふのぢや。實際期限が短かいと借りた者が心を常に傷めて安心する暇がないからな。四 又曰く、己はまた一度も虚言を言つたことはない。だから、他人も決して虚は言はぬものと信じて居ると言つて、是まで、他人から欺かれたことも無いではないが、それは先方が悪いので、此方が悪いのでは無いと安心して少しも氣に止めない。五 又曰く己は自分の兒分が他人と爭鬪をやつて居たとて、決して手を出さぬじつと見て居る、もし他人がまけそうになれば之に加勢をしてやるさ。是等の數言實に味ふべきにあらずや臺南安平には數年前まで、無賴漢横行し、良民を苦しむること多かりしを、君は是等の退治に力を盡し、一々其の不心得を諭し歸國せしむるか將た正業に就かしむるかしたるにより、今日は、殆どかゝる無賴漢を見ずといふ。また、旅費なくして歸國し得ざるものあれば、君は常に之に金を與へ、同地警務課等にて止め置かるゝ行旅人に、皆それ〳〵金を與へて歸らしめ又は業に就かしめつゝあり。室つな愛國婦人會員たり。君は大弓と角力とを何よりも嗜む（臺灣打狗、安平）

杉崎雪英

女史は横濱の茶道家なり天保九年二月十四日駿河國靜岡に生る、舊水野藩士杉崎茂平治の長女、松壽軒と號す十歲の時江戸に來り十五歲にして舊松平三河守邸に奉公すること六ヶ年此間第七世眞柳齋不白（蓮々齋不白の實兄）に就き江戸千家流の茶道を學ぶ多年其蘊奥を極む明治二年横濱に移住して茶道の門を開く是れ蓋し横濱に於ける點茶道の開祖なり爾來刻苦慘憺たること卅有餘年、今や横濱茶道の隆昌なるもの女史の力與りて多きに在り方今神奈川縣女學校に出仕し傍ら門弟の指導誘掖に從事す（神奈川縣横濱市相生町四ノ九）

須網鉞太郎

君は名古屋の醫師なり須網良右衛門の長男、明治十五年二月六日尾州丹羽郡西成村に生る、家世々農を業とし父は農會議員として功勞者たり君愛知縣第一尋常中學校を修了して愛知醫學校に入學し明治三十八年卒業す後ち東京鈴木胃腸病院に入り助手となり實地に就き研鑽する二ヶ年、四十年名古屋に還りて内外科を以て開業して今日に至る（愛知縣名古屋市南大津町一丁目）

杉山岩三郎

君は岡山縣の實業家なり舊岡山藩士中川龜之進の二男、天保十二年八月生る、夙に文武兩道を講じ殊に明知流劍道、神田流鎗術を以て名あり後藩の精鋭隊長となり國館に出征し功あり藩主より賞狀を受く明治初年江戸に出で田口文藏の門に漢學を修む、二十二歲の時同藩士杉山宗樹の養嗣子となる後德島久宗鑛山業に從事して今日に至る方今杉山商事會社長、中國鐵道株式會社長、日本肥料株式會社長、岡山市電氣軌道株式會社、西大寺輕便鐵道株式會社等相談役たり（岡山縣岡山市西田町一七）

鈴木學

君は臺湾の建築請負業者なり、明治十五年五月宮城縣仙臺市同心町に生る實父は高平常盛と稱し、伊達侯に事へて六百石を食み大番組として頗る重きをなしたりき、君はその次男、故あり鈴木家の養子となり其の家督を相續す普通學を郷里に於て修め歲甫めて十八、さる事業家と合力して當時恰も建築中なりし弘前第八師團の建築工事を請負ひ後大倉組に屬して熊本騎兵第六聯隊の建築工事に從事し明治三十四年思ふ所あつて渡臺し、久米組の下請負人として阿里山鐵道工事に從事し次で大日本製糖株式會社の建築工事に關係し明治四十年獨立して建築工事請負業を開始し以て今日に至れり、園碁を嗜む（臺北新起街三丁目）

杉浦孝治

君は舊備後福山藩士杉浦嘉兵衛の長男、嘉永三年生る、明治十七年陸軍教導團に入り卒業後仙臺第二師團に編入し爾來各師團に轉補せられ累進して步兵少佐に任じ日清戰役に從軍して功あり後ち故ありて職を罷め四十二年陸軍省御用達商となり爾來勤勉摯實家業大に進み軍隊の信用亦淺からず方今町會議員、郡參事會員たり、嗜好、園碁（廣島縣深安郡福山町）

杉山秋谷

君は愛知縣の畫家なり安政元年七月二十三日三州碧海郡矢作町に生る、通稱覺左衛門、秋谷は其號別に甫舟、愛古等の號あり始め渡邊小華に就き學び後ち山本竹雲の門に南宗畫を修む方今專ら丹青を事とす、嗜好、古書畫を愛玩し其鑑識に長ず（愛知縣額田郡岡崎町大字八帖五五）

鈴木雨溪

君は東京の畫家なり、鈴木吉藏の長男、明治六年八月千葉縣香取郡萬藏村に生る、君通稱利喜三、字は子延、雨

溪は其號なり又幽松居士の別號あり夙に漢籍を祖父貞亮（儒者）に就き學び兼て鄉里の畫家小澤芦村を師とし南宗派の筆法を修む明治三十年笈を負ふて上京し川村雨谷翁の門に入り研究年あり爾來專ら丹青を事とす方今南畫會の評議員たり、嗜好、詩文（東京市下谷區中徒士町四ノ四四）

角谷定吉

君は臺灣の船舶具業者なり元治元年一月加賀國江沼郡瀬越村に生る、實父は角谷七郎右衛門、家世々農を業とす君は其の十二男、幼より航海業に從事し小樽宗谷各所にあつて航海を事とす二十八年航海の傍臺灣沿岸を視察し、二十九年渡臺雜貨商を營みたれども酒の爲に失敗し、後印刷業に從事する五ヶ年漸く若干の資金を得て、本來經驗する所の船舶具の販賣を本業とし傍ら諸官衙の御用達を爲すに至りて少なからざる財產を貯蓄するを得たり（臺灣基隆）

杉田盛

君は醫學士なり舊若狹小濱藩士故松田玄端の五男、元治元年五月江戸に生る、東江と號す、又別に梅所、蜂州、醫生の號あり我國洋學の開祖杉田白玄は君が四世の祖なりと云ふ君少時英人「フェントン」氏及米人「ホイトニー」氏に隨ひ專ら英學を修む十七歳の時東京外國語學校に入り獨逸語を學ぶ次で第一高等中學校に轉じ明治廿一年卒業して帝國大學醫科大學に入學し二十五年十一月卒業す二十六年一月東京府會議員神田良邦の二女、春子を娶る、春子女史華族女學校卒業生にして在學中常に主席を占め幾多の賞品賞狀を授與せらる其高等科を卒ふる時選ばれて皇后陛下の御前に詩文を朗讀せし事あり二十六年二月神戸市に移住し實兄醫學士杉田雄氏と共に私立杉田病院を開業し同院長として外科患者を治療す二十九年丹後峰山町に丹州病院の開設せらるゝや同院長として赴任し三十七年橫濱に居を移し杉田病院を經營し其院長となり專ら濟生に從事す君居常和歌を嗜み棚橋絢子に學び、又書を好みて日下部鳴鶴翁に問ふ、繪畫は君の特技にして殊に又淨曲を好む、著書としては通俗海水浴論あり（神奈川縣橫濱市眞砂町二ノ一六）

鈴木清七

君は靜岡市の吳服商（山名屋）なり方今靜岡商業會議所會員なり、靜岡縣靜岡市吳服町一ノ九、電話長一三一）

杉山吉貞

君は京都の產科醫師なり、明治四年一月山城國紀伊郡淀に生る、夙に大阪慈惠病院醫學校を卒業し後緒方正淸氏に從ひ產科を專攻して內務省開業醫檢定試驗に及第し、三十二年京都に居住し產科專門を以て開業す、爾來產科館の囑托を受け產婆生を指導養成して以て今日に至る、嗜好、旅行、俳諧（京都市下京區新橋通大和大路二丁目橋本町八）

鈴木鉞次郎

君は東京の表裝家（淸華堂）なり舊秋山藩士鈴木準藏氏の次男、明治五年五月四日東京府北豊島郡板橋に生る、十七歳にして東京本鄉の表裝家藤村豊次郎方の從弟となり十九歳の時師は病歿す辭して橫濱に出て旭喜兵衞氏に師事し居ること二年師又不幸にして鬼籍に入る去つて福田竹次郎氏に就き刻苦奮勵二年明治三十三年上京して獨立斯業を開始す其得意とする所は襖屏風にして殊に金箔の表裝最も巧にす爾來勤勉摯實家道益々隆昌す曾て橫濱表裝競技會に出品し受賞あり、方今區內屈指の表裝家たり（東京市下谷區徒士町二ノ一八）

鈴木東洲

君は東京の畫家なり下總舊佐倉藩士嘉永五年三月二十日生る、名は竹仙、東洲は其號又別に櫻村の號あり夙に心を丹青に潛め故田能村直入翁を師とし南宗派の畫法を修む又漢籍は依田百川の門に學ぶ其筆古雅幽婉にして風格塵を脫す最も羅漢を描く妙手を有す其作品は新潟縣柏崎の鯨波妙智寺に秘藏せる橫貳間半の五百羅漢圖及び陸軍少將佐藤正氏の委囑に係る平城七星門猛進攻擊の圖は共に筆致幽雅、彩色鮮麗着相雄大にして君の傑作として世に稱せらる君屢々靜岡、足利等の各地に歷遊し其名太た高し各種公私の諸會に出品し受賞する數回方今感する所ありて出品せずといふ（東京市小石川區高田老松町四七）

男爵 杉溪言長

男は貴族院議員なり舊公卿正二位伯爵山科言縄氏の三男、母は正二位前權大納言野宮定祥の女祥子、慶應元年乙丑閏五月十三日生る、幼名恒丸と云ふ慶應三年奈良興福寺、寺中妙德院の後住となり、明治元年妙德院を相續す二年三月六日正六位に叙し堂上格仰付けらる、同年十二月十四日妙德院を改め杉溪と稱す、五年六月春日神社神勤を免せられ、次で奈良縣に貫屬す、八年三廿月三日華族に列し、九年四月二十二日從五位に叙す、十年一月京都府に貫屬を換ふ、此年二月十七日拜謁天杯を賜ふ、十五年京都宮殿勤番仰付けらる、十六年十月十八日京都宮殿勤番廢

せられ殿掌となる、十七年七月七日男爵を授く、後殿掌を辭し、二十三年七月貴族院議員に當選す、二十四年六月十六日正五位に叙す、二十九年三月二十五日第七回帝國議會召集の際勵精の廉を以て銀盃壹組を賜ふ、三十年七月三日從四位に叙す、同年七月貴族院議員改選に當り再選し、三十六年六月三十日正四位に叙す、三十七年七月貴族院議員第三期に當選し、爾來今日に至る、三十九年四月一日三十七八年事件の功に依り勳四等旭日小綬章を授く、

男頗る畫を能くす、名は言長、字は信卿六橋と號す、夙に北村岐陽、草場船山、林双橋等に就き經史詩文を修め、歳十六、甫めて畫を重春塘に、書を遠山廬山、小林卓齋等に學び共に妙技に至る、壯年に及び宋、元、明、清大家の遺墨を臨摹し並に名手巨匠の眞蹟を研究し大に造詣す、後更に大倉雨村に質し刻苦經營習氣を洗脱し專ら南宗の正派を傳ふ、是より筆格逍逸、風韻清超、名聲遠近に聞ゆ、乃ち筆を載せて三備、瀟讃の山水を探り、又濃、飛、越、丹の煙霞を攬り、益々其精神を發揮す、中年來りて諸老と丹青を商確し、尤も星石宗伯爵と友とし善し、推されて文墨協會の副會頭となり、忙中餘力を以て斯會の爲に盡瘁す、又詩文を能くし上京以來森槐南に學び常に神田香巖、田邊碧堂の諸士と詩句を唱酬す其賦する所の詩又清俊流麗たり（東京市麻布區新龍土町一二、電話二三六七）

須藤義衛門

君は獸醫學博士なり舊仙臺藩士須藤正衛の長男、文久元年二月十一月仙臺東三番町に生る、明治十年二月宮城縣英語學校卒業後駒場農學校官費生徒となり每學期優蹟を占め數々賞品を下賜せらる十五年農商務省御用掛となり尋で駒場農學校助教諭、同助教を歴て札幌農學校助教に任じ從七位に叙す廿六年農科大學教授に任し累進して正六位勳六等に陞り瑞寶章を授けらる三十二年獸醫學博士の學位を受領す方今從四位勳三等に進み東京帝國大學農科大學教授の職にあり其著家畜醫範あり又獸醫書編纂委員にして中央獸醫會雜誌主任たり（東京市四谷區南伊賀町八）

住田長作

丈は横濱の長唄師匠なり明治十六年十月九日東京麻布新網町に生る、俳優三代目大江玨藏（嵐理玨）の男、本名桑島秀太郎藝號を住田長作と稱す四歳にして父に就き歌舞を練習する十ヶ年故ありて之を廢し實業に從事せしも時運に會せず終に長唄を以て家を成さんことを決し十六歳始めて岡安喜代七に就き三絃を學ぶ十八歳の暮長唄師匠住田長三郎の養子となる十九歳の春父理玨に會して再び俳優となり俳號を橘鶴と稱し父に伴はれて劇場に出演すること二ヶ年徴兵に適齢し乙種第二補充となる爾後長唄を以て業とし子弟の教授に從ふ三十七年日露戰役に際し同年十月牛莊に往き御用商人として奔走せしも病に罹り歸朝す翌年一月召集せられて麻布歩兵第五中隊第一小隊に入營し更らに現役に編入せられ第七中隊に入り第五十九聯隊に請願中平和克復となりて解散す三十九年四月明治三十七八年事件の功に依り金若干を賜はり同時に從軍記章を授けらる此年八月除隊となる爾來門弟に授けて以て今日に至る丈斯業開始以來具さに世の辛酸を嘗む其妻女濱子藝號を杵屋佐喜榮と稱し斯技に長す專ら丈を輔けて赤誠大に勉め丈の今日ある女史の力與りて大なり丈性繪事を嗜み業閑必ず筆硯を事とし未だ曾て一日も筆を抛ちたることなしと云ふ又寶生流謠曲、金春流太鼓、小笠原流大弓に堪能にして殊に俳諧を好み暗的の號あり（神奈川縣横濱市長者町五ノ五〇）

鈴木田美靜

君は東京の意匠圖案家なり鈴木正雄の三男、明治二十二年四月東京芝琴平町に生る、父正雄氏は讀賣新聞社の創業者たり、君名は陽三郎、美靜は其號なり幼より繪畫を好み始め東京美術學校に入學し日本畫を專攻す後思ふ所ありて圖案に志し渡邊小舟氏に就き其指導を享くる年餘、後獨立自營す爾來織物、染物の模樣圖案及雜誌の挿畫等に從事し營業頗る盛大なり、嗜好、西洋音樂（東京市神田區表神保町二）

杉原龍子

女史は岐阜市の音曲家なり杉原善兵衛の二女、明治八年九月生る、幼時兩眼を失ひ又父に離れ母に養育せらる夙に音曲に志し明治二十一年京都に赴き檢行古川龍齋に師事し琴、三絃の曲を學び傍ら師の手引案内の役を勤む二十二年師の勸に隨ひ京都府盲啞院に入學し普通科を修了し後ち進て專修科音曲部に入り成績優等級長となる二十六年春卒業し猶ほ同院に在りて溫習すること四ヶ年後ち上藏の稱號を得て歸鄉し爾來專ら子弟の教授に從事す（美濃國岐阜市鞆屋町）

鈴木千代

女史は京都の衡器製作業家なり嘉永三年京都に生る、家世々衡器財料の販賣を業とす明治二十二年の頃衡器製作業の免狀を受けて創業す資性溫厚篤實にして穎悟而かも貞節なり良人勘二郎氏は蒲柳の質常に病床を離れず女史克く其看護に盡して怠らず傍ら四十有餘名の職工員店を督勵して業務の發展に力め製作工場を市内下河原町及上馬町に設置し又別に秤皿の製作場を新鈴屋町孫橋畔に增設し衡器財料と共に製作衡器を全國各地に販賣し家業頗る繁盛なり女史博愛慈善の情に富み又佛教を信ずる深し現に大谷派本願寺の信徒に

して婦人法話會幹事たり其他日本赤十字社員、京都婦人慈善會幹事、愛國婦人會常務幹事、平安義徳會幹事等の職を帶び慈善事業に貢献する所少なからず、嗜好、點茶　京都市下京區三條通大和大路東入五、（電話一八一五、振替口座東四二四八）

鈴木直之丞

君は名古屋の齒科醫なり安政四年七月六日尾州名古屋に生る、故鈴木善六の舍弟、明治十五年神奈川縣に於て齒科醫術開業試驗に合格し翌十六年六月歸鄉し七月開業し爾來專ら濟生に從事し頗る施術に富み方今其名都下に高し君居常和歌を嗜み夙に粟田廣治を師として堪能なり其他書畫を觀賞す（愛知縣名古屋市小田原町九九、電話八〇九）

鈴木捨之助

君は京都の綿布紅染業家たり明治元年十一月美濃國養老郡日吉村に生る、村上丈助の男、家世々農を業とす、君幼にして農業を厭ひ十三歳の時京都に出て始めて絹布紅染業家鈴木治兵衛氏方の徒弟となり業を受くる十九年其間主家に仕ふる忠實にして主人の信頼する所甚だ深し遂に拔てられて女婿となり鈴木氏を冒す明治三十一年分家して該業を開始す時恰も舶來緋金巾の要途益々盛にして未だ我邦の製品を以て之れが防壓をなすものなきを慨し其研究に腐心す偶々瓦斯茂美染を發明するものありて市場に其製品を散見し窃かに時勢に適したるを感し其機を逸せず市内に有數なる綿布問屋商三中西榮三郎氏に謀り專門技師を聘して共に刻苦研鑽遂に絹地代用茂美裏地染を發明するに至る今や專門家として該業を營むものの之れ唯だ君あるのみ絹地裏代用として經濟上頗る時宜に適し需用の程度亦廣く大に世に歡迎せられ高評嘖々として其名聲四方に揚る同工場より染出する製品は現に關東地方に於て鈴木染の登録名稱のみを以て價格の査定を見るの勢ありと云ふ之を各種公私の諸會に出品し金銀等の優等賞を得る其數擧げて數ふ可からず殊に第五回内國勧業博覽會に於て宮内省御用品たるの光榮を荷ふ方今工場を增設し營業益々隆昌を極む（京都市下京區西洞院通四條南入電話二〇七〇、工場同市四條通大宮西入電話三九一〇）

杉本卯兵衛

君は京都の縮緬精練業家なり該業は安政元年の頃に創始す方今業務頗る隆にして工場の設備完成し斯界の泰斗を以て稱せらる、嗜好、園藝（京都市上京區衣棚通丸太町北入、電話三七二、二三五二）

菅谷大鳳

君は東京の染物模樣圖案家なり明治七年七月京都粟田に生る、通稱兼二始、

め曉雲と號し後今號に改む夙に繪畫を京都に修む明治二十七年上京して望月高鳳翁の門に研究す後圖案に志し山田直華氏を師とし專攻年あり一旦京都に歸り粟田陶器の繪付業に從事す三十三年再び上京し爾來染物模樣圖案及版下圖案を專門とし實弟一鳳氏と共に提携以て盛に營業す實弟一鳳氏は裾模樣圖案を以て名あり（東京市日本橋區新材木町一一）

杉島牧太郎

君は大阪の醫士なり岡山縣の人慶應二年正月生る、明治十四年の頃大阪に出で實兄の宅に寄宿して醫學士常持爲治の門に螢雪の苦を嘗む明治二十七年五月内務省開業醫の檢定試驗に及第し二十九年開業す後ち難波尋常小學校々醫たり現に花柳病の治療に富み方今名聲甚だ高し、嗜好、釣漁（大阪市南區難波新地五番町一四六）

鈴木久五郎

君は前代議士なり埼玉縣粕壁町の人鈴木庄五郎の二男、明治十年八月二十二日生る、夙に東京專門學校に學び後自家の經營せる鈴木銀行東京支店の監理者たり明治三十七年日露戰役の際財界の機微を察知し旅順陷落を期とし株劵の買占を始め三十八九年の交株式相場の大變動に逢着し首尾克く數百萬圓の巨利を占め一時天下の耳目を聳動せしめ名聲四方に馳するに至る四十一年群馬縣高崎市部より選出せられて衆議院議員となる四十五年五月改選に際し之を罷む方今日本坩堝株式會社取繼役たり（東京市麹町區三年町二、電話新橋三三九九）

鈴木徳子

丈は東京の女優なり明治二十六年七月十日東京本郷區湯島天神町に生る、幼より遊藝を好み綉雪小學校に通學するの傍ら藤間藤藏の門に入り踊を學び又杵屋六藏を師とし長唄の稽古を爲す明治四十年株式會社帝國劇場の女優養成所第一期生募集に應じ入りて歌舞の練習を受け卒業後帝國座附の俳優となる方今藝大に進み好評あり（東京市下谷區車坂町一）

角藤鐵吉

君は神戸の運輸業家なり舊岡山藩士角藤新八郎の長男、安政五年一月生る夙に鄕里の儒森田月來に就て漢史を修む明治七年征臺の役起るや拔刀隊を組織し許可を得て從軍す凱旋後東都に遊學し十六年農商務省に出仕し山林局に勤務す後辭して神戸に赴き身を實業界に委し各種の事業に關與すること二十有餘年三十一年内外運輸合資會社を創設し其社長となり爾來幾多の難關を破踏し漸次盛運に赴くに至る資性篤實人に接する恭謙而かも報國の至誠に厚く專ら力に慈善事業を致し殊に赤十字社

事業に盡瘁し三十七年其功勞を賞し有功賞を下賜せらる四十年同社兵庫縣支部協賛員を囑托せらる後ち博愛巡遊會を起し自ら其會長たり方今備作鄉友會の常任幹事として後進の誘掖に努めつゝあり（兵庫縣神戸市榮町三ノ一九、電話一〇〇五）

鈴木華邨

君は東京の畫家なり鈴木清次郎の長男、萬延元年二月十七日江戸下谷池の端に生る、家世々加州舊金澤藩の御用達たり君通稱惣太郎、諱は茂雄初め忍青と號し後華邨と改む夙に菊池容齋の門弟萩原亨齋に就て畫法を學び後容齋の晩年に至り其門に遊ぶ年十五米國勸業博覽會事務局圖畫掛を命せられ後內務省勸業寮編輯掛となる十七歳起立工商會圖案部長となり歐米各國公使館依囑揮毫に從事す又伊國公使館に出入して專ら洋畫を研究す其作品は內外公私の博覽會、美術展覽會、共進會等に於て優等賞を得る頗る多し方今有數の畫家たり（東京市淺草區旅籠町）

住友吉左衛門

君は有名なる大阪の富豪家なり名は友純舊名隆麿、春翠と號す、元治元年十二月二十一日京都に生る、故德大寺公純の第六子にして現に侯爵德大寺實則及侯爵西園寺公望の實弟なり明治十五年學習院に入る普通學科を修む二十五年四月出でゝ住友家を嗣ぐ爾來專ら意を實業に注ぎ力を家運の恢興に致せり即ち祖先の遺業たり別子銅山の鑛業を改善して其產出に係るK、S型銅の聲價を內外に博せしめたる外現に銀行倉庫、石炭鑛業、伸銅及鑄銅の諸業を經營せり廿九年二月特旨を以て從五位に叙せらる卅年六月商業視察の爲め歐米を漫遊す同年貴族院議員に改選あり乃ち互選會に當選し就任し卅二年八月之を辭せり卅五年第五回內國勸業博覽會評議員を仰付けらる卅七年勳四等に叙し瑞寶章を授けらる卅九年明治三十七八年事件の功に依り勳二等に叙し瑞寶章を授けらる四十一年六月日本大博覽會評議員を命せらる四十二年四月日英博覽會評議員を仰付けらる（本邸大阪市南區鰻谷東之町三六電話南三、別邸北區中之島五ノ四五、電話西四六五、東京別邸神田區駿河臺南甲賀町五）

角谷源之助

君は敎育家なり舊紀州藩士角谷八良右衛門の次男、慶應二年六月紀州和歌山に生る、虎南と號す、明治二十年東京高等師範學校を卒業す翌年群馬縣師範學校に出仕し助敎諭に任せらる二十三年宮崎縣中學校長となり二十六年東京師範學校に轉任す三十二年和歌山師範學校に轉じ三十五年靜岡縣師範學校長に任せらる其間累進して正六位勳六等に至る方今前記の外靜岡縣敎育會長心學道和會員たり、嗜好、柔術、禪學（靜岡縣靜岡市西草深町一三〇）

鈴木拳山

翁は愛知縣の畫家なり天保十三年三月十七日三州寶飯郡下地町に生る、名は潛字は子龍、拳山は其號別に三寅の號あり夙に畫を鈴木我古の門に學ぶ年あり師歿れに臨み諭すに自今必ず天造活學を修ふと是に於て吳道李龕眠の描法及び宋元諸名家の遺墨を探り本邦固有の着色法を慕ひ樹木山川波浪花卉禽獸の類揮て自然の形象に據り苦心慘憺初めて獨技の寫意法を創造す特に魚族を描くに至りては最も得意とする所なり其作品各種の繪畫展覽會に於て賞を受くる頗る多し輓今丹青に身を委ぬる者世俗にあり氣品生動を後にするを憤慨し獨り畫室に蟄居し專ら筆硯に親み敢て名聲を估らす悠々自適す、嗜好、漁魚殊に煙火を作るに巧なりと云ふ（愛知縣三河國寶飯郡下地町）

鈴木古參

師は臨濟宗の尼僧にして花道家なり鈴木仲右衛門の六女、安政五年一月二十七日尾州名古屋に生る、家典舗を業とす、年十五、名古屋矢場町瑞雲山政秀寺住職碩天和尙に就き得度す明治二年實禪古參禪尼を授與せらる師性花道を好み夙に十三世哲叟庵利有の門に東山公正流の花法を修め明治十六年一月會頭となり三十六年九月諸國總會頭の主席に昇進し求得花古參と號す又茶道を松尾宗見の門に學ぶ四十三年三月盆點點前令の相傳を受く方今法務の傍ら花道を以て子弟の敎授に從事す門弟頗る多し授業甚だ懇切なり、嗜好、胡弓（愛知縣名古屋市不二見町二四）

鈴木寬豐

師は曹洞宗の僧なり天保十四年十月二十五日三州渥美郡豐橋に生る、八歳にして得度し認拈寺前住職好山大休師に從ひ薙染す二十九歳信州に出で下伊那郡平谷雲谷寺に留錫して平谷小學校に敎鞭を執る數年明治二十五年豐橋岩崎龍拈寺執事となり鑑寺典座に補せらる爾來地方敎育の發達に盡瘁し推されて岩崎青年會幹事に擧げられ殖產及農事の改良に熱中し專ら力を青年の指導誘掖に盡す爲に德化村內に洽く未だ曾て村中より犯罪者を出さずといふ敎育及農事奬勵の廉を以て屢々縣知事より賞狀を受領す（愛知縣三河國渥美郡豐橋町字岩崎龍拈寺）

鈴木政吉

君は本邦ヴアイオリンの創業者なり

鈴木正春の長男、安政六年十一月八日生る家世々樂器製造を業とす明治十年八月家督を相續す以來ヴァイオリンの製作に腐心し刻苦精勵多年、二十一年二月遂に外國品を凌駕するの製品を出し爾來需用の增加と共に製作益々進歩し販路日に擴張して全國に及ぶ四十三年三月文部省の囑托を受け日英博覽會出品整理の要務を兼て西洋樂器實地調査の要件を帶びて渡英し同年八月歸朝す方今市會議員たり（名古屋市東門前町三ノ五三）

隅田廣吉

君は門司市の素封家なり先代武助の長男、安政二年十一月生る、夙に柳井謙仁の門に漢籍を修むる數年師歿后友石家塾に入り和漢の學を研修して敎鞭を執る明治二十一年敎職を罷め翌年村會議員となる町制實施の際町會議員に擧げられ又市制實施と同時に市會議員に當選し次で市參事會員に推され爾來改選毎に當選し今猶其任に在り四十年三月多年公職に盡力せし廉を以て市會の決議を以て銀盃一個を贈與し其功勞を表彰せらる、嗜好、書畫（福岡縣門司市舊門司）

杉本碧海

君は東京の畫家なり片山五兵衛の四男、明治八年六月二十八日愛知縣碧海郡大濱に生る、後出で、杉本家を嗣ぐ、通稱猪之助、碧海は其號なり甫め名古屋の畫家木村金秋の門に入り土佐派の筆意を學び十八歳にして笈を負ふて上京し村瀨玉田の門に拮抗精勵年あり明治三十六年信州の各地に歷遊して山水の勝區を探り大に造詣する所あり其特長とする所は山水花鳥にして就中花鳥最も妙あり其作品を日本美術協會展覽會、日本畫會、巽畫會等に出陳し毎回優等の賞を受け又宮內省御用品として御買上の榮を荷ふこと數次、方今專ら丹青を事とす、餘技和歌を能くす千葉胤明氏に就き研究する所あり（東京市麴町區上六番町四〇、電話番町二一六七）

杉山浪

女史は東京の岩繪具製造始祖杉山伊助の未亡人なり嘉永五年三月五日江戸に生る、家世々長門屋と稱し繪畫用品商を業とす文化年間初代杉山仙助長門に於て始めて岩繪具を製作す二代仙助安政年中江戸に來りて製造販賣業を開く是れ江戸に於ける岩繪具製造の始祖なり代を經る五代にして四代仙助氏は即ち女史の良人にして又後素界の功勞者なり維新後邦內多事、美術の衰微は其極度に達し悲慘日に迫り糊口に窮するもの頻々たり此時に當り獨り氏は奮然として身を挺し狩野芳崖、橋本雅邦、川端玉章氏等と共に百折不撓幾多の難關を破踏して以て今日あるを致せり其功績沒すべからざるなり氏不幸病歿し嗣子を有せず女史爲めに其遺業を繼承し爾來益々精勵し家聲日に擧り販路月に加はり家礎愈々固く今や岩繪具の精華なると、水干胡粉の佳良なるとは高評嘖々たり（東京市日本橋區久松町三二）

菅森夢庵

君は横濱の花道家なり、菅森源七の男、明治八年四月筑前福岡に生る、家世々綿麥米商を業とす祖父は了岱庵と號し源古流生花の家元にして父を源隆庵と號す君に至りて三代目なり君古園齋夢菴と號す夙に祖父に就き源古流の花法を學び其蘊奧を極む明治二十三年上京して始め東京醫學校に入り醫學を學ふ當時父は大阪に在りて第四師團の御用商人たり其在學中父病氣の爲めに一且大阪に戻る三十八年再び上京して明治法學校に法律を專攻す其在學中又不幸にして母の訃音に接して歸鄉す爾來家政上の支障に因り出京すること得ざるに至る三十一年居を横濱に移し花道を以て業とし專ら後進子弟の敎授に從事す君庭園の設計考按に長じ又盆景を能くし竹屋流より出で、一生面を啓き正流と稱し一家を成す（神奈川縣横濱市福富町一ノ三一）

鈴木紫陽

君は京都の圖案家なり鈴木吉藏の長男、明治十六年二月、三重縣宇治山田町に生る、幼にして繪事を嗜み始め鄉里の畫家磯部百鱗翁を師とす後京都に適き都築華香の門に入り兼て圖案を研磨獨修す其作品は名古屋共進會、京都美術協會新古美術展覽會等に於て受賞する數回又三越、白木屋等呉服店の懸賞圖案募集に應じ優等賞を得る數次四十二年關西圖案會創設に與り斡旋盡力す方今都下有數の圖案家たり、嗜好、讀書、旅行（京都市下京區猪熊通錦小路南入）

杉田一貫

君は神戸の實業家なり舊鹿兒島藩士杉田祐一の長男、明治十二年二月横濱に生る、歳十七、横濱の明治屋に入り商業の見習を爲し後神戸支店に勤務す當時川崎芳太郎氏の所有地布川通り老姥ケ口より湧出する炭酸水は飲料に適するに依り其販賣經營を一任せらる明治三十四年之が販賣に着手し一意專心販路の擴張に努むるも實質未だ飲料として我邦人の嗜好に適せず其製數僅に五十箱に過ぎず爾來苦心の結果滿洲に輸出するに及んで露國人の嗜好に適し大に好評を博し一時活氣を呈せり三十

七年日露の戰役起るや斯業界は意外の影響を蒙り爲に悲境に陷るに至る此時に當り君此礦泉を利用して「シャンペンザイダー」「ジンジャエール」等の製造を創始し專ら精良の品質を製出し大に其聲價を發揮す平和克復後事業界の活氣と共に各方面に事業の擴張を圖り業務益々隆盛す四十三年五月株式組織として布引礦泉株式會社と稱し君其專務取締役に推され現に業務の發展に盡瘁しつゝあり（兵庫縣神戸市加納町）

杉山令吉

君は東京の文學家なり、杉山千和の男、安政四年七月十四日美濃國安八郡神戸に生る、乃父千和氏は圍碁の名人たり、君名は直心、三郊又養老山樵と號す夙に書を棚邊風外に又漢籍を鈴木重遠、野村明、佐藤楚材等に學ぶ、明治十二年十月上京し河田梵河、依田學海、重野安繹等を縣遊し書法を巖谷一六翁の門に研究す後玉置環齋、奥藍田、鈴木湖邨等に交り大に得る所あり十九年冬米國に遊學しミシガン大學に入り政治科を專攻し二十三年歸朝す尋で高等商業學校教授に任じ後外務大臣秘書官に轉任し馬關條約に與り條約文の揮毫を擔當す後又海軍編輯局に出仕し日清戰記の編纂に從事し在職數年官を罷め方今早稻田大學教授東伏見宮南殿下の侍講たり其室琴子女史は文學博士川田剛氏の長女にして湘碧と號し詩歌に通じ書畫を能くす、書は殊に細楷に長じ又琴曲に達す（東京市牛込區横寺町五八）

杉山市三郎

君は岐阜長良の鵜匠なり先代要助の長男、嘉永六年生る、家代々鵜飼を業とす永祿七年織田信長在城の砌鮎及鮨を献上して鵜匠の稱號を受け米十俵と漁騎を給せらる爾來德川幕府を經て明治維新の際米金の給與を止め鵜匠を川漁取締役とし二人口扶米を扶持せらる明治四年之を廢し同六年より鵜飼稅金を納め漁業を自營することゝなれり先是明治四年有栖川宮御勸所より鵜飼匠の免狀を得て爾來斯業に從事して今日に至る（岐阜縣稻葉郡長良村）

鈴木啓處

君は東京の畫家なり鈴木得三の男、明治六年四月栃木縣宇都宮に生る、父得三氏南宗派を能くし松浦と號す、君通稱源三郎、啓處は其號なり夙に畫を家庭に學び後宇都宮侯の老臣戸田香園翁に就き修む明治二十六年七月上京し荒木寛畝翁の門に入り南北合派を學ぶ此間技術の蘊妙を究めん爲め前南禪寺管長大徹禪師に參禪し徹叟居の法號を受く其筆花鳥山水に長ず會て正派同志會展覽會に孔雀の圖を出品し大に好評を博す、三十年日本美術協會秋季展覽會に群鴨の圖を出品し北白川宮殿下の御用品となる三十二年佛國巴里博覽會に出品し銅賞牌を受領す又日本畫會に出品し百畫當選の一に入る其他各種の諸會に於て受賞する數回、現に日本畫會委員たり（東京市下谷區谷中清水町五）

菅楯彦

君は臺灣の實業家なり杉浦與七の次男、安政六年十月尾張國中島郡祖父江に生る、家は同地の舊家にして代々里正だりき君夙に鄕儒吉川氏に就き和漢の史を學ぶ長じて家業に從事し戸長に推され後ち是を止む明治二十四年濃美大地震の際名古屋に移り住す君夙に政治上の事に興味を有し自由黨に籍を措くこと久し縣議國議の選擧等には常に大活動を現したり二十八年渡臺して材木商を營み傍ら建築請負業を開始し時機に投じて大成功を贏ち得て今や息女ひさ子に養嗣子を迎へ業務を任せ悠々自適書畫骨董茶道に親む（臺灣臺北北門街外）

杉浦孝次郎

君は大阪の畫家なり明治十一年二月因幡國鳥取に生る、畫家菅盛南の長男君乃ち家學を修む甫めて五歳父は大阪に移住す二十歳時の父病歿し其箕箒を繼ぎ土佐派の家法を傳へ最も人物畫に長す方今專ら丹青を事とす、嗜好、雅樂讀書（大阪市東區農人町二ノ六六）

鈴木源藏

君は勢州津の足袋製造業家なり慶應元年十月生る、君少時家貧にして永く溫なる父母の膝下に梨栗を求むるを許されず小學校の修了を待たずして松阪西町の足袋商紅庄の徒弟となる時に十一なり是に於て將來斯業を以て身を起さんと胸裡に刻み刻苦奮勵其業を受く明治十一年十一月主家を辭し君漸く得たる十圓金を資本として翌年一月始めて山瀨古裏町に借家し此處に足袋製造業を開始す爾來勤勉摯實日夜寢食を忘れて業務の發展に努力するも如何せん資金僅少にして羽翼を伸ばすの餘地なし苦辛慘澹たること年餘、關西鐵道敷設工事始まるや君店を閉ち去つて同事務所に雇はる以來關西鐵道難工事と稱せられし加太隧道迄八里の險道を毎日

往復して日に幾分の收入を得て之れを貯蓄して再び足袋製造業を同市分部町に開始し二名の徒弟を容れて之を勵まし百折不撓の精神を鼓舞し孜々其業に盡すに至り資金内に殖へ信用外に增し家運漸次に發達して職工又次第に殖へ店舗狹隘を告ぐるに至る是に於て同町の横通りに移店し業務を擴張して足袋の先付機械一臺を購入し製造高の增加するに伴ひ市内販路の狹を唧つ折柄日露兩國間に戰端開かれ日々の戰報を讀むに及て活眼早くも滿韓は將來我國の領有たるべきを看取して忽ち朝鮮視察の意を起せり時恰も明治三十七年十月交戰に際し蹶然其途に上り仁川に上陸し危險を冒して京城に着くや本町二丁目に借家して店を開きて頗る盛況を極む居ること一ヶ年此間同地四丁目に支店を設け十數名の職工を雇入れ主任を店員に任して歸朝す四十一年四月東北地方の視察を企て函館、小樽、札幌等を視察し旭川一條通十丁目左第五號に一支店を開始す先是本店は分部町に新築して大阪和泉式の裁斷器を購入し大に製造力を增加するに至る四十一年更に分工場を設け四十二年十月本店の南隣へ新築すると共に莫大小製造部を增設し足袋部と兩々相俟て諸事整頓し數十名の職工は日夜其手を停めず盛に製造しつゝあり（三重縣津市分部町、電話三五九）

鈴木一翠

君は横濱の花道家なり鈴木繁雄の長男、慶應二年五月相州小田原に生る、通稱吉太郎、齡松齋一翠と號す、君二歲の時父は横濱に來り住す、幼にして風雅を好み專ら花道に心を寄す長じて東京四ッ谷の花道家松齊一得の門に遠州流の花法を學ぶ明治三十七八年日露戰役の當時同志會の幹事に推され軍國の爲めに盡瘁す卅八年十月横濱港外に大觀艦式の御擧行あるや御召艦淺間の玉座を飾るべき挿花の命を蒙り黄白菊花一對の挿花を献納し斯道の爲めに千載一遇の光榮に浴す是より御用遠州流の一派を興し流祖家元第七世寛松齋一典より其免狀を得四十三年五月第一回貿易品博覽會へ皇太子殿下行啓の際御座所に生花を陳列し併せて其寫眞帳を献納し御嘉納の榮を荷ふ同年十月第廿五回彫刻競技會へ皇后陛下行啓の際御座所裝飾の爲め生花數瓶を献納し該會より感謝狀を受領す其他献花の爲め縣知事より木盃感謝狀を受領する數回に及ぶ君又細川流の盆景に達し共に師範たり、殊に俳諧を嗜み松雪庵笠翠の號あり（神奈川縣横濱市北方町六四一）

鈴木空如

君は東京の佛壽家なり鈴木虎之助の三男、明治六年二月秋田縣羽後國仙北郡長信田村に生る、家世々農を業とす通稱久治、空如は其號なり夙に父を扶けて家事に從ふ歲甫めて二十にして繪

事に志し笈を負ふて上京し東京美術學校に入學し明治卅五年卒業す、此間兼て帝室技藝員山名貫義翁に就き伊勢流の有職故實を研究し得る所頗る多し、爾來精力を佛壽に傾注し拮抗齋勵終始渝らず嘗て奈良に遊ひ法隆寺の壁畫に以て臨摹し造詣益々深し今や佛壽の專門を名聲甚だ高し方今有數の壽家たり（東京府北豐多摩郡舊日暮里村一一〇三）

鈴木彌兵衛

君は東京の表裝家（壽僊堂）なり、先代彌兵衛の長男、明治四年十一月十五日生る、幼名福太郎・後家督を相續し襲名す家世々表裝を業とし維新前は舊南部藩の御用經師たり君夙に業を家庭に修め能く其家法を傳へ軸物表裝の外襖、屏風、壽帖、卷物、金銀箔押、金銀砂子蒔等に妙技を有し啓發頗る多し今や父祖の遺業に異彩を放ち家道太た旺盛なり曾て子爵淺邊國武氏の大藏大臣時代より斯業賃銀に關する調査委員の囑托を受け爾來引續き今猶其任に在り毎年大藏省理財局長より感謝狀を受く又裁判所より鑑定の委囑を受くる數次、資性溫厚篤實にして徒弟を撫育指導すること厚く隨ふて徒弟皆忠實業に勵み柔順事に從ふ現に一家を搆へ獨立自營するもの既に十二名に達す皆親睦にして圓滿事あれば直に君の宅に集合し和氣洋々として春の如くなるは同業者の羨望する所たり又嘗て川喜多忠兵衛、福田長次郎氏等と相謀り研究會を起し巽壽會を主催として表裝競技會を開設する等斯業の改善發達に盡瘁する所あり明治四十三年九月巽壽會主催第一回表裝競技會に輪奇表本紙を出品し三等銅賞を受領す方今有數の表裝家たり君蒲柳の質始め運動の爲めとして歌澤を試みしに漸次其趣味を解し遂に芝派の聲曲に精通するに至るといふ（東京市神田區豐島町四二岩井橋詰）

菅野新作

君は富山縣の殖產家なり菅野新八の長男、嘉永六年十月越中國下新川郡三日市町に生る、家世々農を業とす君郡制實施以來町會議員、郡會議員、郡參事會員たり嘗て石川縣時代縣會議員となり後ち富山縣の設置せらるゝに及び議長となる其間黑部川架橋は三日市町の榮枯盛衰に關する重大問題たることを主唱し有志と謀りて遂に之を架設し後ち縣の經營に附せり又三日市町に者先自ら資を投じて圖書館を建設經營する等盡瘁する所あり後ち新川織物同業組合設置せらるゝや推されて其組長となり爾來累選今猶其職に在り方今前記の外縣參事會員、株式會社櫻庄銀行專務取締役、新川織物株式會社長、高岡中越氣船株式會社監査役、株式會社生地銀行監査役たり、嗜好、書畫骨董、又繪を能くし竹舟と號す（越中國下新川郡三日市町）

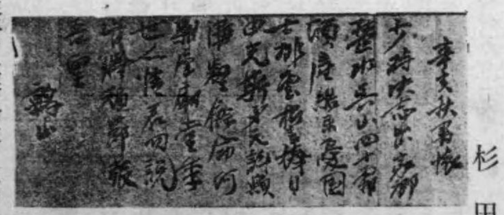
菅音次郎

君は神戸の茶商菅園主人なり川口源七の三男、慶應元年四月一日河内國中河内郡日根市村字日下に生る、出でゝ菅家に入り養嗣子となり明治二十三年家督を相續す養家の初代は久次郎と云ふ大阪の人にして唐物商を營み屢横濱に往來して外商と取引を爲す當時横濱港の殷盛なるを目擊して神戸の地之に優る良港なりとして神戸に移住す明治初年官廳の御用達たり三年兵庫運上所起るや通商社を創設し其頭取に推され貿易業の經營に盡瘁す二代を爲次郎と云ふ先代久次郎の長子にして明治七年茶商を創め菅國と稱す製法原料の選擇に苦心を凝らして繁榮の基を建つ十年時勢を達觀して燐寸製造業を兼營す之れ神戸市に於ける燐寸製造の嚆矢なり三代は即ち君なり君家業繼承以來益々販路の擴張を計り專ら意を品質の改善に致して高評を博し呉、佐世保、竹敷等の各鎮守府幷に水交社の御用を蒙り其他朝野鉅公の愛顧を受け家聲益々發揚す殊に茶を加味せる風流美味の名菓「たますだれ」を製出し世の嗜好に適し好評頗る高し君甞て神戸商業會議所議員として盡す所多し方今神戸菓子商同志會々頭日本製茶輸出株式會社監査役神戸商業會議所議員たり（兵庫縣神戸市多聞通三ノ五、電話、一七二八）

陶尾祖山

君は名古屋の花道家なり尾州東春日井郡陶村曹洞宗陶昌院住職にして清流齋枕石と號す、幼時花道に心を寄せ臥龍齋閑甫の門に眞道流の花法を學ぶこと十有餘年、其奥儀を究む君身體羸弱にして法務を全ふするを得ず明治十八年寺門を退き名古屋東田町に閑居して花道を指南せり三十一年眞道流準總會頭に昇進す三十四年故ありて眞道流を脱し同年十月二條家より御花所の命を受け流名を條風順天流と稱す茶花は吉田紹敬師の門に千家表流儀を學び其奥儀に達す君技倆頗る卓絶遠近風を望で其門に遊ぶもの甚だ多し、嗜好、南畫を能くす（愛知縣名古屋市流川町二八）

杉田定一



君は前代議士なり福井縣の人杉田仙十郎の長男、嘉永四年六月二日生る、家世々里正にして酒造家なり君夙に藩儒吉田愼齋の門に學び經史に通ず二十歳上京して獨逸學を修め中途にして一旦歸郷し明治八年再び上京し新聞業に從事す其所論往々忌諱に觸れ禁獄に處せらる出獄後海内を歴遊し交を四方の志士に通じ十二年歸國す偶々地租改正の紛議あり君父と共に百方に盡力して事を再調に結ばしむ爾來專ら力を教育に盡し邸内の酒庫を徹し校舍となし自郷學舍と稱し郷黨子弟の薫陶に從事す後ち經世新論を著し條例に觸れ獄に下さる十四年自由黨の組織に際し之に加盟し北越の牛耳を執る後愛國公黨員となり次て縣會議長に推さる十七年清國を漫遊し東洋政略に就き研究する所あり十九年歐洲を巡遊し二十一年歸朝す二十三年縣の第二區より推されて衆議院議員に當選す君頗る海軍事務に精通す其議場に在るや數々奇警の質問を發し政府委員を苦ましむ第二議會解散後再選し爾來改選毎に當選す後憲政黨内閣成るや北海道長官に任せられ從四位に叙せらる第十二議會解散後復當選し爾來副議長同議長全院委員長たり三十九年四月日露事件の功に依り勳四等に叙し旭日小綬章を授けらる四十一年改選に際し郡部より選出せられ衆議院議員となり翌年立憲政友會院内總理に推さる四十五年總改選の際復出てす、嗜好、詩文、園藝（東京府豊多摩郡澁谷町下澁谷三七七、電話芝二二六〇、越前國坂井郡波寄村）

鈴木松翠

君は東京の畫家なり鈴木佐吉の次男明治十七年四月東京に生る、家世々畳匠を業とす父佐吉氏は篤志家たり君通稱兼吉楸翠は其號なり幼にして繪事を好み明治二十九年岡田華莊（前梅村）の門に入り容齋風の畫法を學び爾來專ら寫生に心を傾け造詣する所あり其特長とする所は花鳥にして山水之れに次く三十四年第十一回繪畫共進會に雪中鴛鴦の圖を出品し褒狀を受領す三十五年三月第十二回同會に散花に雉子の圖を出品し褒狀を受領す方今專ら丹青を事とす（東京市京橋區木挽町一いノ一四）

諏訪鎗太郎

君は東京府の神職にして同府豊多摩郡東大久保村北向天滿宮神社の社掌たり（東京府豊多摩郡東大久保村四四六）

鈴木濟美

君は東京の辯護士なり舊水戸藩士鈴木藤左衛門の長男、慶應元年八月常陸國那珂郡上野村に生る、夙に漢學を修め水戸中學校に入る次て上京し野口勝一綿引東海等の經營せる嶽東社に入り五縣新聞の記者となり大に筆硯を弄し時事を痛論せり明治二十年東京法學院に入り十三年卒業して水戸地方裁判所監督書記となる二十七年判檢事登用試驗及辯護士試驗に及第し二十八年辯護士となり郷里水戸に於て法律事務に從事し傍ら常陸物産株式會社及茨城商工株式會社の重役たり後ち水戸在住辯護士間に軌轢を生じ偶々官文書變造の告訴を受け鐵窓の下に繫ること月餘事素

より寃枉に屬せしに因り無罪となる三十年再び籍を辯護士に掲げ熱誠事務を執る爾來市會議員、縣會議員同副議長等に擧げらる後事務所を東京日本橋區槇町に移し同區第六部より推されて衛生會評議員となり次て其會長に擧げられ貢献する所多し爲に區民より金盃を贈與して其功勞を表彰せらる後又現住所に移住し爾來專ら法律事務に從事す君居常書畫を愛玩し其所藏尠からずと云ふ（東京市下谷區清水町一九）

杉本景洲

君は大阪の文學家なり金澤太次郎の三男、安政三年一月三日大阪に生る、幼名與三郎、明治二十五年二月先代與一郎の養嗣子となり家督を相續し襲名して與一郎と改む景洲は其號なり養家は世々履物商を業とす君夙に漢籍を妻鹿友樵、賴支峰、重野安繹、中村正直等に學び詩文を田結井莊千里、小野湖山等に問ひ又國學は落合直澄、敷田念治等に從ひ學は和漢に通じ辭書を能くす曾て堺市藥種商の機關雜誌羅針盤の主筆たり其著に國詩文典、小學解通、唐詩解釋、畫解小倉百集、滑稽戲詩等あり、嗜好、圍碁に通じ初段格を有す其他書畫、謠曲。大阪市南區久左衛門町六。

鈴木源助

君は東京の鎚金家なり先代源助の長男、慶應三年十二月江戸下谷池ノ端仲町に生る、家世々銼職を業とし創業は安永年間にして代を經る七代とす君幼名伊三郎、明治十五年家督を相續し襲名す、鈴源齋と號す夙に業を父に修め鏤刻の秘技を究めて其蘊奥に入る明治二十三年七月第三回內國勸業博覽會に金製刈稻彫卷莨入を出品し三等妙技賞を受領す二十五年十一月東京彫工會競技會に金製松鳩彫手卸を出品し朧銀賞票を受領す二十七年五月美術展覽會に銀製鎚嵌馬圖卷莨入を出品し三等銅賞を受領す、二十九年五月美術展覽會に朧銀流水千鳥切嵌卷莨入を出品し二等銀賞を受領す同年九月東京彫工會競技會に銀朧銀刻分波鷺彫卷莨入を出品し二等銀賞を受領す三十二年五月美術展覽會に金屬製鴛鴦置物を出品し二等賞銀牌を受領す三十六年十二月彫工會競技會に於て二等銀賞を受領す三十九年五月美術展覽會に朧銀切嵌梅花書屋小箱を出品し技藝一等金賞を受領す此年四月東京勸業協會第一回製品々評會に於て二等賞銀牌を受領す四十二年九月東京彫工會競技會に於て二等銀賞を受領す君東京彫工會創立以來每次審査員に推擧せられ且つ同會の爲めに貢献すること少からず三十八年同會は其功を表彰して銅賞牌を贈與せらる現に東京彫工會員、美術協會委員にして都下有數の鎚金家たり（東京市下谷區池ノ端仲ノ町二八）

鈴木清九郎

君は神戸の疊職なり先代清九郎の長男、慶應元年十月生る、其先は埴正成の家臣鈴木宗右衛門清利に出つ清利建武元年三月正成に從て湊川に戰死す其子清右衛門父の靈を弔はん爲め湊川の畔に永住して歸農す爾來子孫世々農を業とす其十六代の孫木屋清九郎に至り業を轉じて酒造及疊職を兼業す先代清九郎の代に至り時勢の趨向に鑑み酒造を廢し疊業を專業とすに至る明治二十年父歿後君家督を相續し家業を繼ぐ資性溫厚摯實にして技倆亦群を拔く二十八年宮室疊司の職を能め全國疊職中より御疊調進者を撰擇採用せらるゝに方り特に擢られて君獨り其恩命に浴す後又東宮御所より御疊調達の光榮を擔ふ爾來年々御用を蒙ると云ふ君又力を地方公共の事に盡す明治二十九年神戸疊職同業組合の創立に與り組長に擧げられ十五箇年間其任にあり貢献する所少からず方今神戸湊東區會議員たり（兵庫縣神戸市元町四ノ七四）

杉森與吉

君は臺灣の高等旅館日の丸館主なり杉森與吉の長男、元治元年五月伊賀の上野に生る、家代々肥料商を營む夙に學を鄉儒佐々木の塾に受く十二歳の時無斷大阪に出で堺江の藍問屋に奉公し十六歳主家を辭して歸鄉し藍商を開き後ち米商に轉じ數年ならずして大に信用を博し米穀取引所設置に奔旋盡力し仲買店を開く後ち取引所解散又電信架設に際し電柱を寄附する等頗る公共事業に盡力す明治二十九年日清戰役終りて臺灣の我領土に入るや島狀視察を思立ち渡臺し種々の新興事業研究を遂げ殊に旅館の頗る不完全なるを曉り先づ小規模の旅館を設け誠實懇篤を旨とし營業に從事し漸く江湖の信用を高め、漸次擴張し今や同地一流の旅館として知らるゝに至る更に各港行汽船荷客特約取扱、兼爲替貨物取扱、委托品販賣諸官衙御用達等の業を兼ね營業益々隆盛を極む君天資任俠後進子弟の誘掖に趣味を有し現に君の恩顧に浴し高等教育を受けつゝある者數名に及ぶと云ふ（臺灣臺北元府直街）

鈴木松旭齋

君は東京の文人籠師なり鈴木平八氏の次男、明治五年東京日本橋濱戸物町

に生る、家代々魚河岸の魚籠製作を業とす、通稱重十郎、松旭齋は其號なり幼より業を家庭に受く年十六、生花を嗜好とするに當り文人籠の製作に志を起し業務の餘暇を求めて研究す技塾するに及び其着色法に苦辛を凝らす人あり敎ゆるに硝酸の使用を以てす君乃ち潛かに父の實印を使用し其證明書を作り藥種舗に就き該品を購求し人なきを幸ひ之を釜中に投じ火を與へ失敗を招く爲めに父の叱責を受く時に年二十五なり後本所馬場町に加賀の人矢島某あり頗る編籠に巧なるを聞き父に請ひ三ヶ年の年期を以て徒弟の約を結び就くこと僅に三月師の技倆の平凡なるを看破し師事するに足らざるを知るも苟も既に師弟の緣因を結ぶ徒らに去るに忍びず意を決し自ら籠を製し之れを市場に携帶して毎月十八圓乃至二十圓の收入を得て業に從ふこと年餘遂に前途を誤らんことを恐れ斷然師家を辭し獨立斯業を開始するに至る是れ君が二十七歳の時なり而して君斯業を開始するや其資金僅々五圓爾來粉骨碎身以て今日あるに至る今や君の卓越精巧なる技倆と優美高尚なる着色とは坐ろに人をして其趣味の深きを感せしむといふ、嗜好遠州流花道に精通す（東京市本所區馬場町七五）

鈴木孔友

君は岡山縣の人舊津山藩士鈴木伊助氏の長男、嘉永四年九月作州津山に生る、芳粹と號す漢籍は同藩士丹治玄賢長瀨通江等に修む明治十二年毛糸製造業の企圖を抱き大阪に來りて其志を達す十六年北區同心町に毛糸製造工場を設置し業務一時旺盛す二十年の頃業を廢し爾來身を公職に委し區會議員、聯合區會議長、北區高等小學校學務委員たり就中學務委員として在任最も久しく今猶其任に在り四十年第三級より選出せられて市會議員となるや聯合區會議長を辭す、殊に區會議長及學務委員として敎育上に盡瘁する所多し其功績見るべきものあり府知事は特に其功勞賞を贈與す又日露戰役に際し率先北區十ヶ町を聯合せしめ松ヶ枝報國會を創設し軍人遺族の慰問及び救助に盡力すること少からず府縣知又其善行を表彰し三組木盃を下賜せらる方今市會議員たり、嗜好、書畫（大阪市北區松ヶ枝町七）

鈴木佐七

君は東京の實業家なり先代佐七氏の長男、明治十二年一月生る、家代々疊職を業とす父佐七氏は東京十五區内に於ける疊業組合の總頭取にして斯業の爲めに貢献せしこと少からず代を經る四代とす君幼名卯三郎父歿后家督を相續し襲名す夙に業を家庭に受け嗣襲以來家聲を墜さず益々精勵し細川侯爵、長岡子爵、三井銀行、東京信托會社其他朝野鉅公の邸に出入し營業頗る繁盛を極む方今都下有數の疊匠工なり、嗜好、音曲（東京市京橋區木挽町一ノ一四、電話京橋一六九二）

椙山正弐

君は名古屋の敎育家なり、舊尾州藩士椙山正明の長男、明治十二年六月一日生る、君三十二年以來岐阜縣小學校に敎鞭を執り傍ら同縣敎育會敎育雜誌の主任となりて操觚の事務に鞅掌す後ち所感ありて職を辭し三十五年上京して渡邊辰五郎に就き裁縫の技を學び三十八年二月卒業して歸鄕し私立名古屋裁縫學校及女子技藝學校を創設し自ら校長となり專ら育英の事に從ふ君敎育に熱心にして敎授其宜しきを得生徒三百二十有餘名を收容して裁縫、造花、押繪、圖案、茶花両道等の諸科を設け盛に授業しつゝあり方今名聲都下に高し其著に新令適用小學校裁縫科敎案及敎方、裁縫家敎授法等あり（愛知縣名古屋市富士塚町二丁目）

鈴木源之助

君は東京の鎚金家なり先代源助氏の次男、明治六年八月東京下谷區池ノ端仲町に生る、家世々銕職を業とし代を經る八代とす君泰源と號す幼より業を父に就き學び性頗る鎚金術を好み夙に其蘊奥を究む明治二十六年別家して獨立自營す二十九年五月始めて日本美術協會展覽會に朧銀芦雁の圖卷貰入を出品し三等銅賞を受領す三十一年十二月彫工會競技會に銀製小竹狗の圖卷貰入を出品し二等銀賞を受領し此出品宮内省御用品として御買上の榮を蒙る同年十二月東京彫工會競技會に銀製切嵌雁圖貰入を出品し三等銅賞を受領す四十二年七月金工協會競技會に朧銀製竹の彫刻象嵌卷貰入を出品し二等銀賞を受領し此出品宮内省御用品として御買上の榮を蒙る其他日本美術協會展覽會、博覽會、共進會等に於て銀銅牌の優等賞を受領する拾數回又各種の諸會に審査員たること數次現に日本彫工會委員、兼第五部長にして都下有數の鎚金家たり（東京市芝區三田臺町一ノ六）

杉阪六三郎

君は臺灣の實業家なり、舊尾張德川公の藩士にして劍術の師範たりし杉阪重常の四男、明治四年六月其の郷里に生る、幼にして普通學を鄕校に學び、漢學を儒者重野天來の門に受く、長ずるに及びて堺紡績會社々員となり、居ること數年、明治二十九年臺南に航し宅合名會社臺南支店長となり熱心業務に從事して頗る上下の信用あり、現に

臺灣商工會幹事たり、室富子慈悲に富む（臺灣臺南武官街）

末吉勘四郎

君は大阪府の素封家なり其先は田村麿將軍の末裔にして中古增富家より分家して世々平野郷に住し農を業とす代を經る十三代其間實に三百有餘年連綿として系統を絶たず二代孫右衛門慶長十三年戊申孟秋二十五日暹羅國渡船の朱印狀を得て彼國と盛に通商貿易を爲し屢次往復す寛永十癸酉十月二十一日京都清水寺に繪馬額を奉納し海上無難を祈願せる額今尚存せり初代勘兵衛は大阪に住し銀座たり大阪の末吉橋は卽ち初代勘兵衛の架設したるものなりと云ふ君は先代勘四郎氏の二男にして安政六年正月三日攝津國東成郡平野郷に生る、幼名熊次郎長兄早世爲めに家督を相續し夙名す夙に漢籍を含翠堂小川寛の門に修む嘗て平野紡績會社を發起創設す後ち攝津紡績會社と合併するに當り幹旋盡力す方今日本綿花株式會社取締役、日本赤十字特別社員たり、嗜好、和歌又茶道に通じ閑適と號す（大阪府東成郡平野郷野堂、電話平野一）

鈴木義彦

君は東京の鎚金家なり、鎚金家鈴木源助の三男、明治十七年九月東京下谷區池ノ端仲町に生る、家代々錺職を業とす實兄源助及源之助氏鎚金を以て共に名あり君名は義彦又通して號とす年十六、甫め海野美盛の門に彫金術を修む後海野勝珉翁に師事し傍ら畫を池田琴峰、川端玉章等に修む明治三十三年東京美術學校彫金部二學年に入學し三十六年卒業後第一師團騎兵聯隊に入營し除隊後分家して獨立業を自營す三十七年八月第十九回東京彫工會競技會に雪中鴛鴦彫刻真入及金彫伊勢神苑圖手釦を出品し銅賞牌を受領す四十一年六月日本美術協會展覽會に銀彫花瓶群鴨圖を出陳し銅賞を受領し此出品皇后陛下御用品として御買上の榮を荷ふ同年七月日本金工協會第五回競技會に於て銅賞を受領す同年九月第二十三回東京彫工競技會に於て銅賞を受領す四十二年七月日本金工協會競技會に臘銀製竹の彫刻象嵌真入を出品し銀賞牌を受領す同年十二月美術展覽會に於て銅賞を受領し宮内省御用品の榮を夢る（東京市淺草區東三筋町四〇）

杉山小兵衛

君は大阪の實業家なり、安政三年五月十六日生る、先代小兵衛氏の長男、家世々醫の傍ら賣藥を業とす幼名大吉明治三年六月父歿後家督を相續して襲名す爾來醫業を廢し賣藥業を營む明治十三年の頃戸長役場用掛となり會計事務を掌ること五ヶ年此間實地理財上に得る所少からず十八年府下に大洪水の慘事あり家屋賣買價格頗る低落す君瞬眼早くも日本橋筋に幾多の土地家屋を購入したり君が今日の資產、地位及名望を併有するもの一に玆に胎胚すと云ふ廿五年一月市會議員に選擧せらる爾來衞生委員、日本橋筋一丁目外二十八ヶ町衞生通信擔當委員、聯合區會議員、勸業委員、南區會議員、徵兵參事員、大阪市學務委員、聯合區學務委員等の任に在り又嘗て高津尋常小學校及分校建築に際し建築協議員として功績あり爲めに區會は其決議を以て銀盃一個を贈與せらる二十四年尾濃震災の際大阪赤十字社員を代表して彼地に赴き幾多の危險を冒して多くの罹災民に金品藥劑等を惠與し其任務を全ふす後ち時の岐阜縣知事より木盃賞狀を贈り感謝の意を表せらる方今市會議員たり嗜好、盆栽、骨董（大阪市南區日本橋筋二ノ六）

鈴木清

君は神戸の實業家なり舊攝州三田藩士鈴木喜間太の男、嘉永元年四月十九日生る、幼名鹿之助後ち改む夙に漢學を藩儒白洲退藏に學びて學校句讀司となる十七歳特選せられて學師組を命せられ三人扶持を受く二十一歳家督を相續す明治五年神戸に移住し米國宣教師デビス氏に英語を學び後ら基督教傳導に志し畿内、中國、四國の各地を遊說す十二年奮然獨立罐詰製造業を開始す蓋し本邦斯業の嚆矢たり爾來業務を擴張して今日に至る此間内國勸業博覽會米佛博覽會等に於て賞牌を受くる數回此年又赤心株式會社を創設して其社長となり北海道開拓業務に從事す十七年藩儒白洲氏の選拔と福澤諭吉、九鬼隆一兩氏の勸告に從ひ舊主家九鬼子爵の家政に力め其家政係、地家局長の名稱を以て勤務せり先是明治十三年區會議員に當選し在職四年餘、二十一年神戸商業會議員に就任す二十六年破產管財人を命せらる二十八年日本赤十字社兵庫支部會計監事に推擧せらる方今赤心株式會社取締役社長、三等郵便局長たり（神戸市中山手通六ノ一五三、電話二三一）

須藤治郎

君は廣島縣の人明治九年備後國比婆郡本村に生る、家世々農を業とす夙に學を修め二十三歳にして衆望を荷ひ村長に推され三十七八年日露戰役の功に依り勳七等に叙せらる明治三十八年職を辭す方今縣會議員、廣島縣革新倶樂部員たり、嗜好、旅行、相撲（廣島縣比婆郡本村）

菅野傳右衞門

君は富山縣の多額納稅者なり先代傳右衞門の長男、家世々米穀肥料問屋を業とす方今株式會社高岡銀行、同貯金銀行等頭取、高岡紡績株式會社、同電燈株式會社等社長北一合資會社代表社員たり、嗜好、盆栽、球突、圍碁（越中國高岡市木舟町三六、電話三〇）

本山田喜庵作（この二四頁記事參照）

都路華香筆（つの一六頁記事參照）

大村岳陽筆（をノ三七頁記事參照）

上村紫江圖案（うノ二一頁記事參照）

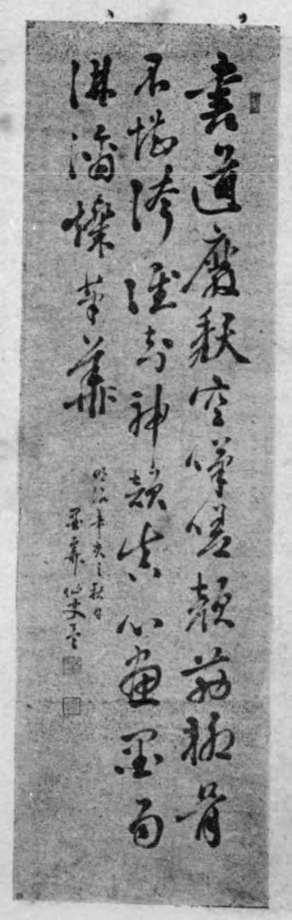
竹內吉鳳筆（たノ一三五頁記事參照）

辻香塢筆（つノ二八頁記事參照）

佐藤米翁筆（さノ四五頁記事參照）

笠井鳳齊筆（かノ七五頁記事參照）

鏑木清方筆



四平墨華筆（よノ一頁記事參照）

岩田豊麿筆（いノ百三十頁記事參照）

水上香邨圖案
（みノ二三頁記事參照）

田畑雨邨筆
（たノ八四頁記事參照）

款落光定野星
（ほノ二頁記事參照）

曾我長四郎作（そノ一頁記事參照）

野口小頻女史筆（のノ一五頁記事參照）

村上洗夢庵作（むノ一五頁記事參照）

補遺

市川右團治

丈は大阪の俳優なり市川齋入の嗣子にして父齋入と改稱するに及び襲名して右團治となり爾來各座に出演し藝名あり（大阪市南區竹屋町二九〇）

市川齋入

丈は大阪の俳優なり四代目市川小團次の男にして天保十四年七月生る、本名伊藤嗣太郎俳號家升家號高島屋又鶴屋と云ふ幼にして某商家の丁稚となり後芝居道に入り嘉永五年始て道頓堀若太夫座に上り尋で角座にて子役を勤め夫より處々にて首振り又は宮芝居に出でたり文久二年江戸に出で守田座に勤め好評を博し後大阪に歸る同三年若太夫座に出勤し右團次と改名す夫より宮座又は濱座にて修業せり慶應二年八月角座附となり明治八年假名垣魯文の新作芝矢場女殺を演じ大に好評を得たり十五年再び出京して新富座及び久松座春木座等に出勤す十七年角座新築後其座頭となりて朧月小松原の新作狂言を與す劇場と云ふ事此時より始まる二十五年京都祇園館にて法界坊の役を水藝にて演じ二十六年上京春木座に出勤し當地名殘狂言に再び法界坊の水藝にて演じ共に好評あり二十七年大阪中座に石川五右衛門の宙乘りつゞらぬけを勤め非常の賞賛を得尋で尾の道偕樂座にて五右衛門宙乘りを務めて負傷す二十九年中座にて花舞臺興行の際水藝を演じ尋で之を一世一藝として大江山の宙乘りを演じ猶卅一年中座にてお染久松の七役早替りを演じ宙乘の際復た負傷す卅二年北海道札幌小樽等に興行し歸朝後右團治の名を其嗣子に讓り自ら齋入と改稱し方今阪地に在りて斯道の牛耳を執る（大阪市南區竹屋町二九〇）

岩本富三郎

君は臺灣鐵道ホテルの支配人なり（臺灣臺北鐵道ホテル内）

市川權三郎

丈は東京の俳優なり通稱を長谷幸太郎と云ふ市川權三郎は其藝名なり方今下谷市村座に出演し好評あり（東京市京橋區木挽町三ノ二一）

市川荒五郎

丈は大阪の俳優なり通稱を市川楠三郎と云ふ市川荒五郎は其號なり現に關西に於ける屈指の俳優なり（大阪市南區阪町六九）

井上圓了

君は文學博士なり新潟縣の人安政五年二月四日生る、明治八年帝國大學哲學部を卒業して文學士の稱號を得爾來研學其蘊奥を極め遂に妖怪學を創見し頗る學者間の賞賛を受く二十八年文學博士の學位を授與せらる又自ら哲學館を設立し純正哲學の眞理を授け傍ら哲學書院を開設して之が書籍を出版し斯學の普及に盡力する所あり其著に妖怪學講義あり（東京市本郷區駒込富士前町五三）

伊藤明義

君は東京府豐多摩郡十二社神社の社司にして尙鐙神社、淀橋天滿宮等の社司を兼務す（東京府豐多摩郡淀橋町大字角筈十二社）

池田兵三郎

君は東京の實業家（池田商店）なり夙に京橋區中橋廣小路の越前屋絲物商店に奉公し忠勤年あり後辭して今の所に一商店を開き絲物類及卸類を販賣し勤勉着實信用日に加はり業務漸次に隆昌し今日の成功を見るに至れり（東京市日本橋區馬喰町四ノ七、電話長浪花一八七七）

市川市藏

丈は大阪の俳優なり通稱安部楠松藝名を市川市藏と稱し又はり市の號あり方今藝名頗る高し（大阪市南區八幡町一六）

今井直

君は東京の神職にして現に向島白髭神社々掌の職に在り君世々同神社の神職として夙に名あり（東京府南葛飾郡向島寺島村大字寺島一一八八）

市川吉三郎

丈は東京の俳優なり通稱前田兼太郎と云ふ市川吉三郎は其藝名なり現に赤阪演伎座に出演し好評頗る高し（東京市麻布區谷町一三）

は之部

馬場斧吉

君は東京の人鳶頭馬場斧吉の次男、天保九年八月二十五日生る、家世々消防ち組頭取にして代を累ぬる君に至り十一代とす君十七歳消防組に入り爾來焦烟火中に出入して公益に盡す處あり嘗て嘉永年中淺草大火に際し故新門辰五郎と共に雷門の防火に努め功あり駒込大火に纒持萬藏と共に猛火の中に陷りしも死を賭して纒持萬藏を救ひ當時の纒今尙君の家に存すと云ふ王政維新となり消防署創立するや擧げられて小頭となり尋て頭取に推さる明治十一年消防用ポンプ初めて使用せらるゝやポンプ組頭を命せらる爾來勤續實に六十二年の久しきに至る其功勞を賞し時の警視總監龜井英二郎より木盃一組及直筆扇面を贈らる其他職務上に就き受賞せらるゝもの數を知らず方今第五消防署四番組々頭各區總代の任にあり（東京市淺草區馬道町五ノ一一）

花柳芳三

君は東京の踊師匠なり先代花柳壽輔の高弟にして踊技頗る巧妙を以て聞ゆ現に各劇場に出演し高評あり兼て子弟の指南に從事す（東京市牛込區肴町四二）

早速整爾

君は廣島縣郡部選出の代議士なり中山源藏の二男、明治元年十月二日其郷に生る、夙に漢籍及普通學を修め明治十六年九月上京して東京專門學校に入り政治經濟の學科を研究し十九年卒業す此年十二月埼玉縣私立中學英和學校長代理となり二十一年十月辭して博文館に入り編輯に從事す翌年一月歸郷し藝備日々新聞を經營し自ら其主筆となり以て今に及ぶ又傍ら印刷業書籍販賣の事業を兼營しつゝあり先是二十九年三月廣島縣會議員に擧げられ次て市部會議長に推さる三十二年九月府縣制實施に際し更に廣島縣會議員に當選し市部會議長に再選す又廣島商業會議所特別會員に推され廣島經濟會を組織して地方公共の裨益を計るに力めり三十二年以來商業會議所副會頭に擧げらる方今會頭の職に就けり三十四年五月市會議員に選擧せらる此年八月市部より衆議院議員に選出せられ爾來當選すること三回嘗て日露事件の功に依り勳四等旭日小綬章を叙賜せらる四十五年五月總改選に際し郡部より衆議院議員に選出せられ現に其席に在り（廣島市大手町二ノ五九）

春田宣德

君は東京の神道家なり故向島牛島神社々司春田明德の長男、明治六年七月十二日生る、嘗て故成島柳北、江東義塾等に學び二十三年皇典講究所に入る次て國學院に轉じ二十六年卒業す此年徴されて軍役に入り日清の役に出征し凱旋後牛島神社々司に補せらる更に東京神職管理所理事、同皇典講究分所理事及試驗委員等に推され今尙其職に在り（東京市本所區向島須崎町七八）

阪東百喜知

女は東京坂東派の踊師匠なり方今門弟の教養に從事し頗る隆昌を極む（東京市神田區元柳原町二二）

花形喜一郎

君は東京の神職にして深川富岡八幡神社の社掌たり（東京市深川區富岡公園内二號地）

花柳輔次郎

丈は東京の踊師匠なり方今各劇場に出勤し振付に從事し名聲極て高し又傍ら門弟の指導誘掖を爲しつゝあり（東京市淺草區千束町二ノ二一三）

早川與吉

君は東京の講談家なり夙に講談を練習し專ら新讀物に工夫を凝らし遂に新機軸を案出し主として學校教育會其他各種團體の需に應じ講演して高評を博せり方今都下有數の講談家を以て稱せらる（東京市神田區同朋町二一）

に之部

西久保白愛

君は東京の神道家なり神職西久保孝始の長男、明治七年七月生る、夙に學を國學院に修め二十六年大輔敎の職階に陞り後ち東京築土八幡神社の社掌となる嘗て東京府神職會理事、神職試驗委員たりき君又著す處多く其一二を擧ぐれば紀貫之時代風俗史、藤原時代と皇室との關係、德川時代の經濟と風俗祝詞作法等なり（東京市牛込區築土八幡町築土八幡神社）

と之部

豊澤團平

丈は大阪の淨曲三絃家なり通稱を植畑九市と云ふ豊澤團平は其藝號なり現に文樂座に出勤し攝津大椽の糸を彈き斯業界の重鎮たり（大阪市西區南堀江通一ノ九）

豊澤廣作

丈は大阪の淨曲三絃家なり通稱を山田新治郎と云ふ夙に先代廣作に師事し師と共に文樂座に出勤して好評あり後ち師の名を襲ぎ廣作と稱し今猶文樂座に出勤し好評嘖々たり（大阪市南區順慶町一ノ一）

常盤津佐登美太夫

丈は常盤津師匠なり通稱鈴木竹治郎と云ふ佐登美太夫は其藝號なり方今各劇場に出演し大に好評を博す又門弟の指南に從事す（東京市神田區千代田町二一）

豊竹巴太夫

丈は東京の淨曲家なり、中村勘三郎の長男にして父勘三郎氏は翁家さん馬と號し落語家として名あり丈夙に淨瑠璃を好み修業すること年あり方今各席に出勤し好評を博す（東京市淺草區小島町八）

時任武

女史は東京の敎育家なり現に東京澁谷實踐女學校に在りて專ら女子敎育に從事しつゝあり（東京府豊多摩郡澁谷町實踐女學校）

豊澤竹三郎

丈は大阪の淨曲三絃家なり通稱栗原竹三郎と云ふ豊澤竹三郎は其藝號なり（大阪府堺市戎之町東二丁）

戸倉瀧三

君は東京の祭具商なり神奈川縣藤澤の人戸倉平吉の長男、明治元年四月生る、年十八甫めて東京に出で神田祭具店增田家に入り勤續十四年遂に獨立して本郷湯島天神町に祭具店を開き後ち芝區宇田川町平野商店の閉店するや其跡を受け益々隆盛を來す明治四十四年東京祭具株式會社を起し其專務取締役に推され現に其職に鞅掌せり（東京市芝區烏森町一、電話新橋八三〇）

豊川光長

君は東京の彫金家なり舊川越藩士大塚喜三郎の三男、嘉永四年生る、通稱勇吉光長は其號別に眞柳齋喜山人と號す慶應二年豊川家を繼ぎ彫金の技を修め柳川派の衣鉢を受け先代光長翁と共に紀、尾、水三家の金屬彫刻を勤む明治十三年君龍池會に新羅三郎秘曲吹奏の圖を出品し其故實に通ずる所終に優賞を占む又皇居御造營及皇后陛下寶冠章御調製に際し共に其御用を命せられ尋て皇上銀婚の大典を擧げさせ給ふや東宮御所の御用命を以て鶴龜置物を鐫刻し令旨を賜はる三十三年秋季彫工會競技會に皇后陛下行啓に際し御前彫刻を命せられ銀製栗を献品し嘉賞せらる又日本美術協會彫工會其他各共進會展覽會等に於て銀銅賞牌を受くる前後數回に及ぶ金工協會彫工會の委員に推さるゝ又數次業餘茶俳道を嗜み喜多流の謠曲を能くす（東京市本所區南二葉町七）

董松秋

君は臺南の實業家なり夙に名望家として知られ家業頗る盛なり（臺灣臺南市庚一一一二）

豊川秀靜

君は東京の畫家なり彫金家豊川光長の男明治七年九月生る、通稱喜之秀靜は其號別に鬼堂と號す初め家庭に彫金術を修む十八歳鮮齋永瀧の門に入り狩野派の畫風を學ぶ兼て永峯秀湖に就きて容齋派の筆意を研究す二十八年秀湖

翁の歿後獨立自營し人物花鳥を專門とす爾來宮內省彫刻下繪を事とす此間靑年繪畫共進會美術協會日本畫會其他公私各種の展覽會等に於て受賞數回又業餘有樂流の茶道及生花幷に春藤流の謠曲を能くす（東京市本所區南二葉町七）

豐澤猿糸

丈は大阪の淨曲三絃家なり通稱を山本大次郎と云ふ夙に豐澤廣助の門人となり後ち師の前名を襲ぎ猿糸と稱し現に文樂座に出勤し名聲高し（大阪市東區今橋三ノ二九）

ち之部

陳鴻鳴

君は臺灣の實業家にして篤行家の聞へあり（臺灣臺南市丙九八四）

陳采臣

君は臺灣の實業家なり（臺灣臺北大稻埕中北街二七）

張家坤

君は臺灣の實業家なり（臺灣臺北大稻埕珪瑜粹街四九）

林啓我

君は臺灣臺南の實業家にして德望高く家運益々隆盛を極む（臺灣臺南市丙一四六二）

知野根好光

君は東京の神職從五位日向守平岡好貞の三男、安政四年五月七日生る、夙に學を修め更に皇典を研き明治八年四月佃島住吉神社々掌を拜命す十一年是を辭し淺草熱田神社々掌となる二十五年十月南千住町元地方橋場町石濱神社々掌今戶町八幡神社々掌を兼ね二十七年石濱神社々掌を辭す次で佃島住吉神社々掌を兼務となり今日に及ぶ（東京市淺草區吉野町四三）

張作人

君は臺灣臺南の實業家にして篤行家を以て知られ現に天足會幹事の職にあり（臺灣臺南市丙六三二）

り之部

林熊徵

君は臺灣の紳商林本源の代表者にして上下の信認頗る篤し（臺灣臺北大稻埕建昌街一ノ三〇）

李文樵

君は臺灣新竹街の實業家にして夙に篤行の聞へあり（臺灣新竹街土名北門八八）

林烈堂

君は臺灣の紳士なり臺中廳下の富豪にして德望家を以て知らる（臺灣臺中廳猫羅阿罩霧庄）

を之部

小川一眞

君は寫眞撮影製板印刷書籍出版業家なり武州舊忍藩士原田庄左衞門の二男萬延元年正月十五日生る、夙に上京して有馬學校に入り英學を修む後寫眞術に志し研鑽苦心漸く其梗概を修得す明治十四年榛名山の絕勝を撮影し第二回內國勸業博覽會に出品し高評を博す翌年七月外友の紹介を以て米國東洋艦隊「スワタラ」號の乘組員となり米國に航し同國ボストン府に於て「リッズ」氏及び「ハスチングス」氏に就て肖像畫の術を修め不變色寫眞術及び乾板製造法を「アルレン」氏及び「ロウエル」氏等に學び寫眞板は「アルバートタイプ」會社の「エス、エス、メリン」氏に示教を受け同時に同會社に通學して「アルバートタイプ」、「ヘリヲタイプ」及び寫眞銅板術を研究し更に又費府に流遊し以て乾板製造法をカートハッ氏に學び十八年歸朝して業を東京飯田町に開く幾もなく參謀本部の囑托を受く十九年日蝕皆既す米國天文學博士トッド氏渡來し蝕光を觀察撮影して以て天文學上の試驗を遂げんとす時に君選ばれて白川に出張し假小屋を設け一新法を發明し巧みに之が撮影を終へ能く其目的を成功す「トッド」氏大に喜び其歸るに及んで特に君が技術の巧妙を報告し之を學者間に傳布せり二十年東京府工藝博覽會寫眞部審査委員となり遂に最高賞牌を得たり當時君は乾板製造會社を起し又屢々宮闕に出入して皇族の撮影を命せらるゝの特典を蒙る翌年宮內省の命を奉じ實物取調委員に從ひて全國を周遊し以て普く海內の珍器名幅を撮影せんとす古社舊刹畫尙ほ暗ふして優雅高妙の本尊其眞を寫すに由なし君終に一法を案出し線香の微光及び「マグネシヤ」火光を用ひ以て僅に其目的を達するを得歸京するに及び吾美術を宇內萬國に發揚するの目的を以て實物取調委員長九鬼隆一氏及び美術學校雇教師「フェノロサ」氏等と謀り一大美術雜誌「國華」を發行す尋で寫眞新報を發行す二十三年第三回內國勸業博覽會審査官となり銀牌及び賞金を賜はり又出品は美術部より一等妙技賞工藝部より有功一等賞を得二十六年米國萬國博覽會開設に際し萬國寫眞公會商議員となりて渡米す其出品は第一等賞牌を受領す時に寫眞彫刻銅版及び同亞鉛版の製造諸機

械を齎らして歸朝し京橋區日吉町に小川寫眞製版所を設け撮影幷に寫眞製版寫眞版（コロタイプ）寫眞銅版（ホトエングレビーン）寫眞石版（ホトピソブラク）の業に從事す君斯道に於て獨得の長技を有し貢献する所少からず四十三年十二月帝室技藝員仰付らる方今日本乾板株式會社專務取締役たり（東京市麻布區霞町二、電話二二五〇）

大野吉治

君は東京淺草玉姫稲荷神社の社掌にして現に其職に在り（東京市淺草區山谷町八九）

奥戸善之助

君は大阪の辨護士なり本姓矢田氏後出でゝ奥戸家を嗣ぐ家世々米穀商を業とせり君夙に漢學を修め後上京して法律學を研究し遂に對策して辯護士となり法律事務所を大阪市に開き爾來熱誠其業務に從事し頗る民事事件に長じ名聲極て高し明治三十七年七月米國に航し普く各州を巡遊し人情風俗其他裁判制度等を視察し同年九月歸朝す後渡米日記の著あり方今專ら前記の業務に從事す（大阪市東區平野町一ノ六）

越智通孝

君は東京芝金刀比羅神社の社掌にして現に其職に在り（東京市芝區琴平町金刀比羅神社境内）

大隅太夫

丈は大阪の淨曲家なり通稱を井上重吉と云ふ大隅太夫は其藝號なり現に堀江座に出勤し攝津大掾と並ひ立て斯界の重鎮たり（大阪市南區大寶寺町中橋）

岡田秋湖

君は東京の茶道家なり岡田清右衛門の長子、安政三年九月美濃國養老郡高田に生る、始め思齋庵と號し後今號に改む又別に古今齋の號あり君夙に茶事を嗜み松屋流義に達す明治十五年上京して居を京橋街に卜し專ら子弟の薫陶に從ふ二年後信州諏訪の人孤峰庵關不羨師に就き千家表流義を研鑽し終に其蘊奥を極む四十三年十月不羨師物故後其衣鉢を繼承して孤峰庵二世となる爾來不羨師の遺庵に居し專ら茶道の指南に從事し以て今に及ぶ資性温厚着實にして敎へて倦ます懇篤能く人を誘掖す爲に其門に敎を乞ふもの頗る多し方今有數の茶道家たり（東京市芝公園二十五號ノ七）

わ之部

和田貫水

君は奈良市の畫家なり大阪の人通稱貞次郎、貫水は其號なり現に奈良春日神社の畫所役を勤め最も花鳥人物に長し畫名頗る高し方今專ら丹青を事とす（奈良市大豆山突拔）

金子竹次郎

君は東京市の理髪師なり夙に斯業を研究し技倆凡を拔き今や都下屈指の理髪師として稱せられ業務日々旺盛を極む現に東京市理髪業組合重役たり（東京市日本橋區長谷川町二）

川之邊一朋

君は東京の蒔繪師なり父名は平右衛門一朝と號せり夙に幸阿彌因嶠靜井藤助を師とし蒔繪を學び德川家殿中藤蒔繪方を命せられ其他諸侯より需に應ずること數十年維新後工務局より澳國萬國大博覽會出品富士十景蒔繪を製作し大に高評を博せり明治二十三年以來日本漆工商會議員、日本美術協會員、其他各種博覽會、漆器競技會等の審査員たること數次二十九年帝室技藝員を命せられ御劍御鞘蒔繪を仰付らる尋て東京美術學校敎授となり從七位に叙せらる、先是明治二十七年平右衛門の名を君に讓り一朝を以て通稱とせり君は襲名し平右衛門と改め一朋と號し專ら家業に從事し父歿後其箕箒を繼き家聲を墜さず斯業に從事すること今に渝らず頗る盛なり（東京市淺草區西三筋町五二）

片岡我童

丈は大阪の俳優なり通稱を片岡東吉と云ふ我童は其藝名なり現に關西梨園界に鏘々の名あり（大阪市南區宗右衛門町八一）

川邊旭陵

君は東京の畫家なり家世々畫を以て業とす父御楯氏は土佐派にして有職故實に通せり君幼より父に就き其指導を享け刻苦研鑽其蘊奥を極む爾來專ら諸名家の精を究め造詣する所深し其作品は各種公私の諸會に於て優等賞を得る頗る多し方今熱誠丹青を事とし畫名あり（東京市淺草區小島町三五）

金子圭介

君は山口縣出身にして夙に賀田金三郎の經營に係る賀田組に入り臺灣に於て大に爲す處あり後ち獨立して諸種の事業に從事し家產を起し現下山口縣下より選出せられ衆議院議員の職にあり（山口縣長府町、臺灣臺北府中街一ノ三八）

加藤藤左衛門

君は東京の花道家なり現に門弟の敎

授に從事し頗る隆盛なり（東京市小石川區大塚窪町八、山本正枝方）

よ之部

揚煥彩

君は臺灣彰化の實業家なり（臺灣彰化街土名北門二〇九）

男爵 米田虎雄

男は舊熊本藩士なり天保十年正月二十五日生る、家世々熊本藩の國老にして父を盛物と云ふ君は其次男なり長兄是豪氏歿後入りて家督を相續す夙に陸軍に出仕し明治三年累進して陸軍中佐となり翌年宮内省侍從職を奉す後父監物の勳功に依り華族に列し男爵を授けられ正四位勳二等に進み二等侍從兼主獵官に任せらる方今從三位勳一等主獵頭兼侍從官たり（東京市神田區駿河臺南甲賀町三、電話本局二三三六）

揚炳煌

君は臺灣の實業家なり（臺灣彰化街北門街）

吉川準

女史は東京の花道家なり夙に遠州流の花道に達し名聲極て高く現に門弟の指南に從事し門葉頗る盛なり（東京市四谷區荒木町二七）

た之部

竹本津賀太夫

丈は東京の淨曲家なり通稱を米谷安藏と云ふ竹本津賀太夫は其藝號なり方今各席に出勤し頗る喝采を博し名聲斯界に現はる（東京市日本橋區樽正町）

高橋凌雲

君は東京の鑄金家なり明治二年東京小石川關口に生る、通稱龜吉凌雲は其號なり明治十二年鑄金家大島如雲氏に就き蠟型鑄金術を學ぶ二十三年東京美術學校教授岡崎雪聲氏に就き奥旨を質し頗る造詣する所あり二十四年以來同校に於て楠公及西郷南洲銅像紀念碑の製作に與かり三十一年以降自家工場を設立し專ら海外輸出向美術品の鑄造及

神社佛閣等の諸燈籠、置物製作に從事すること今に渝らす三十三年佛國巴里博覽會其他公私各種の美術展覽會に於て銀銅賞牌を受くる前後拾數回に及ぶ四十四年架設せる日本橋々上裝飾各種の鑄金物は東京美術學校教授津田信夫氏を主任として共に僅少日數の間に竣功し大に斯業界の好評を博せり、嗜好、點茶（東京市下谷區谷中三崎町二三）

高橋春

丈は東京西川派踊の師匠なり方今盛に門弟の教養に從事しつゝあり（東京市下谷區同朋町二）

高橋保志

君は東京の土木建築請負業家なり夙に業に清水滿之助氏の建築部に勤務し斯業の塾練家として重せられ在職多年方今辭して現住所に於て獨立して斯業に從事し朝野名門の信任を得る深く業務頗る隆昌なり（東京市神田區千代田町二）

よ、ル之部

竹本競太夫

丈は東京の淨曲家なり通稱を原田七三郎と云ふ竹本競太夫は其藝號なり現に各席に出勤し高評あり兼て後進の指導誘掖に從事せり（東京市本郷區湯島天神町三ノ一一）

谷口巖

君は臺灣の醫師なり夙に業を長崎醫學專門學校に受け醫學得業士となり渡臺して臺北醫院に入り後ち谷口病院を開き現に診療に從事しつゝあり（臺灣臺北書院街一ノ三〇）

高井文平

君は東京赤阪氷川神社の社掌にして現に其職に在り（東京市赤阪區氷川町五二）

高橋善雄

君は東京の神職にして現に豐多摩郡戸塚村諏訪神社の社掌たり（東京府豐多摩郡戸塚村大字諏訪九二）

竹本津太夫

丈は大阪の淨曲家なり通稱を村上卯之吉と云ふ夙に先代津太夫の門に入り文太夫と稱し師と共に文樂座に出勤し

頗る好評あり後ち襲名して津太夫と改め今尙文樂座に出勤す（大阪市西區江戸堀南通一ノ四六）

竹本錦太夫

丈は大阪の淨曲家なり通稱を阪井太八郎と云ふ竹本錦太夫は其藝號方今堀江座に出勤して好評頗る高し（兵庫縣播磨國明石郡明石町內西本町一一）

竹本越路太夫

丈は大阪の淨曲家なり通稱を貴田常次郎と云ふ夙に攝津大掾の門に入り淨瑠璃を修業し頗る艶物に長ず後ち拔擢せられて師の前名を襲き三代目越路太夫となり現に文樂座に出勤して好評嘖々たり（大阪市東區大川町番外八）

竹本南部太夫

丈は大阪の淨曲家なり通稱を前田卯之助と云ふ竹本南部太夫は其藝號なり夙に文樂座に出勤し藝名頗る高し（大阪市北區天滿空心町一ノ二）

竹本伊達太夫

丈は大阪の淨曲家なり通稱を南馬太郎と云ふ竹本伊達太夫は其藝號なり現に文樂座に出勤し好評嘖々たり（大阪府東成郡天王寺村字天ヶ茶屋）

竹本春子太夫

丈は大阪の淨曲家なり通稱を山田清吉と云ふ竹本春子太夫は其藝號なり現に堀江座其他各座に出勤して好評あり（大阪市南區心齊橋筋順慶町南入）

田中嚴道

師は東京深川永代寺の住職なり資性篤行にして護法に厚く專心布敎に從事し爲に信徒の崇拜信仰する所たり（東京市深川區富岡公園地永代寺）

高橋秋華

君は京都の書家なり嘗て京都市立美術學校繪畫科を卒業し爾來專ら諸名家の精を究め造詣する所あり其筆山水花鳥に長し畫名極て高し（京都市上京區寺町通姉小路上ル本能寺境內）

竹本七五三太夫

丈は大阪の淨曲家なり通稱を瀨鴻幸吉と云ふ竹本七五三太夫は其藝名なり方今文樂座に出勤し藝名高し（大阪市西區江戸堀上通二ノ九二）

そ之部

蘇孝德

君は臺灣嘉義の實業家なり夙に學を修め德望高く現下嘉義市米街區街長たり（臺灣嘉義市米街）

蘇有志

君は臺灣實業家なり夙に名望家を以て鳴る（臺灣臺南市丁八五三）

つ之部

土橋熊次郎

君は京都の美術品商なり廣く書畫骨董の販賣に從事し頗る其鑑識に長す內外好事家の信用あり隨て營業頗る隆昌す（京都市下京區四條通堺町東入、電話六四四）

鶴澤清七

丈は大阪の淨曲三絃家なり通稱を前田鹿之助と云ふ鶴澤清七は其藝名なり現に堀江座其他各座に出勤し藝名高し（大阪市南區笠屋町四八）

鶴澤清六

丈は大阪の淨曲三絃家なり通稱を出中福太郎と云ふ鶴澤清六は其藝名なり方今斯業界に於て錚々の名あり（大阪市南區順慶町一ノ四二）

鶴澤松雨齋

丈は東京の淨曲三絃家なり通稱を吉田久吉と云ふ鶴澤松雨齋は其藝號なり方今專ら後進の指導誘掖に從事し門戸頗る繁盛を極む（東京市本郷區湯島天神町三ノ一五）

鶴澤才太郎

君は東京の淨曲三絃家なり夙に浪花に於て研究し名聲あり方今專ら子弟の敎授に從事し頗る隆盛を極む（東京市日本橋區吉川町三）

ね之部

練尾忠次

君は東京の菓子製造販賣商なり家號を鹽瀬と稱し練羊羹及蒸菓子を以て名聲都下に顯はる現に宮内省及東宮御所の御用命を蒙り營業太た盛なり（東京市赤阪區田町六丁目）

な之部

中村鶴江

女は東京の踊師匠なり現に門弟の教授に從事し家業太た盛なり（東京市神田區山本町五）

中村芝若

丈は大阪の俳優なり通稱を中島笑太郎と云ふ芝若は其藝名なり方今青年俳優中頗る好評あり（大阪市南區難波新地五番町四四四）

中村駒助

丈は東京の俳優なり通稱青木八重太郎と云ふ中村駒助は其藝名なり方今下谷市村座に出演し高評あり（東京市淺草區左衛門町一）

中村六三

君は東京の神道家なり神職吉川政興の男、明治十三年九月二十三日東京市牛込區築土八幡町に生る、後ち出でゝ神職中村守の養子となり其氏を冒す夙に國典を修め明治三十五年皇典講究所に學を受け八等司業となり尋て養父の後を受けて小日向神社々掌に補せらる四十年四月東京府神職講習會を修了し六等司業に進み同年皇典講究所より祭式修業證を受領す方今前記の職にあり（東京市小石川區小日向水道町八六）

む之部

村岡鐐一郎

君は東京の神職にして現に豊多摩郡戸塚村諏訪神社々掌の職に在り（東京府豊多摩郡戸塚村大字諏訪九二）

村田かく子

丈は東京の女優なり家世々品川町に住し酒造を業とす幼にして藝を好み小學校に通學の傍ら音曲踊舞等の遊藝を修む後東京帝國座女優養成所に入り第一期卒業生として現に帝國座に出演し名聲益々高し（東京府荏原郡品川新宿四六）

村瀬勝太夫

君は東京府の神職にして現に南葛飾郡龜井戸天滿宮神社々掌の職に在り其境内に梅林あり殊に臥龍梅の名頗る高し（東京府南葛飾郡龜井戸町）

う之部

梅澤隆眞

君は東京の蒔繪師なり、柴田是眞の次男にして柴田令哉の實弟なり、幼にして業を家庭に修め、其蘊奥を究む後出でゝ梅澤氏を冒す、爾來專ら斯業に從事し屢々各種公私の博覽會、共進會等に出品し金銀銅の優等賞を受領せり又宮内省及東宮職の御用品として御買上の光榮を荷ふこと數次、現に日本漆工商會の重役たり（東京市淺草區瓦町九）

哥澤芝金

女は東京の歌澤師匠なり通稱柴田錦子と云ふ歌澤芝金は其藝號なり現に盛に子弟の教授に從事す（東京市日本橋區萬町八）

内海藤太郎

君は東京の料理師にして和洋料理を以て斯界に知らる現に帝國ホテルに在り好評頗る高し（東京市麹町區内幸町一ノ三）

の之部

野澤吉兵衛

丈は大阪の淨曲三絃家なり通稱を松井福松と云ふ幼より淨瑠璃を好み五代目野澤吉兵衛の門に入り刻苦研鑽して其技凡を拔き遂に先代野澤吉兵衛を襲名して六代目となる方今斯業界の領袖を以て稱せらる（大阪市西區江戸堀南通二丁目）

臺北文武街一丁目十六番戶
株式會社 臺灣貯蓄銀行
電話百五十五番

臺灣基隆哨船頭街十六番地
合資會社 辰馬商會基隆出張所

本店 臺北

支店 大阪、神戸、基隆、臺中、臺南、厦門、香港、

出張所 淡水、宜蘭、新竹、打狗、澎湖島、福州、汕頭

株式會社 臺灣銀行

臺灣臺南下横街十三番戸

株式會社 臺灣銀行臺南支店

電話番號十八番

●專賣特許阪東式木綿調帶ノ特色

一 原絲ハ綿絲中最良ノモノヲ選ビテ織製シ護謨類ヲ材料トセル特別ノ浸染液及塗料ヲ用キ且ツ完全ナル伸縮防止法ヲ施セルモノナリ

二 特殊ノ囊織ナルヲ以テ開裂剝離セズ

三 他品ノ如ク延伸セズ

四 張力及耐力ハ遠ク皮革調帶ニ超越シ比肩スベキモノナシ

五 濕氣ニ堪フルハ勿論水中ニ使用シ又ハ油類ノ浸潤ニ遇フモ耐力ニ變化ヲ及ボサズ

六 厚薄強弱ノ不平均ナク柔靭ニシテ固執力ニ富ムヲ以テ滑脫セズ

七 原質構成均一ニシテ皮革ノ如ク重カラザルヲ以テ動力ヲ減殺セズ

八 價格極メテ低廉ニシテ工費節約上至大ノ利益アリ

阪東式木綿調帶ハ發明者阪東直三郎氏ガ夙ニ斯業ノ國益タルコトヲ信ジテ至誠熱心堅忍不拔二十餘年ノ久シキニ渉リテ非常ノ辛酸ヲ嘗メ頻リニ考案ヲ凝シ巨多ノ資本ヲ投ジテ改良ニ改良ヲ加フルコト前後七回ニ及ビ其耐力張力共ニ遠ク皮革ヲ超過シ舶來品ニ優越スルノ成績ヲ呈スルニ至リ遂ニ去明治三十二年第三三八四號ヲ以テ其筋ノ特許ヲ得更ニ一層織方及製法ノ研究ヲ重ネ明治三十四年改訂特許ヲ受ケタル完成品ニシテ從來廣ク全國ノ公私各工場ニ使用セラレテ實驗上ノ證明ト特殊ノ好評ヲ博シ現今東洋ニ於ケル唯一無二ノ完全ナル木帶綿帶調ハ專賣特許阪東式ノ製品タルコト既ニ社會ノ認識セル所ナリトス

神戸市兵庫明和通二丁目(兵庫驛南五丁)

阪東式調帶合資會社

(電話四九八)

振替貯金口座一〇三五一

基隆港鼻仔街二一四

合資會社 基隆商船組

(電話七番)

打狗停車場構内

合資會社 基隆商船組打狗出張所

大坪與市

艀船及勞力請負業

大日本
優等清酒

◎賣捌御望の御方は御一報次第値段書及商取引大要書を增呈す

◎弊店小賣部は高松市上横町に設置し有り

山陰山陽九州豫讃各地元賣捌所

香川縣高松市東濱町

阪田屋商店駄賣部

營業主 岡本丘郎

發電(サカ) 電話長加第壹四參番 振替貯金第七七八番

大正二年五月十三日印刷
大正二年五月十五日發行

不許複製

○定價金拾貳圓

編纂兼發行者 東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木四百三十五番地 成瀨麟

編纂兼發行者 東京府豐多摩郡淀橋町大字柏木四百三十五番地 土屋周太郎

印刷者 東京市京橋區元數寄屋町四丁目二番地 安田金次郎

印刷所 東京市京橋區元數寄屋町四丁目六番地 合資會社 安田商店印刷部 電話新橋(二九〇四)

發行所 東京市豐多摩郡淀橋町柏木四百三十五番地 合名會社 八紘社

ㅌA97